
水晶物語 ～運命の継承者～

御門屋運命

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水晶物語 ～運命の継承者～

【Nコード】

N3652N

【作者名】

御門屋運命

【あらすじ】

レブルス国。

それは、実力式階級制度と呼ばれる文字通り実力ある者が高い階級に就く制度によって成り立つ国。

その国の歴史は長く、様々な逸話や伝説が語り継がれている。

この物語はそんな国で史上最強と称される王の物語。

人々は王に馴染みが深いある物の名前からその物語の事を水晶物語と呼んだ。

今回はそんな水晶物語において、我らが王がどのようにして王とな

ったのかを語るとしよう。

（当小説は自サイト「幸運の館」からの転載です。
全四話の一話でありリメイク作となります。

原型が気になる、続きが読みたいと言う方は下記サイトまでお越し
下さい。

「[http://www.geocities.co.jp/An
imeComic/3111/](http://www.geocities.co.jp/AnimeComic/3111/)」

プロローグ

十六年前。

とある国のとある城のとある謁見の間にて、二人の男性が向かい合っていた。

一人は威厳と風格のある老人、玉座に座っている事から彼がこの国の王である事が伺える。

もう一人は空を思わせるような青い髪と深く鮮やかな海のような青い瞳を持つ青年。

青年は玉座に座る王に対し跪いており、その様子からこの二人が主従関係である事が伺えた。

謁見の間には二人だけではなく、騎士や兵士、召使たちまでが一堂に集まり整列している。

「テラ・ラグファースよ。そなたはこの国の英雄、この国の誇りだ」
国王は玉座に座りながら目の前の青年、テラに話し掛ける。

その声は威圧するものではなく、不思議と歡喜に満ちていた。

「ありがとうございます」

テラは礼儀正しく返事をする。

「民達も皆そなたを英雄として、いや、一人の人間と信頼している」
同意の声は無いものの、王が話している言葉が真実である事はその場に集まっている者達の表情を見れば一目瞭然であった。

「長く玉座に座り続けてきたが、そろそろ私もこの玉座を誰かに譲ろうと考えている。そこでこの国の王として、いや一人の人間として頼みがある。どうだろう、この国の王になつてはもらえないだろうか？」

極めて重大かつ重要な話のはずなのだが、その場の雰囲気は不思議と和んでいた。

寧ろ、その場に在る皆がその青年が王になる事を望んでいるようだった。

皆がテラの次の言葉を期待する。だが

「…………お断りします」

「っ……！」

王を含めその場にいる全員が愕然とした表情を見せる。

何故ならば、この場に集まった時点ですでに皆が皆、テラが王に着くであろう事を確信していたからだ。だと言うのに、テラは王となる事を拒否した。

「王よ。あなたにはご子息がおりますし、もうじき孫もお生まれになるでしょう。私などがこの国の王となるのは筋違いです」

テラが順序良く、まるで説明するように話していく。

確かに彼が述べている事は正論であったが、この場、この国においてはその理論は通じない。

「だ、だがなあテラよ。物事には流れつつものがあるだろ。それをお前…………」

それを聞いた老人は反論の声を上げる。そこには先程までの威厳ある王の雰囲気はなかった。

「…………はあ、アベル。せめて臣下の前では王らしくしろよな。折角こつちが片っ苦しい言葉遣いまでして付き合ってたやってるのに」

そんな王、アベルの姿を見て呆れたとばかりにテラの態度も一変する。

おそらくそれが本来の彼の姿なのであろう。先程までの礼儀正しい青年の雰囲気よりも、今の雰囲気の方が彼に合っているように思えた。

「それとこれとは話が別だ。お前、親友である俺の頼みが聞けないって言うのか!？」

「あーもう、だーかーらー」

テラは頭を掻いてアベルに話し掛ける。

「俺は王様に何かなりたくないんだよ。堅苦しいし面倒くさいし、はつきり言って嫌なんだ」

そんなテラの言葉を聞き周囲の者達は顎が外れんばかりに口を開

いて呆然とする。

それもそうだろう。王に面と向かって王様になるのが嫌だなどと言う者はまずいない。

「大体、お前が王様やって俺がその部下になるってのが約束のはずだろうが」

「いや、そうは言っても民はお前が王になるのを望んでいるんだ。

他の国ならいざ知らずこの国じゃこのまま俺が玉座に座り続ける訳には如何だろ。それをお前……」

「……うーん、まあ、そう言われるとちょっと困るんだよなあ」

個人同士の会話であるならばまだしも、それが他の者達、国全体に関わる出来事となれば、テラも少し言葉に困る様子を見せる。

「でも、悪いが俺には王になれない理由があるんだよ」

「何？」

「おーい、入って来いよ」

テラがそう声を上げると一人の若い女性が謁見の間に足を踏み入れる。

その女性の姿にその場に居合わせた誰もが一瞬目を奪われる。

その女性は清らかという言葉が相応しい実に美しい女性だったからだ。

「む、貴方は……」

その女性を見てアベルの表情も変わる。

「お久しぶりです、陛下」

「ストア殿ではないか」

どうやら顔見知りであつたらしく、お互いに挨拶を交わす。

「大神殿お付きの巫女である貴方が何故このような所に？」

当然の疑問であり、王として当然の質問であつた。

「あー、えーつとな。アベル」

テラはばつが悪そうに述べる。

「実は俺達、今度結婚するんだ」

「っ……!」

またしても、その場にいる全員は顎が外れんばかりに口を開いて驚く。

「お、お前っ！！」

これには流石のアベルも驚きの表情を隠せずにいた。

「だ、大神殿の、それも巫女に手を出したのか！？」

とても王とは思えない実に解りやすいストレートな表現である。

「ああ」

その言葉をさらりと肯定するテラ。

どうやら彼にとっては手を出したと言う事実を誰かに指摘されるよりも、結婚すると言う事を誰かに伝える事の方に抵抗があったようだ。

「お前、それがどういう事が……」

「立派な重罪だな」

アベルの言葉を取引するようにテラは自分の立場をそう述べる。

「あの、付け加えますと私はすでにテラ様のお子を身籠っています」

「医者が言うには妊娠三ヶ月目だそうだ」

「っ！！」

最早、その場にいる人間で口が閉じている者は存在しなかった。

「お、お前は……」

アベルもとうとう頭に手を当て何やら苦悩し始める。

「はっはっはっ、まあ仕方がないって、惚れた奴が悪いって事だよ」

「……はあ、お前は昔っからちつとも変わらんなあ」

「変わらないってのもある種の才能だろ」

テラはけらけらと笑いながら大きく胸を張って威張る。

そんなテラを見て、アベルもどうやら諦めの境地に至ってしまったらしい。

「まったく、毎度毎度振り回されるこっちの身にもなってみろ」

「そう言うのが嫌だから王になりたくないんだよ。……けど、こっちの方が面白そうだろ」

テラがニツと笑いながらそう言う

「……ふ、ふふふ。違いない」

そう延べ、二人は驚き沈黙する周囲の目を気にせず笑い始める。
その笑いが数分続いた後

「それで、これからどうするつもりだ？」

「そうだな。この国を離れる訳には行かないし、しばらくは山奥で
隠居でもしとくつもりさ」

「それもいいだろう。お前ならどこに行っても食うには困らないだ
ろうしな」

アベルはそう言うともう諦めたと言う風に王座に深く腰を沈める。

「じゃあ、俺達はもう行くぜ」

「そうしろそうしろ。今頃大神殿の連中も大騒ぎしている事だろう」

「はは、後始末よろしくな」

テラはそう言うストアの手を引いて謁見の間から出て行こうと
する。

その場にいる誰もが二人を止めようとしなかった。どうやらアベ
ルを除いてまだショックから立ち直れていないようだ。

「ああ、そうそう」

テラは部屋から出る前に一度だけアベルの方を振り返る。

「俺は王になる気なんてないけど、俺の子供を王にするっていうの
はありんじゃないか。何と言っても……俺の子供だからな」

「……なるほど、すごい説得力があるな」

「数年経ったら一度顔見せに来る。またその時にでも考えてくれ」

テラはそう言うのと今度こそ謁見の間から姿を消した。

「あいつの子供……か」

テラが出て行くと同時にアベルは少し考え込むように呟く。

「これも運命、と言う奴なのかな……」

一見して落ち込んでいるようにも見えたが、その顔はこれから起
こる事を想像してか、少し笑っているようにも見えたと言う。

第一章『始まりは丘の上』

第一章『始まりは丘の上』

暖かい春の日差しの中、小高い丘の上には気持ちの良い風が吹いていた。

その風を楽しむかのように一人の少年が丘の上に寝転がっている。年の頃は十五歳ぐらい。空を思わせるような青い髪をしており、その髪が邪魔にならぬように黒いバンダナを頭に巻いていた。

風が少年の髪をゆつくりと靡かせる。

その風が気になったのか、少年はゆつくりとその眼を開く。すると、開かれたその瞳も深く鮮やかな海の色が映ったかのような綺麗な青色だった。

「（風、か……）」

思った通り、それは風の仕業だった。

そう解った少年は再び眼を閉じようとするが

「……ああ」

「ん？」

少年の耳に近づいてくる声が聞こえた。少年が再び眼を開いて前を見ると

「きゃああああっ!!」

「げっ!!」

少年の体の真上、およそ二メートルの位置に突然少女が現われる。

「ちよっ!!」

回避する暇も無く

ドスウン

「へぶうつ!!」

クリティカルヒット、少女は少年に大ダメージを与えた。

少女の体は少年の体の上に着地し、少女のお尻が少年の腹部へと

めり込んでいく。それは果たして悲鳴だったのか、とにかくにも声にならない痛みが少年を襲う。

「あ痛たあ……」

そんな少年を他所に、少女はそう声を上げる。

年齢は少年と同じぐらい。肩に掛かるぐらいの薄紅色の髪と瞳をしており、少し長めの髪を纏めるためのヘアバンドをしていた。容姿は美しいというより可愛い部類に入る方だろう。体型も同年代に比べれば若干幼く見えた。

「あれ、おかしいな。何であんな所に出ちゃうんだろ？ 計算に誤差でもあったのかな……」

少女は不思議そうに頭を傾げて考えこむ。

「……あ、あのぉ、フェリア……さん」

「何、ラック？」

「そこ、早くどいてくれませんかね？」

そう、フェリアと呼ばれた少女は未だに少年、ラックの上に座っていたのだ。

「あ、あはは……。ごめんねー」

脂汗を流し、痛みを堪えながらそう述べるラックを見て、フェリアは苦笑しながら……正確には笑って誤魔化しながら上を立ち退く。
「まったく……」

それを確認し、ラックも腹部を擦りながら体を起こして立ちあがる。

「んー、本当はあの辺りに出るはずだったんだけどなあ」

そう言ってフェリアは丘の麓、やや離れた位置にある平地を指差す。

「どこをどう計算間違えしたらそこまで座標が狂うんだよ」

「いやー、それが解ったら苦労しないって」

「その苦労の対象が俺になっている事にまず気付いてくれ……」

流石に腹部の痛みも引いてきたのか、ラックの発言量が徐々に増えてきた。

「大体、移動に呪法を使う方がどうかしてる。何時もギガおじさんが呪法は気軽に使うものじゃないって言っているだろ。特に座標転移系の呪法は危険度が高いし、今回だってもし座標が地面の中だったらどうす……」

「大丈夫よ、その辺りはちゃんと回避するように組んでるから。って言うかそもそもこの呪法のチャート考えたのはラックじゃない」

「確証が無いのに実行するなって言ってるんだよ」

「相変わらずラックは心配症ね」

「フェリアはニコニコ笑いながらそう言ってくる。」

「……はあ」

そんなフェリアを見てラックは深い溜息をつく。

こうなってしまうてはフェリアに何を言っても無駄な事は経験上解っているからだ。

説得が無駄であるのなら、これ以上の会話は無意味である。

「まったく、親の忠告は素直に聞くもんだぞ。……それで、何の用だ？」

よって、ラックは会話を次の段階に進める事にした。

「何言ってるの。迎えにきたのよ」

「迎えに？」

「昨日約束したでしょ。……まさか、忘れたとか言うつもり？」

そう問い掛けてくるフェリアに対し

「忘れた」

そう即答するラック。

「炎っ！！」

ラックの返事を聞くや否や、ラックの頭を指差し高らかにその声を上げるフェリア。

その声に反応するかのように

シュボッ！！

「ぬおう！！」

ラックの目前に炎が舞い上がる。いや、正確にはラックの頭があ

った位置にである。

フェリアの声が上がると同時にラックは身を捻り、その炎を回避したのだった。

「ま、待て、覚えてる。昼から裏山に行こうって約束だろ。ちゃんと覚えてるから」

だから追加攻撃は止めると制止の声を上げるラック。

「最初からそう言えばいいのに」

ヒュッ……

フェリアがラックを指差していた手を横に振ると同時に、炎は音を立て消えてしまう。

「お前のその事ある度に呪法を使う癖はどうにかならんのか？」

「んー、難しいと思うよ」

まるで他人事のようである。

「……はあ」

それを見て、ラックは再び大きく溜息をつくのであった。

「っていうか、まだ昼前だぞ。幾ら何でも気が早すぎないか？」

ラックはそう言いながら太陽を見上げる。

日の傾き具合から時刻がまだ昼前であり、約束の時間にはまだまだ早い事が読み取れた。

「そんなの私の勝手でしょ」

「やれやれ……」

最早反論するのも面倒だと言わんばかりに、ラックは三度目の溜息をつくのであった。

二人が丘を下りていくと、やがて村が見えてくる。

カマト村。人口は凡そ三百人程度、村人がほぼ全員顔見知りと言っ実に小さな村である。

「じゃあ、丘の上でまた会いましょう」

「って言うかわざわざ呼びに来る必要あったのか？ 昼飯食ってか

ら行こうって話だっただろ」

「んー、そこは何て言うか……何となく、かな？」

こう言うのも何だが、フェリアは相当の気分屋だ。

彼女が何となく言えば本当に何となくそうしたのである。その事をラックも知っているためそれ以上の追及はしなかった。

「解った解った。それじゃまた後でな」

「うん」

フェリアはそう言うと言分の家の方に向かって走り出す。

「さて、俺も帰るか」

そんなフェリアを見届けた後、ラックも自分の家に向い歩き始めるのであった。

「ただいまあ」

家の扉を開け、自分が帰った事を告げるラック。

「あ、おかえりなさい。ラック」

その声に反応するかのようにエプロン姿の女性がそう返事をする。ラックの母、ストア・ラグファースである。

息子であるラックの年齢を考えるならばすでにその年齢は三十路を越えているはずなのだが、その外見は二十代前半、下手をすれば十代の少女のように見えた。

「ただいま、母さん」

さて、ここで軽くこの物語の主人公、ラック・ラグファースの家庭事情を説明しておこう。

今現在、ラックは母のストアと二人暮らしをしている。何故そのような言い方をするのかと言うと、彼の父親、テラ・ラグファースが数年前に旅に出て以来行方不明となってしまったからだ。

通常であるならば「旅先で亡くなったのでは」と考えるべきなのだが、ラックもストアも楽観的と言うか、あの父親がそう簡単に死ぬ筈は無いと思って疑いもしていなかった。

そんな訳で今現在、ラックとストアは母子二人で暮らしていた。

「昼ご飯は……まだか」

エプロン姿の母を見る限り、目下作成中と言ったところのようだ。
「何か手伝おうか？」

母子二人暮らしであるのだからして、家事を協力分担するのは当たり前前の事である。

「そうね、じゃあ薪を割ってきてちょうだい。予備が無くなっちゃったの」

「うん、解った」

そう返事をするラックは自室に戻り一本の剣、バスタードソードを手に携え家の裏に向かう。

バスタードソード。それは片手半剣と呼ばれる片手でも両手でも使える剣の事である。

刀身は約百四十センチ。バスタードソードとしては長い部類に入り、その分扱いが難しいのだが、片手でも両手でも、切る事も突く事も出来る汎用性の高いその武器をラックは好んで愛用していた。

「よし、ちゃちゃつと片付けてご飯としますか」

鞘より剣を引き抜き、正眼に剣を構えるラック。

その目前には直径一メートル程の丸太が置かれていた。

「……よっ」

そんな軽い声と同時に

キンッ

何か、金属が触れ合うような音が辺りに響く。

気が付けば、ラックが構えていた剣は何時の間にか振り下ろされており、半瞬遅れて目の前の丸太は真つ二つに分かれる。

その切断面は恐ろしく滑らかで、木が裂けたのではなく文字通り切断された事を意味していた。

「ふむ……」

再び、ラックは剣を正眼に構え剣を振り上げる。

「……ふっ!!」

今度は先程とは違い気合いを入れながら剣を振るう。すると
キンッ！！

再び金属が触れ合うような音が辺りに響くが、それは先程よりも
更に高い音であった。

「……まあ、こんなもんかな」
パカンッ……

ラックの声に反応するように、目の前の二つに分かれていた丸太は
音を立て数十本の木片、薪へと姿を変える。ラックはその薪を籠に
入れ家の中へ持ち運ぶ。

「薪割り終わったよー」

「ごくろうさま、ご飯もちょうど出来たところよ」

家に入るとテーブルの上には料理が綺麗に並べられていた。

「さあつ、冷めないうちに食べなさい」

「はい」

ラックが先程行った芸当は誰の目から見ても達人の域の技であつ
た。

だが、彼にとってそれは日常の出来事であり、特筆すべき事がな
い出来事であつたようだ。

昼食を食べ終わり、自室にて荷造りをするラック。

「……さて、そろそろ行くかな」

先程使用していた剣と動きの邪魔にならないサイズのバッグを背
負い。家を出ようとする

「あら、どこか行くの？」

ストアにそう呼び止められる。

「うん。ちよつとフェリアと一緒に裏山に行ってくる」

隠す事でもないため、ラックはそう素直に行き先を伝えた。すると
「……そう。気をつけてね」

少し間を空けた後、ストアはそう母親らしい言葉を述べる。

「うん、いつてきまーす」

「いつてらっしゃい」

ストアにそう延べ、ラックは家を後にする。

後から思えば、ストアがこの時どのような思いでその言葉を言ったのかをラックは知るべきだったのかもしれない。だが、その時の彼にそれを知る由は無かった。

家を出たラックがフェリアとの待ち合わせの場所である丘の上を目指す途中

「あ、兄ちゃん」

「どっか行くの？」

子供達からそう声を掛けられた。

年齢はまばらで六〜九歳ぐらい、男女二人ずつの四人組だった。

小さな村であるため子供の数もそう多くはない。ラックの年齢は現在十五歳、この地方では十六歳より成人とみなされるため、子供と言う枠で考えるならばラックも彼等と同じ扱いであり、当然子供達とは普段から付き合いがある。

「ああ、ちよつと裏山へ冒険しにな」

そんな訳で、ラックは子供達の質問に軽く答えを返す。

「えー、いいなあ」

「俺達も連れてってよー」

ラックその答えを聞き、男の子二人がそう声を上げる。

「駄目だ。何度も言うが、裏山で遊びたいならせめて俺から一本取れるぐらいになってからだな」

小さな村においては大体の場合は年齢に比例して役割が分担される。

ラックは先程述べた通り大人としての役割をまだ与えてもらっていないが、年長者として自発的に子供達に剣術を教えていた。

「そんなの絶対無理じゃん」

「そつだよー、兄ちゃん手加減してくんないしさ」

「手加減したらためにならないだろ」

「そんな事言つて自分が負けるのが嫌なだけじゃなか」

「はは、かもな」

ラック本人に取つては片手間の遊びのようなものであつたが、子供達からしてみればラックは剣術の先生であり、村の大人達以上に信頼出来る兄貴分でもあるのだ。

「なー、その冒険つて姉ちゃんも一緒なの？」

「ん、ああ」

姉ちゃんとはこの場合フェリアの事を指している。

「何だ。二人でデートかよ」

「じゃあ邪魔しちゃ悪いか」

「馬鹿言つてんじゃない」

ゴツンッ

そう言いながらラックは二人の頭を小突く。

地味に痛かつたのか二人は小さな悲鳴を上げ、頭を押さえて蹲る。

「でも、お兄ちゃんがお姉ちゃんの事好きだつてみんな知つてるよ」

「うん、お姉ちゃんも知つてるよ」

今度は女の子二人がそんな事を述べた。

「今度の成人の儀に兄ちゃん告白すんだよね？」

「そしたら結婚式挙げるんでしょ？」

先程小突かれた男の子二人も加勢を得たためか、再びその声を上げ始める。

「……そうなつてくれたら嬉しいけどな」

そう述べるラックの内心は穏やかではなかった。

ラックとフェリアは生まれた時から幼馴染である。同年代の異性はお互いしかおらず、人生の大半をこれまで共有して過ごしてきた。そこに恋心が生まれても不思議ではない。

少なくとも、ラックはフェリアに対して好意を抱いていた。このままフェリアと共にこの村で静かに平和に幸せに暮らしていきたいと

思っていた。

フェリアも同じ気持ちだ……と、ラックとしては思いたいが、相手が本当に自分と同じ思いを抱いているのかと問われると、答えられないのが現状だ。

何故なら、フェリアは外の世界へ興味を抱いている。

今日の裏山の一件にしても、その好奇心を少しでも静めるための行為に過ぎないのだろう。

この村は原則として成人するまでは村長の許可なく村の外に出る事を禁じられているが、成人の儀を済ませた者は自由に村の外へ、外の世界へ出ていくことが出来る。

フェリアが実際に外の世界へ行くかどうかはまだ本人に確認していないので解らないし、ラック自身もフェリアがそう言いだした場合どうするかを決めていない。

だが、どのような結末になったとしても、ラックはフェリアに自分の思いを伝える気でいた。

「俺達応援してるぜ」

「うん、絶対二人はお似合いだって」

「そうだよ」

「そしたら結婚式には絶対呼んでね」

自分もまだ子供ではあるが、自分より小さい子供達に恋愛の応援をされると言うのは実に複雑な気分だった。だが、同時に子供達の素直な応援が有り難くも思えたのだ。だから

「ああ。そう願っていてくれ」

ラックは笑顔でそう答える。彼自身の意志はすでに決まっていたからだ。

丘の上に行く坂道を上っていると、先程ラックが寝転がっていた付近に人影が見え始めた。

「遅かったね」

誰かと問う必要はないだろう。フェリアである。

「……俺が遅いんじゃないかって、お前が早いんだよ」

子供達に呼び止められたからだと言おうとしたが、先程の会話を思い出し、追及されるのも追及するのも今は面倒だと考え、あえて言わなかった。

「そうかな？」

「そうだよ。太陽がまだ傾き始めてないだろ」

そう言っただけで太陽を指差すラック。

確かに、まだ太陽は傾きを始めてはいなかった。時間で言えば午後一時前と言った所だろう。

別段、時間を決めて待ち合わせをしていた訳ではないのだが、子供の頃からの二人にとって昼からと言えば大体一時ぐらいを指していた。

「んー、それにしたってやっぱり遅いような気がする。途中誰かと話し込んだりしなかった？」

これまた、昔からお互いの事を知り合っている二人だからこそその指摘であった。

ラックは基本的に人を待たせるのも待たされるのも嫌いだ。そして、フェリアは待ち合わせをする際必ず三十分は早く現地に到着する癖がある。だから、ラックも三十分早く現地に到着する事を心掛けていたのだ。

そんなラックが時間前とは言えフェリアよりやや遅れてきた。フェリアにしてみれば疑問に思わずにはいられない事だった。

つまり隠すだけ無駄、ラックは会話の内容を出来るだけ省き、子供達と話していた事を素直に白状する。

「やっぱりね」

予感的中とばかりにフェリアは得意気な表情を見せる。

「それで、何の話をしてたの？」

「明日の剣術稽古についてちょっとな」

「……本当に？」

「ああ」

フェリアの問いに真顔で嘘を答えるラック。

「……まあいいわ」

昔ながらの付き合いを抜きにしても、フェリアの勘は鋭い事で有名だった。

特に一番親しい仲であるラックは嘘を見抜かれなかったことが殆ど無い。だから、今のフェリアの言葉はあえて追及しないで上げましようと言う意味を持っている。

「時間が勿体無いし行きましょう」

それに今は他に目的があるとはかりにそう述べ、フェリアはまっすぐ裏山を目指し歩き始め、ラックもその後を追うのであった。

「なあ、フェリア。今回の山登りの目的は何なんだ？」

裏山に入ってから三十分程して、ラックはようやく今回の目的を問う。

「あれ、言ってなかったっけ？」

そう言つと、フェリアは背負っているリュックから「こそ」と一冊の古い本を取り出し始める。

「それは？」

「教えて欲しい？」

フェリアがにっこりと笑って聞いてくる。

明らかにこちらの反応を期待しているようだった。

「教えて欲しい」

ラックはフェリアと同じようににっこりと笑いながら同じ言葉で聞き返す。

「じゃあ教えてあげましょう。この本は御霊について書かれた本よ」「御霊について？」

御霊。

伝承曰く、この世界を造った神は世界の安定と平和を願いその魂

を御霊としてこの地に残したと言われている。だが、その御霊がどのような物体、形状、存在なのかについて記載された資料は殆どなく、伝説上の存在であると言われている。

実際には諸説云々様々な話があるのだが、御霊とはそれくらい凄異代物であると言うのがラックの認識であった。

「うん、実はこの前家の書庫を整理してたらこの本が出てきてね」「あの書庫を整理しようとしたのか……」

フェリアの言葉にラックはフェリアの家の書庫の惨状を思い出す。フェリアの父、ギガ・カストゥールは呪法師である。

呪法。

それは文字や文章を構築し、呪いを介して世界の法則に干渉する技。

ギガはそんな呪法を操る優秀な呪法師であり、ラックとフェリアの師匠であり、この村の子供達みんなの先生であり、村長や村人全員の相談役でもあり、優秀な呪法師と言う肩書きだけでなく人望厚き優秀な人物でもある。

そんな実に優秀な人物であるギガだったが、彼は俗に言う片付けが出来ない人で、一度読んだ書物は大体の場合はそのまま書庫に放り込み放置してしまう。

こればかりは個人の性格であるため他者が何かを言う事も出来ず、誰かに迷惑を掛けている訳でもないで誰もその事を問題とはしなかった。……ただ一人、家族であるフェリアを除いては。

「大変だったろうに……」

「そりやもう大変だったわよ……」

ラックの同情の言葉にフェリアはありがとうと言葉を返す。

先程も述べた通り、呪法師はその職業上で文字や文章、つまり本の類と無縁ではられない。

それに加えてギガの本好きが高じ、フェリアの家の書庫の荒れようは大きな図書館に大地震が襲ったかのような惨状であった。

それを整理しようとしたフェリアの心境は察するに余りあった。

「まあ、そんな訳で発掘されたのがこの本な訳」

発掘と述べるあたりに彼女の努力の程が見え隠れするようである。
「それで、その本には何が書かれているんだ？」

フェリアには悪いが、経緯はともかくとして今問題となっているのは本の内容である。

純粋な好奇心からラックがそう問うと

「えーと、簡単に言っちゃえば御霊の調査報告書みたいな物かな。
内容自体はどこにでもあるような内容だったんだけど、本にこんな地図が挟まれてあったの」

フェリアが本の中から取り出した地図をラックは受け取り広げる。
「随分と大まかな地図だな」

世界地図とまでは言わないが、細かい地形を把握している地図ではなかった。所々に五つの赤い丸印が付けられており、その近くに文字が書き加えられている。

「大分古い地図みたいだけど、この丸は何だ？」

文字が書き加えられている事は解るのだが、地図自体が相当古い代物であるらしく、ぱつと見では文字がかすれて殆ど読めなかった。
「私が解読した限りじゃ御霊のある場所を示しているみたいなの」
「なるほど、要するに宝探しって事か」

その言葉を聞き、ラックはようやく今回の目的を察する事が出来た。

「御霊がこんな所にあるとは思えんがね」

現実的に考えて、そんな大層な代物が自分達の住んでいる村の裏山にあるとは思えなかった。

「まあまあ、無いなら無いで別に構わないわよ。あったらあったで面白い訳だし」

フェリアとしてもそれぐらいの気分であるようだ。

その言葉を聞き、ラックもそれならそれで散歩やピクニック気分
で楽しもうと思えた。

それから更に奥に進むこと三時間。

その違和感に最初に気付いたのはラックの方だった。

裏山と言ってもそれ程広い訳ではない。子供の足でも四時間もあれば抜ける事が出来る程度の山だ。ラックも子供の頃から何度も足を踏み入れており、遊び慣れている山……のはずだった。

「（……何だ？）」

景色は何時もと変わらない。道も歩き慣れた道だ。それだと言うのに、急に村との距離感が解らなくなって来始めたのだ。

「（気のせい……じゃないよな）」

気のせいだと考えるのは簡単だった。現にラックは途中までそう考えていたのだが、足を進めるにつれ距離感の狂いが激しくなっていくのがはつきりと解った

「フェリア」

「ん、何？」

前を歩いていたフェリアがゆっくり振り向いて返事をする。

「さっきの地図、もう一度見せてもらえないか？」

「いいけど？」

そう言ってフェリアは先程の地図を再びラックに手渡す。

「（……え？）」

自分の距離感や方角の狂いを正す目的で地図を見ようとしたのだが、再び地図を見てラックは驚きの表情を隠せなかった。

「（地図が、変わってる！？）」

先程まではもっと大雑把な地形を示した地図だったはずなのに、今見ている地図はより詳細な地図へと変わっていたのだ。

「どうかしたの？」

不思議そうに、ラックを見つめるフェリア。

「これ、さっきの地図……だよな？」

「え、そうだけど？」

何かおかしい所でもあるのかと言わんばかりにそう述べるフェリ

ア。

ラックが手に持っている地図を覗き込んでも、彼女は少しもおかしな表情を見せなかった。

「……」

あまりに不可解な状況だった。

フェリアはこの地図の変化に、異変に気付いていない。だが、自分はこの地図が変化していると思っている。この場合、考えられるパターンはそう多くない。自分がおかしいのか、フェリアがおかしいのか、それとも地図がおかしいのか。全てにおいておかしくなっているパターンも考えられるが

「……なあ、フェリア」

とにかく何かがおかしい。

「もうすぐ日も暮れてくるし、そろそろ帰らないか？」

ラックはこのままこの裏山を進むことに危険を感じ、村に帰る事を提案する。

「そうね。そろそろ帰りましょうか」

特に反論を述べる理由も無く、フェリアはラックの意見に賛同し、二人は来た道を戻り始める。

来た道を戻るだけだ。

ここに来るまでほぼ一本道。迷う余地など何処にもない。

そのはずなのに、何時まで経っても村に着かず、それどころか先に進めば進む程更に奥に進んでいる感覚に囚われ始めたのだ。

「……ねえ、ラック」

「何だ？」

「もしかして私達、道に迷ってる？」

ここに至り、フェリアもその事実気付いたらしく、ラックに確認の言葉を求めてくる。

「……多分な」

迷っている事は既に確実なのだが、自分自身その事を認めたくなかったのか、思わずそんな返事をしてしまう。

「（まずいな。暗くなればそれだけ動き辛くなる。かと言って下手に行動を起こすのも危険だ）」

空はすでに赤く染まり始めている。時期に夜の暗闇が訪れるだろう。

その前にこの状況をどうにかして切り抜けなければと考えていると
「ラック、ちよつと休まない」

フェリアが休憩を求めてきた。

「……そうだな。無駄に歩き回っても仕方が無いし、少し休むか」
無理もない。もう何時間も歩きっぱなしだ。

二人は少し開けた場所を探し、大きな岩に腰を下ろして荷物を降ろす。

ようやく一息ついた頃には空が黒く染まり始めていた。

「仕方がない。今日はここで野宿をしましょう」

「……は？」

フェリアの言葉に遅れること三秒、ラックはそんな間の抜けた声を上げてしまう。

「もうすぐ日も沈むし、夜の暗闇の中を歩き回るのは危険よ。体力を無駄に消耗するだけだわ」

「いや、それはそうだが……」

フェリアが言っているのは正論だ。事実、ラック自身もそう考えていた。ただ、そう言う事は普通男が提言して女を説得するものではないだろうかとラックは内心で思う。

「……解った」

フェリアが突然何かを言い出す事は珍しい事ではない。

何より、今回は正当性があるのだから異論も反論もする気はなかった。

「そう決まったんなら俺は薪を集めてくる。ここを動くなよ」

ラックはすぐに思考を切り替え、今為すべき事を考え始める。

夜の山は気温が下がる。野生の獣達から身を守る意味も含めて火は熾しておいた方が良さだろう。そう考え、ラックは行動に移ろう

とするが

「あつ、ちよつと待つて」

フェリアはラックを呼び止め、降ろしていたリュックの中をガサゴソと探り始める。

「何やってるんだ？」

「決まってるじゃない。テントを探してるのよ」

「……は？」

一時沈黙。

「……えーと、何をやっているんだ？」

思わず笑顔で指を動かしながら再びそう聞くと

「いや、だからテントを引っ張りだそうとしているのよ。簡易テントだけど無いよりましでしょ」

返ってきた答えは先程と大して変わってはいなかった。

それを聞き、脳が一時停止したかのような錯覚に襲われる。

「ほら、ぼさつとしてないで手伝ってよ」

「あ、ああ……」

それから三十分程して簡易テントの組み立てが終わる。

簡易テントと言っただけあつて、サイズ自体は大きくはなく一人用ではあるのだが

「……これ、どうやってその中に入ってたんだ？」

どう考えてもフェリアが背負っていたリュックの中に納まる大きさではない。

「リュックの中の空間を呪法で拡張してみました」

「またお前はそう言う事を……」

昼間言っただ言葉はやはり彼女には届いていなかったようだ。しかし、今回はそれが有意に働いたため何も言う事は出来ない。

さて、呪法でそこまでの事を遣って退ける事が出来るのであれば村まで呪法を使って帰れば良いのではと思われるかもしれないが、呪法には多くの制限が存在する。

昼間フェリアが使っていた空間転移系の呪法に関しても、まず自

分の位置、座標が解らなければ使用出来ないと言う現状において最もネックになっっている問題があるため使えないのだった。

「いや待て、中の空間を拡張したところで質量は変わらんだろ。重たくなかったのか？」

「うん、結構重たかった」

ラックの問いにさらっとそう述べるフェリア。

「何で俺に言わなかった」

「だって、言ったらラック持とうとしたでしょ」

「当たり前だ」

「だから言わなかったの」

どうやら、自分の荷物をラックに持ってもらうと言う行為が嫌であつたようだ。

「……解つた。もうその件に関しては追及しない。だが帰りは持たせて貰うぞ」

「はいはい」

知ってしまった以上、それを見過ごせないのがラックである。

フェリアもそれが解っているためあえて反論はしない。

「ついでに聞くんが、食べ物とかは無いのか？」

「干し肉ぐらいしかないよ」

「あるのかよ……」

その答えを聞き、再び精神的ダメージを受けるラック。

流石に食べ物が入っていないだろうと思つての問いだったためだ。

「……まあいい。おかげで食料調達の手間が省けた」

現実的に考えて有益な事なのだからこの際は良しとすべきである。その後、薪を集めて火を熾し、近場にあつた湧水より水を汲みフエリアが持ってきた干し肉を食べ終わる頃には夜はすっかり更けてしまつていた。

そんな状況で薪や湧水が確保出来たのは実に不幸中の幸いであつたと言えよう。

「さてと、ご飯も食べ終わつたし、明日に備えてそろそろ寝よつか」

「そうだな」

「毛布一枚しかないからちよつと狭いけど、別にいいよね」

「ああ」

フェリアの言葉に思わずそう相槌を打ってしまうが

「……は？」

一呼吸遅れてそう間の抜けた声を上げてしまう。

「枕は……どうしよう。流石に二人じゃ使えないし、うーん……」

「あ、いや、待ってくれフェリア。お前、さっきから一体何の話をしているんだ？」

「何って、一緒に寝るんじゃないの？」

ズガンッ！！

地面に頭を突き立てるラック。

どうやら彼の中で発生した何かしらの精神的な超重力が肉体に影響を与えてしまったようだ。

「……どうしたの？」

そんなラックを不思議そうに見つめるフェリア。

「お、お前な……」

先程も述べた通り、テントとは言え所詮は簡易テント。そのサイズは一人用だ。

年齢上でまだ子供とは言え、十五歳ともなれば大人の一步手前、とても二人で寝られるスペースはない。もし寝ようとするとするならば、それこそ体と体を密着させる形となってしまうだろう。

「昔はよく一緒に寝たじゃない」

「何時の話だ何時の……」

先程の地面へのヘッドバッドの影響か、頭を押さえながらそう述べるラック。

どうやら色々な意味で軽く頭痛が襲っているようだ。

「でも、夜の山は冷え込むよ。山で遭難した場合は体力を温存するために体温の低下は極力控えるべきじゃない？ だったら一緒に寝た方がいいでしょ」

正論だ。極めて正論である。

だが、それは理屈や理論の上での正論であって、人の心までは計算に含まれていない。

「……なあ、フェリア。こんな事はあまり言いたくないんだが、俺達もう十五歳だ。後半年もすれば十六歳になって成人の儀も迎える。何時までも子供のままだじゃないんだ」

「うん？」

「だから、そう言う無防備な事はしないでくれ。俺だって男なんだ。そう言う事をされると……その、思い余ってフェリアを襲わないとも限らない」

自分自身で一体何を言っているんだと思わないでもないが、それがラックの本音だった。

一時の状況に流されてそんな事はしたくないからの思いで述べた言葉だったのだが

「いいじゃない。別に」

何だそんな事かと言わんばかりにそう述べるフェリア。

「はあっ!？」

その一言にラックは素っ頓狂な声を上げてしまう。

「な、何言ってるんだよお前はっ!！」

同時に怒りが込み上げてきた。

意を決して言った自分の言葉を否定されたからではない。フェリアがそう言う事をその程度にしか考えていないのかと言う事に対して怒りを感じたのだ。

「何って、ラックが私を襲うかもって話でしょ？ 大丈夫よ、ラックはそんな事しないもの」

「どこにそんな保障がある!！」

こっちの気も知らないで、と口に出掛けるが、それを言ってしまうえばそれこそ後に引けなくなってしまう。

「……んー、それじゃラックが絶対にその気にならない言葉を言っ
てあげましょう。効果は絶大、これを聞けばラックは私に手出し出

来なくなるわ」

そんな言葉があるのかと聞き返そうとするラックだったが、途中でフェリアとの視線が合う。

「な、何だよ？」

見られる。

フェリアは真っ直ぐにラックの眼を見ている。ラックはフェリアのその視線から眼を逸らす事も出来ず、フェリアはラックの眼を見ながら言う。

「私は……ラックを信じてる」

「っー！」

息を呑むラック。

フェリアの言った通り、効果は絶大だった。

「ラックは優しいから、こう言えば私を傷付ける事なんて出来ないでしょ」

「……はあ」

ここに来て、ラックはようやくフェリアから視線を外す事が出来た。

何てことはない。先程のあれは見られていたのではなく、見透かされていたのだ。

元より長年付き添った幼馴染である。こちらの思考パターンなど彼女にとってはまさにお見通しなのだ。

「解ったよ。ったく、どうせ俺はフェリアには勝てないさ」

そう述べるラックはまるで拗ねた子供のようにであった。

「解ったから早く寝ろよな」

このままでは立場が悪くなる一方だ。そう思い、フェリアに寝る事を進めるラックだったが

「一緒に寝ないの？」

「話を蒸し返すなよ……」

フェリアの一言にラックはややうんざりした表情を見せる。

「夜の山が危ないのはフェリアだって解ってるだろ。どちらにせよ

火の見張りは必要だ」

「それもそうか」

「どうやら今度は素直に納得してくれたらしい。」

「じゃあ、途中で交代するから適当に起こして」

フェリアはそう言いながら一人テントの中へ入っていく。

「ああ」

フェリアのその言葉にそう返事をするラックであったが

「……ねえ、ラック」

フェリアはテントの入り口から顔を出しラックの名を呼ぶ。

「そんな事言つて、実は交代する気なんて無いでしょ」

「あるよ」

「嘘ばかり、朝まで自分が見張りしとくから安心して寝ろって顔に書いてあるわよ」

「……」

凶星であった。

どうにも、本日はラックにとって嘘がつけない日となっているようだ。

「たまには俺のやる事を黙って見過ごしてくれんかな？」

男として、格好をつきたい時もあるのだとラックは主張するが

「んー、時と場合によるかな」

フェリアの正論の前にあっさりと打ち破られてしまう。

「まあ、ラックの言い分も解るし、今回はお任せしようかな」

「そうして貰える则有難い」

「どうやら今回は譲歩してくれるらしく、フェリアはラックに見張りを任せるつもりのようなのだ。」

「それじゃあ、そんな真面目で格好良いラックに一つ良い事を教えて上げましょう」

「ん、何だ？」

既に火の見張りに入っているラックがそう返事をする

「成人の儀にラックが何か言ってくれる事、私、楽しみにしてるよ」

「っ!？」

そんな心臓に悪い言葉を笑顔で言い残し、フェリアはテントの中へと姿を消していった。

「……」

一人、焚き火の前で硬直し、沈黙するラック。

どれぐらいの時間そうしていたのかは定かではないが、とにかく更け行く夜の闇の中で

「（本当、見透かされているなあ……）」

そう思い。ラックはただただ悩み続けるのであった。

第二章『国王代理と騎士団長』

第二章『国王代理と騎士団長』

やや時は遡り、カラト村から遠く離れたとある城の執務室。

そこで書類の束を相手にする少年の姿があった。

年の頃はおそらく十歳前後、金髪碧眼の端正な顔つきで、見た目で年齢を判断するのが難しい年頃ではあるが、黙々と仕事をこなすその姿は並みの大人顔負けの姿だった。

「ランク様、少しはお休みになって下さい」

そんな少年、ランクに話し掛ける男が一人。

年齢はおそらく三十歳前後、ランクとは対照的な大人であるがための年齢の判断の難しさがあつたが、見るからに真面目そうで堅物なイメージが印象的だった。

彼に関して特筆すべきはその黒さにあつた。

別に内面がどうのこうのと言う話ではない。言葉通り外見が、彼は黒髪黒眼である上に黒い甲冑を着込んでおり、誰もが一目で彼のイメージを黒だと印象付けられてしまつたろう。

「そうはいかない」

ランクは手を止めずにそう答えを返す。

「国の内情が圧迫している今、及ばないまでも国王代理である私が身を削り仕事を為さねばならない。休んでいる暇などはない」

そう答えるランクの顔色はあまり良いようには見えなかった。

文字通り、その身を削って仕事をしている様子が伺える。

「ですが、このまま無理を続ければ再び倒れてしまわれます」

どうやら無理が祟って倒れてしまった事がすでに何度かあるようだ。

その言葉を聞き、手を止めるランク。

「ウィルの言う事は解る。だが、それでも誰かがやらなくてはなら

ない。そうしなければこの国は国として成り立たなくなってしまう。
……そうだろう？」

「それは、申される通りですが……」

黒甲冑の男、ウィルの言葉をランクは否定している訳ではない。
ただ、ランクは自分が為さねばならない事を自覚しているのだ。
若千十歳そこその少年であるランクがだ。

「心配してくれている事には感謝している。けど後少し、せめて王位継承の儀が終るまでは私の我儘を許してくれ」

「我儘などともない」

ランクの苦労がどれほどのものかを知っているのか、ウィルはその言葉を否定しようとするが

「祖父、アベル王が亡くなってからもうじき一年。その間国王代理を務めてきたが、それももう限界が近づいている。……この国には新たな王が必要なのだ」

「……」

ランクのその言葉にウィルは何も言えなくなってしまった。

その言葉がどれだけの重たさを持っているのかがウィルにも解っているからだ。

「その件ですがランク様、本当によろしいのですか？」

「ウィル、まだ私に王位を継げと言うのか？」

またその話かとランクは少々困ったような表情を見せる。

「代々クラウス家に仕えてきた騎士の家系だからと言って、今更私を王にする必要もないだろう。そもそも私に王の器はない」

「ランク様以外にレブルス国の王に相応しい方はおりません」

とりあえずこの二人の関係はそう言う関係であるらしく、事情もそう言う事情であるらしい。

「ランク様以上にこの国の事を思っている方を、私は知りません」

そのウィルの言葉にランクは何か言いたげであったが

「だが、この国の王に相応しいのはこの国で最も強き者であるべきだ。例外は無い。それが実力式階級制度を取るレブルス国の最低限

のルール。そうだろうか？」

実力式階級制度。

それは、文字通り実力ある者が高い階級に就く制度の事である。様々な問題が指摘されるこの制度を唯一取っている国、それがレブルス国であり、レブルス国の王はレブルス国内において最強の人物になる事となっている。

「残念ながら、私には兄様達のような武才がなかった。それを知った時、私は一人の文官として王に仕え国に尽くす事を決めたのだ」
残念だと述べながらも、そこに悔いや無念があるようではなかった。

「兄様……達？ ランク様の御兄弟はラルス様お一人だけでは？」

ふと、ランクのその言葉を疑問に思いウィルはそう質問をする。

「あ、いや、何でもない。気にしないでくれ」

その言葉を訂正するランク。

「とにかくだ。一月後に行われる武闘大会で全ては決まる。その優勝者が次代の王となるだろう。それまで私は国王代理の役割を果たすつもりだ」

そう述べ、再び書類処理に移ろうとするランクであったが

「……ランク様」

「ん？」

ウィルの言葉にその手を今少し止める。

「先程ランク様はこの国の王に相応しいのはこの国で最も強き者であるべきだと申され、ランク様はご自身にその力が無いと申されました。では、その力があれば、ランク様はこのレブルスの王となっていただけなのでしょうか」

「……そうだな。私に王となれるだけの力があるならば、私が王となる事でレブルスがより良い国となるのであれば、私が王となっても構わないと思っている」

レブルス国のために必要な事を為す。

結局の所、ランクの最終目的はその一点にあった。

「だが、力などと言うものは一長一短で身に付くものではあるまい。それに人には向き不向きもある」

ランクの言う事は尤もだった。

それが事実であるからこそ、彼は自身に王の器がないと言ったのだ。

「いいえ、一つだけ方法がございます」

だが、ウィルはそんなランクの言葉を否定する。

「その方法とは？」

「御霊です」

その言葉を聞き、ランクの表情が変わる。

「先日、城の呪法師達から御霊の所在に関する書類を見つけたとの報告がありました。伝説の神の御霊、それがあればランク様はこの国の王として相応しい力を手に入れる事が出来ます」

「御霊か……」

ウィルの言葉を聞きながら、ランクは何かを考え込むようにそう呟く。

「ランク様、私に御霊搜索の任をお与えください」

「……解った。御霊の件に関してはウィル、お前の好きなようにしろ」

「はい、有難うございますっ!!」

ランクのその言葉を聞き、歓喜の声を上げるウィル。

その後、手続き上の会話を交わしウィルは足早に執務室を後にする。

一人、執務室に残ったランクは深い溜息をつく。

「……ここに来て御霊の所在が解るなんて。全ては運命の導くままに……と言う事か」

誰に言うでもなく、そう呟くランク。

「もしそうだと言うなら、早く帰って来て下さい。兄さん……」

そう呟くランクの表情は、年齢相応の少年のものだったと言う。

第三章『御霊』

第三章『御霊』

「……ん」

太陽の光を受け、意識がゆっくりと覚醒していく。まだ重たい瞼をこじ開け、周囲を見回す。

「……しまった。寝たのか俺は」

岩に背を預け、剣を抱くような姿勢をしている自分の姿を見てようやく現状が把握出来た。

「あ、起きた？」

「フェアリア」

見れば、フェアリアは既に身支度を整え朝食の準備までしていた。

「……はあ、見張り役を引き受けたくせに寝てしまうとは、我ながら情けない」

「ご丁寧に体の上に毛布、おそらくフェアリアが使っていたであろう毛布まで掛けられていたのでは申し開きも出来ない。」

「そうでもないよ。ラックが寝たのって夜が明ける直前だったし、朝まで見張りしてたって言えばしてた事になるんじゃない」

「見てたのかよ」

「たまたまね」

「ここで「起こしてくれればよかったのに」と言うのは、毛布まで掛けてくれたフェアリアの気遣いを否定する事になるのであえて言わない事にした。」

「で、どうする？ もう一、二時間寝とく？」

ラックが眠りに落ちてからまだ三時間も経っていないとフェアリアは説明するが

「いや、もう起きる」

ラックはそう言うと言分の体に掛かっている毛布を取り、立ち上

がって軽く体を動かす。

「寝起きが悪いラックにしては珍しいね」

何時もであれば二度寝するところなのにとフェリアは述べる。

「不思議と眠気が無くてな。って言うかこの状況で二度寝する程俺の神経は図太く無い」

その後、朝食を食べながら今後の事を話し合う。

朝食と言っても昨夜食べた干し肉の余りな訳だが、とりあえず水分と塩分が補給出来て腹が膨れればこの際何でもよかった。

「それで、これからどうしようか？」

闇雲に山の中を歩き回っても昨日の二の舞となる可能性がある。何らかの方針が欲しい所だ。

「湧水が出てるって事は川なり水脈なりがあるって事だ。この辺りの川と言えば俺達の村に流れてる川ぐらいしか無いはずだ。だから水の流れを辿って行けば村に着くんじゃないかと俺は期待している」
水が途中で塞き止められていたり、何らかの理由で流れが辿れなくなればこの方法は使えない。

可能性にはそれ程高い案とは言えなかった。

「後はどこか広い場所に出られればと考えているが……」

結局の所、行き当たりばったり感が拭えない。

「そっちは何か無いか？」

こちらの意見は全て述べ終わった事を伝え、フェリアの意見を聞くとするラック。

「うーん、それが一つ気になってる事が……私達の村って石畳とが無かったよね」

「石畳？ いや、見た覚えはないな」

庭や道路などで平らな敷石を敷き詰めた場所、この場合は平らな敷石を敷き詰めた道を指す。

「石畳がどうかしたのか？」

「あー、論より証拠を見せた方が早いよね。すぐそこだし、そろそろ行こうか」

食事も終え、出立準備も出来ていたので二人はすぐにその場を後にする。

歩き始めて僅かに数分。

「これこれ」

「……本当だ」

フェリアが指差す先には若干途切れ途切れではあったが、確かに石畳の道があった。

「さつき湧水汲みに行った時に見つけたんだ」

見れば、確かに湧水が出ている場所から見える距離だった。

「……」

湧水が湧いている場所と石畳の距離を見てラックは思う。

「（昨夜は気付かなかった。暗かったから気付かなかっただけ……なのだろうか？）」

確信がある訳ではないが、昨日裏山に足を踏み入れた時にもこれと似たようなことがあった。

地図の一件である。

「（この石畳もあの地図と同じように急に現れた代物だったとしたら……）」

想像の域を出ない考えとは言え、それを無視する事は出来ない。

「どうする？」

「とりあえず道があるって事は人が行き来した事があるって事だろ。もしかしたら俺達が知らないだけで村の周辺には石畳があるのかもしれない」

「って事は、この道のどっちかを辿って行けば村に辿り着けるかもしれないって事が」

可能性の話を始めたらきりがながい、現実的に道は二人の目の前にある。

どちらにしても山の中を遭難していた状況よりはましな状況だと

言えるだろう。

「問題はどっちに行くか、だね」

確率は二分の一。村に続いている道か村以外に続いている道か。

「こう言うときは下手に決めるより運に任せた方が良い」

ラックはそう言う一枚のコインを取り出し

ピンッ

親指で軽く弾き、コイントスを行う。

弾かれたコインは回転しながら宙を舞った後、ラックの手の甲にて受け止められる。

「……あっちな」

予めコインの表裏でどちらに行くかを決めていたのか、ラックは道の片方を指差す。

「異議なし」

先程も述べた通り確率は二分の一。

現在の状況では判断材料が無いためラックの決め方に異論はないとフェリアも賛同する。

石畳の上を歩くこと二時間、二人は驚くべきものを発見する事となる。

やや切り立った崖に挟まれる様に姿を現したのは

「あれって神殿……だよね？」

「ああ、そう見える」

一言で言うならば、それは神殿と思われる建造物であった。

小さな神殿ではない。まだ距離があるため正確な大きさは測りかねるが、一般で言うところの中規模から大規模の神殿に相当するように見えた。

「行ってみましょう」

いい加減見飽きてきた山道の先に突如として神殿が現れたのだ。否応なしにテンションが上がってきたのであろう、フェリアはそ

う声を上げ歩く速度を高める。

それに人が造った建造物であるのであればその中に誰か居る可能性もある。

色々な意味で期待をしていた二人であつたが、その期待はすぐに裏切られる事となる。

「これは……酷いな」

神殿の近くまで歩みを進めた二人はその光景に啞然とした。

二人が目にしたものは倒れた柱に所々崩れた屋根。床は割れ刃りには草木が生え茂っており、それはまるで廃墟のような神殿だった。遠巻きに見た感じでは普通に見えたんだがな」

「どう見ても手入れされてる気配無いよね」

その荒れ方は素人目で見ても長い間放つて置かれていた事が解る。「とりあえず中也見てみるか」

「そうね」

ここまで来れば中に人が居る事を期待するなど無駄と言うものだろう。

外観からしてあれだったのだ。中也相当荒れているに違いないと予想し、二人は覚悟を決めて神殿の門をくぐるが、今度はその予想が良い意味で裏切られる事となる。

「驚いたな……」

「うん……」

倒れた柱に崩れた屋根。割れている床に生い茂る草花。

一見して、それは予想していた光景であつたが、二人が目にしたのは実に幻想的な光景だった。

崩れた屋根からは木漏れ日が入り込んで崩れた床を照らしており、そこから生えている草花は倒れた柱をまるで癒すように咲き誇っていた。

「不思議な光景だ」

「うん、まるで夢を見ているような感じ」

その光景は実に奇妙にバランスが取れており、まるで絵に画かれ

ているみたいに美しく、時を感じさせないほど静かで、安らぎすら感じる空間を作り出していた。

「こんな場所が村の近くにあるなんて……」

場の雰囲気と言うのだろうか、神殿であると言う理由を除いてもここは何か神聖な空気が満ちており、明らかに普通ではない場所である事が感じ取れた。

そんな場所が村の近くに存在するなど、言葉通り思ってもいなかった。

「ねえ、ラック。ここつてもしかして例の場所なんじゃない？」

「御霊か……」

フェリアの言葉に当初の目的を思い出す。

この場所であるならば、この場所を目の当たりした今ならば、その存在を信じられる。

「しかし、何と言うかどうにも、足を踏み入れずらい感じがあるな」
例えて言うならば、真っ白な雪原に足を踏み入れ景色を壊そうとしている心境だった。

「出来るだけ荒さないように進みましょう」

「ああ、そうだな」

そもそも御霊を探す事が今回の目的ではあったが、本当に御霊を手に入れようとかそういう気はまったく無かった。だから、二人にしてみれば御霊よりもこの景色を荒らす事の方がどうにも気が引ける所業に感じられた。

「ラック、あれ見て」

先を進むフェリアが何かを見つけたのか声を上げる。

見るとそこには地下へと続いているような通路があった。

「（…… 妙だな）」

地下通路の存在がではない。いや、神殿に地下通路があると言う時点でそれなりに妙な存在ではあるのだが、ラックが目をつけたのは通路の在り方に関してだった。

「（見た所、この神殿にはしばらくの間人が足を踏み入れた痕跡は

見当たらない。だと言つのにこの地下通路の中には植物が一切入り込んでいない」

今二人が居るのは神殿の礼拝堂と呼ばれる場所で、入口の広場同様に辺りに植物が生い茂っているのだが、地下通路の中にはそれらの植物が一切生えていなかった。そればかりか、まるで礼拝堂と通路との間に壁があつたかのようにその境目までもがはっきりと分かれていたのだ。

「（どう考えても妙だ……）」

ここに至り、ラックは再び昨日の地図の件と先程の石畳の件の事を思い出す。

「（不可解な現象が続き過ぎている。一度や二度なら偶然や気のせいで済ませられるが、これだけ連続して起きるとまるで何かの筋書き通り事が進んでいるように思えてくる）」

内心でラックがそう考え込んでいると

「ねえ、入ってみましょう」

フェリアがそう声を上げる。

「……ああ、そうだな」

そもそも今自分が考えている事はかなり突拍子もない事だし、この先に何かあるのかを確認せずに帰るなどフェリアが許さないだろう。ならば、今更引き返す事など出来ない。

そう思い、ラックは意を決し通路に足を踏み入れる。

「方向的には山の方に続いているみたいだな」

通路を進む事数分、自身の方向感覚を信じるならば山の方へと向かっているとラックは述べる。

「みたいね。外の光も届かなくなってきたみたいだし」

途中までは外からの明かりがあつたため歩くことに不自由しなかったが、徐々に光が届かない場所に来始めたのか、周囲が暗くなり足元が見え辛くなってきていた。

「そろそろ明かりをつけるか」

フェリア程ではないが、ラックも山に入ると言つ事で緊急用の道

具を幾つか持ってきていた。

その内の一つに蠟燭があり、ラックはリュックより蠟燭を取り出して火をつけようとするが

「……それにしても、この通路何か変じゃない？」

フェリアは自身の足元を踏みならすように足踏みする。するとカンカン……

堅い何かとぶつかる音が辺りに響く、少なくとも土や石とぶつかった音ではない。

フェリアが何の音だろうと怪訝そうな表情を見せるとパツ！！

急に周囲が明るくなる。

「くっ！！」

「きゃっ！！」

突然の出来事に二人は思わず目を覆う。

目が暗闇に慣れていたため、光に対して反射的に行った行動であったが、二人はすぐに何が起こったのかと警戒しながら辺りを見回す。

「……何これ、この通路……全部鉄で出来てる？」

光によって視界が良好になったためか、周囲がどのような状況がすぐに解った。

二人が歩いていた通路は土や石ではなく、鉄によって構成されていたのだ。

カンカン……

その鉄の壁を指で軽く叩くフェリア。

「嘘、しかも分厚い」

音の反響具合から、その壁が少なくとも数センチ以上はある事が確認出来る。

「それにこの光は一体……」

天井を見上げると、そこにはまるで太陽のように光りを放つ棒状の物体が存在していた。

見た事の無い物体にフェリアが戸惑っている

「蛍光灯だ……」

ラックがその声を上げる。

「ラック、これ知ってるの？」

「ああ、機械だよ。多分さっきのフェリアの足踏みでスイッチが入ったんじゃないかな」

「キカイ？」

聞きなれない言葉のせいか、そう喋るフェリアの発音は微妙にラックのそれと異なっていた。

「そうか、フェリアは実物を見たこと無かったわけ。世界各地の遺跡から発掘される古代文明の遺産の総称だよ。俺も詳しくは知らないけど、その大半が電気の力で動いていて、一説じゃ神様が世界を創造するときに使った道具だとか大層な事も言われている代物だ。各国でその研究が進められているらしいが、遅々として解明は進んでおらず、今の技術じゃ再現が不可能って事ぐらいしか解っていないらしい」

「……んー、とにかくすごい代物って事？」

フェリアの中では機械はとりあえずそう言う存在なのだと認識されたようだ。

「遺跡から発掘されるって事は、ここは遺跡って事になるのかな？」

神殿の奥なのに、とフェリアは疑問を口にする。

「他所から運んで来た可能性もあるが、この神殿がかなり古い代物である事は確かだ。遺跡の存在を知った上で作られた神殿だと考えた方が自然だろうな」

憶測の域は出ないが、そう考えればそれなりに話の筋に違和感がなくなる。

「神殿に遺跡に御霊か、フェリアじゃないけどワクワクしてきたな」
俄然、御霊の存在の信憑性が高まってきたとラックは述べる。

「ふふーん、ラックも乗ってきたわね」

その言葉を聞き、ようやく火がついたかと言わんばかりに嬉しそ

うな声を上げるフェリア。

「それじゃ改めて、この先に何があるのか確認しに行きましょう」
「おう」

二人は鉄で出来た通路の先に何があるのかを確かめるべく、歩く足を早めた。

足を進めること約三十分、二人はやがて広い部屋へと出る事となる。

「これはまた……」

「ふえー、すごいねー」

部屋の形、広さは直径五十メートルの半球状。広場と呼んで差し支えない広さだった。

その壁は先程の通路と同じく鉄で出来ており、球状である天井の至るところにはこれまた先程と同じく光を発する機械、蛍光灯が取り付けられていた。

通常であればそれだけでも目を奪われる光景であったのだが

「あれ、何かな？」

「さて、皆目見当もつかんな」

部屋に入って二人の視線がまず向かったのは、広場の奥にある祭壇のような場所だった。

二人はその正体を確かめるべく、広場の奥へと足を進める。

祭壇の上、そこで二人が目にした物はこれまで二人が見た事が無い存在だった。

一見して、それは大きさ約三メートルの鉄製の箱のように見えたが、その金属性の大きな箱には見た事のないロープのようなものが沢山繋がれており、箱のおそらく蓋の部分にはガラスがはめ込まれていた。

その箱の存在も驚くに値する物であったが、二人の関心は箱の中身の方に向けられていた。

「これは……」

「水晶玉……かな？」

青い水晶玉。

箱の中は何かの液体で満たされており、液体の中を気泡が流れている事から箱の中で何らかの循環が行われている事が読み取れた。その水晶玉はそんな液体の中央に支えられる事無く浮かんでいたのだ。

「……水晶玉って浮いたっけ？」

「そういう問題か？」

どう見ても常軌を逸した光景ではあったのだが、その光景に不快感を感じられなかった。

寧ろ、その青い水晶玉のあまりの鮮やかさは見ているだけで心が奪われてしまいそうだった。

二人がしばらくの間その水晶玉を見入っていると

……トクン

「（ん？）」

一瞬、その水晶玉が動いたように見えた。

「（何だ……？）」

気のせいだろうか。そう思いながら水晶玉を見続けているとドクン

水晶玉は生きているかのように再び鼓動する。

「っ！？」

見間違いではない。

今、確かにこの水晶玉は動いた。それを認識すると同時にゾクッ……

背筋を冷たく鋭い何かが駆け抜けていく、まるで稲妻が走ったかのようにだった

「（何だっ！？）」

何かがヤバイ感じがした。

理屈や理論では無くただの直感だが、全身の毛が逆立ち、言葉に

出来ない焦燥感に駆られる。

「フェリアー!!」

とにかくこのままここに居てはいけない。

そう思い、ラックはフェリアを連れてこの場を離れようとするが

「フェリア……?」

フェリアはその水晶玉を今尚見入っていた。

いや、その表現は聊か間違いである。フェリアの視線は水晶玉から外される事なく、こちらの声がまるで聞こえていないように微動だにしなかった。

ラックはすぐにその異変に気付く、フェリアは水晶玉を見入っていたのではなく、水晶玉に魅入られていたのだ。

ドクンドクンドクン……

こちらの意図に気付いたかのように、水晶玉の鼓動が速くなっていく。

「（まずい、まずいまずいまずい……）」

先程から、本能が何度も何度もそう危険信号を発している。

「おい、フェ……」

とにかく何か行動を起こさなければいけない。

そう思い、ラックが意を決してフェリアに触れようとした瞬間

ドクンッ!!

一際高く水晶玉が高鳴り

バシユウッ!!

鉄の箱の蓋が開かれる。

「フェリアッ!!」

「え?」

ラックの悲鳴にも似た大声が届いたのか、我に返りそんな声を上げるフェリア。

そして彼女は認識する。開かれた箱の中から液体と共に数十本の細いロープがまるで生き物のように飛び出し、自分を襲おうとしている事を。

回避する間もなく、そのロープに囚われると思われた時
ドンッ！！

フェリアの体に衝撃が加えられる。

何らかの力によって横から押し飛ばされたのだ。いや、今更何らかのなどと言う曖昧な言い方をする必要はないだろう。ラックが咄嗟にフェリアを横から突き飛ばしたのだ。

「くっ！！」

突き飛ばした反動で自分も身を逸らす……などと言う動作がこの一瞬で出来るはずもなく、ラックは入れ替わるようにフェリアの立っていた場所へ移動してしまう。そして

シュルッ！！

フェリアに向かって伸びていたロープがラックの体に巻きついていき、ラックはどうにかしてそのロープを振りほどこうとするが、その強烈な力の前には為す術もなく

「うわああーっ！！」

宙に体を持ち上げられ、箱の中へと引きずり込まれる。

バシュウッ！！

引きずり込むや否や、箱はその蓋はすぐに閉じラックを外界から完全に遮断する。

そして、どこから注入されているのかは解らないが、先程まで箱の中を満たしていた液体が物凄い速さで噴出され、箱の中を再び満たそうとし始める。

「くそっ！！」

ラックは蓋のガラスを割って脱出しようとするが

ガキンッ！！

「なっ！？」

手足を鉄製の厚い板で拘束されてしまう。

どうにかして拘束を解こうとするが、不自由な体勢からでは思うように動けず、そうこうしている間に箱の中は液体によって再び満たされ、ついにはラックの全身を液体の中へ沈めてしまう。

「っ……！！」

ラックは呼吸を止め、どうにかしてこの状況を打開出来ないかと
思案するが

ヒュ……

今までどこに行っていたのか、青い水晶玉が突如ラックの眼前に
姿を現す。そして

「っ！？」

水晶玉は有無を言わずゆっくりとラックに近づき、まるで溶け
るように彼の体の中へと入り込んでいく。あまりに信じられない現
象だったが、その時のラックにはそんな事を考えている余裕はなか
った。何故ならば

「ぐ、があああああつ！！」

ラックの体内に入り込んだ水晶玉はまるで粉になったかのように
分散し、血管を介して体内を駆け巡り堪えがたい激痛を与え始めた
からだ。

ゴポゴポゴポツ……！！

悲鳴とともに口から空気が漏れていく、だが、今の彼にとってそ
んな事は些細な事だった。

強烈な電流が体を駆け抜けていくような感覚、頭の奥が焼き切れ
んばかりに目の前が何度も白く光り、拘束された体が大きく仰け反
る。

その痛みが絶頂を超え、意識が飛ぼうとした時

「ラックッ！！」

声が聞こえた。

自分の名を呼ぶフェリアの声だ。

ガンガンッ！！

今にも飛びそうな意識の中で、ガラスを叩きながら自分の名を必
死に呼び掛けてくるフェリアの姿がはつきり見えた。

「ラック、しっかりして」

ラックが箱の中に居る以上、呪法で箱を破壊する事は出来ない。

だからだろうか、フェリアはその細い腕で力いっぱいガラスを殴り続ける。他に幾らでも有効な方法はあったらうに、フェリアは無我夢中でガラスを叩いている。

見れば……その拳はガラスを叩いた衝撃で赤く染まり、血が流れ出ていた。

「っっ!!」

グッ!!

体に力が入る。

痛みは既に限界に達しており、指一本動かす事も出来ず後は意識を失うだけのはずだった。

だが、ラックはそれら全てを無視して体に力込めていき

メキ、メキメキメキ……バキンッ!!

遂には手足を拘束していた鉄の板を引きちぎってしまう。そして

全身全霊の力を込め

「はああああーっ!!」

バキンッ!!

目の前のガラスに拳を突き立てる。

それが最後の一撃だった。その一撃を最後にラックの意識は今度こそ本当に飛んでしまう。

だが、その最後の一撃が効いたのか

ピシッ、ピシピシピシ……

ガラスの蓋に突き刺さった拳の周囲にはどんどん亀裂が入っていき

……ドシヤアッ!!

遂には決壊を迎える事となる。

「ラックッ!!」

噴き出す液体と共に排出されるラックの体をフェリアが受け止める。

外気に触れ、空気を求めてラックの体が無意識に呼吸をしようとするが

「ぐっ、ぐっ、ぐぼっ……!!」

激しく咳き込むラック。

咳き込むと同時にその口からは大量の液体が吐き出されていく、
どうやら肺の中が液体によって満たされていたようだ。通常であればその時点でかなり危篤な状態であったはずなのだが

「ぐっ、はぁはぁ……」

自身の咳き込みが気付けたとなったのか、ラックは意識を取り戻す。
「げほ、げほ……」

残った液体を吐き出すようにしばらくの間は咳が止まらなかったが、それもすぐに落ち着きを見せ始めた。

「ラック、大丈夫？ 意識はある？ 体はなんともない？ 吐き気とかどこか苦しい所は？」

そんなラックを心配し、そう次々と質問を投げ掛けるフェリア。
「あ、ああ、何とか大丈夫……そうだ」

今もなお呼吸が荒く、流石に一つ一つの問いに答える余裕が無かったため一つの返事となってしまったが、少なくとも意識はあるし、身体的に問題がある箇所は見当たらなかった。

言葉通り何とか危機を脱する事が出来たようだ。

「よ、良かったぁ……」

フェリアは心底安心したような声を出す。見れば、少し目に涙を浮かべているようでもあった。

「良かったじゃないこの馬鹿」

ラックはそう言うとフェリアの手を取る。

「痛っ……」

自覚がなかったのか、ラックが手に取ることによってフェリアは自分の手が今どのようなになっているかに気付く。

「まったく、無茶しやがって」

ラックは手の使いぬフェリアに代わり、服を破いて彼女の手に巻いていく。

「素手でガラス殴ったらどうなるかぐらい解るだろ」

「だって……」

フェリアは済まなさそうな顔をする。

元はと言えばラックを助けようとして出来た傷だ。それをラックが怒ると言うのはそれはそれでおかしい話でもある。

「解ってる……」

だから、まず先に言っておかなければならない言葉がある。

「ありがとう、フェリア」

「……うん」

その後、二人は布を巻き終わるまでの間無言でいた。

お互い同じことを考え行動した事が嬉しくもあり、少々恥ずかしくもあつたがためだ。

「……よし、とりあえず応急処置はこれでいいだろう。骨は折れて無いみたいだが、早く村に帰ってちゃんとした手当をした方がいい」「うん。でも、私の事よりラックの方が……」

そこまで口にし言葉を止めるフェリア。

フェリアの言わんとしている事は解っている。確かにラックは意識を取り戻しその体に外傷は見当たらないが、その経緯を考えるならば楽観視などとても出来ない。

「俺の体の中に得体のしれない物が入り込んだ……か」

得体の知れない物、青い水晶玉。

あれが一体何だったのかは解らない。今はつきりと解っているのは、それがラックの体内に入り込んでいると言う事ぐらいだ。

「すぐに帰ってお父さんに見て貰おう。もし危ない物だったら……」
「だったら、どうなるのだろう。」

そんな事を確認するまでもない。最悪の場合は……死が待っている。

その事実を前に、当事者であるラックより先にフェリアの顔が真っ青になる。

「落ち着けフェリア。まだそうと決まった訳じゃない。今は村に帰る事だけを考えよう」

こういう場合、余計な事を考えると悪い考えしか浮かばないのが

人間と言うものだ。

そう思い、フェリアを説得して村に帰ろうとするラックだったが、当事者であるラック自身は不思議と落ち着いた気分でした。

「来た道を戻れば村に着くはずだ。行こう……」

「うん……」

フェリアを連れ、広場を後にしようと出口に足を向けるラックだったが

バシユウ……

突如、その扉を塞ぐように鉄の壁が下りてくる。

『え？』

そして、赤い光を発する何かが広場を染め上げ、けたたましい音が鳴り響く。

「何だっ！？」

「何、何が起こってるの！？」

訳が解らず、二人が周囲をキョロキョロと見回していると

『インストーラーエラー発生、施設内にて異常事態が発生しました。修復プログラム起動、施設を一時封鎖します』

そんな声が聞こえてきた。

『施設内に高エネルギー反応確認。危険分子と判断、防衛システムを起動します』

人の言葉ではあるが人の声ではない。どこか無機物的な印象を与える声だった。

「ねえ、ラック」

「ああ、良く解らないがヤバイ感じた」

何が起こっているのかは良く解らないが、そのけたたましい音が何らかの警告音であり、その声が述べている言葉が何を意味しているのかは解った。

今尚鳴り響く警告音と赤い光が広場を照らす中

ゴウンゴウンゴウン……

広場の中央、出口に向かっていた二人の後方の床が左右に分かれ、

音を立てながら何かがせり上がって来る。

「あれって確か……」

「ガーゴイル……か？」

ガーゴイル。

それは魔獣の姿をした拠点防衛用の人造兵器の総称。その性能は製作者の技量に左右されるが、一般的なガーゴイルは石で出来ており、与えられた単純な命令を忠実に実行する事しか出来ない。

だが、目の前のガーゴイルはその一般的なガーゴイルとは一線を画していた。

「でも、あれどう見ても鉄だよ。っていつかでかい鎧！？」

一般的にガーゴイルは魔獣の姿を模して造られるのだが、二人の目の前に現れたガーゴイルは全長約四メートルの巨大な鎧が動いているような人型であり、その体は見た感じ鉄で出来ていた。

とてもじゃないが一般的などと言う言葉が当てはまるようなガーゴイルではない。

「……動くの、かな？」

「そりゃ、動くんじゃないか？」

動かないのであればおそらく出てはこないだろう。

何より、先程の声を聞く限りではこのガーゴイルはこの遺跡、施設を守る事が目的のようだ。

そして、自分達はその施設に侵入した侵入者であり、不本意ではあるがおそらく防衛対象であつた青い水晶を持ち出そうとしている賊である。狙われない道理が無い。

『ターゲットロック。ガーディアン始動、目標を排除します』

ブウン……

そんな言葉と共にガーゴイルの目が赤い光を放つ。それが起動の合図である事はすぐに解つた。

「くそ、フェリアは下がってる。ここは俺が……っておいっ！？」

ガーゴイルの強襲に備え、作戦立てをしようと声を上げるラックだったが、振り向き見たフェリアの行動にそんな声を上げてし

まう。

「先制攻撃、行くよつ!!」

フェリアは手で印を組み、呪法を使う体勢に入っていたのだ。

「待て、こんな近くでそんなの使ったら!!」

時すでに遅し、フェリアの周りを囲むように光の文字が円陣を描き始め

「大火球つ!!」

力ある言葉と共に、直径二メートルの巨大な火球が姿を現す。

生み出された火球は一直線にガーゴイルに向かって飛んで行きドオオooooooooooooッ!!

炎と爆音と衝撃を巻き起こす。

「くっ!!」

衝撃に備えラックも咄嗟に防御呪法を展開する。

それは、フェリアの周囲に今も展開されている円陣と同じ物だった。先程フェリアの周囲に現れた円陣は火球を生み出すための物ではなく、その衝撃から身を守るための防衛呪法だったのだ。

「よしっ!!」

手応えあったのか、ガッツポーズを取るフェリア。

目の前で未だ巻き起こっている爆炎の凄まじさを考えるならば、その気持ちは解らなくもない。

「やるならやるって言えよ!!」

「いやー、ごめんごめん、何かヤバそうな雰囲気だったからさ」

先手必勝と言わんばかりにそう述べるフェリアだったが

ブワァッ!!

「え?」

爆炎を吹き消すように、質量をもった何かが音を立て高速で迫ってくる。

ガーゴイルだ。

驚くことにその体は無傷であり、自身に攻撃を加えたフェリアを最初のターゲットとしたのか、まっすぐフェリアに向かって移動し

ていく。

鎧であるのだから足があり、普通に考えるならばその移動手段は歩くか走るかに絞られると思うのだが、ガーゴイルは驚くことに地を這うように空中を水平に滑空してきた。

見ればガーゴイルの背部から何か光が発せられており、その光が何らかの推進力を生み出している事が予測された。そして、その速度は走る速度とは比較にならなかった速さだった。

「フェリアッ！！」

チャキッ！！

叫ぶが早いか行動が早いのか。

ラックは剣を抜き取り、滑空するガーゴイルに体当たりするように剣を振り下ろす。

ガキイインッ！！

「ぎっ……！！」

堅い。

剣を持つ手が痺れる。まるで大きな岩を棒で叩いたような手応えだった。

無理もない。相手は岩ではなく鉄で出来ており、ラックが手に持っているのは鉄の剣。普通に考えて刃が通るはずがない。

だが、それでも衝撃を加える事は出来たのか、ガーゴイルの軌道はフェリアから逸れ広場の壁へと突き進んでいき

ドオオオオオーッ！！

巨大な衝突音が広場に響く。その際の衝撃の凄まじさが音から読み取れるようであったが、鉄製の壁は大きく凹んでいるにも関わらずガーゴイルは無傷であった。

ヒュッ！！

そんなガーゴイルを追従するようにラックは距離を詰めていた。鉄の剣で鉄の装甲を切るのは不可能、それは先程の切り込みで解った。

ならば、次にラックが狙うのは装甲と装甲の繋ぎ目である間接部

分。

壁にぶつかり体勢を崩している今ならば通常時よりも正確に多く切り込める。そう思い

ガギギンッ！！

一度の踏み込みで三撃。首、脇、腰に刺突、右薙、逆風を叩きこむが

「くっ！！」

その何れも目に見える効果は得られなかった。それどころかブンッ！！

今度はガーゴイルの拳がラック目掛けて繰り出される。

ガキイインッ！！

そのガーゴイルの拳を剣の腹で受け止め盾代わりとするがヒュ、ズザアッ！！

受け止める事が出来ず、ラックの体は宙を飛びフェリアの居た位置まで押し戻されてしまう。

「呆れた堅さだ。おまけに隙間すら無い……」

最初の一撃と先の三撃で痺れる腕を軽く振るラック。

「どうする？」

まともにやって勝てる相手ではない。

フェリアもそれが解ったのか、今度はラックとすぐに連携して動けるように体勢を立て直す。

「切って駄目なら断つしかない」

剣を正眼に構え直し、呼吸を整えるラック。

「解った。じゃあ隙は私が作る」

ラックが何をやるうとしているのかが解ったのか、フェリアは先程とは違う印を組み、呪法を展開し始める。

「（集中……）」

例外なく、物質とは何かと何かを繋ぎ合せる事で出来ている。

その繋ぎ目を針に糸を通すより正確に断つ事が出来れば、理論上はどのような物質をも切断する事が可能だ。しかし、理論上は可能

であつてもそれを実現する事は極めて困難である。

通常であればそのような事は不可能だと言えるだろう。だが、ラック・ラグファースにはその不可能を可能にする事が出来る特技があつた。

「（……見える）」

ラックの眼にガーゴイルの装甲が映る。その体には薄っすらと細い線が描かれていた。

それこそが物質と物質の繋ぎ目、極限の集中下でのみ彼はその線が見えるのだ。

「（薪を割るようにはいかないだろうけど……断つてみせるっ！！）」

「

以前、ラックが薪を割つた際にも同じ現象が起こっていた。

あの時と同じようにガーゴイルの装甲に走っている線を切る事が出来れば、同じことが起きるはず。残る問題は相手が高速で動く物体だと言う事。薪とは違い容易に切り込めるはずが無い。

「（長引けば長引くほどこちらが不利になる。チャンスは初手の一瞬のみ……）」

全てを次の一振りに賭ける。そう思い、ラックは更に集中力を高める。

ゴウッ！！

やがて、ガーゴイルは再びこちらを視界に捉えたと先程と同じように背部より光を放ちながら高速で迫ってくる。だが、その行動は二人にとつてすでに予測された行動だった。

スッ！！

手を十字に交差させるフェアリア。

「呪縛、スペルバインドッ！！」

力ある言葉が広場に響き、その交差を解くと同時にフェアリアの指から無数の光系が現れる。

その光系は一本一本が意思を持っているかのように伸びて行き、瞬時に全方向からガーゴイルの体に絡みつきその動きを封じる。

ズ、ガ、ズザザアアアーッ！！

それでも一度付いた加速による慣性移動は止められず、鉄の床の上をスライドしながらガーゴイルが迫ってくる。だが、その速度は滑空時の速度よりも遥かに遅く、ラックにしてみれば目標が正面からゆっくりと迫ってくるに等しい状態となった。

「はああーっ!!」

気合と共に、ラックは寸分の狂いも無く剣を真つ直ぐ振り下ろす。
キーンッ！！

断つた。

「ラックのその一撃は間違いなくガーゴイルの体を両断した。だが何っ!？」

ガーゴイルが生物であれば、そのまま意識を失うか身体の欠損により体が硬直するなりして、おそらくそこで勝負は付いていただろう。だが、先にも述べた通りガーゴイルは人造兵器、生物ではない。首元から腰にかけ、斜めに両断された体の上半身は左右に分かれながらも動き続け

ガコンツ！！

ガーゴイルの頭部が開く。正確には顔部分、扉が開くようにそこが左右に分かれ、その奥にあるものがラックを捉える。

「つ！？」

見るのが先か撃たれるのが先か、ラックが確認出来たのはそのガ
ーゴイルの顔の奥に何かを打ち出す発射口の様な物があると言う事と
カツ！！

そこで何かが一瞬光ったと思った所までだった。

ドオオオー！！

凄まじい爆音と衝撃が広場に響く。

「つ……」

痛みは無かった。

ただ、自分の体が吹き飛ばされ、辺りの景色がゆっくりと流れていくのが見えた事を覚えている。そして、その時フェリアの顔が僅

かに見えた事も覚えている。

何か信じられないものを見ている。そんな印象的な表情だった。
ダンッ、ダンダン……。

宙を舞い。床に叩きつけられたラックの体は投げ捨てられた人形のように床を二、三度バウンドして転がっていく。同時に

キン、キキンキン……

粉々に砕け散ったラックの剣が地面にばら撒かれる。

「う、が……」

即死は免れた。

あの瞬間、ガーゴイルの光から身を守るように剣を盾にする事が出来たお陰だろう。

だが、ラックの意識は既に絶え絶えで、酷くまぶたが重く、このまま目を瞑れば一瞬で死ねると言う事を自覚出来るほどだった。

「（これは、死ぬかな……）」

自分の血が地面を赤く染めて行くのが見えた。

「（でも……）」

今にも消えそうな意識の中でそんな事を考えながらも、ラックは良くやれたと思っていた。

自分もこの有様だが、間違いなくガーゴイルは分断した。如何に人造兵器とは言え真つ二つにされあの至近距離で共に爆発を食らったのだ。ただでは済むまい。つまり、倒す事が出来たのだ。

「（上出来だ……）」

これで最悪の事態は回避出来る。

ラックにとつての最悪の事態とは、フェアリアにもしもの事が起こる場合を指す。だから、そういう意味ではラックはガーゴイルに勝ったのだ。勝利の余韻に浸るようにそう考えていると

「ラックッ！！」

時が戻ったかのようにフェアリアが叫びを上げる。

ラックは身を起こしてフェアリアを見ようとするがうまく体が動かない。

「あ、ああああ……」

フェリアの顔が歪んでいく。

地面に横たわるラックにはその顔は見えなかったが、フェリアの体が震えている姿は見えた。

「（……ああ、そうか）」

フェリアを守る事が出来ても、それは所詮自己満足に過ぎない。

「（このまま俺が死んだら、フェリアは悲しむのか……）」

このまま自分が死ねば、フェリアは自分自身を許すことが出来るだろうか。

おそらく、出来ないだろう。

「（死ねない。死にたくない。でも……）」

今の自分にはどうにも出来ない。ただただ泣き叫ぶフェリアの声を聞いている事しか出来ない。

このまま、自分は後悔を残したまま死ぬのだろうか。そう思った時
ギ、ギギギ……

「……っ!？」

視界にそれが映った。

ガーゴイルだ。体を両断され、機能が停止したと思われたガーゴイルがまだ動いている。

フェリアはまだその事に気付いていない。位置で言えばフェリアの後方、フェリアからは見えず地面に伏しているラックにしか見えていなかった。ガーゴイルも満身創痍なのか、上半身、頭と半分の胴体と右腕のみでどうにかして動こうとしている。

「（あ………!!）」

ギギ……

その体が徐々にこちらを向こうとしている。こちらを見ようとしているのだ。

ガーゴイルの顔がこちらに向けば、あの光が、先程自分を吹き飛ばした光が自分達を、フェリアを襲う事となるだろう。

「ぐ、あ………」

逃げる、フェリア。

そう叫ぼうとするがうまく声が出ない。

「ラックツ!？」

寧ろ、その言葉にならぬ声によってフェリアの意識は完全にラックの方へと向いてしまう。

無防備なフェリア。

無力な自分。

打つ手は何もなかった。後少し、ガーゴイルがこちらを向くだけで全てが終わる。

十五年間生きた自分の人生も、フェリアの十五年間の人生も。そう、諦めかけた瞬間

「ラックウ……」

ラックが見たのはフェリアの泣き顔だった。

そして思い出す。自分が成人の儀の日になんか何を言ってくれる事を楽しみにしていると云ってくれた……フェリアの笑顔を。

「（……駄目、だ）」

グッ……

体に力が入る。

ドクン

心臓が大きく鼓動する。

「（フェリアが死ぬ？ 駄目だ、ふざけるな。そんな事があってたまるか……）」

ドクドクドクドク……

心臓の鼓動がどんどん速くなっていく。

心臓が一回鼓動する度に、死にかけの体に力が戻ってくるようだった。

「（認めない。認めないぞ。そんな事は絶対に認めないっ!! フ
ェリアは……）」

ドクン!!

一際大きく心臓が脈打ち

「（フェリアは俺が守るっ！！　そして俺は……フェリアと一緒に帰るんだっ！！）」

そう強く思った時

カチッ……

頭の中で何かのスイッチが入る音がしたような気がした。

考える間も無く、ガーゴイルの顔がフェリアの姿を捉え

カチッ！！

光が周囲を眩く照らす。

凄まじいばかりの爆音と衝撃が再び広場に起こるかと思われたが

……爆発は起きなかった。

「ラッ……ク？」

状況が飲み込めず、驚きの表情だけを見せるフェリア。

バリッ、バリバリバリ……！！

後ろから聞こえるそんな音に気付き振り向く。そこにはこちらを見据えるガーゴイルの姿と、抱きしめるように自分を支えているラックの姿。そして、そこから延ばされる左手が見えた。

バ、バババツ……！！

その左手にはガーゴイルから放たれた光が受け止められており、光は今もラックの手の中で弾けようと断末魔の様な悲鳴を上げていたが

グッ、バチインツッ！！

大きな音と共に、ラックの左手によって握り潰されてしまう。

「……すごい」

その光が一体どのようなエネルギーの集合体であったかは解らないが、拡散されるはずだった爆発をラックは物理的に握りつぶしてしまったのだ。常識的に考えて凄まじい事である。

「すごいよ、ラッ……！！？」

フェリアは歓声を上げながらラックの顔を見る。そして、絶句してしまった。

ラックだ。目の前に居るのはラック・ラグファースに間違いない。

だと言いつのに、そこに居るのが本当にラックであるかどうかが一瞬解らなくなってしまった。

表情や顔つきも理由の一つだが、一番の理由は

「（金色の……瞳？）」

その瞳の色だった。

ラックの瞳が、あの深く鮮やかな海の色が映ったかのような青い瞳が、まるで獣のような金色の瞳となっていたのだ。

その瞳を見た時、フェリアの心が震えた。こちらの全てが見透かされる感覚。一度その瞳で見られようものなら、自分の全てを曝け出すに等しい行為に思えた。

「……」

無言で、フェリアから体を離し立ち上がるラック。

フェリアが戸惑う一方で、ラック自身も自身の変化に戸惑っていた。

「（何……だ？）」

目の前に居るのはフェリアだ。フェリア・カストゥールに間違いない。

だが、今のラックの目に映っていたのは。

「（0と1……？）」

フェリアの形を構成している0と1の集合体だった。

暗い闇の空間に、隙間無く0と1の様々な色で光る文字がびっしりと刻み込まれている。

フェリアだけではない。地面も空気も自分自身も、全てが0と1とで構成されていた……されているように見えた。

それらは何らかの法則をもって羅列を組んでおり、本来であれば解るはずも無いその法則をラックは自然と理解し始めていた。この文字の羅列がフェリア、この文字の羅列が地面、この文字の羅列が空気。……そして、あの文字の羅列がガーゴイル。

ギ、ギギギ……

ガーゴイルが再び動き出す。

今一度こちらを見据えて光を放とうとしているようだったが、どうやらあの光を放つには一定時間のチャージが必要であるらしい。先程まではそれが解らなかったが、今のラックにはそれがはっきり解った。まるで未来を読むかのように、文字の羅列の変化がそれを物語っている。

「（どうする……先程のように光を受け止めるか、いや、あれを再び遣って退ける自信は無い）」

だが、光の発射を食い止めようにも今のラックには武器がない。傷付いているとは言え並大抵の呪法では奴の装甲を破壊する事は不可能だ。そうやって策を思案していると

「っ……？」

不思議な事に気が付く。

ラックが断ったガーゴイルの切断面が一樣に0で構成されていたのだ。

切断面だけではない。フェリアが放った火球で焦げた床、ガーゴイルがぶつかった壁、粉々に吹き飛んだ剣の欠片。その全ての構成において0の割合が多かった。

「（……そうか）」

1とは有の数値、0とは無の数値。すなわち真偽の法則。

「（0が無と言つのであれば、それを集める事が出来れば……）」

ラックは両手を前に伸ばし意識を集中する。

空気中の0を一点に集める。出来るかどうかは解らないが、その行為だけに集中する。すると

ポウ……

ラックの周囲に光が生まれる。青い光だった。

その青い光の粒子は次々と空中に現れ、ラックに従うように漂い始める。

「（……よし、行ける）」

そう思い、感じた瞬間。意識が一気に収束される。

同時に周囲の青い光が一点に集まり、大きな球体へとなっていく。

そして

「消え去れ……」

カッ……

光が一筋の線を描く。

ラックの手より放たれた青い光は光の線となり放出され、ガーゴイル目掛けて伸びて行く。

ガーゴイルも再びあの光を放っていたが、光と光がぶつかり合う事は無かった。

ラックが放ったその光は触れた物を全て飲み込む様に消していったのだ。

ガーゴイルが放った光もガーゴイル自身も、果てには地面や壁や空気や、何もかも全てがその光に触れる事によって、まるで初めから存在そのものが無かったかのように一瞬にして消え去っていく。

「……」

まさに、一瞬の出来事であった。

その光が通った後には文字通り何も残っておらず、床を、ガーゴイルを、壁を消し去り、光は山を貫いていた。結果として、後に残ったのは壁に開く大穴のみとなる。

これが後に『全てを消し去る無の光』と称されるラック・ラグフアースの秘儀『ライトニング』の最初の発現であった。

「っ……」

ラックはその全てを見ていた。

ありとあらゆる物が0に塗りつぶされていく光景。その光景に対してこれと言った感情は抱かなかった。何故ならば、ラックにとってそれはただ文字が1から0に変わって行く現象でしかなかったからだ。

だが、その文字の羅列によって自分が、そしてフェリアもが構成されている事を思い出すと途端に意識が朦朧としてくる。自分達の存在が文字で構成されているのならば、自分達の存在はこんなに簡単に消えてしまうのか。

フラ……

その事実を知った時、ラックの視界が歪む。視界が歪むと同時に見えていた光る文字は消えていき、世界が闇に染まっていく。

倒れる寸前、ラックはフェリアの顔を見た。

泣きそうな表情をしていた。

だが、そんなフェリアの表情を見てもラック自身は非常に穏やかな心でいた。何故ならば、彼は『フェリアを守る』と言う目的を果たしたからだ。

だから、自分がどんな有り様であろうとも彼の心は満たされている。

そんな満たされた心のまま、彼の意識は闇の中へと消えていった。

第四章『空を裂く光を見た』

第四章『空を裂く光を見た』

ウィル・ワームズ。

彼は厳格な男だった。

厳格と聞くと堅物と言うイメージを真っ先に思い浮かべるが、本来厳格とは規律や道徳に厳しく、不正や怠慢を許さない事を意味している。そう言う意味では、彼は実に厳格な男であった。

彼の家柄は代々レブルス王家に仕える家系で、彼自身も前国王であるアベル・クラウスの孫、ランク・クラウスに仕える身である。

レブルス国は実力式階級制度の異色の国だ。レブルス国においては実力が全てであり家柄や血筋は二の次である。だから、ウィルの家柄は異色のレブルス国において異色の家柄であったと言えるだろう。

だが、彼の实力はレブルス国において誰もが認めるところであり、その実力や人柄を見込まれ前国王アベルよりレブルス騎士団の団長の任を与えられている程だ。

そんな彼が厳格な男だと言われる所以は、王家に仕えると言う自分の家柄を頑なに守ろうとしている所にあった。

前国王アベルが崩御した際、レブルス国の内情は一時荒れた。

我こそが王に相応しいと腕に覚えのあるもの達が名乗りを上げ、ある種のクーデターが起ころうとしたのだ。それを食い止めたのがランクとウィルである。

ランクはその年齢からは考えられない程の政治の才を持っており、国の経済や外交を全て取り仕切り、ウィルはランクの指示を寸分たがわず実現させ、国内の不穏分子を鎮圧した。

その際、ウィルは騎士団長としてではなく一個人、ランクの部下として行動を起こしていた。

先程も述べた通り、ウィルの実力はレブルス騎士団を束ねるに相応しい腕前であり、彼がその気になっていればレブルス国王の座を我が物に出来ていた事は誰の目にも明らかだった。

だが、彼は王にはならなかった。

彼はその時の事を「自分はランク様にお仕えする身です」と語ったと言う。

王家に仕える彼にとって王になると言う事は、人としての道徳に反する行為であるとの認識があったのだ。故に、彼はあくまで個人としてランクの指示を受けたのだと言う。

それ程までに、彼にとって自身のルールは絶対なのだ。

今回の御霊搜索の任にしても、彼にしてみればランクが王となるために必要であるからと言う理由以外の理由はなかった。

彼は良くも悪くも自身の信念と忠義を貫こうとする騎士と呼ばれる存在なのだ。

ウィルが御霊搜索の任を受けてから二日、人々が行き交う街道を進む騎士達の姿があった。

規模は十人程度、隊として考えれば最少構成だ。

騎士達は中心の馬車の荷物を守るように隊列を組み街道を進んでいた。

騎士とは表現したものの、彼らは騎士らしい騎士の格好をしていた訳ではなく、街道行き交う人々と変わらぬ格好をしていた。

御霊搜索の任はあまり公言出来るものではなく、どちらかと言えば隠密の任にあたる。故に彼らは確かに騎士ではあったが、変装の意味を兼ね人々と変わらぬ格好をしていたのだ。

ただ一人、ウィル・ワームズを除いては。

「隊長、やはり街道でそのお姿は人目を引きます。せめてローブを着るなりして隠した方がよろしいかと……」

「目立つか？」

「はい。かなり」

騎士の一人、御霊搜索隊副隊長であるデイズ・ブラインがウィルにそう進言する。

ウィルはレブルス城に居た時と変わらぬ黒い甲冑をその身に纏っていた。城の中であれば何らかの格好ではなかったのだろうが、ここは一般の人々が行き交う街道である。

「だが、この鎧はアベル様より授かった私が騎士である証だ。それを任務中に隠す事は出来ない」

何度も述べるが彼は厳格な男で自身が騎士である事を誇りに思っている。だから彼は城の中であろうがどこであろうが、騎士として行動している時はその鎧を脱ごうとはしなかった。

「解りました……」

そんなウィルの言葉を聞き、デイズは苦悶の表情を見せながらそう述べる。

ある程度その答えを予想していたのだろう。その辺りに関してあれこれ言うつもりはなく、建前として述べたと言った感じであった。「ウィル隊長、間もなくタンジエントの街に着きます」

だから鎧の件に関しては口実で、こちらの言葉の方が本題である。「我々が目指すポイントは更に先となりますが、物資の補給や情報収集のため立ち寄った方が良いかと思われます。立ち寄る事により行程に半日程の遅れが予想されますが如何致しましょう」

隊長の補佐をするのが副隊長であるデイズの役目である。

例え隊長であるウィルが既に解っている事であっても、こうやって逐一報告し判断を仰ぐ義務が彼にはあった。

「街に立ち寄ろう。街に着いたらまずは昼食を兼ねて少し休憩を取る。物資補給や情報収集はその後でも構わない」

ウィルは空に浮かぶ太陽を見上げながらそう答え返す。

「急な任務だったからな。皆、準備もままならず疲れているだろう」「いいえ、自分達は平気です」

デイズはウィルの言葉にそう返答する。

それが本音だったのか強がりだったのかそれとも建前だったのかは解らないが、騎士団長であるウィルの人望は厚く、騎士達はウィルに絶対の信頼を寄せていた。

ウィルは厳格な男だが人の心が解らぬ冷血漢ではない。寧ろ、彼は仁義に厚い義理人情の男と言えるだろう。

「いや、実際の所、本当に有るのか無いのか解らぬ存在を搜索するために皆を巻き込んだ事に私は負い目を感じているのだ。それぐらいの労いはさせてくれ」

「隊長……」

騎士が任務に従うのは当然の事だが、任務に参加する騎士の人格を無視している訳ではない。

先程の部下への労いの言葉にしても、彼は本心からそう述べていた。その辺りが彼の人望の所以と言った所だろう。

「今回の任務が成功し、ランク様が王となればレブルス国はより良い国となるだろう」

「……隊長、無礼を承知で申し上げます」

「どうした？」

「隊長ご自身が王となる意思は無いのですか？ 多くの騎士や兵達はその事を願っています」

出過ぎた発言である事は重々承知していた。

だが、騎士達の言葉を代弁し、ウィルに伝える事も副隊長であるデイズの義務である。

彼は当然ウィルが激怒し自分を叱咤するものと思っていたが

「私は王の器ではない」

ウィルは冷静にそう答えを返す。

「ですが隊長は今度の武闘大会に出場なさると聞きました。それは即ち王になる意思があると言う事ではないのですか？」

そう食い下がるデイズ。

先程、騎士達の言葉を代弁してと記載したが、その騎士達の一人に彼も含まれていたのだ。

「武闘大会には出場する。だが、もし私が優勝する事が出来たならば……私は王位をランク様に譲るつもりだ」

「何故ですか？」

デイズはウィルの言葉に問い質す。

王位を譲るなど、レブルスでは前代未聞の行為であるからだ。

「皆が私に期待してくれる事は嬉しい。だが、私は不器用でな。ルールを守ることは出来ても作ることは出来ない」

王家に仕える人間だからと言う理由の他にも、彼には思う所があるようだ。

「ランク様はまだ若いのに立派に国を管理しておられる。今はまだ至らぬ所もあるかもしれないが、これからのレブルスにはあの方の力が必要なのだ。だから私はランク様こそが王に相応しいと思っている」

「そこまで、お考えなのですか……」

騎士達とてランクの事を軽視している訳ではない。

ランクの実力は既に証明されているし、まだ幼いランクを支えてやりたいと思うのは騎士でなくとも思う事だった。

「済まないな。私の我儘を許してくれ」

「いいえ、隊長がそうお考えならば自分達は隊長についていきます」
デイズのその言葉に他の騎士達も賛同の意思を見せる。

「……皆、ありがとう」

自分の事ではなくレブルスの事を考え行動をする。

そう言う意味ではランクとウィルの二人は実に良く似ていると言えるだろう。

そんな二人だからこそ、多くの者達の支持を集める事が出来るのだ。

「ですが隊長。そうなると一番の強敵はラルス様と言う事になりますか……」

一先ずの結論が出た所で、デイズは次の問題を提言する。

「そうだな。気まぐれな方ではあるがその実力は本物だ」

ラルス・クラウス。

ランクの兄であり。レブルス国の第一王位継承者。

実力式階級制度のレブルスでは王位継承権などあってないようなものだが、政治の建前上そう言う肩書きが必要な場面が多くある。そのための肩書きではあったのだが、彼はその肩書きに相応しい実力の持ち主だった。

しかし、そんな第一王位継承者であるラルスは約五年前にクラウス家の仕来りに従い旅に出たまま音沙汰がなく、今現在も世界を旅している俗に言う放蕩王子であった。

「所在は未だ不明だが、闘いに関する関心は他の追隨を許さない方だ。母国で武闘大会が開かれると聞けばおそらく戻ってこられるだろう」

「よろしいのですか？」

ラルスもまた、ウィルが仕えるクラウス家の人間である。

そんなラルスと闘う事になってもよいのかとデイズは問うが

「ラルス様が大会に出場されると言うのならそれはそれで良い。

一人の武人として、何時か手合わせしたいと思っていた」

ウィルはクラウス家に仕えており、ランクやラルスに対して忠誠を誓っている。

通常であれば彼が彼等二人に弓引くがごとき行動を取る事はないだろう。だが、舞台が武闘大会と言う場であるならば話は別だ。

正式な場で闘う以上は全力で闘うのが礼儀である。

ウィルの辞書には、真剣勝負の場で手を抜くなどと言う言葉は無かった。

「皆、その一戦を楽しみにしています」

その答えを聞いて騎士達は喜びの表情を見せた。

騎士と雖も実力式階級制度のレブルスの民である。

強い者と闘いたい。強い者同士の闘いが見てみたいと思うのは無理からぬ事であった。

「余談が過ぎたな。先を急ぐとしよう」

何時に無く任務中に喋りすぎたとウィルは騎士達に行動を促す。

そんな時

カッ！！

周囲が昼であるにも関わらず急に明るくなる。地上に居た者は強烈な光を感じ皆空を見上げる。

光だ。

空を見上げれば、眩いばかりの青い光が天を分断するかのよう空を貫いていた。

「なっ……」

信じられない光景だった。

空を切り裂く一筋の青い光。それは太陽の光よりも眩しく、空よりも青い光であった。

フッ……

数秒もしない内に、その光は現れた時と同様に音も無く消え去ってしまふ。

そう、消え去った。

それはまるで夢を見ているようであった。

文字通り、その光の後には何も残っておらず、雲も、空も、光さえもまるで空を白い何かで塗りつぶしたかのように、後に残ったのは白い空間のみであった。

しかし、それも一瞬の出来事ですぐに空はその青さを取り戻し元の状態へと戻る。だが、あの青い光を見た後ではその空の青さがとても希薄な青に見えた。

「計測は出来たか？」

ウィルはそう声を上げ、後方を振り向く。

見れば、馬車の荷を解き何やら鉄製の道具を使っている騎士が居た。

「そ、それが……計測出来ませんでした」

「間に合わなかったか……」

無理も無い。

何の準備もしていない所に突如現れた現象だ。対応し切れなかったとしてもそれは責にはならないとウィルは言うが

「いいえ、違います。計測は行いました。ですが、計測が出来なかったのです」

「何、どう言う事だ？」

間に合わなかったという事ではないらしい。

「機器は正常に動作しています。ですが先程の光は何の痕跡も残しておりません」

「データに無い現象だったと言う事か？」

「例えデータに無かった現象であつたとしても、何らかの数値が計測出来ているはずです」

その事実には皆が皆顔を見合わせる。そんな事があるのかと。そんな中

「隊長、これを見て下さい」

「どうした？」

デイズがウィルに声を掛け、一枚の紙を差し出す。

「発信源は解りませんが、先程の光の方向から逆算して発生箇所を地図上に記してみました」

「これは……」

ウィルはその地図を広げ、発生箇所と思われる線をなぞっていく。

「我々が搜索場所としている場所が発生予想箇所上に存在します。」

偶然と考えるのは容易いですが……」

可能性の話だ。

関連付けようとすれば関連付けられるし、無関係だと言えば無関係としてみる事が出来る。そんな可能性の話だが

「……私は、あの光が我々の捜し求める物と無関係であるとは考えられない」

そのウィルの言葉に騎士達も賛同の意思を見せる。

その場にいる全員が、根拠無き確信を持っていた。理由は無く根拠も無い。だが、理由や根拠を超越した何かがそう訴え掛けている。

「休憩は取り消した。計測機器収容後、すぐに目的地に向かう」
『はっ！！』

騎士達はそう返事をする手際良く計測に使った機器を馬車に積み込みはじめる。

収容が終わるのを待ちながら

「（それにしても……）」

ウィルは空を見上げて考えていた。

「（実に、美しい光だった。心奪われるとはああいう時の事を言うのだろうか……）」

それは、あの青く輝く光を見た者ならば誰もが思う事だった。

ただ、ウィルは誰もが思うその感想にもう一つの感情を抱いていた。

「（もし、もう一度見られるものであれば、見てみたいものだ……）」

それは彼の中に生まれた小さな小さな運命の波紋であった。

第五章『世界の真実』

第五章『世界の真実』

「ん……？」

朝日が徐々に昇るように、ゆっくりと意識が回復していく。

意識を取り戻して最初に気が付いたのは人の気配だった。まだ意識がはっきりとしないが、近くに誰かが居るようだ。それを確認するためにも、とりあえず目を開けて見る事にした。

「……」

目を開けると、すぐ目の前にフェアリアがいた。両目を大きく開いてこちらを見ている。

「……ああ、おはようフェアリア」

意識がまだ朦朧としていて何を言えいいのか解らず、とりあえず思いついたそんな言葉を言ってみると……

「おはようじゃないわよっ！！」

怒られた。

「人がどれだけ心配したのか解ってるのっ！？」

胸元を掴まれたまま、顔が付かんばかりの距離で怒鳴られる。

どうやら相当ご立腹のようだ。どうやってその怒りを鎮めようと案を練っていると

「本当に、心配したんだから……」

今度は泣き出されてしまう。

「（……俺にどうしろと）」

どう対応すればよいのだろう。状況がまったく解らない現状では下手な対応は命取りだ。現状を把握するためにもまずは周囲の情報を得る必要がある。そう思いラックは周囲を見回すが

「……何で、部屋に居るんだ？」

そこは勝手知ったる自分の部屋だった。

「確か俺、ガーゴイルと闘って……」

覚えている限りでは、自分は確か遺跡の中でガーゴイルと闘いその後意識を失ったはずだ。それが何故自室のベッドの上に居るのだろうか。

「あの後、お父さん達が来てくれてラックを村に運んでくれたの」
そんなこちらの疑問に気付いたのか、フェリアは涙目のまま事の経緯を説明してくれる。

「来てくれた？ フェリアが呼びに行つたんじゃないか？」

それはそれで疑問を感じる言葉だった。その件に関しても答えて欲しかったが

「行ける訳ないじゃない。だってラック、だって、血だらけで倒れて、起こしても起きないし、私、ラックが死んじゃったのかと思つて……」

フェリアは再び泣き始めてしまう。

どうやら相当情緒不安定になっているようだ。それだけ心配してくれたと言う事なのだろうが

「泣くなよ。ちゃんと生きてるだろ」

フェリアが泣いている所など見たくない。

ラックはフェリアに大丈夫な所をアピールしようとベッドから身を起こし、その声を掛ける。

「(……ん?)」

そこで改めて自身の体の状態を認識する。

「(傷が……無い?)」

フェリアに対し大丈夫だと言ったが、記憶にある自分の体はガーゴイルとの闘いでボロボロだったはずだ。それこそ死を覚悟するぐらいに。だと言うのに身を起こした体には傷一つ付いておらず、寧ろ健康体そのものであった。

「フェリア、俺……」

結構な大怪我していたはずだけど何か知らないか……そう、今のフェリアに問うのは酷だろう。

「喉が酷く渴いてるんだ。水、貰えないか？」

「うん、ちよつと待ってて、ストアおばさんも呼んでくるから」

そう答えるとフェリアは涙を拭い、部屋を出ていこうとする。出て行く間にフェリアの見せてくれた笑顔が「自分はフェリアを守る事が出来たのだ」と言う事を自覚させてくれた。

パタンツ……

フェリアが出て言った事を確認して、ラックは改めて考える。

「（……おかしい）」

窓から外を見れば、太陽はまだ真上から傾き始めた頃、大凡午後二時と言った所だった。

「（俺達が行方不明になって丸一日。裏山に行くとは伝えてあったが、搜索が始まったのは日が昇ってからのはずだ。そう簡単に見つかるはずがない。何より腑に落ちないのは……）」

遺跡の件である。

遺跡は古代文明の遺産であり、各国で研究が行われているほどの価値のある存在だ。

自分達が見つかったと言う事はその遺跡の存在が皆に伝わったと言う事であるはずなのに、窓から見える村の光景は普段と何も変わっていないかった。

「（前からあの場所に遺跡がある事を大人達は知っていた。そして、その上で何かを隠している）」

推測は出来てもこの場で答えが出る類の問題ではない。

「（それを確認する必要がある……）」

そう考え、ラックは服を着替えてフェリアと母が居るであろう居間へと足を向けた。

居間。

「……あれ、フェリアは？」

居間の中を見回すが、居るのは母のみでフェリアの姿が見当たらず。

なかった。

「貴方が起きたって兄さんに伝えに行ってもらったわ」

「ふうん……」

その言葉にラックは特に反応を見せなかった。

「それよりラック、先に言う事があるんじゃない？」

「……あー、えーっと、ごめんなさい」

どう言い訳した所で心配を掛けた事に変わりはないだろう。

そう思い、ラックは素直にそう謝罪の言葉を述べるが

「あら、何か謝らなきゃいけない様な事したの？」

「え……」

どうやらストアが期待していた言葉とは違ったようだ。

「あ、もしかして人様に言えない様な事をフェリアちゃんにしたんじゃないでしょうね」

「いや、そんな事する訳ないし」

本当は少し危なかったりもした訳だが、それを言うことややこしくなるので言わない事にした。

「まあ、それならそれで良くやったと褒めてあげるわ。グッジョブよラック」

親指を立てながら息子を褒めるストア。

「母さん、その発言は母親としてどうな訳……」

相変わらず、とんでもない事をさらりと言う母だと内心で思うラックだった。

「って言うか、謝ったのは心配掛けたんじゃないかと思ってしたんだけど」

「心配なんてしてないわよ。心配してたとしたらフェリアちゃんの無事ぐらいかしらね」

「息子の心配は無しですか……」

「ちよっとやさっとでどうにかなるような育て方はしてないつもりよ」

ラックの言葉にストアはそう述べ

「それで……ちゃんとフェアリアちゃんは守ったの？」

「……母さん？」

真剣な表情でそう問い掛けてくる。

「どうなの？」

言葉だけを聞けば「男の子なんだから女の子を守って上げなくちゃ駄目よ」と言った問いのように聞こえるが、その実は違う。

「守ったよ。命を懸けて守った」

「そう、ならいいわ」

聞きたかったのはそれだけだとストアは言う。

その問いはまるで、あの遺跡で何があったのかを知っており、確認のための質問のようだった。

「母さんは……何を知っているの？」

聞きたい。

今、何が起こっているのかを。そして、何が起ころうとしているのかを。

「貴方の考えている事は大体解るわ。色々謎だらけなんでしょ？」

そんなラックの心を見透かすようにストアはそう述べ、ラックはその問いに頷き返す。

「兄さんの所に行きなさい」

「え？」

「兄さんに聞けば全て解るわ。でも、それまでは誰にもその事を聞いちゃいけないわよ」

何故？

思わずそう母に問いたくなったが

「……解った」

一呼吸考え、そう答える。

母は何時ものほほんとしていて突然とんでもない事を言ったりする人だが、間違った事を言った事は一度も無い。

「（……つまり、と言う訳かは解らないけど今は黙っておけと言う事なのか？）」

質問をしたはずなのに謎が増えてしまった。

だが、それを解決する糸口は示してもらえた。

「じゃあ、ちょっといつてくるよ」

「ええ、いつてらっしゃい」

ラックはストアにそう言い残し、家を出てまっすぐフェアリアの家へと向かった。

不可解な点は幾つもあった。

突如迷宮と化した山、山の中にあつた遺跡、遺跡の中にあつた人の体に入り込む水晶玉、そして、おそらくは水晶玉が入り込んだ事によって見えた0と1の世界。

どれをとつてもおかしい事だが、その全てに不思議な繋がりがあるように思えた。

その答えを求めるべく、ラックはフェアリアの家へと向かっていたのだが

「……」

不思議な光景を目撃する。

それは何時もの村だった。だが何時もの村のはずなのにどこかが違う。

「（……何だ？）」

その違う何かに気付くのに僅かの時間を要した。

それは村の大人達だった。

何度も述べるが小さな村だ。村人全員が知り合いで、村の中を歩けばすれ違う大人達と二、三会話を交わす事はざらにある。そんな中、普段と大して変わらない会話を交わしているはずなのに何故か大人達が何時もと違うように見えたのだ。具体的に何が違うと口で言える変化は無いのだが、どうにも雰囲気違っていているように感じた。

「（どこか落ち着いている感じがする。いや、落ち着いていると言

うよりはテンションが低い感じだ。けど、何で……？」

ラックがそんな違和感の正体について考えていると

「あ、ラック兄ちゃん」

「聞いたぜー。何かとんでもない事やったんだろ」

村の子供達に声を掛けられる。

「お兄ちゃん何かしたの？」

「お姉ちゃんと一緒に居なくなったって聞いたけど本当？」

子供達の質問に

「いや、情けない事に山で迷子になってただけだよ」

ラックはそう答えを返した。

「えー、嘘だー」

「だってお父さんもお母さんも何か真剣な顔してたよ」

その言葉を聞き、ラックは確信する。

子供の感受性は侮れない。自分の母はあの通りの人だからその辺りが読み取れなかったが、村の子供達までもが自分と同じ何かしらの違和感を感じている。

「なあ、兄ちゃん。今日は稽古つけてくれるんだろ？」

「俺達今から学校行くんだ」

小さな村ではあるが最低限の施設ぐらいいは揃っている。

とは言っても小さな村の小さな学校だ。授業が無い時は子供達にとつての公園のような場所だった。そこで稽古を、この場合遊んでくれと頼まれるが

「悪いな。俺はこれからギガおじさんに説教受けに行かなきゃならないんだ」

多少の尾鰭を付けつつそう断る。

「げ、先生のお説教かよ」

「そりゃ災難だ」

それじゃあ仕方が無いとばかりに子供達も諦めの声を上げる。

「あ、でもその後ならいいんでしょ」

「フェアリアお姉ちゃんも誘ってきてよ」

「ああ、また後でな」

子供達はラックのその返事を聞くとまっすぐ学校に向かって走っていった。

「（……子供達は何も知らない。だが、大人達は何かを知っている）

自分やフェリア、子供達が知らない。もしくは子供達には言えない何かを大人達は知っている。

それだけは確信を持つ事が出来た。

コンコン……

フェリアの家の扉を軽く叩くラック。すると

「あ、いらっしゃーい」

ガチャ……

中からフェリアの声が聞こえてきて扉が開かれる。

「遅かったね。どうせまた道端で話し込んでたんでしょ」

「話し掛けられたんだから仕方ないだろ」

ラックはそうぶつきらばうな答えを返すが、受け答えをするフェリアに先程までの不安定さは見当たらず、一先ず安心する。

「まあいいわ。さ、入って入って」

「お邪魔します」

フェリアの後を追う家の中に入ると、居間のテーブルで一人の中年男性が紅茶を啜っていた。

ギガ・カストゥール。

フェリアの父親であり、ラックとフェリアの呪法の先生であり、ストア・ラグファースの兄。

つまり、ラックにとっては伯父に当たる人だ。ちなみにそう言う意味ではラックとフェリアは従兄妹関係と言う事になる。

「やあ、お昼寝の後の気分はどうか？」

「すこぶる快調ですよ」

ギガの言葉にラックはそう答える。

どうにもギガ・カストゥールと言う人物は物事を多少の変化球で話す癖があるらしく、言葉通りの意味で捉えると後で痛い目を見る……と言うのが彼に対するラックの認識である。だが、変化球ではあっても物事の本質や本題を外した事が無い事もラックは知っており、先程の言葉にしてもラックの事を気遣つての発言である事を理解している。

「それは良かった」

ラックがテーブルの椅子に座るとフェリアがカップと紅茶入りのポッドを運んで来てくれる。

それらをテーブルに置くとフェリアも同じように並んで椅子に座った。

「気分が悪いと思考もうまく働かない。何事も自然体が一番だ。寝起きの紅茶でも飲んでリラックスしていこう」

促されるまま、ラックは紅茶を一口飲む。

余談ではあるがラグファース家もカストゥール家も紅茶党であり、食後や雑談等で振舞われる飲み物は決まって紅茶である。

「さて、君が昼寝している間にフェリアから大体の事情は聞いた。大変だったみたいだね」

たっぷり数分は間を置いて、ようやくギガがそう口を開く。

「ええ、まあ……」

危うく死に掛けた事を大変の一言で済まして良いのかとも思ったが、大変であつた事に変わりはない。

「しかしまあ、ガーゴイルを相手に良く頑張つたものだ。日々の修練の賜物だなこれは。二人とも無事で何より、私としてはこれ程嬉しい事はない」

「おじさん、その事です……」

何故、それも自分達がした事を知っているのか。その事を今こそ問おうと思つたが

「おっと、そこまでだ」

「え？」

ギガは口元に一本指を立て、喋るなど言った仕草をする。

「悪いがまだ私の話の途中でね。出来れば黙って聞いて貰えるかな」

「……」

一瞬「はい」と返事をしそうになるが、ラックは寸前でその口を閉じる。

隣を見るとフェリアも同じように口を閉じていた。何時ものフェリアであれば問答無用で質問しそうなものだが、どうやら事前にギガから言いつけられているようだった。

「よしよし、まずは第一段階成功だ」

「（第一段階？）」

決して口には出さないが心の中でそう思う。

「ラック君、君は私がこれまで受け持った生徒の中で最も優秀な生徒だ。だから、これから私が喋る事の意味を出来るだけ正確に理解して欲しい」

妙な言葉の言い回しだった。

ギガの言い回しが普通と異なる事は先程も述べた通りなのだが、前もって言葉の意味を理解しろなどと言うような人ではなかったはずだ。

「今の君は色々と疑問を抱え込みそれを質問したいと思ってだろうけど、君はその全てを質問出来る訳ではない。だが、それは私が喋らないと言う意味ではないし、私がその質問の答えを知らないと言う意味でもない」

ギガは真剣な、どこか危機迫るような表情でラックに話し掛ける。「これから君は私に対しておそらく三回だけは質問が出来る。いいかい、出来る限り核心をつくような事を聞くん。そして質問をした後は私が喋り終わるまで質問しない事……いいね？」

ギガの言葉にラックは小さく頷く。

まだ状況が良く飲み込めてはいないが、伯父がこれだけ真剣な表

情をして話をしている所をラックは見たことが無い。それだけ何か重大な事が関わっていると言う事なのだろう。ならば、こちらもそれ相応の心構えを持って当たらなければならぬ。

「（……しかし、どうしたものか）」

ギガの言う通り、ラックはこの一連の出来事のコアを突くようなキーワードを考える。

ラックが知る限りギガ・カストゥールという人物は思慮深く冷静で、何事においてもミスをしない人だ。その人物がここまで念を押すと言う事はその言葉の裏に秘められた何かが必要であるはず、それを見極めなければならぬ。

「（どうする、何を質問すればいい？）」

考えれば考えるほど焦りが生まれ、思考がうまく噛み合わない。そんなラックを見かねてか

「焦る事は無い、時間はたっぷりある。ゆっくり考えて答えを出すといい」

ギガはラックにそう助言をする。

「（……どういう事だ？）」

ラックはてつきり「時間が無いから三回だけしか質問出来ない」
と思っていた。

だからこそ、素早く的確に答えを出さなければならぬと考えていたのだが

「（時間はある。だがおじさんは三回だけは質問が出来ると言った。この矛盾は一体……？）」

疑問がまた一つ増えた。質問の選択肢が増えたかのようにも思えたが

「……ではおじさん、質問をさせてもらいます」

ラックの最初の質問はすでに決まっていた。

「遺跡の中にあつた青い水晶玉、あれは一体何なんですか？」

この質問は外せない。

自分の体に関わる事であると言う理由もあつたが、山で迷子にな

ったのも遺跡に辿り着いたのも、全ては水晶玉の所へ辿り着くための布石。そう、一連の出来事は全てあの水晶玉へと繋がっていると思えたからだ。ならば、あの水晶玉の正体は何であるかをまず確認する必要があった。

「ふむ、まあ、模範的な質問だな」

ギガは何か納得するように一人で頷く。

「まずは君の意見を聞こうか、ラック君はあの水晶玉が何だと思う？」

「え……」

「ああ、私から質問した時は喋ってもいいですよ。ただし、解答のみをね」

ギガはこちらの考えを見透かしたようにそう指摘する。

「……御霊、だと思います」

あの水晶玉の正体、それは伝説と言われている神の御霊。

「どうしてそう思う？」

「フェアリアの地図の件もありますが、俺が知る限り御霊がどんな形や色であるかが記述されている書類や文献はありません。だとすると記述されてないのではなく、記述出来なかった。つまり、御霊が特定の形状を留めない不定形体である可能性が考えられます。今回、御霊は水晶玉の形をしていましたが、今は俺の体の中にある。ある意味不定形である証明にもなりますし、人体に入り込むような存在であれば解析が困難だとも考えられます」

「なるほど、一応は理に適っている説明だ」

その説明に満足したのか

「察しの通り、あの水晶玉の正体は伝説の神の御霊だ」

ギガは嬉しそうに述べる。

「さて、あの水晶玉が御霊だとして、御霊とは本当に神の魂が具現化したものだと思うかね？」

「いいえ」

「理由は？」

「本当に神の魂が具現化したものであるならば、人がその身に御霊を宿す事は不可能でしょう」

「では、御霊とは一体何だと思う？」

「おそらくは古代の兵器の一種。機械に守られるように置いてあり、御霊が俺の体内に入った時の状況から考えると、生物に何らかの機能を付与するための増強剤的な何かだと思われます」

そう考えるならばある程度の筋は通るような気がした。

パチパチパチ……

ラックの言葉を聞き、ギガは拍手をしながら笑う。

「なかなか見事な推測だ。僅かな情報からそこまで考える事が出来れば十分過ぎる。これから話す事も、君ならきっと理解出来るはずだ」

ギガは一度仕切り直すように紅茶を一口飲み、言葉を続ける。

「君は自力で御霊が神の魂が結晶化した物では無いという結論に達した。確かに御霊は神の魂が結晶化した物などではない。本や伝承、言い伝えの出来事なんて全て作られた嘘っぱちだ。御霊とは、膨大なパターンのチャートやアルゴリズム、マトリクスを集め記録しているだけのデータベース、巨大なライブラリにしか過ぎない」

「（え……？）」

その言葉の数々にラックは戸惑う。

それらは呪法師が呪法を作る上で使われる言葉の数々。

「だから君が口にした増強剤と言う言葉はなかなか的確に的を射ている。君が御霊を手に入れる事によって出来たと思っている事は、たまたま御霊の中に君の能力を強化してくれるデータが存在していた結果に過ぎない」

「（俺が御霊を手に入れる事によって出来たと思っている事をおじさんは知っているのか……）」

御霊を手に入れる事によって出来たと思っている事。

御霊を手に入れる事によって見えたと思っていたあの世界。そう、あの0と1の世界の事をギガは知っている。

「まあ、人にしたって世界にしたって、本質なんてものはそう簡単には変わらないものさ」

「（本質……？）」

その言葉が妙に引つ掛かった。

そして、ラックは同時にあの世界、0と1の世界の事を思い出す。

「（……まさか）」

途端、ラックの表情が変わる。

ラックの中で一つの結論が導き出されたのだ。

「ほう、何か気付いたかね？」

「ええ、恐ろしい事に」

「では次の質問を聞こうか？」

「……二つ目の質問をさせてもらいます」

それは賭けにも近い事だったが、だからこそラックは質問する。

「この世界は……何で出来ているんですか？」

何を聞いているのだと思われるかもしれない。常軌を逸している質問だと自分でも思う。

通常であれば絶対に正気を疑う質問だっただろうし、ラック自身も他者からその話を聞かされればまず信じなかっただろう。だが、その質問の解答が自分の予想通りのものであるならば、全ての点において説明がつく。

「……」

一瞬の沈黙が流れる。そして

「……良い質問だ。ああ、実に良い質問をしてくれた」

ギガはまるで一生を掛けなければ解けない難解な問題を解いたかのように、実に清々しい笑顔でそう言った。

「驚いた。まさか二回目でその質問をしてくれるとは思っても居なかった」

「あれだけこちらに情報を提供しておきながら良く言いますよ」

その伯父の言葉でラックは確信が持てた。全てはこの瞬間の前振りだったのだ。

「……おじさん、答えを聞かせてください」

「そうだね。そこまで解ってくれているのならまずは答えだけを先に言おう」

ギガは一呼吸置き述べる。

「この世界は……プログラムで出来ている」

「……」

ラックはその言葉を黙って聞いていた。

「まあ、もう少し正確に言うならばそれはプログラムではなく文字や数字の集合体、更に厳密に言えば0と1で出来ている」

出来れば違うと言って欲しかったと言わんばかりの表情を見せるラック

「……え、待ってラック、どういう事？」

それまで押し黙っていたフェリアだったが、我慢出来ずにラックにそう聞いてくる。

ギガに対しての質問ではなく、ラックに対しての質問である辺りに配慮が感じられた。

「聞いている通りだ。この世界はプログラムで出来ている」

「プログラムって私達が何時も作ってるあれ？」

「ああ、それだ」

プログラム。

それは呪法を構築する上で呪法師達が組み上げる文字や文章の羅列の事を意味している。

そのプログラムを実行する事によって発言する現象の事を呪法と言うのだ。

「何言ってるの、そんな事ある訳ないじゃない」

フェリアのその反応は当然だった。

「お父さんも真面目な顔して何言ってるの」

それが普通の反応と言うものだろう。だが、ギガは言葉を続ける。

「フェリア、お前はこの世界に疑問を抱いた事は無いのかい？」

「え？」

「ただの文字や文章の羅列が世界の法則に干渉すると言っ現象を疑問に思った事は？」

フェリアは幼き頃から父より呪法を学ん出来た。

その過程で「何故このような現象が起こるのだらう」と言っ疑問を持った事は当然ある。だが

「文字や文章の羅列が世界の法則に干渉すると言っのであれば、この世界は文字や文章で来ている……そう考えた事は無いかい？」

その先に関しては考えた事がなかった。

「ラック君はあるかな？」

「俺は……あります」

「ラック？」

ラックのその返事にフェリアは驚きの表情を見せる。

「子供の頃からずっど疑問に思っていたんです。元はただの文字や数字の組み合わせに過ぎないのに、どうしてそれを実行しただけであんな現象が起こるのか」

ずっど疑問に思っていた。

自分が作ったプログラムが自分の考えた通りに超常現象が引き起こす。

呪法師であれば誰もが一度は感じる優越感。呪法を使った時に感じる、まるで自分が神にでもなっただかのような高揚感。その正体をラックは知りたかった。そして

「今だから白状しますけど、俺はその答えが知りたくて呪法を学んで来ました。そして……」

その答えは出た。

「この世界はプログラムで出来ている」

その答えをラックは見た。両の眼ではつきりと0と1の世界を見たのだ。

今ならば確信出来る。あれこそがこの世界の真実の姿なのだと。

「そんな……」

フェリアはまだ信じられないといった感じだったが、彼女が信じ

る信じないに関わらず、彼女はこの話が本当の事なのだと気付き始めている。何故ならば、潜在的に彼女もその事に関して気付いていたからだ。彼女だけではない、呪法を扱う者は誰もがその真実と隣り合わせに居る。

「フェリアがその事に気付かなかったのは無理の無い事だ。そもそも、自発的にその事に気付く事自体がありえない」

ギガは尚も言葉を続ける。

「衝撃の事実だろうが、問題はその先にある。ラック君、この世界がプログラムで出来ているとしたら。私達の存在が、いや、この世界がどのように成り立っているか解るかな？」

「……」

問われるが、ラックはその答えを返せなかった。

答えが解らなかった訳ではない。その答えを認めたくなかったのだ。

「ラック……」

一人、その答えが解らず困惑するフェリアを見て、ラックは重い口を開く。

「呪法は呪法師が組んだプログラム通りに動作する。俺達がプログラムで出来ている存在であると言うならば、俺達は言わば呪法だ。そうだとすれば、俺達はプログラムの示す通りに動かなければおかしい事になる」

「……え、それって」

仮に呪法に意思があつたとして、呪法は自分の意思でその動きを変ええる事が出来るのだろうか。

答えはノーだ。呪法は呪法師がプログラムした通りに動作する。

この世界が呪法と同じくプログラムで出来ているのだとしたら、自分達の存在はその呪法と何ら変わらない。つまり

「俺達は、もしかしたら生まれたその時から今に至るまで、プログラムに従って動いているだけなのかもしれないって事だ」

「……嘘、そんな」

そんな事は認めたくない。

いや、それこそ認めたくない。認めたくはないが、思い当たる節は幾つかあった。

「不可解な事は幾つかあった。初めは裏山に入った時、何時もであれば裏山で迷う事なんてあるはずがない。だと言うのに俺達は迷った。そして俺達は偶然遺跡に辿りつたいが、思えば何もかもが出来過ぎている」

それらが予め定められている順序通りの出来事だとしたら、全てに対して説明が付くのではないだろうか。

「そんなのおかしいっ!!」

フェリアが突然怒りを露わにして大声を出す。

「だって、私は偶然書庫で本を見つけて、それでラックを誘って裏山に行ったのよ。そんな偶然の出来事が……」

プログラムの仕業だと言うのか。そう否定したかったフェリアだったが

「そう、それこそが抗う事の出来ない定めプログラム。私達はそれを運命と呼んでいる」

ギガにそう肯定されてしまう。

「運命は私達の意思に関わらず物事を進めて行く。フェリア、お前はさっき偶然と言ったが、それは本当に偶然だったと言いきれるかい？」

「え……」

「運命とは、その辺りの全ての事象すらも捻じ曲げてしまうものなんだ」

ラックはその捻じ曲げると言う言葉に心当たりがあった。

地図の一件だ。

フェリアは気付いていなかったが、あの時地図はまるで遺跡に行く事を促すように描き変わっていた。地図だけではない。今の話を聞いてラックは石畳の時の事を思い出す。あの時、ラックはコイントスで道を決めた。確率は二分の一だったが、もしかしたらあれす

らもが運命によって捻じ曲げられた結果だったのかもしれない。

「そんな……」

自分の意思で行ったと思っていた事が、実は運命に操られるままに行われた行為だった。

「おかしい、そんなのおかしい。だって私の意思は私だけのもので、それがプログラム通りだったなんてそんな事……」

その事実をフェアリアは受け入れられないでいた。

「そう、その通りだよ。フェアリア」

「お父さん？」

そんなフェアリアにギガは優しく話し掛ける。

「プログラム通りに動いて、プログラム通りに選択して、死ぬまでずっとプログラムに従って生きていく。誰も逆らう事の出来ない定められた運命と言う名のプログラム。私はそんな運命に従って生きるのが嫌だった」

それがギガの本心だった。

「おじさん……？」

何時も穏やかで、どんな事が起きても冷静だった伯父が自分の我を露わにしている。

「だからラック君。私は、いや、私達は君に期待しているんだ」

「え……？」

その言葉の意味をラックは一瞬理解出来なかった。

「私達は……」

ギガは言葉の続きを喋ろうとするが

「……」

突如、ギガの言葉が止まる。

「……おじさん？」

「すまない。これ以上の言葉を喋るためには君の言葉が必要なようだ」

これもまた運命と言う事なのだろうか、ラックは三度目の質問を迫られる。

「（だが妙だ。先程の話が本当だとするなら、この受け答えには一体何の意味がある？）」

人の意思や事象すらも捻じ曲げてしまう定められたプログラム、運命。

それが事実であるならば、何故自分はこうやって質問を考え投げ掛けている。

目の前の伯父はその運命に操られ言葉を発する事すらままならな
いと言うのに、何故自分は質問を投げ掛ける事が出来ているのだ。
そこでラックはある事を思い出す。

「（……いや、おかしいのは俺の方なのか？）」

思い返せば、自分はおかしい事をおかしいと気付いていた。

それは先の話からすればおかしな事ではないだろうか。運命が自分達を導いていると言うのであれば、おかしいとさえ思わないはずだ。現にフェリアは地図の一件に気付かなかった。何より、先程からギガはまるで自分に何かを伝えようとしている節がある。

「（その辺りに最後の謎が隠されている。だとすれば……）」
意を決しラックは口を開く。

「おじさん、最後の質問です。おじさんは、いえ、村の大人達は何を知っているんですか？」

「……ふふ、ラック君。君は本当に優秀な生徒だ。私は君の師である事を今日ほど嬉しいと思った事はない」

喋る事の出来なかったギガの口がそう言葉を発する。

「教えてください。おじさん」

「先程も言った通り、この世界はプログラムで出来ている。多くの人達はその事を知らずにプログラムに従ってその人生を全うする訳だが、世の中には極々稀にその事に気付いてしまう者がいる。すると、気付いてしまった人には同時にある異変が起こるんだ」

「異変？」

「自分の運命が、自分の一生の人生がどのような物かが解ってしまう。つまり、自分の未来を知ってしまうんだ。これから自分が何を

するのか、自分がどうなってしまうかが一瞬にして解ってしまう。
その事に気付いた人達の殆どがこう思う。運命に逆らいたい、と」
どのような作用でそんな事が起こるのかは解らない。だが、自分
もそう思っている一人だとギガは言う。

「そうやってこの世界は二種類の人達に分類される。即ち『知って
いる者』と『知らない者』」
「まさか……」

ラックはここに至りようやく大人達が何を隠しているのかに気付く。

「この村にいる大人達は全員……」

「そう、全員自分の運命を『知っている者』だ」

「そんな、じゃあみんな初めから。俺やフェリアが遺跡に行く事を
知っていたんですか!？」

その話が本当ならば、村の大人達はラックとフェリアが生まれる
前から、何時か二人があゝの遺跡に行くことを知っていた事になる。

「ああ、その通りだ」

ギガはそれを肯定する。

「私が『知っている者』になったのは約二十年前。テラがその事を
教えてくれた」

「父さんが？」

「私だけではない。この村の大人達全員がそうだ。詳しくは説明出
来ないが、テラは人に真実を教える事が出来る力を持っていた」

「それで……」

その言葉を聞きラックは合点がいった。

テラはラックが子供の頃に旅に出たまま帰ってきていない。だから、
ラックより年下である子供達は何も知らず、村の大人達しかそ
の事を知らないのだ。

「……でも、だったら何で黙っていたんですか？」

知っているならな、教えてくれていればあの山には行かなかった。
それが運命だったとしても、もし知っていたならば何か伝える手

段があつたはずだ。そう考えるラックだったが

「教えなかったのではなく、教えられなかったのだよ」

「……え？」

「運命には逆らえない。先程私が喋れなかったように、運命に逆らったり運命を変えるような言動は途端に出来なくなってしまう。だから、教えたくても教えられなかった」

「じゃあなんで今喋っているんですか！？」

すでに終わった事だからか、それとも他に理由があるのか。

「ラック君、君が成長するのを皆待っていたんだ」

「俺を……？」

それはどういう意味かと問う前にギガが言葉を続ける。

「君が見た0と1の世界はプログラムの原初の形にして最終的な形、マシン語と呼ばれる物だ」

「マシン語？」

初めて聞く言葉だが、実物を見ているためか違和感がなくその言葉を受け止める事が出来た。

「そう、理論上0と1との組み合わせだけで無限のパターンが作り出せる。プログラムで作られた文字や数字は最終的には0と1に変換され世界に反映される。君はその世界の姿を垣間見た」

あの時感じた法則みたいなものはそれだったのかと納得する。

「本題はここからだ。この世界がプログラムだと言うのなら、呪法と同じように何らかの方法で書き換える事が出来るはず。そう、世界の真実が見える力を持つ君ならば、私達の運命を変える事が出来るはずだと、私達は考えている」

「待ってください。いきなりそんな事を言われても」

ギガの突然の言葉にラックは同様に隠せない。

それはそうだろう。いきなりそんな事を言われてもはいそうですかと納得出来るはずが無い。

「そう難しく考える必要はない。運命にも無条件で発動するものとそうでないものが存在する。例えば今現在も貴方はその選択肢の真

っ只中にいる」

「……そうか、三回の質問」

「そう、私が『知っている』のは君が私に三回の質問をする事によって運命が次の段階に進むと言う事。運命の分岐点に現れる条件の事をフラグ、それらフラグによって発生する運命をイベントと言う」「どれをとってもプログラム用語になる訳ですか」

それらの単語もプログラムを組む上で学ぶ言葉だった。

「そう、そしてプログラムの用語には真と偽と言うものがある。主に判定などを行う場合に使われる言葉で真は1、偽は0を意味している。今の君ならこれが何を意味するかより解るはずだ」

「解ります。今の俺なら……」

あの0と1の世界を見て、あの世界の真の意味を知った今ならば。「そして、ラック・ラグファースのラックは運命を意味し、ラグファースのフルスペルはフラグファースト。君が世界に疑問を抱いたように、君は生まれながらにして運命のフラグを変える事が出来る唯一の存在だ」

「そんなの言葉遊びじゃないですか」

「その言葉の組み合わせによってこの世界は成り立っている。この世界においては全ての文字や言葉に意味がある。君は意識せずともすでに世界を変革出来る力を持っているんだ」

「ですが……」

ギガの言葉に嘘は無い。

少なくともラックはそう感じていた。だが、幾ら言葉を並べたところで本当にそんな事が出来るのか、見る事が出来ても運命を、世界のプログラムを書き換えるなんて事が自分に可能なのか。そんな保障があるはずもなく、そんな自信はとても無かった。そんなラックの心境を察したのか

「大丈夫、自信を持ちなさい。君はすでに一度運命を変えている」
ギガはそう述べる。

「え……?」

すでに一度運命を変えている。

何時だ。状況から考えるならば、裏山に入り遺跡に至り村に帰ってくるまでの間に起こった出来事のはずだが、そんな事をした覚えは無い。そこで、ラックは伯父のある言葉を思い出す。

『二人とも無事で何より、私としてはこれ程嬉しい事はない』
些細な言葉だった。

だが、改めて考えてその言葉に隠された真の意味を知り、恐ろしい答えに辿り着く。

「まさ、か……」

認めたくない。そんな事など認めたくない。

「……そう、フェリアは本来……あの遺跡で死ぬ運命だった」
バンツ！！

ラックはテーブルを力の限りで殴る。

「おじさんはその事を知っていたんですか！？ 俺達が遺跡に行く前から、俺達が子供の頃から、俺達が生まれる前から！！」

「ああ、全て知っていた」
グッ！！

思わず、拳に力が入りギガに殴り掛かろうとするラック。

「ラック駄目っ！！」

フェリアはそんなラックの腕を抱きしめ止めようとする。

「落ち着いて、お父さんを殴ってどうするの！？」

「放せフェリア、こんなふざけた事を平然と言われて黙っていられるか！！」

「でも、お父さんは私達に呪法を教えてくれた。闘う術を教えてくれたじゃない。少しでも運命に逆らおうとしたんだよ！！」

「っ……！！」

そうだった。

自分達に呪法を一から教えてくれたのはこの人だ。それが運命にやるものだったかどうかは解らない。それでも、ラックは今日に至るまで学んできた呪法でフェリアを守る事が出来たのだ。おそらく、

そうでなければ自分にフェリアを守る事は……出来なかっただろう。

「……フェリア、ありがとう。少し落ち着いた」

「ラック……」

フェリアはそんなラックの言葉に胸を撫で下ろし、掴んでいた腕を放す。

「おじさん、すみませんでした」

「いいや、殴られても仕方がないと思っていた。親として、娘を見殺しにするような真似が許されるはずも無い。もし君が許せないと言うのであれば、この命を奪ってもらっても構わないとさえ考えていた」

「おじさん……」

その言葉に嘘は無い。

ラックがギガを殴ろうとした時、ギガは抵抗するそぶりを一つも見せなかった。

「私は本当に感謝しているんだ。ラック君、よくフェリアを守ってくれた。ありがとう」

ギガはニツと笑いながら礼を言う。

その笑みを見て、ラックは自身の先程の行いを省み恥ずかしくて仕方が無かった。

「フェリアを守ると決めた時、音が聞こえたはずだ」

ギガの言葉にラックは頷く。

あの時の音を思い出す。まるでスイッチを押した時のような音だった。

「大きなフラグが成り立った時には音がするとテラが言っていた。そして、運命を変えろというのは理屈ではない。大切なのは運命を変えようとする君自身の強い意志だとも言っていた」

「……はい」

ラックはその言葉を、自分達を育ててくれた親の言葉を深く心に刻む。

「……おじさん」

「ん？」

「聞きたい事は聞きました。三回の質問もしました。でももう一つだけ聞きたい事があるんです」

ラックはそう言葉を続け、ギガに質問をしようとするが

「これから、何が起るんですか？」

コンコン……

ラックの質問が終わると同時に家の扉が叩かれる。

「残念ですが、時間切れのようですね」

ギガは椅子から立ち上がり玄関へと向かう。

「待ってくださいおじさん。まだ喋れます。これから何が起るんですか！？」

ラックの再度の問いに、ギガは良く聞こえる声でこう答えた。

「……この村が滅亡するんですよ」

第六章『運命の命じるままに』

第六章『運命の命じるままに』

カラト村。

人口約三百人程度の小さな村。周囲は山に囲まれこれと言って娯楽のようなものは何一つ無く、施設は必要最低限の施設のみ。ただ人と自然が共にあるだけだった。

「（首都レブルスと比べる方がおかしいというものか）」

カラト村に足を踏み入れたウィルはそんな景色を見て心の中でそう思う。

何故レブルスと比較しようなどと考えたのかは自分でも解らないが、不思議とこの村に踏み入れた時にそう頭に浮かんだのだ。

「隊長」

そんなウィルの下にデイズが姿を現す。

「どうだった？」

「はい、情報通り元宮廷呪法師のギガ・カストゥール殿がこの村に住まれているそうです」

「そうか、場所は解るか？」

「はい、確認済みです」

その答えを聞き、ウィルはデイズと共にギガ・カストゥールの住まいへと向かう。

扉の向こうから話し声が聞こえてくる。

どうやら在宅しているようだ。その事を確認した上で

コンコン……

ギガ・カストゥールの住まいの扉を軽く叩く。

ガチャ……

程なくしてその扉が開かれた。そこにはウィルよりもやや背の低い、良く言えば思慮深く、悪く言えば思考の読めない中年男性が立っていた。

「おじさん、俺の質問に答え……」

そんな男性に話し掛ける少年と視線が合う。

空を思わせる青い髪に深く鮮やかな海の色瞳の少年だった。少年は来客者である自分の邪魔をしないためか、言葉を止め一礼して再び奥へ戻っていつてしまう。

「突然の訪問失礼致します。ギガ・カストゥール殿はご在宅でしょうか？」

「ええ、私そのギガ・カストゥールです」

そうではないかとの予想をしていたが、どうやら目の前の人物が件の元宮廷呪法師ギガ・カストゥールその人であるようだ。

「失礼しました。自分は……」

ウィルは敬礼しながら自身の身分を明かそうとするが

「レブルス国の騎士団長ウィル・ワームズさん……ですね」

ギガの言葉に驚きの表情を見せるウィル。

「……流石は、宮廷呪法師の肩書きは伊達ではありませんな。私の事をご存知でしたか」

一瞬の驚きを見せたが、ウィルはすぐにその態度を改め礼儀正しい騎士の態度に戻る。

「ええ、ざっと二十年程前から貴方が来るのを待ち続けていました」

「面白いご冗談を言われる」

元宮廷呪法師ギガ・カストゥールが変わり者だと言う話は聞いていたため、それを冗談だと受け止めるウィル。

「どうやら来客中にお邪魔してしまったようですが、我々の要件も急を要する事、失礼は承知しておりますが幾つか質問にお答え頂けませんか？」

「ええ、いいですよ。どうぞ」

「今日の午前中に空を裂く青い光をご覧になりましたか？」

「話は聞きましたが私は直接見ていません」

「調査の結果、その光がこの先の山々から発生したようでして、この先に怪しい場所、遺跡等がございましたら場所をお教え頂けませんかでしょうか」

「遺跡が一つあります。えーっと、地図は持っていますか？　口で説明するのは難しいので」

「はい、ここに……」

そう答え、ウィルはこの近辺の地形が描かれた地図を取り出す。

ギガはそれを受け取ると山々の間に文字を記載していき、その地図をウィルに返す。

「ご協力感謝します。本来であれば正式な書状でお応えしたい所ですが、今は調査を優先したく、後日必ず礼をさせて頂きます。ご無礼をお許してください」

「いえいえ、気にしないでください」

ウィルはギガのその返事を聞くと深く頭を下げ、ギガの住まいを後にする。

「隊長」

大勢で押し掛けては迷惑だろうと、離れた場所で待機していたデイズがウィルの下へ駆け寄る。

「如何でしたか？」

「快く協力して頂き目的地もこの通りご教授して貰った。すぐに出発するぞ」

「はっ……」

デイズと共に隊へと戻ろうとする途中で

「（それにしてもあの少年、どこかで会った事があるような気がするのだが……）」

ふと、ギガの家に居た少年の事を思い出す。

ウィルの決して記憶力は悪くない。寧ろ彼はどんな些細な事でも

記憶に留めて置くほどの記憶力の持ち主だ。

先程の青い髪の少年、あれ程の特徴がある人物をそうそう忘れるはずなど無いのだが、不思議とウィルはその少年との接点を思い出せないでいた。

「隊長、どうかなさいましたか？」

「いや、何でもない。急ぐぞ」

「はっ！！」

今重要なのは御霊の搜索だ。思い出せない事に気を取られていても仕方が無い。

そう思い、思考を切り替えるウィルだったが、それが彼の意思とは違う所で働き掛けるある力のためだと気付くのはこれよりずっと後の事となる。

ギガに教えて貰った地図によれば、カラト村より西に数キロ、布土の森と呼ばれる森を進み、水晶山と呼ばれる山の麓に今は使われていない神殿があるとの事だった。

騎士達が山に足を踏み入れ進む事三十分、確かに神殿は存在していた。

「情報通りだな」

「流石は噂に名高いギガ・カストウル殿ですね。ほぼ位置に狂いはありません」

ウィルの言葉にデイズは地図を開きながらそう述べる。

「馬車はここまでだな」

「石畳の道が使えただけでも幸運ですよ。でなければ背負って運ぶ事になっていたでしょう」

「ああ……」

今は使われていない神殿と言う話だったが、どうやら相当大きな神殿であるらしく、道中で使用した今でも使える石畳の質から考えてもその見解は間違っていないだろう。

「だが、この先は手作業だ。荷を下ろせ、内部を探索するぞ」
『はっ！！』

神殿内部の探索はウィルとデイズを含めた六人編成で行い。後の面々は馬車と荷を見張る留守番役となった。

神殿に足を踏み入れ、奥へと進む探索メンバー達。すると

「隊長、奥に通路があります」

騎士の一人が奥へと続く通路を発見する。

「この奥に遺跡があるのか……」

ギガが地図に書き記した内容はそこで終わっていた。

「行くぞ」

通路を進むこと約十分。

「これは……」

通路の材質が途中を境に鉄へと変わる。

「間違いありません。施設級の遺跡です」

「電源もまだ生きています。見たところ劣化も少ないかと」

その通路を調べるように騎士達は壁や天井を見渡す。

過去に何度かこの手の遺跡を発掘した経験があるのだろうか、通路の鉄の壁を見ても彼等は特に驚いた様子を見せなかった。

「隊長、可能性が出てきましたね」

「ああ」

そう答えるウィルの表情にも若干の希望や期待の色が浮かび始めていた。

騎士達が更に奥に進むと、やがて通路は大きな鉄の壁に阻まれてしまう。

「行き止まりか？」

「いいえ、どうやら隔壁が降りているようです。お待ちください、すぐにロックを解除します」

騎士の一人が何かの道具を壁に開いている穴へと差し込み操作をし始める。
すると

バシユウ……

隔壁は静かな音を立てながら開いていく。

いよいよ核心に迫る事が出来る。騎士達は期待しながらその先の光景を待つが

『っ！？』

隔壁の向こうの光景、広場を見て皆絶句する。

先程までの通路とは打って変わって荒れた光景が待っていたからだ。いや、荒れていると言うのは少々言葉が悪い。何かがあった後と表現した方が正しいだろう。

何かの爆発が起こったであろう跡がある床、床に巻き散らかされた金属やガラスの破片、切断された何かの下半身と思われる物体。そして、鉄の壁に空いた大きな穴。

それらの痕跡がまだ新しい事は見て読み取れた。

「広場を調査するぞ。何でもいい、情報を集めるのだ」

『はっ！！』

数分後。

「隊長」

「何か解ったか？」

「はい、データベースが生きおり、そこからある程度の情報が引き出せました。当初の予測通り、この施設は御霊の保管を目的とした施設であつたようです」

「御霊は？」

「あのカプセルに保管されていたようですが……」

デイズの視線の先には粉々に砕かれたガラスの蓋の箱、カプセルがあつた。

その中身は無く、周囲にはガラス片とまだ乾ききっていない液体が散乱している。

何があつたのかはまだ解らないが、ここに御霊が保管されており、その御霊がすでに存在せず一足遅かった事だけは解った。

「……そうか」

落胆の色は隠せない。

「あの切断された下半身はどうやら拠点防衛用のガーゴイルの物と思われれます。施設内部でエラーが発生し、その対処のためガーゴイルが起動したところまでの記録が残っていました」

「ガーゴイルをあそこまで見事に切断するとなると相当の手練なのだろう」

一見して、床に転がっているガーゴイルが鉄製である事が解る。その重量を考えれば出力やパワーも相当なものであったはずだ。それを両断してしまう程の実力の持ち主が御霊を持ち去った可能性がある。

「ここまで来て見す見す御霊を奪われてしまうとはな……」

口惜しい。

だが、結果を悔やんでも何も解決はしない。早々に次の手を打たねばならない。

「あの大穴に関する記録は残っていないのか？」

広場に入ってまず目についたのが壁の大穴だった。

山を貫通するように直径五メートルの円状の穴が開いており、その断面はまるで切り取ったように滑らかでどう見ても自然に出来た穴ではない事は確かなのだが、これを人が行ったとすればそれはそれで異常な事だった。

「記録には特に何も、おそらくこの惨状と何らかの関係があるとは思われますが……」

そうデイズが述べていると

「隊長」

壁からせり出している台の付近で何かの道具を操作していた騎士が声を上げる。

「どうした？」

「監視システムの一部が生きていました。映像が再生出来ます」

「本当か!？」

騎士の言葉に皆が集まり、地面に置いてある一面だけがガラス張

りの四角い箱を見る。

「はい、モニターに表示させます」

騎士がそう述べると、箱のガラスに絵が表示される。

絵は連続して代わる代わる繰り返し表示され、映像となって映し出されていく。

映像には祭壇であるカプセルが映し出されており、映像のカプセルはまだ壊れておらず、中にはおそらく御霊と思われる青い水晶玉が見えた。

「何時の映像だ？」

「今日の午前十時頃の映像のようです」

午前十時、それは自分達がああ光を見た時間より少し前の時間帯だった。

「特に変化がないな」

ガラスに映し出される映像にはこれと行った変化がなく、同じ景色ばかりが映し出されていた。

「待つて下さい。少し早めます」

騎士がそう述べ台の辺りを触ると映像の動きが速くなり

「止める」

映像に新たな要素が映し出される。

人間だ。二人の人間が映像に姿を現した。

それほど鮮明な画像ではないため細かい容姿は解らなかったが、

一人は青い髪、もう一人は赤い髪をしているようだった。体つきから見て男女、しかもまだ子供のようにも見えた。

「（この青い髪の少年……まさか）」

映像は更に先に進み、少年がカプセルへと取り込まれていく。少女はカプセルを叩くが効果はなく、少しの間の後、少年は自らの力でカプセルを破り、内側から這い出てくる。

「……すごい」

騎士の一人がそう呟く。

広場を調査するに当たって当然カプセルもどのような代物かが調

べられた。

外壁は鉄で構成されており、蓋の部分はガラス張りだったが、ガラスと言っても厚さ数センチに及ぶ分厚いガラスであり、カプセルの中からは言え並大抵の力で破れる代物ではないはずだ。

やがて場面は次へと進む。

体長四メートルのガーゴイルの出現、そのガーゴイルと闘う二人。それは信じられない光景だった。

ガーゴイルのスペックは普通に考えても通常のガーゴイルより遙かに高く、おそらく自分達レベルスの騎士であっても一対一で勝つのは至難の業だ。

それだと言うのに、映像に映る二人はそんなガーゴイルに一步も引く事なく闘っていた。

それだけでも十分に驚くべき光景だったのだが、騎士達は更に驚くべき光景を目にする。

光だ。

ガーゴイルの攻撃によって倒れた少年が立ちあがり、青い光を身に纏い始めたのだ。

その光には見覚えがある。先刻、天を引き裂き貫いたあの青い光だ。

そして、その光は少年に操られる様に一点に集まると
カッ……

件の光の線となってガーゴイルを消し去ってしまう。

映像はそこで終わる。

まるで、少年が放った光により映像すらも掻き消されてしまったかのようなだった。

「た、隊長。これは一体……」

「解らん。何が起ったと言っんだ」

何が起ったのか理解出来なかった。

ただ、自分達が何十年、いや一生を掛けて修練を積もうともあんな真似は不可能だろう。

それを映像の少年はいとも容易く成し遂げてしまったのだ。

『…………』

その事実を前に、騎士達は言葉を失う。

「おそらく…………」

そんな中ウィルが口を開く。ウィルとて決して動揺していない訳ではなかったが、それ以上に彼には思うところがあったのだ。

「あれこそが御霊の力なのだろう。でなければ説明が付かない」

それは色々な意味で願望に近い言葉だったが、騎士達はウィルの言葉に賛同する。

「他に情報が無いか手分けして探すぞ。些細な情報でも構わん」

「はっ！！」

再び、広場を調査し始める騎士達。そんな中

「（ここに、御霊があつた…………）」

ウィルはカプセルに近寄り、思う。

「（あの光は御霊が生み出した光だったのか、御霊とは…………御霊とはあかも強大な力を与えてくれるもののなのか）」

あれが御霊の力だとするならば、あれこそがウィルが望んだ力だ。

「（何としても、御霊を手に入れなければ…………）」

そのためにどうすれば良いかを考える。

この時、彼は自分の思考にある変化が生じている事を自覚してはいなかった。

ある変化、それは…………野心である。

いや、それはまだ野心と呼ぶには極々小さな欲でしかなかった。

現にウィルはまだランクのために御霊を持ち帰ろうと思っており、そのための手段を考えていた。だから、実際は言葉の上のほんの僅かな変化でしかない。「持ち帰らなければ」と考えるところを「手に入れなければ」と考えたと言ったほんの僅かな変化。

だが、それこそが彼の運命を変える大きな切欠になる変化だった。

「隊長っ！！」

「どうした？」

騎士の大きな声に振り返るウィル。

「ガーゴイルのストックが見つかりました」

騎士の一人が壁の台を操作すると広場の床が開き、新しく三体のガーゴイルが姿を現す。

「如何致しましょうか？」

「起動可能な状態なのか？」

ガーゴイルの一体に近寄り、ウィルはその状態を確かめる。

見たところ破損もなく、ほぼ完全に近い状態であるように思えた。

「はい、保存状態は良好のようです」

「これほどの品を放置するのは惜しい。運び出してレブルスに持ち帰りたい所ではあるが……」

その性能は先の映像を見れば一目瞭然。

研究対象としても、うまく行けば戦力としても、レブルスのためになるだろう。だが

「現状の我々の装備では運び出す事は不可能です」

「……仕方あるまい。後日部隊を派遣する事にしよう」

ガーゴイルはガーゴイルで実に魅力的な存在ではあるが、今は御霊が優先である。

「とりあえず制御系の部品を解体し、起動出来ないようにしておくぞ」

「はっ！！」

ウィルの言葉に騎士達はすぐに解体作業へ入る。

ウィルも一体のガーゴイルの背後に回り、制御部分であると思われる頭部を探る。その時

「（……む、何……だ？）」

意識が霞む。

意識が遠退いたり無くなったりするのではなく、意識が霞む。頭がぼんやりとした状態となり、手が勝手に動いたかのように思えた瞬間

ピッ……

小さく、ウィルにしか聞こえない程度のそんな高い音が聞こえた。
そして

ブウン……

「（な……！？）」

低い響きと共に、ガーゴイルの目が赤い光を放つ。それが起動の
合図である事はすぐに解った。

「うわぁっ――！」

「そんな、システムは落としていたはずなのに！？」

動き出すガーゴイルを前に騎士達の動揺は明らかだった。だがそ
れ以上に

「（何だ、私は、私は今何を……！？）」

動揺するウィル。

霞む意識の中でガーゴイルに触れる指の感触と高い音が確かに聞
こえ、その直後にガーゴイルが動き出した。間違いなく、自分がこ
のガーゴイルを動かしてしまったのだ。

いや、その一体だけではない。見れば他のガーゴイル達も起動し
始めていた。

「隊長っ――！」

「っ！？」

デイズの大きな声が聞こえ、我に返る。

気付けば、目の前でガーゴイルが腕を振り上げているではないか
ブウンッ――！！

「くっ――！」

間一髪、ガーゴイルの拳を避けるウィル。

考えるのは後だ。そう思い、目前の脅威に備える。

「散開しろ、ガーゴイルを各個撃破する――！」

『はっ――！』

騎士達が散開すると同時にガーゴイル達も素早い動きを見せる。

自分達の近くに居る騎士のみを払い退け

ゴウッ――！！

背部より光を放ち、高速で壁に開いた穴に飛び込んでいく。

「何っ!？」

穴は山を貫き外へと繋がっており、ガーゴイル達はあっという間に姿を消してしまう。

「皆、無事か？」

「はい、負傷者はありません」

ウィルの問いにデイズが答える。

「よし、すぐに追跡するぞ」

「ですがガーゴイルがどこへ向かったのが解りません」

ガーゴイルの姿はすでに見えず、追跡するのは困難だった。

「おそらくはカラト村だ」

「カラト村？」

「映像に映っていた少年、私はあの少年に良く似た少年をギガ・カストウール殿の家で見掛けた」

「本当ですか!？」

「確証は無いが、あのガーゴイルが御霊を守護する事が目的として造られた存在であるならば、奴らが向かうのはおそらく御霊のある場所……」

「つまりはカラト村……ですか」

「そうだ。あんな物が人里に下りたらどれだけの被害が出るか解らん。急ぐぞっ!!!」

『はっ!!!』

ウィルの言葉に騎士達は声を上げ走りだす。ウィルも騎士達と共に走り出すが

「（私は、私はあの時何を……）」

先程の事を思い出しゾツとする。

あの瞬間、ガーゴイルの頭部、制御回路に触れたあの時

「（これをうまく使えば、御霊を手に入れる事が出来るのではないか……）」

意識は霞んでいたが、ウィルは確かそう考え……笑っていた。

自分がそんな事を考えるなど信じられなかった。そして、同時に思う。

「（あれは、私の意思では断じてなかった。私の体に一体何が起ったと言うのだ……）」

それが何であるかを彼は知らなかった。

そして、すぐに知る事となる。自分に課せられた、抗う事の出来ない定めと言うものを。

今、全ての事柄は運命と言う名のプログラムの示す通りに進んでいた。

第七章『カラト村滅亡』

第七章『カラト村滅亡』

「……おじさん、今の人は？」

来客者、ギガの家に訪れた黒い鎧の男が去った事を確認し、ラックは口を開く。

カラト村の人間ではない。居間からでは詳しい話は聞こえなかったが、このタイミングで村の外の人間が現れた事にラックは疑惑を抱いていた。

「レブルス国の騎士団長、ウィル・ワームズ。代々クラウス家に仕える由緒正しき騎士様ですよ」

「クラウス家に？」

その言葉を知っていたのか、ラックは驚きの表情を見せる。

「そのレブルスの騎士が何故この村に？」

「言わずもがな、御霊を探しに来たに決まっているじゃないか」

ラック自身もそうではないかと思っていたのか、ギガの言葉に同意の表情を見せる。

「しかし、どうやら既に運命には変化が生じ始めているようだ」

「どう言う事ですか？」

「私知っていた運命では三回の質問が終わった時にイベントが発生したはずだ。だが四回目の質問が終わった今もそのイベントが発生していない。それに、騎士団の到着はそのイベントの最中だったはずだ」

「では、どこかで運命が変わったと言う事なんでしょうか？」

「おそらく、君が使ったライトニングが彼等に影響を及ぼしたのだろっ」

「ライトニング？」

聞いたことの無い名前にラックはクエスチョンマークを頭の上に

浮かべる。

「君が使った全てを消し去る青い光の事だよ。あれには無条件で存在そのものを消し去る力がある。先程の騎士団長殿の言葉を聞く限り、ライトニングの光を見て到着を早めたように聞こえた」

「あの光にそんな力が……」

現象として、自然界で起こるはずが無い現象だと言う事は感じていたが、それほどの事だとは思っていなかった。

「ラック君。君も気付いていると思うが、あの光は無闇に使ってはいけない。下手をすれば君がこの世界を消し去ってしまう可能性もある」

可能性だ。

もしもあの時、ラックがライトニングをガーゴイルに向けて撃ったあの時、その発射角度がもつと下に向いていたならば、ライトニングは壁を貫通せずに大地を貫通し、世界を消し去っていたかもしれない。

「ですが、騎士団がこの村に早く到着した事はチャンスと言える」

「チャンス？」

「そう、既に運命は変わり始めている。騎士達の到着が早まったと言う事は、君に新たな選択肢が増えた事を意味している」

「運命はそんなに簡単に変わるものなんですか？」

先の話聞く限りでは運命とは変えたくても変える事が出来ないものと言う話だったが、今のギガは運命が変わり始めていると軽く話している。

「いや、これは私の言葉が悪かった。運命はそう簡単には変わらない。だが、運命とは言っても一から百まで全ての行動が決まっている訳ではないんだ。例えるならば川の流れ。途中で岩なり脇道なりがあつて水の流れが変わったとしても、最終的に行き着くところは変わらない。イレギュラーが発生した場合はある程度運命は変化するが、最終的には同じ結果になるうとする復元作用が起きる」

「ウォーターフォールモデルと言う事ですか」

それもまた、プログラム用語の一つだった。

「私達も私達なりに運命に逆らう手段を考え実行してきた。その結果が今であり……君なんだ」

その言葉の重さは解るつもりだ。

ラックだって村の大人達が黙って運命を受け入れたとは思っていない。

「おじさん……」

だが、どう答えて良いかが解らなかった。

果たして自分に何が出来る。運命に逆らってくれ、運命を変えてくれと言われたところで何をすればいい。その答えをラックはまだ出せないでいた。そんなラックの心情を察したのか

「……ラック君、一度家に帰りなさい」

「え？」

「君にはまだやらなければならない事がある。それが終わったらもう一度ここに来なさい。おそらくそれぐらいの時間はあるはずですよ」

「……解りました」

ラックはそう返事をする二人の前から姿を消す。ラックの姿が見えなくなった後

「……フェリア」

ギガは重く口を開く。

「何、お父さん？」

「親として、お前にしてやれる事はもう無いだろう。だから、私の最後の頼みを聞いてくれ……」

「……うん」

フェリアは深く考えた後、ギガの言葉を聞く覚悟を決めた。

バンッ！！

「はぁ、はぁ、た、ただいま……」

ラックが息を切らしながら扉を開けると

「あら、おかえりなさい」

ストアは何時ものようにラックを出迎える。

「何も走ってこなくてもいいでしょうに、そんなに息を切らせて」

「な、何を悠長な事……」

ストアはラックがギガより全ての話を聞いてきた事を知っているはずだ。だと言うのに、ストアは少しも動揺している様子がなかった。

「今更慌てたところで仕方がないもの」

そう述べる母の表情は落ち着いているようで、どこか寂しそうだつた。

「母さん……？」

そんな母の表情を見るのは初めてだった。

「大体の話は兄さん聞いていると思うから、私が言う事は特にはないわ」

そう言いながら、ストアは一振りの巨大な剣を取り出しテーブルの上に置く。

「私の最後の役目はこれを貴方に渡す事と、貴方の力について話す事」

「役目って何だよ……」

その言葉を聞き、ラックは言いたい事を言う。

「母さんも、父さんから運命の事を教えてもらったの……？」

「ええ、そうよ」

「じゃあ、母さんは運命だとか役目だとか、そんな理由で父さんと結婚して……俺を生んだの？　俺がこうして生まれてきたのも全部運命だから……」

「いいえ、それは違うわ」

「でも、運命には逆らえないんですよ！？」

ギガの話を聞いた時からずっと疑問に思っていた。

村の大人達は今日までの自分の運命を知っていた。そして、その運命に逆らうために、ラックを育ててきた。逆に言えば、ラック・

ラグファースと言う存在は皆の運命を変えるために生み出され、育てられた事になる。

「俺は……!!」

「ラック、例え運命であつても最終的な人の意思までは操れないわ。私とお父さんが出会つたのは運命かもしれない。でも、私は私自身の意思であの人を好きになつて……貴方を生んだのよ」

「母さん……」

「それに、運命を『知っている者』にはたった一つだけある選択が許される。それは、自ら命を絶つと言う選択……」

「え……?」

「さつきも言つた通り、例え運命でも最終的な人の意思までは操れない。人に残された最後の選択、それが自ら命を絶つ事。本当の本当に最後の手段。でも、それは自分自身の否定以外の何物でもない。だから私達はその選択を選ばずこつして生きて、運命に逆らおうとしている」

そう延べ、ストアはラックを優しく抱きしめる。

「自信を持ちなさい。貴方は間違いなく私達が望み、生まれてきた子供よ」

「あ……」

何故か、泣きたくなくなった。

いや、抱きしめられながらラックは涙を流していた。

母のその言葉は彼が一番聞きたかつた言葉だつたからだ。

彼は父の事も母の事も好きだつた。この二人の子供で幸せだつたと思つていた。だから、それが運命によるものだと思はれた時、自分の全てが否定されたようで……怖かつたのだ。

「確かに、村の皆は貴方に期待している。でも、それを決めるのは貴方よ。誰もそれを強制出来はしない。だから、貴方が望む未来は貴方自身が選びなさい」

「……うん」

涙を拭い、そう返事をするラックの顔は笑つていた。

「まだ、自分がどんな運命を背負わされているのかは解らないけど、俺は俺の意志で未来を決める。運命がそれを拒むなら……俺は運命だつて変えてみせる」

母の言葉がラックにそう思わせてくれた。今の彼に迷いはない。「うんうん。それでこそ私達の息子よ。本当にお父さんそっくりの良い男に育つたわね」

ラックのそんな姿を見て、ストアは満足そうに笑う。

「……あれ？」

母のその言葉を聞いてふと疑問が浮かぶ。と言うより、何故今までその事を疑問に思わなかったのだろつと言う類の疑問だ。

「母さん、父さんって何者なの？」

「貴方、自分の父親を捉まえて何者は無いでしょ」

「だつて、二人とも自分の話つて全然しないし」

テラ・ラグファース。

レブルス国の元英雄であり、ラックの剣術の師匠。村の大人達は皆彼から自身の運命を教えてもらったとギガは言っていたが、果たしてどのような術を持ってすればそんな事が可能なのか。

普通ではない事は薄々感じていたが、今回の件は幾ら何でも度が過ぎている。

「実際の所はどうなの？」

「うーん、実は私も詳しく知らないのよね。本人も昔の事はあんまり覚えていないらしいし、とりあえず五百年以上生きている魔族つて事は解っているんだけど」

ズガンツ！！

超重力発生、ストアの言葉を聞きラックはテーブルに頭を沈める。

「……あら、何いきなりテーブルに突つ伏してるの？」

「いや、何故と言われても……」

テーブルに手をつけ、引き剥がすように顔を上げるラック。

「父さんって人間じゃなかったの？」

「え、お父さんが人間だなんて私達一度も言つた事無いわよ」

「いやまあ、そりやそうだけど……」

「まあまあ、そんな事はどうでもいいでしょう」

「全然よくないと思う……」

魔族。

生まれつき通常の人間には無い特殊な能力をその身に宿した存在の事を総称してそう呼ばれている。その大半が人間よりも遥かに長い寿命を持っているが、その能力から異端とされ、迫害を受ける者が多く。天寿を迎える事が出来る者は少ないとも言われている。

「父さんが魔族……ねえ。まあ、それならまだ色々説明もつくか」
魔族が生まれ持つ特殊な能力。

あの0と1の世界が見えたのも、人々に運命の事を知らせる事が出来たのも、父が魔族であると言うならばまだ説明がつくと言うものだ。

「お父さんの特殊能力の名は真眼」

「真眼？」

「その瞳に見えぬ物無しと言われる真実を見る事が出来る金色の瞳の事よ。もつとも、余程気合が入っている時や、危機的状況でもない限りは発動しないって話だけ」

「なるほど……父さんも真眼の力で運命を、この世界の真実を知る事が出来たって事か」

心当たりはある。

ガーゴイルとの闘いの中で、ラックは極限の状況下に置かれた。

そして、フェリアの危機を感じたあの時の集中力は今までの人生に無いものだった。

「まあ、実際にはそこに至るまでに色々あったらしいけど、その辺りは結局最後まで教えてくれなかったわ」

そう延べ、ストアはテーブルの上の剣を手に取りラックに差し出す。

「受け取りなさい」

「これは？」

差し出された剣を受け取るラック。

巨大な剣だった。鞘に収められてはいるもののその刀身はラックの身長を超えており、おそらく百七十センチはあるだろう。何より驚いたのはその剣を手を持った瞬間だった。

「軽い……」

その剣は異様に軽く、凡そ重たさと言ったものを殆ど感じなかったのだ。

「イレイザーフォルス、通称イルフォン。貴方にしか使えない貴方だけの剣よ」

ラックが鞘から剣を引き抜くと、そこには空を映したかのような鮮やかな青の刀身があった。

「重さが無い訳じゃない。ちゃんと重量があるのに……」

どういつ材質かは解らないが、どうやら持ち手に重さを感じさせないだけで質量はちゃんと存在するようだ。

「凄い剣……って事か」

その全容は解らないが、普通の剣ではない事は確かだ。

「貴方がその剣を手に入れるのは本来であればもっと先になるはずなんだけど、ちよつとした裏技でフライングゲットしちゃった」

「しちゃったって……」

こうしてラックが剣を手にする事が出来ていると言う事は、最終的にはラックがこの剣を手にする運命であると言う事だ。だが、今の段階でラックがこの剣を手にする事によってこの先の運命が変わるかもしれない。おそらくストアはそう考えこの剣を入手してきたのだろう。

「ああ、でもその剣の説明は他の人に聞いてね。私はここまでしか説明出来ないから」

「……」

言いたい事が言えない。聞きたい事が聞けない。運命とは何と束縛力が強いのだろう。

「さあ、もう行きなさい。ここで貴方がやるべき事はもう無いわ」

「母さん……」

伯父の言葉が本当ならこの村は滅びる。

「体には気をつけなさい。言っても無駄だろうけど、あんまり無茶をしちゃ駄目よ」

だと言っのに、母はまるで何時ものように自分を送り出そうとしている。

「それと、貴方は男の子なんだからフェリアちゃんをしっかり守ってあげなさい。いいわね？」

「うん、母さんも……気をつけてね」

これで今生の別れになるかもしれないのに、ラックはそんな事しか言えなかった。

「……いつてきます」

「いつてらっしゃい」

何時ものようにラックは家を後にした。

それが最後。以後、彼がこの家に戻ってくる事は無かった。

「……」

ラックは家を出るとまっすぐフェリアの家に向かって走った。

あまりに重要な情報が大量に頭の中に入り込んできたせいか、彼の頭の中は軽い混乱状態にあった。そんな混乱を振り切るように一心不乱に走り続ける。そんな時

ドオオオオオーンッ！！

遠くで大きな音が鳴り響き、同時に強い衝撃が体を襲う。

「くっ……」

足を踏ん張り、その衝撃に耐える。

「（何だ……！？）」

爆音がした方向を振り向くと赤い光りと黒い煙が見えた。

「（………何かが始まったんだ）」

この村が滅亡する。

そんなギガの言葉が脳裏を過る。確実にこの村に何かが起こり始めている。

「早くおじさんの所へ……」

ラックはそう思い再び走り出そうとするが

「え、待てよ。あの場所って……」

爆発のあったと思われる方角を見て、ある場所を思い出す。

「まさかっ……！」

学校。

小さなカト村において唯一子供達が遊べる遊具が存在する場所であり、時刻は午後五時前、日が傾き始めて入るが子供達が遊ぶにはまだ明るい時間だ。

そして、ラックは子供達があので場所で遊ぶと言っていた事を思い出す。

「あ、ぐ、くそおおっ……！」

一瞬悩み、ラックは爆発の起こった場所へ向かって走り出す。

一刻も早くギガの所に行くのがこの場においてはおそらく最善の一手であったはずなのだろう。少しでも可能性が高い選択肢を選ぶのが大人の判断と言うものなのだろう。

だが、ラックには出来なかった。子供達を見捨てて自分が生き残る選択肢を選ぶ事など、彼には出来なかったのだ。

走る足が遅く感じる。

赤い光りと黒い煙はどんどん大きくなっている。そして、ラックが辿り着いた頃には学校と呼ばれた建物は最早手のつけられないほどの炎に包まれ、真っ赤に燃えていた。

「誰か居るか!? 居たら返事をしろっ……！」
大声で叫ぶ。

爆発のせいなのだろうか、辺りには学校の瓦礫が大小様々に散らばっていた。誰か居ないかと声を上げながら周囲を見て回るラック。
「誰か……うつ」

そんなラックの眼に映ったのは、建物の破片と共に倒れている子

供達の姿だった。

「おいっ!!」

倒れている子供の一人に近づき抱き上げる。

「……死ん、でる」

呼吸が無い。

まだ少し暖かい体、ついさっきまで生きていた証だ。

だが、抱き上げたその体には生命の鼓動が感じられなかった。

「こんなの……!!」

その光景はあまりにも日常とかけ離れた光景で、昼間、後で遊んでくれよと言っていた子供達は、何も喋らない存在へと変わっていた。

「……っ……ゃん」

「っ!？」

学校の中から微かに声が聞こえた。

ラックが振り向くと、そこには傷付いてはいるが確かに生きている子供がいた。

「ラック兄ちゃんっ!!」

泣きながら、炎の中を歩いてこようとする。

怪我のせいかうまく歩けないようで、出口まであと少しだと言うのに炎が今にもその子を巻き込もうとしていた。

「待ってる、すぐに助け……!!」

ラックはその子供の所にすぐに駆け寄ろうと走り出すが
ガッッ!!

子供の体が突如現れた巨大な手によって持ち上げられてしまう。

その巨大な手には見覚えがあり、その巨大な手の持ち主には見覚えがあった。全長約四メートルの巨大な鎧の化け物、ガーゴイルだ。ガーゴイルの巨大な手が子供を掴み、持ち上げている。

「止めるおおっ!!」

ガーゴイルが次に何をしようとしているのかは明白だった。

ラックは必死になってそれを止めようと駆けるが

ブシュツウッ！！

届かなかった。

僅かに一步、たったそれだけの距離が届かず、その子はガーゴイルの巨大な手によって……握り潰されてしまう。

ピ、ピピ、ピシャッ……

空中に飛び知った液体がラックの顔にかかり、視界を赤く染める。その液体はまだ少し暖かく、つい先程まで人が一人生きていた事を訴え掛けるようであり、その液体がその子の血だと認識するのに僅かの間を要した。そして

「あ、ぐつ、うわああああー！！！！」
叫ぶ。

何に対して叫んでいたのかは解らない。

ただ爆発するように湧き出る感情を抑えきれず、気付いたら声を上げていた。同時に

ダッ！！

ラックは剣を抜きガーゴイルに切り掛かっていた。

ガキイインッ！！

剣は以前と同じようにガーゴイルの装甲によって弾き返されてしまった。

「ああああああーっ！！」

ガギンギンギンッ！！

ラックはそんな事お構いなしにガーゴイルを切り続ける。

その時の彼は怒りで我を忘れ、頭の中は完全に真っ白になっていた。そして

「（切るっ！！ 切る切る切る切る……こいつは切る！！）」

理屈や理論を一切無視し、ただガーゴイルを純粹に切り裂く事だけしか考えていなかった。

ギンギンギンッ！！

途中、何度かガーゴイルも反撃を試みるが、それすらも打ち返すようにラックは斬撃を繰り返す。普通の剣であれば刃毀れを起こし

とつくに折れてしまっていただろう。だが、ラックの新しい剣は折れる事はなくその切れ味も落ちてはいなかった。

ギンギンギンギンギンッ！！

それでもガーゴイルの装甲は堅く、未だ切り裂く事は叶わなかった。

何十回目だろう。ガーゴイルの装甲に剣を叩きつけ続け、それが無駄である事が証明されようとした時

「はあああッ！！」

ギンッ！！

音が変わる。

明らかに、先程までとは違う金属音が鳴り響く。

見れば、度重なる斬撃によるものなのかそれとも他の何かによるものなのかは解らないが、ガーゴイルの装甲に亀裂が入っていた。そして

「だあああああッ！！」

バギィィンッ！！

切った。

ガーゴイルの胴体を横から上下に真つ二つに叩き切る。何時ぞやの分断とは違う純粋な物理的力による切断だ。ズドオオンッ！！

上下に分かれたガーゴイルの上半身が地面に倒れこむ。

「くたばれえええ！！」

ガスンッ！！

渾身の力を込め、ガーゴイルの頭部に剣を突き立てる。それが最後、ガーゴイルはその行動を停止した。

「はああああ……」

倒れそうになる足を押さえつけ、ラックは辺りを見回す。

その光景は、何も変わってはいなかった。

子供達は変わらずその場所にあり、命ある者はラック一人だけだった。

「何も、出来なかった……」

助ける事が出来なかった。

来たときにすでに事切れていた子供達は勿論、目の前で助けを求める子供すらも救えなかった

「俺は、俺は……！！」

剣を強く握り締めるラック。そんな彼の耳に

チユドオオーン！！

先程と同じ爆発音が聞こえてくる。

「えっ……！？」

遠くで赤い光と黒い煙が立ち上っている。

「そんな、ガーゴイルは……」

ガーゴイルは自分が倒した。ここにその証拠が転がっている。

「そうか……！！」

気が動転していて気が付かなかった。

良く考えればラックは神殿でガーゴイルを完全に消し去ったではないか。

それなのにまた現れたという事は、このガーゴイルはあのガーゴイルとは別の存在であると言う事だ。ならば、他に何体かのガーゴイルが存在していたとしてもおかしくはない。

「く、くそおおっ！！」

ラックは地面を蹴り駆ける。

泣く暇も、後悔する暇も、子供達に謝る暇も無く、爆発が起こった場所へと向かう。

カラト村中央広場。

そこには一体のガーゴイルと対峙する騎士達の姿があった。

「敵を包囲する。動きを封じるんだ！！」

「はっ……！！」

副隊長デイズ・ブラインの指揮の下、騎士達は果敢に闘っていた。

騎士とは言え彼等は軍人である。個々の能力がガーゴイルに及ばずとも集団での戦闘でこそ真価を発揮する存在だ。客観的に見ても善戦していたと言えただろう。

その証拠に、今まさにガーゴイルの動きを封じ込めようとしている。だが、このガーゴイルの最も特筆すべき所はその鉄の装甲にある。如何に彼等がガーゴイルを封じ込めたとしても、その装甲を破る事が出来ない限り勝利は無い。

そして、ガーゴイルの持つ能力はその装甲だけではなかった。カッ！！

ガーゴイルの頭部から放たれる強烈な光が辺りを照らすと同時にドオオオオオッ！！

爆発が巻き起こり、騎士達の体が周囲に吹き飛ぶ。

「くっ……」

副隊長としての責任かそれとも誇りか、他の騎士達が吹き飛ぶ中その爆発に耐えるデイズ。だが決して無傷と言う訳ではなく地に膝を着いてしまう。そんなデイズを叩き潰すかのように

ブウンッ！！

ガーゴイルの拳が唸る。

「（やられるっ！！）」

デイズが死を覚悟したその時

ガキインッ！！

大きな金属音が鳴り響く。何が起きたのかとデイズが視界を上げると

「き、君は……」

そこには青い髪の少年、ラックが立っていた。

ラックは剣を盾にし、デイズを守るようにガーゴイルの拳を受け止めていたのだ。

「ふっ！！」

ギインッ！！

剣で弾くようにガーゴイルの拳を跳ね除けるラック、そして

「はぁあっ!!」

ガキインツ!!

ラックの回し蹴りがガーゴイルの巨体を吹き飛ばす。

「なっ!!」

それを見たデイズは驚愕した。

何が起こっているのかが一瞬解らなかった。自分達が数人がかりでやっと封じ込めたガーゴイルの力をこの少年は剣一本で受け止め、その巨体を蹴り飛ばしてしまったのだ。

ありえない。

実際、自分達が見た施設の映像でもこの少年はガーゴイルの力に翻弄されていた。だと言うのに、今のこの少年はそのガーゴイルと互角以上の力を発揮している。

「（一体、何が起こっているのだ……）」

困惑するデイズを他所に、ラックは剣を構える。

ラック自身、自分が今どれだけの事をしているのかに気付いてはいない。何故ならば

「こいつらが……こいつらさえ来なければっ!!」

今の彼を支配しているのは純粹な怒りだったからだ。

怒りは人から冷静さを奪い、同時に爆発的な力を与えてくれる。

ダッ!!

地を蹴るラック。

地を這うように移動するその速度はガーゴイルに体勢を立て直す

暇を与えず

「だぁあっ!!」

ギンツ、ギイインツ!!

一太刀目で不完全な防御を打ち砕き、二太刀目でその装甲に亀裂を生じさせる。そして

「弾けるおお!!」

バチ、バチバチバチッ!!

ラックの左手が稲妻を発する。

彼が保持する呪法の中で最大の威力を誇り、彼の最も得意とする雷系呪法。

「爆雷っ！！」

ドオオオオッ！！

ガーゴイルの装甲の亀裂より入り込んだ稲妻は、その体を内側から粉々に吹き飛ばす。

「す、すごい……」

その光景は実に圧巻だった。

武を学ぶ者にとって、彼のその姿は見惚れんばかりの強さを見せてつけていた。

「皆さん、ご無事ですか？」

「あ、ああ……」

ラックの言葉に頷き返すデイズ。負傷者は多数出ているが致命傷の者は居ない。

「ガーゴイルが村に来るなんて、一体何があったんですか？」

ラックの問いに、デイズは要点だけをまとめて簡略的に説明をする。

「後一体ガーゴイルが居る？ 何処にですか！？」

「村の外れだ。ウィル隊長が一人で足止めをしている」

自分達はその間にもう一体のガーゴイルを倒す手筈だったとデイズは説明する。

「解りました」

その答えを聞き、ラックはすぐに駆け出そうとするが

「待ちたまえ、どうするつもりだ！？」

デイズはそんなラックを呼び止める。

「どうするって、助けに行くに決まっているじゃないですか」

「我々は騎士で君は民間人だ。どんな事情であれ民を守るのが騎士の役目、君が闘う必要はない」

守るべき民に守られたとあっては騎士である我々の立場がないとデイズは言うが

「ふざけるなっ!!」

ラックの怒号が響く。

「役目だとか立場だとか、そんなくだらない理由で人が死ぬのを黙って見ていられるかっ!!」

そう言い残し、ラックはあっという間に走り去ってしまう。

「……」

しばし、呆然とするデイズ。

少年の言葉は、それだけを聞けば何も知らない子供の台詞のように聞こえた。だが、彼の言葉はデイズの中の何かに響く。

「デイズ副隊長」

「……放つては置けない。後を追うぞ!!」

『はっ!!』

傷付き足を引きずる状態であっても、彼等はラックの後を追おうとしていた。

彼等は騎士。良い意味での騎士なのだ。民間人の少年が一人で闘う姿を前に黙っていられる訳が無い。何より、その場に居る全員がラックの言葉に何かを感じていた。

カマト村外れ。

そこには一体のガーゴイルと対峙する騎士の姿があった。

ウィル・ワームズである。

「く、埒が明かな」

一人、ガーゴイルと闘うウィル。

その立ち振る舞いは見事であった。ガーゴイルが剛であればウィルは柔、まさに柔能く剛を制するの見本を見ているようだった。だが、何度も述べるようにガーゴイルの装甲は堅く、それを破る事は半端な事ではない。

如何に騎士団長のウィルと言えどその壁は厚く、消耗戦に似た持久戦がすでに数十分続いている。そんなウィルに疲れが見え始めた頃

「はぁあっ!!」

ガキインツ!!

青い髪の少年、ラックが場に現れガーゴイルに切り掛かる。

「大丈夫ですか!？」

切り掛かった反動でウィルの隣まで移動し、そう尋ねるラック。

「君はギガ殿の所に居た……」

「ラック・ラグファースです。こいつの相手は俺がします」

そう延べ、ウィルの答えを聞く前に

ダッ!!

ガーゴイルに向かって走り出すラック。

「待て、そいつは……!!」

ウィルの言葉は決して遅くなかった。

だが、ラックはウィルの言葉より早くガーゴイル目掛けて剣を振り下ろしていた。

ガキインツ!!

高い金属音が鳴り響く。

「っ!？」

驚きの表情を見せるラック。

今までのガーゴイルとは手ごたえが違う。その事に気付いたラックはガーゴイルの反撃を掻い潜り距離を広げる。

「施設に居たガーゴイル達のリーダー格なのだろう。他のガーゴイルとは装甲が違う」

「みたいですね……」

今まで怒りで我を忘れていたラックだったが、ここに至り我を取り戻す。

ただ装甲が厚いだけではない。ガーゴイルに切り掛かった時、初手は牽制であつたがため気付かなかったが、何か危険な感じがした。その根拠は勘であつたが、闘いにおいて勘は重要な要素の一つである。

「ラック君と言ったな。あの光を使えるか？」

「え？」

「君が御霊を所持している事は知っている。あのガーゴイルを倒すにはあの光が必要だ」

全てを消し去る無の光、ライトニング。

確かにあれならば目の前のガーゴイルを消し去る事は容易であるう。

「……解りません。意図的にやった訳ではないんでやれと言われてやれる自信は無かった。

「そうか……」

そう答えるウィルはやや残念そうであった。

「ならばガーゴイルを切り裂いたあの技はどうだ？」

「あれなら出来ます」

「よし、まずは同時に仕掛ける。その後君は距離を取りタイミングを見計らえ、私は奴の足を止めチャンスを作る」

「解りました」

作戦を議論している暇はない。

騎士団長であるウィルの考えた策は有効的に思え、ラックはその案に従う事にした。

「行くぞっ!!」

「はいっ!!」

ダッ!!

地面を蹴る二人。並走しながらガーゴイルとの距離を詰める。

先に仕掛けたのはラックだった。渾身の力を込めてガーゴイルの頭を叩き切ろうとするが

ガキイーンッ!!

ガーゴイルにとっても頭部は重要な部位であったのか、腕でガードされる。

ガードされたことによりラックの動きが止まる。

その直後、ウィルの攻撃によりガーゴイルは対象をウィルへと変更し、ラックはその間にガーゴイルとの距離を取る……はずだった。

ゾクッ！！

「っ！！」

突如、ウィルの攻撃を待つラックの背筋に冷たい何かが通り抜ける。

殺気だ。

人造兵器であるガーゴイルからは決して感じる事の無い感情。

その殺気が今ラックに目掛けて発せられている。

ヒュンッ！！

突然の状況にラックの体は良く反応したと言える。

背後より繰り出された斬撃をラックはガーゴイルの腕を踏み台にし、まるで曲芸のように回避する。だが、宙に飛んだのは失敗だった。

地面との接点が無くなった状態、回避しようの無い状態であるラックにガーゴイルの視線が向く。そして

カツ、ドオオオオオンッ！！

閃光と爆発がラックを包む。

ダンダン……

地面を転がるラックの体。

「ぐ……」

何時ぞやと同様に、剣を盾にしたお陰で直撃は避ける事が出来た。今回は新しい剣のお陰で比較的軽傷ではあったが、体に襲い掛かる衝撃波までは防ぐ事が出来ず、負傷とまでは行かないまでも体の動きが鈍くなる程度のダメージは食らったようだ。

「良い勘だ。どうやら君のその戦闘能力は御霊から授かった力だけではないようだな」

「どう、して……？」

ラックは先程背後より切り掛かってきた人物、ウィルを見てそう呟く。

「私の任務はその御霊を搜索、回収することにある。文献によれば御霊は所有者の死後、肉体と分離し姿を現すそうだ」

「なっ……」

つまり、御霊の所有者であるラックを殺して御霊を回収するつもりと言う事なのだろうか。

「これ以上被害を大きくしたくないと言うのであれば、大人しく言う事を聞いてくれないか？」

「まさか、じゃあ、このガーゴイル達は貴方が……」

経緯は解らない。

だが、目の前のこのウィルと言う男が言った言葉はそう受け取るに十分な言葉だった。その証拠であるかのように、ガーゴイルはその動きを止めウィルの背後に従うように立っていた。

「本来であればもつと穩便に事を進めたかったが、計画に予定外の出来事は付き物だ。この村の者達には悪い事をしてしまったが、これもこの国のためだ」

そのウィルの一言を聞き

ギッ！！

足を踏ん張って立ち上がり、剣を構えるラック。

「国のためだつて……そんな理由で、何で無関係な子供達が死ななくちゃならないんだっ！！」

「……君は一つ勘違いをしている」

「何っ！？」

「私としてもこの状況は不本意だ。この状況を作り出したのは他ならぬ……君自身だ」

「っ！？」

ウィルの言葉は正しい。

ラックも心のどこかでそう思っていた。運命だとか定めだとか、そんな理由は言い訳にしか過ぎない。結果的に、ラックが御霊を手に入れたことによってこの村は被害を受けている。

つまり、村の子供達が死んだのは自分のせいだと。

「もう一度言おう。私が必要としているのは君が持っている御霊だ。これ以上被害を大きくしたくないと言うのであれば大人しく投降し

たまえ」

「くっ……」

迷う。

その選択の先にあるものが何なのかは解っている。だが、その選択を選ばなかった場合に何が待っているのかも容易に解る。悔しいが、今のラックに選択を選ぶ余地は無かった。

ラックには、その選択以外を選ぶ余地は無かったが
ドオオオオンッ！！

突如、ガーゴイルを中心に爆発が巻き起こる。

「何考えてるのラック！！」

同時に、そんな声が聞こえた。

「そんな奴の言いなりになったってどうせこの村は滅びる。それを変えるためにラックは闘うんでしょ！！」

フェアリアだ。

印を組み、臨戦態勢のフェアリアがそこに立っていた。

「ちい、小娘が余計な事を！！」

ウィルはそう舌打ちするとガーゴイルに視線を移す。

するとガーゴイルがゆっくりと動き出した。何かしらの命令の合図があつたかは解らないが

「や……」

ウィルが何を考え、ガーゴイルが何をしようとしていたのかははつきりと解った。

あの光をフェアリアに向けて使おうとしている。ラックが知る限り、あの爆発を相殺出来る呪法をフェアリアは持っていない。フェアリアにはラック程の武術の心得はなく回避をする事も不可能だ。

つまり、ガーゴイルを止めない限り、フェアリアに待ち受けているのは……死だ。

「やめろおおっ！！」

手を伸ばし、足を動かす。

遅い。

ラックとガーゴイルの距離は大きく開いていた。

どれだけ早く動こうとも、この距離からではガーゴイルが振り向く速度に敵いはしない。

「（間に合わない。このままじゃ間に合わない。もっとだ、もっと速く）」

頭の中が真っ白になり視界が歪んでいく。そして徐々に世界が暗転し、光る文字が見え始める。

0と1の世界。

それは紛れも無く神殿でガーゴイル対峙した時に見たあの世界。極限の状況、究極の集中力がラックをその世界へと導く。だが、今のラックにとってはそんな事はどうでもいい。彼が今望むのはただ一つ。

「時よ、止まってくれえっ!!」

強く、そう思う。同時に

カチッ

頭の中で音がした。

途端、周囲の空間が緩やかに流れ始める。フェアリアもウィルもガーゴイルも、果てには風や炎まで、この世界に存在する全ての存在の時間が遅くなる。そんな中

「うおおおおあーっ!!」

ラック一人だけが動いていた。

「（見えるっ!!）」

剣を構える今の彼に見えているのは0と1の世界。

そして途端に理解する。0と1の隙間を。ラックが集中する事によって見えていた物質と物質の繋ぎ目の線。あれはまさに今見ている世界の0と1の隙間だったのだと。

今まではその線に剣を沿わせる事によって物質を分断してきたが、今のラックにはその0と1の隙間に至る空間までもが全て見えている。

「切、り、裂、けえええっ!!」

目の前の空間に存在する0と1との間を切り裂くように剣を振り下ろす。

キンッ……

空間の断裂。

遠く離れた場所で裂かれた空間は不規則に分断を繰り返し、連鎖するようにガーゴイルへと伸びていく。

そして……切り裂く。

音も無く、まるで紙を切ったかのようにガーゴイルの首は分断され、頭が地面へ落ちていく。

剣を振り下ろし終わると同時にラックを取り巻く時間は元へと戻っており、彼が見える世界もまた元の世界へと戻っていた。

「はぁ、はぁ……」

凄まじい疲労感がラックを襲い。思わず、その場で跪いてしまう。まるで数時間分の疲れが一気に来たかのような脱力感だった。

「ラックッ!!」

何が起こったのかは解らないが、ラックが何かをした事は解った。そんなラックの下へ駆け寄るフェアリア。同時に

ポトッ……

地面に何かが落ちる音が聞こえた。

腕だ。

そちらを見ると、人の両腕が地面に落ちていた。誰の腕かと問うまでもないだろう。

ラックとガーゴイルの間に居たのはただ一人、ウィル・ワームズのみである。

彼の両腕が空間の断裂に巻き込まれ分断されたのだ。

「が、ぐうつ!!」

ウィルもまた、自身の体に何が起こったのかを自覚するのに間があったようだ。

無くした腕を拾うかのように、地面に膝を付くウィル。

「わ、私は、何を……」

腕を失い茫然自失となったのか、ウィルは何か信じられない物を見たかのような表情を見せる。

「はあはあ、……勝負あったな。ウィル・ワームズ」

息切れをしながらではあるが、ラックは勝利を確信した。

レブルス騎士団長とは言え両腕を失った状態で闘えるはずがない。ガーゴイルも頭部を切断したためあの光が使えない。ならば、敗因は無くなった。

チャキ……

剣を杖代わりに立ち上がり、構える。

「皆の仇を討たせてもらうつー！」

「ぐつ……！！」

ラックは剣を握り締め、ウィルに近づき止めを刺そうとするが

『ウィル隊長！！』

ウィルの部下、騎士達が割り込んでくる。

「貴様、隊長に何をしたっ！！」

騎士の一人が剣で切り掛かってくる。

その騎士とて先のガーゴイルとの一戦で無傷ではない。寧ろ满身創痕と言っても良い様な状態だ。だと言うのに、騎士はウィルを助けようとラックに切り掛かってきたのだ。

「なっ！？」

ギンッ！！

ラックはその剣を受け流し距離を取る。

形勢は一気に不利になった。騎士達はこの一件の真実を知らない。彼等に見れば自分達の隊長を助けるのは当然の行動であり、場の状況だけをみればラックがウィルの敵であることは明白だ。今のラックの状態で騎士達全員を相手にする事は困難極まりないが、それ以上に

「（だ、駄目だ。関係の無い人を巻き込む訳にはいかない。どうするっ！？）」

今ここで騎士達を傷付けようものならば、目的のために他者を巻

き込んだウィルと同じになってしまつ。それだけは出来ない。そんな事をすれば、ラックは自分自身の精神を保つ事が出来なかっただろう。

苦悶するラック、そんな時

「そこまでっ!!」

ギガが姿を現す。

「おじさん？」

「お父さん？」

その場に居る皆の視線がギガに集まる。

「私は元宮廷呪法師のギガ・カストゥール。双方剣を収めよ。今回の一件、非は誰にもない」

ラックやフェリア、ウィルを除き状況が解っていない騎士達は困惑する。

レブルス国の宮廷呪法師であり、重鎮であつたギガの名は騎士達の誰もが知っていた。

騎士である以上、元とは言え国の功労者に対し敬意を払うのが礼儀だが、この場に突然現れたギガの言葉に疑問を感じずに入られなかった。

「全ては御霊を廻る運命。私達も君達も、そしてウィル・ワームズもその被害者だ」

「おじさん!!」

ラックは声を上げる。

それを認めるといふのかと言つた意味の叫びだった。

「ラック君、どうやらこの村の運命は変わる事が無かつたようだ」

「え？」

「もう時間はない。この村はまもなくそのガーゴイルの自爆装置によって消滅する」

『なっ!!!!』

皆の視線が頭の無いガーゴイルに向く。

騎士の一人がガーゴイルに近づき何かを確認して声を上げる。

どうやらギガが言っている事は本当であるらしい。

「だが、滅びるのはこの村の人々だけで十分だ」

ギガはそう言うのを結び何かの呪文を口に始める。

「騎士達よ。君達はここで見た事を覚えていなさい。そして、これからレブルスで起こる出来事の真実を……運命を見極めるのです！」

次第に、ギガを取り巻くように光る文字が円陣を作り始める。

「おじさんっ！！！」

「お父さんっ！！」

二人とも、ギガが何をしようとしているかが解った。

「ラック君、フェアアの事を頼んだよ」

そう口にするギガは確かに笑っていた。

そして最後に聞こえたのだ「さようなら」と。それが最後

カツ！！

閃光が辺りを包む。

瞬きにも満たない一瞬だった。ラックとフェリアが気付いた時にはそこは村外れではなく、カラト村を一望できる少し離れた小高い丘の上だった。

そこには二人しかおらず、ウィルの姿も騎士達の姿も……ギガの姿も無かった。そして

ドオオオオオー————ンツ！！

耳を破らんばかりの大きな爆発音と、地を揺らす程の衝撃が二人を襲う。

耳を塞ぎ、衝撃に耐えるラックとフェアリア。

そのピークが過ぎた頃、ようやく二人はその光景を目にする事が出来る。

「そん……な」

「村が……」

カラト村の方から光が見えた。

日が落ち暗くなった空が朝になったのかと思えるほどの眩い光。

そして、天を貫くような火柱が村を包みこんでいた。

どれくらいその光景を見ていただろう。

光と火柱が収まる頃には、カラト村があつた場所には大きなクレターが出来上がっており、二人はその事実を理解する。

二人が住んでいたカラト村は、文字通り滅んでしまったのだと：

…。

第八章『待ち人現る』

第八章『待ち人現る』

レブルス城、執務室。

「ランク様」

書類を片手に持ち、兵の一人が執務室の扉を開け入って来る。

「どうした？」

そんな兵にそう問うランク。

体裁は取り繕っているものの、慌てている雰囲気を感じ取れた。

「実は……」

兵は言い辛そうに重く口を開く。

「……何、ウィルが重傷？」

驚きの表情を見せるランク。

その報告はウィル・ワームズ、彼の経歴を知るものであればありえない事だと思えただろう。

「はい、現在医療室にて手術中との事です」

「何があった」

「同行しておりました騎士達の報告書です。騎士達もまだ混乱しているようでやや情報が錯綜しているようですが……」

そう述べ、兵はランクに持ってきた書類を手渡す。

御霊搜索の任務途中に御霊を所持していると思われる少年と戦闘に入り、その戦闘でウィル・ワームズは両腕を失う重傷を負った。

大体そんな感じの内容の書類だった。

「……」

だが、確かに情報が錯綜しているようで細かい内容が書かれておらず、騎士達の主観がやや強い報告内容のように思えた。

「信じられないな。ウィル程の男が御霊を所持しているとは言え子供相手に後れを取るなど」

自身も子供の身ではあるが、ここは公的な場であり今の自分は公人だ。表現上の問題はない。

「容態は？」

「はい、両腕は肩元から切断されており、切断面から血が出ていない事から空間を分断するタイプの呪法によって切断されたのではないかと思います。命に別条はないそうですが、数日の療養は止むを得ないかと」

「そうか……」

そう答え、深く溜息をつくランク。

四肢の欠損、普通に考えても堪えがたい状態だ。

「医師の報告では肉体的な怪我よりも精神面の方に問題があるとの事です」

「精神面、あのウィルがか？」

「はい。運ばれてきた時に彼は意識を失っていたそうですが、断続的に何かにうなされ苦しんでいるそうです」

「……」

ランクは考えていた。

「（おかしい、ウィルはレブルスで、二を争う実力者だが負けを知らない訳ではない。御霊を持った少年に負けたからと言ってここまで精神的に追い詰められるような男ではないはずだ。そうなる……）」

何かがある。他に何かウィルを追い詰めた要因があるはずだ。

「……ウィルの手術はいつ終わる？」

「今夜中には終わるか、明朝には会話が出来る状態になっているとの報告を受けています」

「そうか」

ランクはそう言つと兵を下がらせる。

翌日、ランクは朝一番でウィルの病室を訪ねた。

「ランク様」

ベッドの上でそう声を上げ、身を起こそうとするウィル。

だが、両腕を失った彼にはそれすらもままならず、ベッドの上で身じろぎする程度の動きにしかならなかった。ランクはそんなウィルに「そのままでもいい」と制止する。

「具合はどうだ？」

「はい、それ程悪くはありません。ただ、空間ごと断ち切られた腕は呪法でも再生する事が出来ないと、医者に言われました」

あつたはずの自身の腕を見るウィル。

「そうか……」

ランクはその言葉に何の言葉も返す事が出来なかった。

「……ウィル・ワームズ騎士団長。報告を聞こう」

「はっ!!」

それでも、ランクは国王代理でウィルは騎士団長だ。公的なやり取りを行わなければならない。

ウィル・ワームズは事の経緯を説明する。

御霊搜索の途中に見た青く輝く光。元宮廷呪法師ギガ・カストゥールとの接触。神殿での出来事。御霊が村の少年の体内に宿った事。そして自分の腕がその少年によって切り落とされた事。

「自分はそこで意識を失ってしまい、後は良く覚えておりません。同行した騎士達に話を聞いてください」

「……解った」

ランクはそう言うと言つて席を立つ。

おそらく、このまま自分がここに留まってもウィルのためにならないと思ったからだ。

病室を後にし、ランクは他の騎士達の下へと向う。

「……」

その後ろ姿を見送るウィル。

「（……言えなかった）」

彼が話した事は今回の一件の成り行きでしかない。

どうしてガーゴイルが動き出したのか、どうして自分が少年と闘う事になったのか。ウィルはそれをランクに伝える事が出来なかった。

「（私は……）」

両腕を失った事よりも、仕えるべき主に真実を述べる事が出来ない事実の方が余程辛く、堪らなく悔しかった。

「（だが、これも定め……）」

最早後戻りは出来ない。

両腕を失う事でウィルは知る事が出来たのだ。

己がやり遂げるべき使命、運命と言う奴を。

騎士団宿舎。

その広間にてランクは御霊搜索に同行した騎士達の報告を聞いていた。

その内容は概ねウィルの報告と同じようであった。

「……そうか、ご苦労だったな。皆もしばらくは養生してくれ」

報告を聞き、騎士達にそう述べるランク。ウィル程ではないにしろ、怪我をしている騎士は少なくなかった。ランクはそう言い残し席を立とうとするが

「……ランク様」

御霊搜索隊の副隊長であるデイズが声を上げる。

「お伝えしたい事があります」

皆、ウィルの事を気遣い喋らなかった。

だが、デイズには副隊長として隊長の行動を報告する義務がある。それに彼は他の騎士達が見ていなかった事実を報告しなければならぬ。

ガーゴイルの猛攻より自分達を守ってくれた少年の事を。そして、ガーゴイルの自爆から自分達を救ってくれたのがギガの事を。

「何が真実なのかは私も解りません。ですが自分には隊長が何の理

由も無しに民間人に対し剣を振るうとは思えません」

「ああ、私もウィルがそんな事をする男ではない事ぐらい解っている」

だが、事実は事実だ。

そこに何があつたかを解明する必要がある。

「ランク様、私は……」

「その事は、今後私が許すまで口にするな。無論ウィルにもだ」

「ですが……」

「真相を解明する必要がある。だが今はレブルスにとって大事な時期、事を荒立てれば何が起こるか分からない。だから、黙っていてくれ」

「……了解しました」

騎士達はそのまま小さく頷き敬礼をする。

「ところでその少年についてだが、何か特徴は無いのか？ 名前や容姿が解ればそれだけ調査がし易くなるのだが」

「はい、身長はそれほど高くはありませんでした。ですが特徴的な青い髪と瞳をしており、名前は確か……ギガ殿がラック君と呼んでおりました」

「何っ!？」

デイズの言葉に驚きの表情を見せるランク。

「それは本当か!？」

「は、はい。施設の画像データが残っておりますので後日報告書と共に提出致します」

「そうか……」

ランクのその表情は驚いていると言うよりもどちらかと言えば驚喜の表情に近かった。

「ランク様？」

問い掛けるデイズの言葉はすでにランクの耳に届いておらず

「皆、本当にご苦労だった」

『はっ!!!』

ランクはそう言つと足早に騎士達の部屋を後にした。

足早に、まるで競歩を行うようにその足は速く、リズム良く足が前に出すランク。

「（そうか、やっぱりそうなんだ！！）」

彼の心は躍っていた。

「（始まった。五年間、僕は貴方を待っていたんですよ。ラック兄さん！！）」

その表情は年齢相応の少年のもので、まるでプレゼントを貰える前の子供のようであり、人目がなければスキップでもしてしまいうな勢이었다。

そのまま執務室へ向かうと思われたランクだったが

ピタッ……

急に足を止め、立ち止まる。

「（けど、兄さんがまっすぐレブルスに来る可能性はそれ程高い）」

可能性の話ではあるのだが

「（そうか、ならあちらから来るように仕向ければ……）」

元々計算能力に優れていた彼の脳がその確率を高める手段と方法を考え出させる。

ランクが考えたその案は実に子供じみた案だったのかもしれない。だが、後にそれが良い意味でも悪い意味でも絶大な効果を生む事を、この時の彼は知る由もなかった。

第九章『賞金首』

第九章『賞金首』

現実を認識するのに一時間。

何をすればいいのかを考えるのに一時間。

今夜の野宿場所を決め食事をするのにまた一時間掛かり、ようやくまともに話せそうな雰囲気になる頃には空に大きな満月が浮かんでいた。

「おじさんが用意しておいて助かったな」

「うん……」

焚き火を前に二人は話をしていた。

カラト村滅亡の少し後、ラックとフェリアは近くに大きなリュックがある事に気付いた。

フェリアが使っていたリュックだ。リュックの中には旅に必要な道具と数日分の食料、当面の資金、それと一通の手紙が入っていた。手紙の内容は概ね今回の一件の全容に関する内容であり、字の滲み具合から大分前から用意してあったものである事が解った。

おそらく、事が起こる前は運命の干渉があり渡す事が出来なかったのだろう。

「こうなる事を見越して一緒に転送してくれたんだな」

とりあえず、ラックが知らなかった事実だけを説明しておこう。

ギガはガーゴイルが自爆する事を事前に知っており、その自爆により村が滅亡する事も知っていた。どうやってラックが生き延びる事となるのかは解らないが、本来であればその自爆によって生き残るのはラックだけだったそうだ。

では、何故フェリアが生き延びているのか。

ここで問題なのは結果と順序である。自爆がおき、村が滅亡し、村に居た皆が死ぬといった順序の中で、運命が重視しているのは自

爆により村が滅亡すると言う結果のみ。村人が皆死ぬと言う結果は確かに運命の一部ではあるが、あくまで自爆による副産物でしかない。

それをギガは最後に行使した転送呪法によって回避しようとした。だが、それでも村で死ぬ運命にあるものは運命による干渉によって転送呪法の対象外となるらしく、ラックによって運命が変わったフェリアのみが転送されると言う結果となったのだ。

つまり、ラックによって運命を変えてもらった者のみが転送呪法でガーゴイルの自爆から逃れ、生き延びる事が出来る。

運命にしてみれば、結果的にラックが生き延びれば運命通りと判断されるとの事だった。

加えて、ギガの手紙には新しい字で「おそらくレブルスの騎士達も転送されているはずだ」と書かれていた。ライトニングの影響により騎士達の運命も少なからず変わっており、今回の転送呪法によっておそらくはレブルスに転送されているはずだと言う事も書かれていた。

「奴も生きている……」

カラン……

焚き火に薪を放り込む力が思わず強くなる。

「……」

会話が途切れる。

こんな時、どんな会話をすればいいのか解らない。生まれた時から周りにいた人達がほんの一瞬で……死んでしまった。帰る場所が無くなってしまったのだ。

普通の少年少女とは言いがたいが、成人の儀を前にしているとは言え二人はまだ十五歳の少年少女だ。目の前の事実を辛うじて受け入れる事は出来ても

「これから……どうする？」

その後の答えを二人は決めかねていた。

フェリアの問いにラックは即答出来ない。

「……フェリアはどうしたい？」

拳句、そう問い返してしまう。

「私は……ラックに決めて欲しい」

「俺に？」

フェリアの言葉にラックは意外そうな表情を見せる。

「ラックが帰った後にお父さんが言ってたの。この世界はプログラムの出来ている。つまり、何者かの手によって作られた世界だ。その何者かが神様かどうかは解らないが、この世界は一つの物語の様に成り立っているって。ラックはその物語において主人公の役なんだって」

「主人公、俺が？」

途方も無い話だ。

世界が一つの物語でその主人公が自分だなどと、想像するだけで馬鹿馬鹿しくなってくる。

「ラック君の選択は物語を変えられる。こういった世界の核心に関わる話は本来物語の中盤でされるはずなんだが、私はあえてこの話を物語の始めにする事にした。そうする事でラック君の選択の幅が広がる事を期待している。だから、余計な事は考えず自分の一番したい事をしなさい。……そう、言ってた。お父さんはそれを最後に言うつもりだったみたいだけど、結局私が言う事になっちゃった」

「おじさんらしいな……」

先の事を考えるのは後にしろ、結果は経過に付いてくる。

それが師匠であり、先生であるギガ・カストウールの教えだった。だが、そう言いながらもギガは何時も先の事を考えていた。考えられる事は出来るだけ考えて、その上で結果を求めるのではなく自分の意思を大切にする。それこそがギガの真の教えだとラックは思っている。

「それにしても、俺が主人公ってのは幾らなんでも言い過ぎだ」

ラックが苦笑しながらそう述べていると

「……私はそうは思わない」

フェリアがそれを否定する。

「ラックは運命を変える事が出来る。きっと、ラックが決めた事がこれから先の未来を変える事になるんだと思う」

フェリアは真っ直ぐラックの眼を見つめる。

ラックの事を信じて疑わぬ、そんな一点の曇りも無い瞳だった。

「だから、これからどうするかはラックが決めて。責任を押し付けるとかそんなつもりはないよ。ただ、ラックに決めて欲しいの。その選択に……私はついていくから」

「フェリア……」

フェリアが自分に選択を託したいと言う意思是解った。

それがフェリアの望みというのであれば、それに答えたいとラック自身も思っている。だが

「俺には……そんな選択は出来ない」

「どうして？」

「助けられなかった」

目を閉じればあの光景が襲ってくる。

「目の前で子供達が殺された。俺は皆を助けたかったのに……助けられなかったんだ」

間違いなく、ラックは皆を助けたいと思っていた。

それなのに助けられなかった。

「そんな俺が、運命を変えるとか自分で未来を選ぶとか、そんな事を言う資格なんて……」

もしかしたら助けられたんじゃないのか、そんな後悔の念がラックの中を駆け巡っていた。

「ラック……」

フェリアはそんなラックの名を呟くとそっと立ち上がり、彼の近くに寄る。

「フェリア？」

そして、ラックの前に立ったフェリアは何の予備動作もなくバキッ！！

「はぶっ!!」

右の拳をラックの左頬に突き立てる。

ドサア……

大きく後ろにバランスを崩し、その場に倒れるラック。

「……痛う、何を……?」

ラックが「何をするんだ?」と問おうと体を起き上がらせるとバキィッ!!

今度はフェリアの左拳がラックの右頬に突き立つ。

「がっ!!」

ドサア

再び、地面に倒れるラック。

「痛う、くそっ!!」

ザッ!!

二度も殴られたせいか、今度はちゃんと立ち上がりフェリアの前に立つラック。

「いきなり何するんだよ!」

訳も解らず殴られたせいか、ラックはやや怒鳴り声に近い声を上げる。

「何で……」

そんなラックに対し、顔を俯かせて喋るフェリア。

「何で私が殴れてるの?」

「え?」

微妙におかしな文法だった。

それを問う前にラックは気付く。

「何時ものラックだったら笑いながら避けれたはずだよ!!」
涙だ。

大粒の涙がフェリアの頬を伝って地面に落ちていた。顔を上げたフェリアは……泣いていた。

「フェリア……」

「何が選ぶ資格はないよ。そんなのラックが勝手に思ってるだけじ

やない。助けられなかった？　じゃあ私はどうなるの？　私はこうやってここに生きてラックと喋って生きているって言うのに、なのに……　なんでラックは」

気付かなかった。

そうだ。色々あつて混乱しているのは自分だけではない。フェリアだってそうではないか。

そのフェリアが泣いている。涙が地に落ち、肩が小さく震えている。

「（それなのに、俺は一体何をやっている……）」
変えられなかった事もあれば変えられた事だってある。

自分一人が何もかも背負い込んだ気になって、一番大事な事を忘れていた。

「今のラックはすつごく格好悪い。今のラックなんて……　大っ嫌い！　！」

「っ！？」
ズキンッ……

フェリアの一言が言葉の矢となってラックの心を貫く。

「（大嫌い……　か）」
フェリアの口からは一番聞きたくない言葉だ。

それがフェリアの本心でなかったとしても聞きたくない言葉だ。だが、それは今のラックを最も言い表した言葉でもあった。

「ごめん、フェリア」

「……ラック？」

フェリアの肩に手を回し、慰めるように抱きしめる。

「俺が悪かったよ。落ち込んでる俺は……　格好悪いよな」
「ラック……」

その言葉を聞き、フェリアの表情が明るくなる。

フェリアはラックの事を良く解っている。今のラックがどんな思いで自分を抱きしめてくれているのかがはっきりと解る。

「うん、私は……　何時ものんびりしてどこか自由で、やりたい

事が見つかったらどんな事でも一生懸命やるラックが……好き」

「フェリ、ア……」

胸が高鳴る。

そのまま自分の思いを口に出来たらどれだけ良かっただろう。

「ラック、私は……」

「……ありがとう、フェリア」

だが、ラックはフェリアの言葉を遮るように言葉を発しフェリアから体を離す。

「でも、その言葉はもう少し待ってくれ」

「え……？」

「俺はまだ、俺が納得出来る俺になっていない。だから、もう少し待ってくれ。必ず、俺はフェリアの好きな俺になってみせるから」

「……うん」

ラックの言いたい事が解ったのか、今はその言葉だけで満足だと言わんばかりにフェリアは涙を拭って静かに頷きながらそう答える。

「それで、これからどうするの？」

ラックの意思を確認するように、再び初めの問いを問い掛ける。

「レブルスに行く」

「レブルスって、首都レブルス？」

「ああ」

首都レブルス。

レブルス国のほぼ中心に位置するレブルス国の首都。レブルス国は首都レブルスを囲むように北、南東、南西に三つの主要都市があり、それぞれが商業、産業、工業を司っている。それら全てを統括するのが首都レブルスであり、レブルスの中心にして中核の都市だ。当然、レブルス城も首都レブルスにあり、レブルス騎士団の本部も首都レブルスにある。

「俺は運命であつたとしてもウィル・ワームズが許せない」

頭では理解出来ていても感情はそうはいかない。

「レブルスに乗り込んで……殺すの？」

「いや、とりあえず……ぶん殴る!!」

ラックは腕を前に突き出し拳を握る。

「殺すとかそんなんじゃないで、純粹にあいつを一発ぶん殴らないと気が済まない。そして、その上でカライト村の償いをさせる。後の事を考えるのはそれからだ」

頭では理解出来ているのだ。ならば、後必要なのははじめだけだ。やるべき事、なすべき事を全て終えてから、先の事を考えようとラックは言う。

「ふ、ふふふ……」

そんなラックを見てフェリアは笑う。

「うん、何時ものラックだ。今のラック、格好良いよ」

「夜が明けたら出発しよう。徒歩だとレブルスまで三日か四日は掛かるからな」

「うん」

ラックの言葉にフェリアは頷き、寢床の用意をしようとするが

「フェリア……」

「何？」

フェリアを呼び止めるラック。

「……俺、もつと強くなるよ」

「え？」

「俺は、フェリアが泣くところを見るのが嫌なんだ。昨日も今日も、俺はフェリアを何回も泣かせてしまった。俺は誰よりも強くなつて、どんな事があつても負けないようになって、フェリアを守れるようになる。だから……誓わせてくれ」

意を決するように、ラックは誓う。

「俺はフェリアを守る。いいや、俺がフェリアを守る」

「ラック……」

ラックのその言葉に、フェリアは目を閉じ少し考えた後

「……うん、誓わせてあげる。ラック、どんな事があつても私を守ってね」

「ああ。任せとけ」

そう、答えを返すのであった。

互いの思いを確認しあった今の二人に迷いは無い。
こうして、長い長い運命の一日は終わりを告げた。

翌日、二人は首都レブルスの南西に位置するタンジエントの街の近くに居た。

二人と表現したが、今現在いるのはラック一人のみであり、彼は街のそばにある森に身を潜めていた。

「（……フェリアの奴、遅いな）」

そんな森の木の陰から街を見つめ、そう思うラック。

タンジエントは商業都市であり、他国からの品を始め様々な物や情報が集まる都市だった。当然レブルス国の都市であるのだから首都レブルスの情報が最も手に入り易い都市でもある。

「（ウィル・ワームズが生きているならば、再び御霊を手に入れようと考えるはずだ）」

それが彼に課せられた運命だとすればきっとそうなる。

「（だとすると、レブルス国の騎士団長と言う立場を使う可能性が考えられる）」

平たく言えば指名手配されている可能性があると言う事だ。

街に入ると同時に追い掛け回されては食糧や物資の調達すらままならない。そのため、まずはフェリアが単独で街の様子を見に行く算段となったのだが

「（まさかとは思うけどフェリアも……）」
フェリアの帰りが遅すぎるのだ。

かれこれ二時間は過ぎようとしている。確認したらずくに帰って来ると言っていたのに二時間は長すぎる。昨日の今日でフェリアの姿が見えないと言う状況はラックにとって苦痛であった。待っている間に浮かぶことは嫌な想像ばかりである。

「（危険だが、行くしかない）」

ラックが意を決し、フェリアを探しに街に向かおうとすると

「あれ、どこか行くの？」

「フェリア」

フェリアが街の方から歩いてくるのが見えた。

「いや、フェリアの帰りが遅いからちょっとな……」

「ああ、心配してくれたんだ」

「……まあな」

とりあえずフェリアが無事である事が解ってほっとするラック。
安心したら他の所に気が付いた。

「フェリア、その袋は？」

「え、ああ、これ？」

フェリアはリュックと別の大きな袋を背負って帰ってきていた。

「えへへー、ちょっとね」

問いに答えず、微笑み返すフェリア。

「……」

フェリアのそんな反応に、ラックは何故かは解らないが嫌な予感がした。

「あ、そうそう。はいこれ」

フェリアは袋の中から一枚の紙を取り出しラックに手渡す。

「……やっぱりか」

予想的中、手渡された紙は賞金首の知らせの紙だった。

そこには名前、年齢、特徴、おまけに似顔絵までが載せられていた。

「その似顔絵良く出来てるよね。騎士の誰かに絵心のある人でもいたのかな？」

似顔絵には寸分違わずラックの顔が描かれていた。

見知らぬ者でも、これを見れば間違いなくラックの事に気付くだろう。

「いや、ウィルや騎士達の反応を見る限りおそらく遺跡で写真か映

像を撮られていたんだろう」

「写真？ 映像？」

聞きなれぬ言葉にそう声を上げるフェリア。

「えーっと、見たままの風景をそのまま残す事が出来る機械があるんだ。多分そのデータを転用したんだろう」

「ふーん……」

どう言う理屈かは解らないが、そういう物もあるのかといった反応をするフェリア。

「……ん？」

「どうかした？」

「これ、何か変じゃないか？」

紙の最後の方には注意書きが記されており、そこには『この者を捕らえ首都レブルスに連れて来た者に賞金を渡す。しかし、必ず生かして捕らえる事、傷付ける事も出来うる限り不可とする。尚この賞金は首都レブルスの外で捕らえた場合にのみ有効とする』と記されていた。

「罪状が書いてない。それに生かして捕らえるの部分は解るが、傷付けるなつてのはおかしい」

ウィルの話が真実であるならば、御霊はラックが死ぬと同時にその姿を現すらしいので、他所で殺されては困るのは解る。だが、それならば生かして捕えろの一言に死ななければ何をしてもよいぐらの事が書かれていてもいいはずだ。

それなのに傷付けるなど言うのは逆におかしな話に思えた。

「村ごと俺を殺そうとしたウィル・ワームズにしては生ぬるいやり方だ」

何か罫があるのか、それともレブルス騎士団の団長として体面を気にしているのか。

ラックがそう思案していると

「ラック、それあの人が発行した訳じゃないよ」

「え？」

「ほら、下の方に……」

フェリアの指差す方向を見る。

すると、紙の右下の方に『発行者、レブルス国国王代理ランク・クラウス』と記されていた。

「なっ!？」

思わず驚きの声を上げるラック。

「ねっ」

「ねっ、じゃない。くそ、何でランクの奴が俺に賞金を懸けてるんだ!？」

訳が解らずそう述べるラックだったが

「んー? ラック、このランクって人の事知ってるの?」

フェリアがそう疑問の声を上げる。

「国王代理って、要するに今レブルスで一番偉い人だよね?」

フェリアの問いに当初は沈黙していたものの、ラックは重い口を開く。

「……はあ、フェリア、六年前に俺が父さんと一年半程旅に出た事……覚えてるか?」

「忘れる訳ないでしょ」

少し怒ったような表情でそう答えを返すフェリア。

「俺も詳しくは聞かされてないけど、父さんはレブルスで結構有名な人だったらしくてさ。旅の半分ぐらいはレブルスに居たんだ。その時にちよつと色々あって知り合いになっただ」

「ふうん、ラックってすごい人と知り合いなんだ」

なるほどと、一先ず納得するフェリア。

「……不本意ながらな」

ラックは歯切れの悪いそんな感想を述べる。

今ラックが言った事が全てだとはフェリアも思っていない。ただ、ラックが何やら喋りたがっていないように見えたのでそこで追求する事を止める。

「まあ、とにかくだ。こいつが俺に賞金を懸けるはずは……いや、

待てよ」

もう一度、賞金首の紙を良く見る。

「この条件、逆に考えれば安全にレブルスに行けるように仕向けられているようにも思える」

先にも述べた通り、ウィル・ワームズはカラト村ごとラックを殺そうとした男だ。

もし、先んじてウィルがラックに賞金を懸けていたならば、こんなもので済まなかっただろう。

「もしかしたらランクの奴、先手を打って俺を守ってくれたのか？」
生かして捕らえると言う条件ならば、ラックが賞金稼ぎに大人しく投降すればよいだけの話となる。その際に賞金稼ぎと交渉する事だって可能だろう。

「……いや、あいつに限ってそれだけって事はないな。何か他に考えが……ああ、なるほど」

何かを思い出したようにラックは頭を押さえ、苦悶の表情を浮かべる。

「あいつ、俺をレブルスに來させようとしているのか」

そうだ。賞金が懸けられたと言う事は、ラックは必然的にレブルスに向かわなくてはならない。

国外逃亡と言う手もあるが、先にも述べた通りラックはランクの事を知っている。

「ランクが俺に賞金を懸けている以上、ランクは俺が自分に会いに来ると思っているんだろう。どの道、レブルスに行かなくちゃならないって事か」

選択肢は違えども、結局レブルスに行かなくてはならなくなってしまうた。

「それで、どうするの？」

ラックに選択を迫るフェリア。

「そうだな……やっぱり当初の予定通り俺達は俺達でレブルスに向かう」

自分一人であるならば捕まっで行った方が早く確実な方法だと思われるが、フェリアがいるとなると話は別だ。捕まれば当然拘束されるだろうし、そうなる何かつた場合にフェリアを守れなくなる。それだけは避けたい。

それに、自分達に非は無いと言うのに黙って捕まると言うのがラックの性分に合わなかった。

「了解」

異議なしとばかりにそう了承の声を上げるフェリア。

「あー、でもよかった。せっかく買ってきた道具が無駄になるかと思っちゃった」

同時にそんな声を上げる。

「道具？」

「うん。じゃーん、変装セット」

フェリアはそう言うと言った袋の中身をラックに見せる。

「ふむ、アイデアは良い」

賞金首として顔が知られている以上、素顔のまま歩き回るのは得策ではない。ならば変装をすると言うのは良いアイデアだ。

「まあ、人間なんてちよいと髪の色や髪の色を変えただけで意外と誰か解らなくなったりするもんだし……ん？」

ラックはどのような変装しようかと袋の中身を確認するが、その中身はラックが予想していたものとはちよつと違っていた。

「あー、フェリアさん？」

「はいはい？」

「何故スカートが入っているんでしょうか？ それにこのやたら髪が長いカツラは一体？ あら、おまけに化粧品までもが」

袋の中には女物の服しか入っておらず、カツラやその他諸々の小道具も女性の物しか用意されていなかった。

「まあ、やるからには徹底的にやらなきゃね」

「……さーて」

「あれあれ、何で私に背を向けるのかなラックさん？」

「それは……逃げるために決まっているだろっ!!」
ダッ

脱兎の如く、ラックは逃げ出そうと地面を踏み込むが
スッ!!

文字通り一足早く、手を十字に交差させるフェアリア。そして

「呪縛、スペルバインドッ!!」

力ある言葉が森に響き、その交差を解くと同時にフェアリアの指から無数の光系が現れる。

「ぐっ!!」

光系はその一本一本が意思を持っているかのようにラックの体に絡みつき、その動きを封じる。

「やだなー、何で逃げるの?」

「フェアリア、変装と女装は違う。そこまでする必要は無いと俺は思うんだ」

光系によって雁字搦めになったまま、ラックはそう抗議の声を上げる。

「まあまあ、似たようなもんでしょ」

「違う。決定的に絶対的に相対的に違う」

「いいじゃんいいじゃん、そっちの方が面白そうでしょ」

「それが本音かああ!!」

ラックは一生懸命体を動かし逃げようとするが、呪縛呪法の束縛力は強く思うように動けない。

余談ではあるが、スペルバインドには周囲に障害物があればあるほど光系が増え束縛力が増すという特徴がある。そして今居る場所は森の中、周囲には木々や岩々が山のようにある。

流石のラックもこの状況は如何ともし難い。

「って言うかフェアリア、お前化粧何て出来るのか?」

「うーん、やったことないなあ。お試し期間って事で実験台になってよ」

「そう言うのは自分の体を使えよ」

「うーん、まずは髪かな」

「聞けよ人の話!!」

フェリアは袋の中からカツラを取り出すと、一つ一つラックの頭に被せては色を確かめる。

「やっぱり青い髪って目立つから色は少し地味にしないと駄目だね。髪型も変えた方がいいかな。あー、でも長すぎると邪魔か。でもご安心を、少し長めの買ってきたから似合うようにカット出来ます」

「……解った、解ったからせめて良心の範囲内で頼む」

最早、ラックにはそう懇願する以外の手段は残されていなかった。そんな訳で約二時間、ラックはフェリアの玩具と化した。

二時間後、街道を並んで歩く二人の少女の姿があった。

一人は言わずと知れたフェリア・カストゥール。

そして、もう一人は背に掛かるぐらいの綺麗な黒髪の少女だった。やや大きめのフード付きマントを着込み、長めの髪が顔を少し隠しているため表情や青い瞳はかすかに見える程度であったが、美少女と称して差し支えないレベルの少女だった。

具体的に言くと、街道で旅人とすれ違うとほぼ全員が少女の方に振り返り、その顔を見ようとする程である。

「ぶ、ふふふ……」

旅人達が振り向く度に、横を歩くフェリアが笑いを堪える。

「笑うな……」

黒髪の少女はそんなフェリアの言動が余程気に入らないのか、不機嫌そうにややハスキーな声でそう述べる。

「だって、皆ラックの事を見てるんだもん。おかしくておかしくて駄目だ堪えきれないとばかりに声を上げて笑うフェリア。」

「俺だって好き好んでこんな格好している訳じゃない……」

そんなフェリアに対し抗議の声を上げる黒髪の少女、ラック。

「うつん、とっても可愛いよ。ラックちゃん」

「勘弁してくれ……」

フェリアのその言葉にラックは涙を流していた。

結局あの後「スカートだけは勘弁してください」と泣いて頼み、服だけは以前と同じ服を着る事を許される事となった。

化粧の方に至ってはフェリアにその心得がなく、殆ど無駄骨となったのだが、カツラ等の最低限の変装項目はフェリアのコーディネートとなったのだった。

そんな訳で今現在ラックに施されている変装はカツラと多少の髪型変更、それに大きな目のマントを着込むだけの変装となったはずなのだが

「くそ、何で誰も俺が男だって気付かないんだよ」

道行く人々は皆ラックが女であると思っっているようだった。

「んー、ラックってそんなに身長も高くないし、童顔で声も体付きも中性っぽいからじゃないかな？ それこそ見た目一つで女の子に見えても仕方ないと思うよ」

「頼む、あまり俺をいじめないでくれ」

流れ出る涙が止まりそうにないとラックは言う。

「まあまあ、正体がばれないのはいいことじゃない。早くレブルスに行きましょう」

「はあ、ここまでくればもう自棄だよ」

最早諦めると言うより開き直るしかないと自分で自分に言い聞かせるラックであった。

それから二日後、ラックは絶望の淵に居た。

「何故だ。何故、誰も気付かないんだ……」

街道の茶屋にて休憩しながらラックはそう唸っていた。

あれから二日、街道ですれ違った人の数はすでに三桁に達している。だと言っのに誰もラックが男である事に気付かず、果てには例

の賞金首の紙を持った賞金稼ぎであろう男にまで声を掛けられたのだが、その男も最後までラックがその賞金首である事には気付かなかった。

「解らん。世界がおかしくなっているとしか思えん」

そうやって頭を抱えるラックに対し

「誰もラックが男だって気付いてないだけでしょ」

残酷な一言を放つフェアア。

「……いや、例えそうだとしてもだフェアア」

ズンツ……

ラックは背負っていた剣を手に持つ。

「こんな馬鹿でかい剣を持ち歩く女がどこの世界にいるよ」

自身の身長以上の剣を持ち歩く女性。

探せば世界の何処かに居るかもしれないが、どう見てもこれは不似合いなはずだ。

「そうは言っても実際今までは覚えてない訳だし」

「……」

見つかりたい訳ではないが、見つけて欲しい気持ちであった。

「ま、この調子ならレブルスまで問題なく行けそうね。後一日ぐらいなんでしょ？」

「ああ、このペースで行けば明日の昼には着くだろう」

「よし、それじゃ出発しますか」

「はあ……」

溜息を付きながら茶屋の主人に飲食代を支払うラック。

当然、その店の主人もラックの事を最後まで女の子であると思っているようだった。

茶屋を出て二時間後。

「それにしても徒歩だと結構掛かるのね」

すでに約三日を歩き通しており、初めは村の外の景色を楽しんで

いたフェリアも道中の退屈を隠せなくなってきたようだった。

「馬車なりを雇えば早かったんだがな」

馬の脚ならば急げば一日で着く事も可能だっただろうが、馬車を雇うのにもそれなりのルールがある。そのルールの一つに身分証明があり、今の二人にはそれが出来なかった。

「カラト村が無くなったって情報が出回るの早過ぎない？」

カラト村滅亡の翌日、タンジエントの街ではすでにその情報が広まっていた。

田舎の村とは言え村は村だ。タンジエントの街とは距離的にも近く話題となるのは頷けるのだが、問題はその情報の広まる速度だった。

時間軸から言えば僅かに一晚、その間にタンジエントの街に情報が伝わった事になる。

「ランクのせいだろうな。レブルスには遠くの土地と情報をやり取り出来る機械がある。おそらく騎士達から聞いた話をランクが賞金首の手配をすると同時に伝えたんだろう」

「そんな機械もあるんだ。機械って本当に便利なんだね」

先日からやたらと聞く機械と言う単語は、今やフェリアにとって便利な道具の総称になっているようだ。

「通常はそこまで機械が使用される事はないよ。その辺りはレブルスが特殊なんだ。レブルスは機械都市とも呼ばれ街全体が巨大な機械の上に出来ている。人間やつぱり慣れ親しみてものがあるからな、俺が知る限り世界で一番機械に詳しい国だ」

「ふーん」

そう説明するラックは何やら楽しそうにも見えだが、実物を目にしていない以上、フェリアにはそんな相槌の答えを返すしかなかった。

「ところでこの先にあるって言うキャンプ場はまだ遠いの？」

道中は所々に存在していた旅の宿を利用してきたのだが、ここから先はレブルスに着くまで宿が存在しなかった。

先程の茶屋からレブルスまでは急げば夜には付ける距離のため、多くの旅人は足を速めるのだが、二人はあえてキャンプ場で一晩休み明日の昼間に着く算段を取った。

レブルスに着いたら何が起こるか解らない。

仮にこれが運命の流れの一つだとすれば、レブルスの街に入った直後に何かが起こる可能性が、イベントが発生する可能性がある。

ならば万全の態勢で挑んだ方が肉体的にも精神的にも良いだろうと言う事で、二人は途中で一泊する事にしたのだった。

「後一時間って所かな。確かでかい湖を挟んで東西に二箇所キャンプ場があつたはずだ」

「はずって、大分曖昧な情報ね」

「仕方ないだろ。何と言つてももう六年も前の話なんだ」

今から向かう場所はかつてテラと旅をした際に立ち寄った場所だとラックは説明する。

「急いでも仕方がないし近い方。湖の西側のキャンプ場で今日は休もう」

「了解」

異議なしとばかりにフェリアはそう了承の声を上げる。

一時間後、二人はキャンプ場に辿り着く。

「ふむ、先客は無しか」

キャンプ場を見回すが自分達以外に人の姿は見当たらなかった。

「まあ、レブルスが近いってのにこんな所でキャンプする人も珍しいんだよ」

「もう夕方だし、今日は俺達の貸し切りかな？」

概ね予想通りと言った所だったが、人が居ない事はラックにとって有難かった。

「ならこの変装ももう要らないな」

ズル……

カッラを取りマントを脱ぐラック。

「あれ、もう止めちゃうんだ」

「ここまで来たらばれてもばれなくても同じだ。っていつかそろそろ俺の男としての尊厳が損なわれるような気がしてならん」

「残念。良く似合ってたのに」

「勘弁してくれ……」

今までは仕方なくその格好をしてきたが、どうやら相当精神的ストレスを感じていたようだ。

「とりあえず日が落ちる前に水だけは確保しておこう。フェリアは飯の準備しといてくれ」

「了解」

野宿とキャンプの最大の差は安全性である。

キャンプ場には水汲み場と最低限の道具が揃えられており、普通に野宿をするよりは格段に快適な場が整っているが、その最大のメリットは何と言っても広域の呪法によって結界が張られ、場が守られていると言う事にある。

夜の街道には野生の獣は勿論、場所によっては魔獣が出没する可能性もある。

それらの不確定要素から旅人の身を守るために国が用意したのが、この広域呪法によって結界の張られているキャンプ場と言う訳だ。

「（しかし、何とも平和だな）」

水汲み場で水を汲みながらラックは考える。

「（この三日間、ウィルの追撃はおるか争い事の一つすらも起きてはいない。賞金稼ぎに追い掛けられる事がないだけでも正直有難い話だ）」

その件に関してはフェリアに御の字だった。

色々不平不満は述べてきたが、おそらくラック一人であれば変装を行う事なく様々な障害が立ち塞がっていたであろう。

「（……もしかしたら、本来であればそうだったのかもしれない）」
もしもフェリアが居なかったら。もし、あの時フェリアが死んで

いたならばと想像すると、二重の意味で背筋が震えた。

「（だが、そう考えるなら運命と言うのは一つ変えるだけで様々な出来事が連鎖して変わっていくのではないだろうか）」

例えば今日、このキャンプ場で泊まらずにレブルスを目指していたら何があっただろう。

「（もしもとか、だったらとか、そんな事を考えても仕方がない……けど）」

可能性は考えておく必要がある。それがギガ・カストウルの教えだ。

しかし、だからと言って一人で考えてもそうそう考えがまとまるはずもなく、ラックは水を汲んだバケツを両手に持ちフェリアの元へ戻るのであった。

「ただいまー」

「おかえりー」

キャンプ場に戻るとフェリアがすでに食事の用意を整えていた。

「それじゃ、ちゃちゃっと仕上げて食事としますか」

「ああ」

汲んで来た水でお湯を沸かし、スープや飲み物を用意して食事を始める二人。

旅をする上で食事は欠かす事の出来ない重要な要素の一つだ。旅をする上での健康面を維持するだけでなく、精神面にも大きな影響を及ぼす。旅の疲れを癒す一時、それが食事であると言っても過言ではない。

そう言う意味では二人は実に恵まれていた。ラックは子供の頃に旅をした経験があるため旅をする上でどのような食事が必要かを知っており自身も料理が出来る。フェリアに関しても父子家庭であるためか家事全般をこなせることが出来た。

お互い料理が出来るため旅の途中の食事は概ね良好であったのだ。そんな訳で食事を進め、食後の一服とばかりに二人が紅茶を飲んでいると

「ねえ、ラック。ウィル・ワームズをぶん殴るって言ってたけど、具体的な方法は考えてるの？」

フェリアがそう質問を投げ掛けてくる。

「あの人って騎士団長なんですよ。行つてはいそうですかって殴れるとは思えないんだけど」

「ご尤もなご意見だ。フェリアの懸念は当然である。」

騎士団長と言えばレブルス国において幹部クラスの人間に相当する。その人間を殴るなどと言う行為は通常では実現不可能だ。

「そうだな。いきなりは無理だろうけど方法は考えてる」

「どんな？」

「まずはランクに会いに行く。そもそもあの賞金首の紙はそれが目的みたいだしな」

ランク・クラウス。

レブルス国の国王代理であり、現在ラックに指名手配を出している張本人。

「……んー、その辺り、いい加減話してくれない？」

ラックがランクと知り合いだと言う話は先日聞いたが、詳しい話はまだ聞いていない。

あの時はあえて追及しなかったがそろそろ聞かせてくれても良いんじゃないか、と言うのがフェリアの意見だった。

「レブルスに居た間、俺と父さんはとある家に居候させてもらってたんだ。そこで俺は年の近い二人の男の子と知り合いになった。向こうはどう思っているかは知らないが、まあ、友達になったってやつだ。その内の一人がランク・クラウス」

「……え、ランクって人、私達と同年なの？」

「どうやらフェリアは先にそちらの方に関心が行ったようだ。」

「いや。年下だ。今年で確か十一歳だったかな」

「ふえー、じゃあ五歳下なのか。そんな年で良く国王代理なんて出来るね」

「まあ、色々と優秀な奴だからな。それで、どういう訳かランクは

俺の事が……その、随分気に入ったようだね」

露骨に言葉を濁すラック。

「とにかくラックは絶対に味方だって言い切れるんだ。あいつの所まで何とかして辿り着けば何かしらの手が打てるだろう」

「絶対に味方……か、随分と固い友情なのね」

「友情……とはまた違うかな」

「……もしかしてラックはランクって人が嫌いなの？」

「いや、嫌いじゃない。嫌いじゃないんだが、何と言うかその……苦手なんだよ」

「……ふーん」

ラックの言葉を聞き、少し考え込むフェアリア。

「まあ、まだ何か隠しているみたいだけどとりあえず要点は解ったわ。許してあげましょう」

「悪いな」

「ラックって言いたく無い事があると途端に言葉を濁す癖あるよね。言いたくないなら始めから言わなきゃいいのに」

「こればかりは性分だ。どうも嘘をつくのが嫌いなんだよ」

その辺りはフェアリアも知っている。

昔から彼は冗談は良く言うが、理由も無く嘘を付くと言う事をしない男だった。

「いいわよ。レブルスに着けば色々はつきり解りそうだし」

「ああ、その時にはちゃんと……」

説明すると答えようとした時

バサバサバサ……

突如、森の奥から鳥達が羽ばたく音が聞こえた。

『っ！？』

ザッ……

瞬時に立ち上がるラックとフェアリア。

この地方に夜行性の鳥は殆ど居ない。居るのは日中に活動する昼行性の鳥ばかりだ。その鳥達が夜に飛ぶと言う異常な行動、それは

森の奥で何かが起こった事を意味している。

チャキ……

立て掛けていた剣に手を伸ばし、剣を構えて何時でも反応出来るように体勢を整えるラック。

「（何だ……）」

ゾクッ……

背筋に冷たい何かが通り抜ける。

「（殺気、……いや、何かが違う）」

先日、ウィルと対峙した時に感じたあの感覚とはまた違った感覚を感じた。

殺意は感じている。だが、肌がざわざわして落ち着かない。

「ラック……」

「フェリア、気を付けろ……何かが来る」

フェリアもそれを感じているのか、見れば額に汗を流していた。

鳥が羽ばたいて逃げた方向から形容しがたい何かが来ようとしている。

バキバキバキ……

木々の折れる音が聞こえる。どうやら道などお構いなしに進ん出て来ているようだ。

バキ……

音が一瞬だけ止まった次の瞬間

ゴウッ！！

木々の間から黒い塊が飛んできた。

鉄球だ。

人の頭より大きな鉄の塊が、こちら目掛けて高速で飛んできている。

「はぁあっ！！」

ギンッ！！

堅い物同士がぶつかり合う音が周囲に響く。

反応出来る状態を取っていたのが幸いし、ラックは一步踏み出し

その鉄球を剣でなぎ払い弾道を逸らす。だが

「ぐっ!!」

腕が痺れる。

十分に体重と速度を乗せた振りであつたにも関わらず、若干こちらが打ち負けてしまったのだ。

ズシャッ!!

鉄球は重い音を立てて地面にめり込む。

ヒュン……

鉄球には鎖がついており、何者かがその鎖を手繰り寄せたのか鉄球は再び森の中へ姿を消す。

「（凄まじい威力だ。今のは一体何だ!?）」

ラックが痺れる腕を必死に言い聞かせ、再び剣を構えるとバキィ!!

一番手前の木が折れ、それは姿を現した。

「っ!?!」

それはまるで、人の形をした巨大な筋肉の塊のようだった。

身長大凡二メートル。頭髮は天を突くようなモヒカンをしており、その眼は血に飢える獣を思わせる真紅の瞳。何より特徴的だったのは不自然なまでに重力に反して反り返ったそのヒゲ、俗にカイゼルヒゲとも呼ばれる高貴の証であるそのヒゲはまるで異形の獣の牙であるかのようにも見えた。

「（……ヤバイ!!）」

それと眼が合った瞬間、全身が凍りつく。

「（ヤバイ、ヤバイヤバイヤバイヤバイ、……ヤバイ!!）」

あれは危険だ。あれと関わってはいけない。本能的な何かがそう警告を発し、身体が意思に反して怯えているのが解る。

「あ……」

後ろからフェリアが服を掴んでくる。

フェリアも感じているのだ、この恐怖を。

逃げる。ラックのありとあらゆる思考回路が満場一致でその答え

を出す。

「……フェリア、逃げるぞ」

ラックは小声でフェリアに話し掛ける。

「ど、どうやって……？」

返すフェリアの言葉が震えている。今にも泣き出しそうな声だった。

「ここから東に十キロ行った所に大きな湖がある。座標は適当でいい。すぐに転送の呪法が発動出来る状態にしておいてくれ」

返事は無いがフェリアは小さく頷き返し、呪法の準備をし始める。

「（問題は……）」

問題はその間、あの化け物が大人しくしてしてくれるかどうかだった。

「（無理、だろうな……）」

奴の目が語っている。

先程から感じていた感覚の正体が解った。これは殺気ではなく……恐怖だ。

ラックは父と旅をしていた時に肉食動物に囲まれた時の事を思い出す。肉食動物たちの自分を狙うあの瞳、今目の前に居る化け物の瞳はそれと酷似していた。

奴は自分達を殺そうとしているのではなく……狩ろうとしているのだ。

獲物を黙って逃す狩人は居ない。

「（ならば、闘うしかないっ！）」

自分一人であればその恐怖に心が折れていたかもしれない。

だが、自分の後ろにはフェリアが居る。

フェリアが居る以上、何があっても負ける訳にはいかないのだ。

ズッ……

奴の手が少し動いたと思った次の瞬間

ヒュンッ！！

鉄球が凄まじい速度でラックの顔面に飛んでくる。先程とは違い

明確に的を絞った攻撃だった。

「だぁあっ!!」

なぎ払うように剣を振るうラック。

ガキイインッ!!

剣と鉄球が火花を散らす。先程と同じように鉄球の弾道を逸らそうとしたのだが

グゲッ……

「(何っ!!)」

押される。

先程は弾く事が出来た鉄球が今度は弾けずに押し戻されようとしてしまう。

「(くっ!!)」

ギイン!!

間一髪、自身の体を捻り自分を鉄球の弾道から外し鉄球を回避するラック。

そうしなければ確実に押し負け鉄球を食らっていた。

「(パワーが違う。力比べじゃ話にならない。とにかくこの間合いはまずい。どうにかしてフェリアから遠ざけないと!!)」

こちらの目的はフェリアが転送呪法を使うまで時間を稼ぐ事だ。

ダッ!!

力は負けていても速度は負けてはいない。

ラックは地面を大きく踏み込み、奴が鉄球を引き戻す前に間合いを詰める。

「はぁっ!!」

そのまま剣を水平に構え、突きの体勢で突っ込む。

回避は不可能、体重の乗った剣が奴の胸に刺さった……と思えたがズッ……

「(えっ!?)」

確かに刺さった。だがそれは切っ先の僅かな部分だけで、剣はそれ以上先には進まなかった。

「（そんなんっ！？）」

奴の鎖を持つていない方の手が動く、ラックはそれを受け止めようと剣の腹を盾にするが

ガコオオオンッ！！

「がっ！！」

衝撃が響く。

そこで爆発が起きたかのように、大きな衝撃が剣を伝ってラックを襲う。

ズザア……

そのまま、ラックの体は数メートルの距離を吹き飛ばされる。

「（う、嘘だろ……）」

ガーゴイルとの闘いであつてもラックはここまで苦戦はしなかった。

「（ほ、本当に人間なのかよあれは……）」

目の前の人間の形をしたその存在はガーゴイルの全てを凌駕している。いや、常識を逸脱したその戦闘能力は人のそれを遥かに凌駕しているようにも思えた。

ラックがそんな感想を抱いている間に

ヒュンッ！！

鉄球が宙を舞い飛んでくる。

「くそぉ！！」

ラックは地面を大きく蹴り、木の枝へと飛び上がる。

「（駄目、生半可な事じゃ奴からは逃げられない……）」

幸い、先程吹き飛ばされた事によりフェアリアからある程度の距離を離れる事が出来た。

「（やるしかない！！）」

ヒュ、ボンッ！！

繰り出される鉄球がラックの足元の枝を粉碎する。

その前にラックは地面に降り立ち、剣を構えて神経を集中させる。
「（強くなるって決めたんだ。だから、こんな所で負けられないっ

「！！」

地面や岩や木の線が、うつすらと見えてくる。

「（まずは……）」

ヒュンツ！！

鉄球はラック目掛けて一直線に飛んでくる。

「（武器を封じるっ！！）」

如何に高速に動こうとも、飛んでくる鉄球の軌道自体は単純である。そうでなければこうも立て続けに回避は出来なかった。

そして、全神経を集中させている今のラックにとって、高速で飛んでくるだけの鉄球などただの鉄の塊と変わりはない。

キーン……

一閃、高い音が辺りに響き鉄球は真つ二つに分断される。

「（よし、次は……！！）」

奴の体を断つ。

そう思い、奴の体を見るが

「（え……）」

線が見えなかった。

周囲の線は確かに見えているのに、何故か奴の体には線が一本も見当たらなかったのだ。

「（そんな馬鹿な！？）」

こんな事は今まで無かった。

例え線が見えなくてもぼやけた何かぐらいは見えていた。だと言うのに、奴の身体にはその反応すらなかったのだ。

そんな一瞬の迷いが隙を生んだのか、ラックは奴の接近を許してしまい。

メキイツ！！

「ぐふっ！！」

拳が深々と胴に突き刺さる。

先程食べた物が逆流してくる。幸い、骨は折れずに済んだようだがダン、ダンダン……

ラックの体は大きく後ろに吹き飛ばされ、地面をバウンドする。

「（何故、だ……）」

立ち上がり、剣を構えて自問するラック。

「（何故、こんな時に真眼が発動しない……）」

母の話が本当であれば、真眼は極限の集中下や危機的状況の時に発動するはずだ。

この状況、発動条件は十分満たしていると思われた。

「ラック……！」

フェリアの声が聞こえる、どうやら呪法の準備が出来たようだ。

「（不本意だが今は……！！）」

ダッ！！

地面を蹴り、奴に近づくラック。

このままフェリアの所に行けば奴も着いてきて一緒に転送されてしまう可能性がある。それでは意味が無い。そう思い、ラックは危険を冒してまで奴の懐に飛び込む。

ブウンッ！！

奴の拳が唸り、ラックはそれを間一髪で回避する。

この時程ラックは奴より反応速度が速い事を感謝した事は無かった。そして

バキッ！！

奴の顔面に拳を叩きつける。

拳によるダメージを狙ったものではない。ラックの狙いはその次にあった。

「雷光っ……！」

カッ！！

力ある言葉と共に、ラックの拳は目が眩む程の強烈な光を発する。拳を奴の顔面に叩き付けたのはこの呪法をより効果的に奴に見せ付けるためだった。

放たれた光によって奴の視力は一時的に奪われ、叫び声を上げながら目を押さえる。

ダッ！！

「フェリアー！！」

ラックはその隙を逃すまいとフェリアの所へと移動する。

「転移っ！！」

すでに準備が出来ていたフェリアがそう言葉を発すると同時に景色が揺らぐ。次の瞬間、二人の視界には別の景色が飛び込んでいた。同時に浮遊感が身体を襲う。

ラックの言った通り細かい座標を設定する暇がなく、二人の体は空中へと転移されていたのだ。

そして、真下には湖が見えた。

ザパアアン！！

そのまま湖へと落ちる二人。

その後、岸へと辿り着きずぶ濡れの姿をお互い見合った時

『は、ははは……』

笑えた。

何故だか解らないけど、本当に助かったんだという気持ちになったのだ。

カラト村の時とは違い、自分達の力で危機を乗り越えたと言う事実が二人にそんな気持ちを抱かせていた。

第十章『親友との再会』

第十章『親友との再会』

フェリアの朝は早い。

その日も彼女は日が昇ると同時に目を覚ました。

前夜のあの悪夢を考えるならばもう少し眠っていても良いはずなのだが、彼女は朝日が昇ると目が覚める体質の持ち主であったのだ。

「ふあ……」

だが、やはりまだ眠いらしく口からは欠伸がこぼれる。

「ラックー、もう朝だよ」

隣で眠っているラックを起こすように声を掛けるが、一向に起きる気配はない。

「仕方が無いか……」

昨夜、岸まで辿り着いた二人は湖の東にあるであろうキャンプ地を目指さずに湖の近くで野宿をする事にした。奴が自分達を探してキャンプ地に現れるかもしれないからだ。

だが、前述した通りキャンプ場外は野生の獣や魔獣が出没する可能性があったため、ラックは疲れた体に鞭打って周囲を探索し安全を確保したのであった。

「ただでさえあんな化け物とやりあった後だっていうのに無茶するから……」

その疲労はかなりのものであるはずだ。

それを証明するかのように、ラックは未だ深い眠りに落ちている。「仕方ない。朝ご飯の良いでもしておきますか」

リュックの中から食材を取り出し、火を熾して調理を始める。

幸いリュックには防水加工が施されていたため中の品は傷んではいない。

そんなこんなで約一時間後

「……よし、出来た」

味を確認して料理の完成を喜ぶフェリア。

なかなか会心の出来だったのか小さくガッツポーズまで見せている。

「さて、そろそろ起こすか」

フェリアはラックを起こそうと彼の体を揺り動かす。

「おい、朝だよー。ご飯も出来てるよー、起きろー」

だが、ラックが起きる気配は無かった。

「ラック、ねえラックってば」

更に呼び掛けるが、やはり起きる気配は無く、それどころかすやすやと寝息を立てている。

「む……」

流石に三度目ともなると気に障ったのか、フェリアの額に怒りマークが現れ始める。

スッ……

すると、フェリアはおもむろに立ち上がり焚き火に当てていたヤカンに手を伸ばす。

ヤカンからは濛々と湯気がたっており、その中に何が入っているかは一目瞭然だった。

「ラック、朝だよ。そろそろ起きなさい」

フェリアが最後の確認をするようにラックの名を呼ぶ、だがしかし、相変わらずラックに起きる気配は無い。

「ふう……」

無言で、ヤカンをラックの真上に運ぶフェリア。そして

ダバダバダバ……

ヤカンを逆さに向ける。

「うっぎゃああああああっ!!」

白い蒸気と共にラックの悲鳴が静かな湖畔に木霊する。

彼は飛び上がると同時に辺りを駆け回り、一目散に湖の方へと走り去ってしまう

それから数分後、全身をびっしり濡らしたラックが帰って来た。
「お、おはよう……」

「おはようラック、ご飯の用意出来ているよ」

フェリアはニコニコ笑いながらそう返事をする。

「フェリア……」

「何？」

「今さっき、寝ているところに熱湯を被せられた気がしたんだが、
気のせいかな？」

「うん、気のせい」

そんなフェリアの反応を見てラックは呆然と立ち尽くす。

長い付き合いなので解る。どうやらフェリアはお怒りのようだと。
と。

「さ、ご飯にしましょう」

「ああ……」

触らぬ神に祟りなし、ラックは黙ってフェリアの用意してくれた
ご飯を食べたと言う。

それから三時間後、時刻は昼。

二人はレブルス国の首都、レブルスに辿り着いていた。

「うわああ、大きな街だねー」

遠巻きにレブルスが見え始めた頃からフェリアは子供のように
しゃいでいた。

そもそもフェリアは村の外の世界に興味があった。首都レブルス
は首都であるだけあってレブルス国で最も文化レベルが高い都市だ。
フェリアとしても旅をするならばこの都市を外す事は出来なかった
だろう。

「ラック、お城ってどこにあるの？」

目を輝かしながらそう問い掛けてくるフェリア。当然、フェリア
は本物の城を見た事がない。

「街のちょうど真ん中にあるよ。大通りに出れば見えるはずだ」

「本当？ 早くいきましよう！！」

街に足を踏み入れて一時間はこんな感じでフェリアの観光に付き合う形となってしまうた。

街の中の雰囲気や昔と違う点を見て回る良い機会だと思ったラックはそれに異を唱えなかったのだが

「（随分と賑やかだな）」

街並みや根本的な雰囲気は変わった様子が無かったのだが、どうも街全体が賑わっている感じが有り、当時の自分が知っているそれと違う事に疑問を感じていた。

「（何かあるのか？ 一度確認する必要があるな……）」

そう考えたラックは

「フェリア、街を見て回るのもいいが、先に今晚泊まる宿に行かないか？」

フェリアにそう提案する。

「え、宿もう決めてるの？」

「ああ、昔父さんに連れて行ってもらった店が宿をやっていたはずだ」

それを確かめるためにも行ってみないかとラックは提案する。

フェリアとしてもどうせ楽しむならばじっくりと楽しみたい。

そう言う事ならばとラックの提案を承諾する。

そんな訳で大通りから路地を曲がる事二回。

「……で、ここがその宿？」

二人の前には一件の店があった。

見た目的には並みより上と言う感じで、他の店と大きく異なる点は看板がU字型でまるで逆立ったヒゲのようになっており、看板には『白ヒゲ亭』と書かれてあった。

「宿って言うより酒場って感じだけど？」

「この店は一階が酒場をやっていて二階が宿をやっているんだ。酒場には腕自慢の連中が集まる事で有名で客入りもいい」

ラックがフェリアにそう説明をしていると
ガッシャアーン、ドン、バタバタバタ
宿の中から何やら争いの音が聞こえてくる。

「何？」

「相変わらずだなあ」

驚くフェリアを他所にラックは懐かしいものを見ているような表情を見せる。

「どういう事？」

「論より証拠、見た方が早い」

ラックはそう述べると店の中に入っていこうとする。

フェリアもその後を追いつ店の中に入ると、そこでは予想通り喧嘩が行われていた。

「……えーっと、止めた方がいいんじゃない？」

店内には喧嘩をしている面々の他にも客が居たが、誰もその喧嘩を止めようとしていなかった。

「レブルスでは喧嘩が合法的に認められているんだ。止めたら逆に罪になる。喧嘩なんてこの街じゃ日常茶飯事なんだよ」

レブルスは実力式階級制度を取っている。実力を明確に示すために行われる最も単純かつ解りやすい方法は決闘だ。そのため、レブルスでは特定の手順を守れば街中での争いは合法となり、それを正当な理由なく止めた場合は止めた者に罰則が与えられる。

「けど、随分と面白い状況になっているな」

喧嘩が行われている事は予測していたが、その状況は予想していたものとは少し異なっていた。

状況は一人対六人で全員男。

六人組の方はおそらく冒険者と呼ばれる類の連中で、全員武器と鎧を所持している。

これに対して一人の方は武器を持っておらず、袖の部分がない服を着ており動きやすそうな身なりをしている。その手に格闘用のガントレットを着けている所を見る限り、格闘家か何かなのだらうと

言う事が読み取れる。

年齢はラックやフェリアと同じぐらい、金髪碧眼で多少筋肉質だがバランスの取れた肉体を持っており、顔立ちもやや陽気な感じはするが美形の部類に属していた。

「ん……？」

ラックはそんなガントレットを着けている男の顔を見た時に妙な感じを受けた。俗に言う既視感と言う奴だ。ラックがその正体に関して悩んでいると

『おおおりやああああっ！！』

目の前の闘いは次の段階へと進んでいた。

冒険者達の一人が動きを見せる。男は武器を所持していたが流石に店の中で武器を振り回すような真似はしないのか、素手で殴り掛かって行く。だがガントレットの男はその拳を軽く捌き

バキィ！！

冒険者のがら空きの顎にアッパーカットを叩き込む。ガントレットの装着された拳でそんな事をされては一溜まりもなく、男は床へ伏する事となる。

「ざまねえな。面倒だ、まとめて掛かって来いよ」

ガントレットの男がそう露骨に冒険者達を挑発すると、冒険者達は頭に血が上ったのか男の挑発通り一斉に襲い掛かるとする。だが
ヒュッ……

ガントレットの男はテーブルを足場に襲い来る冒険者達の頭上に飛翔する。テーブルを足場にしたとは言え助走も無しにそれだけの跳躍を見せる事には驚きだ。そして

メキ、ババキィ！！

ガントレットの男はそのまま冒険者の頭に蹴りを入れるとその反動を利用して他の二人の頭も同時に蹴り飛ばしてしまう。その何れもが一撃必殺の威力であったのか、一度に三人の男が立て続けに床に伏す事となった。

「ふえー、すごいね。圧倒的じゃない」

「ああ、だがこれで状況が変わる」

ラックの言葉を実現させるように、残った冒険者達はそれぞれの獲物を手に持ち始める。

「素手の相手に武器を使うつもり？」

「格闘家がガントレットを装備しているんだ。寧ろ今までハンデがあつたぐらいだよ」

これで武装の面での条件は互角となる。

「でも、これって何だかフェアじゃない」

「フェアは反則とか卑怯な行為嫌いだもんなあ」

そもそも一体多数の闘いであり、始めは武器を使っていなかったくせに自分達が不利と感じると武器を使う。客観的に見れば確かに少々褒められた行動ではないかもしれない。

「ラック、ここは私達も……」

加勢しよう、とフェアリアは言おうとするが

「大丈夫、これでもハンデがあるぐらいだ」

ラックはそう述べた。

冒険者の一人の獲物は剣だった。その剣を手にガントレットの男に切り掛かっていく。

ヒュ、ヒュンッ！！

鋭い斬撃がガントレットの男を襲うが、男はその全てを回避していく。冒険者の男も決して腕が悪い訳ではないが、ガントレットの男の技量はそれを完全に上回っていた。

「ガントレットの方は剣との闘いに慣れている。それに対して剣の方は完璧に気迫負けしているな。あれじゃまず当たらない」

冒険者の男が剣を振り上げ更に切り掛かうとするが、その一瞬を衝いてガントレットの男が素早く間合いを詰め。

ミシッ……

拳を腹に突き立てる。深々と突き刺さる腕に店内に響く鈍い音、どうやら骨が折れてしまったようだ。素手の連中が気絶しているだけなのを見る限り、どうにも武器を持った相手にはそれ相応の対応

をするタイプであるようだ。

「次はハンマーか」

冒険者側の最後の一人の武器はハンマーだった。見るからに力自慢と言った感じの男で、使い込まれたそのハンマーにはそれ相応の威力がある事は容易に想像出来る。少なくとも一人を一撃で粉砕するには十分な威力があるだろう。

「馬鹿だねえ、武器にばかり頼ってるようじゃ同じだぜ」

それでもガントレットの男の態度は変わらなかった。

ガントレットの男はハンマーから逃げようとせず、自らそのハンマーに当たりに行くように踏み込む。そして、そんなガントレットの男目掛けてハンマーが振り下ろされる。

ガキイイッッ!!

火花が散る。

見ればガントレットの男はハンマーを避けるどころか真っ向からハンマー目掛けて拳を突き出していた。それを見ていた殆どの者が男の拳が砕けたと思っただろう。だが、ハンマーはガントレットの男を粉砕するどころか

パラパラパラ……

逆にガントレットの男の拳によって粉砕されてしまった。続けて放たれる拳によってハンマーを使っていた冒険者の男も床に伏す事となる。

「強いな……」

非の付け所の無い強さだった。

格闘と言う面だけで見ればこれまでラックが見てきたどんな者よりも強かった。

「ん……」

そんなガントレットの男の後ろで床に伏していた冒険者の一人がボウガンを構えている姿が映った。男の方は目前のハンマーを使っていた冒険者に気を取られているのか、その事に気付いてはいない。

ヒュンッ!!

「危ない!!」

ボウガンの矢が放たれると同時にラックは動いていた。
カッ……

剣の鞘がボウガンを受け止める。

同時にラックは鞘を引き抜き、ボウガンを撃った男目掛けて放り
投げボウガンを粉碎する。

「おい、不意打ちによる飛び道具の使用は禁止されているはずだ」
レブルスの決闘のルールの一つにそう言うルールがあった。

ルール違反があった場合は第三者の介入が許されている。

冒険者の男も頭に血が上っていたのだろう。

ラックにそう諭されると反論もせずに自ら床に座り込み、裁きを受
ける姿勢を見せる。

「ラック」

ラックの下へフェリアが近づく。

「ちえ、私が止めようと思ったのに」

「悪い悪い、先に手が出ちゃったんだよ」

ラックはフェリアの苦情をそう受け流しつつ

「横槍入れて悪かった」

ガントレットの男にそう声を掛ける。すると

「まったくだ。せっかく面白くなりそうだったのによ」

「……それは悪い事をしたな。どうすれば許してくる？」

「簡単さ、こいつらの分だけ、いや、それ以上にお前が俺を楽しま
せてくれればいい。それなりにやれるんだろ？」

男はラック目掛けて拳を突き出し、そう声を上げる。どうやら喧
嘩を売られているらしい。

「やれやれ」

少々困ったような呆れたような表情を見せるラック。

「買うの？」

「やるしかないだろ。ここでは売られた喧嘩を買わない奴は腰抜け
扱いされるんだ。それに……売られた喧嘩を買わないほど俺は温厚

な性格じゃない」

問い掛けてくるフェリアにラックはそう答える。ラックは比較的平和主義者だが、降り掛かる火の粉を払う事に躊躇はない。

「そう来なくっちゃな」

「フェリア、下がってろ」

ラックは剣を構えながらフェリアにそう指示を出す。

「悪いが、始めから使わせて貰うぜ」

素手の相手に剣は卑怯だとか、そんな事を言っていられるような相手ではない。

「構わねえよ、それじゃ……いくぜえええっ!!」

ダッ!!

言つと同時に男は凄まじい速さで踏み込んでくる。先程の比ではない。

ラックはカウンターを仕掛ける暇無く、初手は防御に徹する事にした。

ガアン!! ガガンツ!!

剣の腹の部分で男の拳を受け止める。

その拳の威力は凄まじかったが、一発一発は受け止められない程ではなかった。だが、繰り出される連撃は止まる事を知らず、徐々に防御が崩されていく。

「はあっ!!」

手を出さない事には状況は好転しない。そう思い、ラックは連撃の中の一撃を受け止めずに回避し、回避運動によって発生した回転を利用して剣を横に薙ぐ。狙いは男の首。

ヒュッ!!

男はその斬撃を腰を落として回避する。だが、ラックにとってそれは予想の範疇だった。ラックはわざと大振りした剣を止めず、独楽のようにそのままもう一回転して、今度は男の足を狙う。

ヒュッ!!

男はその斬撃を今度はジャンプして回避する。ただのジャンプで

はない。男は体を空中で前方に回転しながら反撃を仕掛けようとしていた。前転宙返り踵落としてである。

「くっ！！」

タイミングが悪い。振り抜こうとしている剣を止めて防御していたのでは間に合わない。

そう判断したラックは剣を手放し

ガッ！！

手をクロスさせ男の踵落としを防御する。空中技は一度止められれば体勢が崩れるのが最大のデメリット、男はそのまま体勢を崩して床に倒れ込むとラックは予想していたが

ヒュンッ！！

男の攻撃は止まらず、ラックの腕と自身の踵を支点に体を捻じり、そのまま横蹴りを放ってきた。流石にこれは回避も防御も出来ない。「はぁあっ！！」

ならばと、ラックは男の踵蹴りに使われた方の足を掴み、力を込め放り投げようとする。

ベキィッ！！ ガダダンッ！！

ラックは蹴りを頭の側面に食らい。男は受け身も取れぬまま酒場のテーブルに放り投げられる。

「痛う……」

蹴られた頭がズキズキする。不安定な体勢だったためか致命傷にはならなかったが、痛いものは痛い。それは男も同じなのか、痛みは感じているもののテーブルに放り投げられたぐらいでは傷らしい傷は負っておらず、立ち上がり再び構えを取る。

痛み分けと言いたい所だが、こちらは先程剣を手放してしまった。徒手空拳の心得がない訳ではないが、目の前の男にどれ程通じるかは解らない。

スッ……

それでもやるしかない。ラックは男同様に格闘用の構えを取るが『っ！？』

緊迫が走る。

同じだったのだ。左腕を前に突き出し、右腕は腰元、重心を安定させるように腰をやや下ろし足を前後に広げる構え。気付けば二人はまったく同じ構えを取っていた。

『…………』

一瞬の沈黙が流れる。

互いにその理由を少し考え込んでいたせいだ。そして

『あ、まさか…………』

その答えは意外とあっさりと出る事となる。

「ラルスか!？」

「ラックか!？」

同時に互いの名前を呼び合う二人。

その姿もまるで鏡に照らし合わせるように同じであったのだからここはもう笑うしかない。

知り合いと知らずに殴り合って互いに相手の事に気付いた時の人間リアクションなど、大方こんなものである。

第十一章『フェアリア、酒乱する』

第十一章『フェアリア、酒乱する』

『ははははは……』

酒場の中に笑い声が響き渡る。

あの後、気絶した冒険者達を運び出したり散らかった店内の片づけを手伝わされたり、あれだこれだと事後処理を行っているうちに日が落ちて行ってしまう。

ラックとラルスがゆっくり話しが出来る状態となったのは夕食の時だった。

「それにしても久しぶりだな」

「まっただ」

チンツ……

とりあえずは乾杯をとばかりに互いのグラスを鳴らし合う。

ラックやフェアリアまだ成人の儀を迎えていないためその中身はジユースであったが、ラルスは既に成人の儀を迎えるためそのグラスには酒が注がれていた。

「……ねえ、ラック。そろそろ紹介して欲しいんだけど」

そんな二人のやり取りを前にそう声を上げるフェアリア。

「ああ、……えーっと、構わないか？」

「構わんさ。別に隠してる訳じゃねえし」

フェアリアに紹介する前にラルスの確認を取るラック。

「こいつの名前はラルス・クラウス」

「……クラウス？」

聞き覚えのある姓だった。

「今現在レブルス国の国王代理を務めているランク・クラウスの兄。レブルス国の第一王位継承者。つまりこの国の王子様だ」

「……え？」

口には出さないが露骨に「嘘っ？」と言った表情を見せるフェリア。

それは「どうしてこんな所に王子様がいるのか？」と言った疑問よりも、彼女の想像する王子様のイメージと大分掛け離れていたがための表情だった。

「マ、マジっすか？」

「ああ、前にも話しただろ」

「……あ、もしかしてラックが友達だと思っている人のもう一人？」
そう言えばそんな話を聞いたとばかりにそう述べるフェリア。

「友達か、随分冷たいじゃねえか。せめて親友ぐらいに言っといてくれよ」

「そう言う事は口に出すと有難みが無くなるだろ」

そんな軽口を叩き合う二人、それだけで二人の仲が普通の友達以上である感じが読み取れた。

「え、えーつと、ちよつと待って……」

そんな二人を余所に一人混乱するフェリア。

「ラルスさんは……」

「ラルスでいい、堅苦しいのは好きじゃないんでね」

フェリアの言葉を遮りそう訂正するラルス。

「ラルスはラックと親友で、ラックはラルスやランクって人と知り合いで、それでランクって人は国王代理をやっていて、ラルスはその人の兄で王子様？」

概ねフェリアの述べた言葉は間違っていないのだが、やはりまだ何かしらの混乱が見られる。

「そう難しく考えるな。俺が単に王族二人と知り合いだっただけに考えとけ」

他人の人間関係なんてそれぐらいの感覚で覚えておいた方が楽だとラックは言う。

「それはそれでどうかと思うけど……解った」

ラックのその言葉にとりあえず納得するフェリア。

「で、こっちはカマト村のフェリア・カストゥール」

ラックにそう紹介されフェリアは「どうも」と一度会釈する。

「ほう……」

そんなフェリアを見るラルスの表情は何かを納得したような感じだった。

「それで、二人はどうやって知り合いになったの？　前は居候がどうのこうの言ってたけど」

あの時は詳しい話を聞かなかったが、この状況であれば聞いても問題ないだろうと判断しての質問だった。

「俺とラックが会ったのは六年前、場所は城の中。英雄テラ・ラグファースが十年ぶりにレブルスに姿を現したって言うんで、俺も一目見てみようと見に行ったらこいつが居てよ。噂に名高いあのテラ・ラグファースの息子ならさぞ強いんだろうなと喧嘩を吹っ掛けた方がいいが、あっさり返り討ちにあってな。それ以来親友的な付き合いをしている」

「改めて聞くとあれだな、随分と一方的な親友もあったものだと思える」

「そう言うなって、俺としては初めて本音でぶつかれる相手が出て嬉しかったんだからよ」

どうやら二人の関係はラルスのアプローチから始まったようである。

「ふーん、テラおじさんってすごい人だったんだ」

ギガヤストアからある程度の話は聞いた事があるが、その時は今一つピンと来ていなかった。

「何でも俺のじいさんと戦友であり親友の関係だったとか聞いたぜ」
「ラルスのお爺さんって……」

「アベル・クラウス。レブルス国の前国王だ。まあ、そんな経緯があつて俺はクラウス家に居候させてもらっていて、その間父さんはラルスとランクに武術の稽古をしていたんだ」

「ああ、それで二人の構えが一緒だった訳か」

どのような流派かは知らないが、師匠が同一人物であるのならはその構えが同じであっても不思議ではない。

「なるほど、……ん？」

ラックの言葉にフェリアは再び首を捻る。

「……あのさラック」

「ん？」

「今聞いた感じだと、ラックってクラウス家の人達と仲良いんだよね。だったら何でラックはランクって人の事が苦手な訳？」

話を聞いている限りではラックがランクを苦手とする理由が解らない。まだ聞いていない情報があるのだと考えたフェリアはそう問い掛ける。

「あー、いや、それはだな……」

フェリアの問いにラックがどう返答したものかと困っていると

「ははははは……」

ラルスが横で豪快に笑う。

「笑うなよ」

「すまんすまん。けどお嬢ちゃん。それは今聞くよりも後で聞いた方が面白いぜ。そうだラック、明日一緒に城に行かないか？ どうせお前も……」

そう言いながらラルスは言葉を続けようとするが

「ラルス、お前……」

ラックはそう言いながらラルスから距離を置く。

「ん、どうし……」

ラルスは不思議そうな顔をしてそう問い掛けようとするが、その次の瞬間……

チュドオオオン！！

「はぶっ！！」

ラルスの頭が突然爆発する。

正確には頭が爆発したのではなく、頭に何かが直撃して爆発したと表現した方が正しい。

「あーあ、やつちまった」

ラックは頭を黒く染めたラルスを見ながらそう述べる。

「ごほ、げほ、な、何だ!？」

どうやら威力自体はそれ程高く無かつたらしく、ラルスはすぐに起き上がり周囲を見回す。

「あら、手が滑っちゃった」

するとそこには片手で印を組み、呪法を使用したと思われるフェリアの姿があった。おそらく彼女の得意呪法である火球を使ったのであろう。

「あー、ラルス。フェリアはお嬢ちゃんって呼ばれるのが大嫌いなんだ」

小声でラルスにそう耳打ちするラック。

人間誰にだって禁句と呼ばれる言葉が一つや二つはあるもので、フェリアの場合はそれが「お嬢ちゃん」と呼ばれる事だった。おそらく彼女自身が無意識に自分の体にコンプレックスを感じているためだろうと言う事は想像に難くない。

「はあ？　おいおい何だよ、随分と過激なお嬢ちゃん何だ……」

チウドオオオン!!

「なはあーっ!」

言うが早いか行動が早いか、またもフェリアの呪法がラルスに炸裂する。

ちなみに先程より威力が上がっているらしく、今度は体全体にその影響が及んでおり、酒場の床に黒焦げの物体が横たわる事となる。

「……お前は本当に相変わらずだな」

最早言葉が届いているかどうかは解らないが、その黒焦げの物体にそう述べるラックであった。

「フェリア、もう許してやれよ。ラルスに悪気は無い。こういう奴なんだ」

「駄目よ。こう言うのは最初が肝心なんだから」

「やれやれ……」

こうなつたフェアリアはそう簡単には自己の主張を譲らない。その事を知っているラックは深く溜息をつくのであった。

「おいおい、楽しむのは良いが店を壊さないでくれよ」

「マスター」

そんな三人のやり取りが流石に行き過ぎたのか、『白ヒゲ亭』の店主がその声を掛けてくる。

「まあ、五年ぶりの再会な訳だしうるさくは言わんがね」

そう言いながら店主はグラスを三つ運んでくる。

「サービスだ。あの坊主二人がこんなになでかくなって帰ってくるとは思つてなかつたぞ」

「ははは……」

店主のその言葉に苦笑するラック。

「ラック、店主さんと知り合いなの？」

そんなラックを見てそう問い掛けるフェアリア。

「ここに来る時にも話しただろ。この店は父さんに何度か連れてきてもらった事があるんだ」

「常連さんの息子と店主の関係だよお嬢さん」

余談ではあるがフェアリアは「お嬢さん」と言う言葉には何の反応も示さない。あくまで「お嬢ちゃん」と呼ばれるのが嫌なのだそうだ。

「まあ、今日はゴタゴタして客ももう来ないだろうし、適当に騒いでくれて構わんよ」

そう述べる店主は再びカウンターの中へと戻っていく。

「痛たた……」

そんなやり取りをしていると黒焦げになっていたラルスが復活する。

「あら、お早い復活で」

「頑丈なのも取り柄だね」

自分を黒焦げにしたフェアリアにそう答えを返すラルス。

「いやはや、呪法つてのは殴る蹴ると勝手が違っていかんな。受け

身が取りづらい」

「受け身の問題か？」

そう述べるラックだったが、確かにラルスは軽傷だった。フェリアが手加減をしていたとしても、この短期間で平気な顔をして立ち上がるのはラルスだからと言えるだろう。

「何事も気合いで何とかなるもんだぜ」

ラルスはそう言いながら運ばれてきたグラスの一つを手に取り飲む。

「気合いか……」

ラルスの言葉が本気であれ冗談であれ、今のラックにはなかなか考えさせられる言葉だった。

ラルスと同じようにグラスの一つに手を伸ばし口に含むラックだったが

「む？」

その味に一瞬驚く。

いや、別段味がおかしいとかそういう意味ではない。

「マスター、これ酒だよ」

その中身がジュースではなく酒であったがためだ。

「未成年に酒を勧めていいの？」

「おや、子供の頃に何度も城を抜け出し、二人で飲みに来ていた小僧はどここの誰だったかな？」

そう言えばそうだったとラックは思い出す。

子供の頃に親達、この場合はテラとアベルなのだが、二人が美味しそうに酒を飲む姿を見ていたラックとラルスはこっそり城を抜け出し何度もこの酒場に現れては酒を飲んでいた。

十歳そこそこの子供ではあったが、二人は酒に対する免疫が強かったのか子供ながらに酒の味を覚えてしまった。

性質が悪いのはそれを知った保護者二人が面白いと笑いながら更に酒を飲ませた事にある。

良くも悪くも王族。良い酒を手に入れる事には事欠かず、お陰で

二人は子供ながらに酒豪の名に恥じない飲みっぷりになったとか。

「そう言う意味じゃ俺達はマスターには頭が上がらないな」

「まったくだ」

無論、その過程において酒に手痛いしつぺ返しを食らった事は一度や二度の事ではない。その度に介抱して貰った恩は今でも覚えている。

懐かしい思いでに浸りながら再びグラスに口をつけるラックだったが、思い出に浸るのはそこまでだった。

「……ん？」

ふと、ラックはある事に気付く。

グラスは三つ運ばれて来ており、誰がどれを飲むか解らない状況だ。

そんな中で自分とラルスのグラスに酒が入っていたと言う事は、必然的に三つ目のグラスにも酒は入っていたはずである。と言う事は

「……うくっ」

「フェ、フェリア？」

隣を見れば、酒の入ったグラスを手に持ち焦点の定まらないフェリアの姿があった。

「お、おい。大丈夫か？」

頬は紅潮しており、その手に持たれているグラスの中身はすでに半分以下となっていた。

「にゅ？ にやにりやつく？」

「あー、駄目だこりゃ……」

記憶している限り、フェリアが酒を飲んだ姿をラックは見たことがない。

どうやらフェリアの意識はすでに酒に飲まれているらしく、呂律は回らず思考能力も著しく低下しており、フェリアが酒に強くない事が証明されているようであった。

「おいおい、グラス一杯で酔うか普通」

一杯ではなく半分なのだが、今はそんな事にツツコミを入れてい

る場合ではない。

「マスター。宿を二部屋、何泊かしたいんだけど空きはあるかな？」

「ああ、宿の方は客入りが悪くてね。好きな部屋を使ってくれていいよ」

手続きは後でいいからと述べる店主。

その厚意に感謝しつつ、ラックは早々にフェアリアをベッドに運ぼうとするが

「やれやれ、ラックの連れだつてのに酒が飲めないとは、見た目通りのお嬢ちゃんなんだ……」

ラルスが再び禁句を口にする。

チュドオオオン！！

「なっはぁぁーっ！！」

それが何の爆発で誰が巻き起こしたかは言うまでもない。

「おーい、生きてるかー？」

問題はその火力である。先程までとは明らかに質量も熱量もケタ違いだ。

見れば、今度こそしばらくは復活出来そうにないぐらいに黒焦げになっているラルスが転がっていた。それでもフェアリアの最大火力を知っているラックにしてみれば手加減している事は解るのだが、酒の力はフェアリアの力加減にまで影響を与えているようだ。

「てんびやつよ」

「……あー、フェアリア」

「にやに？」

「酔っている時に呪法は使わない方がいい。後で凄まじく気分が悪くなる」

そう述べるラックだったが

「へーきよへーき」

「どうやら聞く耳持たずと言った状態であるようだ。」

「そりえよりりゃつくー！！」

「な、何だ？」

酔っ払い特有の拳動不審さを全開に、そう声を上げるフェアリア。
「もつとによみましょー」

「は？」

どうやら、酒には弱いようだが味自体は嫌いではないらしい。

「あー、いや、フェアリア初めてだろ。この辺で止めといった方が……」
酔っ払いに更に酒を飲ませる事がどれだけ危険な行為であるかは
今更言うまでもないだろう。

これ以上の惨劇が起こる前にラックはフェアリアを止めようと思っ
たが

「いーやーやー、によむによー」

「……はあ」

駄目だった。

普段のフェアリアでさえ一度決めたら意見を曲げないと言うのに、
そこに酒が加わっていては馬の耳に念仏どころの話ではない。

それならばいつそ酔い潰してしまった方が面倒が無くていいだろ
う。

そう考えたラックは店主に酒の追加を注文するのであったが、そ
れが悪夢の始まりだった。

笑い上戸に泣き上戸に脱ぎ上戸。

酒が進むにつれ段階を踏むようにフェアリアの酒癖の悪さは披露さ
れていき、再び復活したラルスを巻き込んでとても人様には見せら
れないような醜態を晒しまくるのであった。

その事態が収束する頃には日付が変わっていたと言う。

宿の一室にて

「……大丈夫か？」

ベッドに倒れるフェアリアにそう声を掛けるラック。

「吐きたくなったら言えよ」

「うー……」

最早返事をする気力すら残っていないのか、唸り声で答えを返すフェリア。

「はあ、初めてのくせにあんなに飲むから……」

フェリアに付き合わされる形ではあるが、ラックやラルスも酒を飲み、最終的には大きな樽一つが空になっていた。

その内の何割をフェリアが飲んだのかは解らないが、少なくとも初心者飲んで良い量ではない事は明白だった。

「何も考えずに寝る。朝になれば多少マシになってるから」
多少は、である。

気分の悪さとはかくとして、あれだけの量を飲んだのだ。おそらく明日の朝には動く事が出来ない状態になっている事だろう。

自身にもその経験があるため、今晚はフェリアに付き添おうと決めるラックだったが

「ねえ、りゃつく……」

「ん？」

小さい声を聞き、フェリアに近づく。

「おやふみのちゅーして」

「お前な……」

フェリアのその言葉に苦悶の表情を浮かべるラック。

フェリアの酒癖の悪さが折り紙付きである事はすでに証明され、酔った上での発言である事は解っている。だが、だからと言ってそんな事が出来るはずもなくラックは断ろうとするが

「……だめ？」

フェリアの表情を見てしまったのがまずかった。

酒による症状とは言え、弱っているフェリアのその憐れ目を見てしまっただけでは、ラックに断れるはずもない。

「……したら、大人しく寝るか？」

「うん……」

「多分、明日には忘れてるぞ？」

「それでもいい」

だからお願い。

フェリアの目がそうラックに語り掛ける。

「……解った」

そう述べ、静かにフェリアの唇に触れるラック。

それは、とても自然な行為であるように見えた。

一呼吸か二呼吸の間、二人はそのまま動かず、その後ラックはフェリアからゆつくりと離れる。

「えへへ……」

嬉しそうな、実に嬉しそうな表情で笑うフェリア。

「……寝ろ」

「うん……」

ラックの言葉にフェリアは素直に返事をし、眠りにつく。

この時、ラックはフェリアが酔っていてくれて良かったと、部屋が暗くて本当に良かったと思っていた。

何故ならば、フェリアが気付いていたかどうかは解らないが、フェリアから離れたラックの顔は林檎のように赤く、真っ赤に染まっていたからだ。

「（これは、酒のせいだ……）」

そう自分に言い聞かせるように、口元を手で覆うラック。

平静を装ってはいたが、あれこそラック・ラグファース一世一代の演技であり、精一杯の照れ隠しであったのだ。

「（で、でなければこんな……）」

思い返すだけで再び顔が紅潮していくのが解る。

その後、ラックは朝になるまでそんな自問自答を繰り返す事となる。

とにもかくにもそんなこんなで、悪夢の夜は更けていくのであった。

第十二章『それぞれの想い』

第十二章『それぞれの想い』

朝。

窓を開けると心地よく爽やかな風が室内に吹き込んでくる。

小鳥達の囀りや、住宅街が近いのか子供達の遊び声が聞こえてきたりして、申し分無く気持ちの良い朝だった。少なくともラックはそう感じていたのだが

「ううっ……」

ベッドの上で呻くフェリアはそうではないらしい。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃない……」

そう問うラックに青ざめた顔でそう答えるフェリア。

「頭痛い、吐きそう、気分悪い、最悪……」

頭を抑えているのか口を押さえているのか腹を押さえているのか。とにかく二日酔いによるあらゆる症状がフェリアを襲っているようだ。

「初めてであんなに飲んで、更に呪法を使ったのが悪かったな」

「関係あるの？」

「呪法は発動する際に少なからず脳に負担が掛かる。通常でさえ一歩間違えば脳が負荷に耐えられない状況があるんだ。酒を飲んだ状態で呪法を使えばどうなるか。頭痛で済んでいるのが幸いと考えるべきだな」

世界の法則に干渉する呪法を人間が無尽蔵に使えるはずが無い。人が使えるのは人に割り和えられている容量の範囲内の呪法のみであり、人の容量の事をメモリと呼ぶ。一般的にその容量は脳の処理能力と結び付けられ、容量と脳の処理能力は負荷が反比例する。そして、脳が呪法の処理に追いつけず容量の限界を超えた場合の現

象をメモリオバーと言う。

「今は聞きたくない……」

「やれやれ」

今のフェリアにとって必要なのは説明ではなく二日酔いの薬のよう
うだ。

ラックは店主より貰った二日酔いの薬をフェリアに手渡す。事前に胃に優しい朝食をフェリアに食べさせており、昼頃には効果が現れるはずだとラックは説明する。

「ラックやラルスも沢山飲んだのに、なんで私だけ……」

「俺やラルスを基準にするな」

「二人はどれぐらい飲んだら二日酔いになるの？」

「そうだな。タベの三倍ぐらい飲めばとりあえず記憶を無くすぐらいには酔うかな」

「げほっ、そ、それ本当」

ラックの言葉を聞き、飲み掛けていた薬と水を吐き出しそうになるフェリア。

「まあな」

「信じられない」

「そうは言うが、父さんやアベル王は俺達の四倍は軽く飲んでいたので。子供ながらにあれは化け物だと思った」

「……」

フェリアの表情は既に驚きを通り越して呆れを見せ始めていた。

「そんな表情をするな。俺達を基準にするなど言ってるだろ」

「何か、余計気分悪くなってきた。もう寝る」

「そうしろ」

そう述べながら布団に潜るフェリアの隣でラックは食器を片付けようとする。

「……ラック」

「ん？」

そんなラックにフェリアが話し掛ける。

「その、実は私夕べの記憶があんまりないんだけど。何かやったかな？」

フェリアにしてみれば自身の酒癖の悪さや、記憶が無い間に何か醜態を晒していないかの質問であったのだが

「……」

返答に困るラック。

夕べの事を思い出そうものならば、フェリアの顔がまともに見られるはずもない。

「やっぱ何かやったんだ」

「あ、いやいや、確かに暴れはしたが他に客も居なかったし、その、俺的に迷惑とかそう言う事は無かった」

嘘は言っていない。

だからと言って本当の事を言う勇氣も今のラックは持ち合わせていなかった。

「そう……なの？」

「ああ、とりあえず今はゆっくり寝ろ。俺はここに居るから」

「うん……」

その言葉に安心したのか、それとも二日酔いの薬の影響か、フェリアは静かに眠りに落ちる。

約一時間後。

コンコン……

部屋の扉が小さく叩かれる。

「どうぞ」

部屋内から扉の外に聞こえるぐらいの小さな声でそう返事をするラック。フェリアを起こさないようにとの配慮だ。無論、その相手が誰か解っているからの返事である。

ガチャ……

「よお」

部屋の扉を開けて姿を現したのはラルスであった。

「はは、案の定二日酔いか」

眠るフェリア見てそう小さく笑うラルス。

「悪いな。気を使わせて」

「気にするな。初めての二日酔いってのはきついもんだ」

性格柄、何でも大雑把なイメージを持つラルスであったが、人への気遣いはこれでなかなか人並み以上だったりする。

先程のノックにしたってフェリアを起こさぬ配慮である事は明確だ。

「それで、どうしたんだ？ 昼食のお誘いをするにはまだ早いぞ」
時刻はまだ午前十時くらいである。

「何、夕べ出来なかった話をしようかと思ってな」
「一緒に城に行かないかって話か？」

そう言えばフェリアに吹き飛ばされる直前にそんな話をしていたなと思い出すラック。

「まあ、お嬢ちゃんがこんな状態じゃ明日か明後日になると思うが……」

「……ラルス」
そう述べるラルスに真剣な表情を見せるラック。

「話がある……」
何か重要な話をしようとしている。

「……ここでもいいのか？」

そう察したラルスはフェリアをちらりと見て、場所を変えたほうがいいんじゃないかと言う意味でそう問うが

「ああ、ここでもいい」
ラックはそう答える。

ラックとフェリア、そしてラルスにも関わる重要な話だ。他所でする訳には行かない。

「実は……」
ラックはこれまでの経緯をラルスに包み隠さず話す。

「なるほど……」

全てを聞き終った上でラルスは納得したと一度頷く。

「それでお前の賞金首の紙が張られていたのか、妙だとは思っていたが……」

今朝街を見て回ったときにはじめてその事を知ったとラルスは言う。

「ラルス、お前はウィル・ワームズと面識はあるのか？」

「ああ、クラウス家御用達の騎士だからな、当然面識はある。けど、俺は直接ウィルの世話にはなっていないし、ウィルが騎士になって本格的にクラウス家に仕え始めたのは五年前で、俺が旅に出た後の話だ。親しいって程の仲じゃない。面識って点で言えばお前だって会っているはずだ」

確かに、ギガの家でウィルを見た時に何かが引つ掛かった。

もしかしたら五年前、クラウス家の世話になっていた時に会っていたのかもしれない。

「ランクはどうだ？」

ラルスとウィルの繋がりが希薄であっても、ランクとウィルの繋がりはそうではないはずだ。

「兄貴の俺が言うのもなんだが、ランクとウィルの信頼関係は相当なもんだ。元々ウィルはランクの付き人だったし、じいさんが亡くなった後のゴタゴタもあの二人が切り抜けてくれた」

何か思うところがあるのか、ラルスはそう言うとしり込み込む。

「……俺が気にしているのは、ランクが今回の一件にどれだけ関わっているかについてなんだ」

ウィルはクラウス家に仕える騎士であり、国王代理であるランクに仕える騎士団長だ。

ウィルは御霊搜索の任務を受けカトラ村にやってきた。それが誰に与えられた任務であったのか、それがランクである場合、このまま城へ出向いて良いのかどうかの疑問が付きまとう。

「ラック、お前まさかランクが敵になるんじゃないかとか考えてん

じゃないだろうな」

「可能性はな……」

「馬鹿にするな。俺やランクがお前の敵になるなんて事、絶対にあ
るはずがないだろ」

真っ直ぐ、睨む様にラックを見ながらそう述べる。

「天地が引っくり返ったってそんな事あるもんか。お前だってそれ
は解ってるだろ」

確認とか説得とかそう言う類の言葉ではない。

何か既に確定している出来事であるかのようにラルスはそうラッ
クに言う。

「解っている。変な事言っただけだった」

以前も述べた通り、ランクが敵になる事があるとはラック自身も
思っていない。

「だが、運命ってのはその辺りの事象すらも捻じ曲げてしまう物ら
しい。可能性ぐらいは考えさせてくれ」

どんな些細な可能性も見逃してはならない。そうしなければ……
フェアリアを守る事が出来ない。

「そのお嬢ちゃんのためか？」

そんなラックの心中を言い当てるかのようにラルスはそう述べる。

「ああ、そうだ」

ラルスの言葉にラックは即答する。

「……へっ、お前は相変わらずだな」

「はは、そりやお互い様だろ」

「違うない」

ラルスの言葉に笑うラック、そしてラックの言葉に笑うラルス。

「……そういう事なら、やっぱり城へはみんなで行った方がいいな
「え？」

「お前が自分で言っただろ。もしもの可能性がある。お嬢ちゃんも
動ける状態の方がいいし、一緒に居た方が安全だろ」

「……ああ、そうだな」

可能性の話だ。

ラックとフェリアは昨日街中で多くの人に目撃されている。ラックに掛けられている賞金の条件は首都レブルスの外でラックを捕らえた時にのみ有効となる。逆を言えば、レブルスに居ても外に誘き出して捕らえればいいと言う話になる。世の中にはそう言う事を考える連中も居る。

「何から何まで気を使わせて悪いな」

「へ、じゃあ昼飯と晩飯でも奢ってもらおうかな」

ラルスは邪気の無い笑顔でそう言ってくる。

「王族の癖に意外とせこいな。解った、また後で尋ねてきてくれ、フェリアも夜には食事に付き合えるぐらいになってるだろう」

「お前はどこにも行かないのか？」

「ああ、俺はここに居る」

ラルスの問いにラックはそう答える。

「俺がここに居ないと、フェリアが目覚めた時に心配するだろうからな」

フェリアの方を見ながら、ラックはそう優しく微笑む。

「好きにしろ」

そう延べ、ラルスは部屋を立ち去ろうとする。

部屋を出る際、ラルスは二人の姿を見て小さく笑っていた。

その笑みが何を意味するのは当人にしか解らぬ事であったが、そこには僅かばかりの悲しみの色が含まれていた。

翌日。

ラックとフェリア、そしてラルスは城門へ向かっていた。

「ねえ、大丈夫なの？」

「何が？」

城門へと向かう途中、フェリアがそう問い掛けてくる。

「だって、ラルスって王族なのに五年間も城に居なかったんでしょ。」

そんな王子様がいきなり帰ってきたら混乱しない？」

昨日の体調不良はどこへやら、どうやら二日酔いの影響はもう残っていないようだ。

「ああ、そう言う事か。その辺は大丈夫だろ」

フェリアの疑問は尤もであったが、ラックはそう軽く答えを返す。

「何で？」

「うーん、人望……かな」

「は？」

フェリアが「何それ？」と問う前に城門前に到着する面々。

「うーん、流石に懐かしいなあ」

ラルスが感慨に浸っていると、門番の一人が三人の姿を見て近づいてくる。

「お前達、レブルス城に何用だ」

歩いてきたのは一人の老人だった。鎧を着こんでおり威厳のある言葉で話し掛けてくる。

「用が無いのならば、早々に立ちさ……」

「よー、じっちゃんじゃねえか」

老人が立ち去れと言う前にラルスは言葉を遮って話し掛ける。

「久しぶりだなあ、元気してたか？」

ラルスの言葉に老人の反応は一瞬遅れていた。だが、すぐに老人の顔が変わっていく。

「ぼ、ぼっちゃま。ラルスぼっちゃまではございませんか!？」

「おう、久しぶりじっちゃん」

ラルスがそう返事をするると老人は突然涙を流し始める。

「おお、おおおお、ラルスぼっちゃま。爺は見違えましたぞ。こんなに立派になって……」

「ははは、じっちゃんはずっかり老け込んだなあ」

ラルスと老人の会話を残った二人、ラックとフェリアは黙って聞いている。そして老人がようやく落ち着きを取り戻した頃、改めて確認してくる。

「ぼつちやま、そちらの方々は？」

「何だよじつちゃん。もう耄碌しちまったのか？ ラックだよ。テラ・ラグファースの息子のラック・ラグファース」

「な、何と！？」

「お久しぶりです。マークじいさん」

紹介を受け、会釈しながらそう挨拶をするラック。

「もしかと思いましたがああのラック殿。おお、テラ殿と瓜二つでしたので一瞬戸惑いましたぞ」

テラとマークは知り合いだったのか、ラックを見るマークはどこか懐かしそうであった。

「それであつちのお嬢ちゃんは元宮廷呪法師のギガ・カストウールの娘さんだ」

余談ではあるが、フェリアはラルスが自分の事を「お嬢ちゃん」と呼ぶ事について既に諦めを見せていた。

先々日のあの悪夢の夜、ラルスはフェリアに何度爆破されても「お嬢ちゃん」と呼ぶ事を止めようとしなかった。そして最後にはフェリアの方が折れてしまうという珍しい状況となったのだ。これにはラックも驚いたと言う。

「あ、どうも。フェリア・カストウールです」

紹介されたフェリアはラックと同じように会釈しながらそう名乗る。

「何と、今日は何と言う日じゃ。このマーク、レブルスに仕えて五十年、今日ほど嬉しく思った日はございません。こうしてはおられない。この事を早く城の者達にも知らせてやらねば。皆様方しばしお待ちくだされっ――！」

感激の涙を流しながら城内へと姿を消すマーク。

「ははは、本当に変わってないなじつちゃんは」

「まったくだ」

「ラック、今の人は？」

そう話し合うラックとラルスにそう質問を投げ掛けるフェリア。

そう問いたくなるのも無理は無い。ラックとラルスは面識があったようだが、フェリアにしてみれば見知らぬ人である。

「マークじいさん。ラルスの世話係だった人で、俺が居候している間に世話になった人だ」

フェリアの問いに軽くマークの説明をするラック。

「昔俺とラックで色々が悪さをしては困らせたり怒らせたりしたもんだ」

「おい、勝手に共犯者にするな」

「いいじゃねえか。発案は俺だったが実現させたのはお前だろ」

「俺は方法を考えただけで実行する気はなかったぞ。それなのにお前は人の話も聞かず好き勝手に、最後には俺のせいにしたじゃないか」

どこかで聞いたようなやり取りである。

「お待たせしましたっ！！」

そうやって話し合っているとマークが三人の所に戻ってくる。

「何だじっちゃん、わざわざ着替えてきたのよ」

その姿は先程見た門番の姿ではなく、仕官の服装となっていた。

「ラルスぼっちゃまがお帰りになられたのです。ぼっちゃまに仕える身としましてはこれぐらいの服装はしなくては、それに今日はお客様もおられますしな」

「俺達の事は気にしなくて良いよ。マークじいさん」

「そうは参りません。あのテラ殿とギガ殿のお子様である二方が来られたとあればこれぐらいでは申し訳ないぐらいです。ささ、ランク様もお待ちしております」

マークは先導するように城内へと足を進める。

「行こうぜラック」

「ああ」

ラックとラルスはそんなマークの後を追って城門を潜ろうとするが「……フェリア？」

フェリアはその場で立ち尽くしたまま動こうとしなかった。

「どうかしたのか？」

「あ、いや、……私、帰ったほうがいいんじゃないかな？」

「え？」

「だって、私だけ無関係でしょ。何か……場違いな感じがしちゃって」

ラルスは王族であるのだから当然として、ラックにも昔居候していたと言う経歴がある。

だが、フェリアにとってこの先はそう言う繋がりが無い場所だ。そうでなくても一般人が城の中へ入ると言う行為はなかなか抵抗があるものである。

「フェリア、人目なんて気にするな。父さんや伯父さんがこの城の関係者なんだ、俺達はこの城と無関係じゃない。それに、ここには奴が……ウィル・ワームズが居る。俺達はカラト村の生き残りとして、この先に進む正当な権利がある」

ラックの言葉に苦い表情を浮かべるフェリア。

「行こう、フェリア」

フェリアに手を差し出すラック。

「……うん」

フェリアはその手を取る。

城の中へ入る事に抵抗があったのは事実だが、無関係であろうと場違いであろうと、フェリアにとってそんな事はどうでも良かった。ただ、自分の知らないラックがそこに居るような気がして、つい、そんなラックの気が引きたくて我俣を言ってしまったのだ。

だからほんの少し、ラックがこうやって手を差し出してくれることがフェリアにとっては嬉しく、この先に進む勇気を与えてくれた。

城の中に入った三人は文字通り歓迎された。

その大部分はラルスが帰ってきた事に対しての歓迎だったが、少なからずラックやフェリアも歓迎を受けているところを見ると、テ

ラやギガがこの城でそれなりに人望があつた事が伺えた。

「（今更だけど、父さんや伯父さんはこの城でどんな事をやっていたんだろう）」

ギガはテラより運命を教えてもらったと言っていたが、聞いた話や状況をまとめる限りでは、ギガは運命を教えてもらった後にこのレブルス城を後にしている。

テラにしたってその詳しい経歴を知っている訳ではなく、二人の素性ははっきりしているようではっきりしてはいない。

ラックがそう考えている間に、三人は城の応接室へと案内された。城の応接室という事でその内装は実に豪華であり、そこでしばらく待つように言われたのだが、ここで生まれ育ったラルスは別として「フェリア、とりあえず座つとけよ」

「あー、いや、何と言うかフカフカ過ぎて落ち着かなくて……」

フェリアはどうにも居心地が悪いらしく、ソファーに座らずにその隣に立っている。

「まあ、気持ちは解らんでもないが……」

自分も子供の頃に初めて城に入ったときはそんな感じだったと述べるラック。

「それに適応出来たラックは凄いと思うよ」

「いや、単なる慣れだろ」

そんな会話をしていると

ガチャ……

応接室の扉が開かれる。

見ると一人の男、いや、一人の少年が数人の従者を引き連れ部屋に入ってきていた。

「お待たせしました」

少年はその年齢とは程遠い程に礼儀正しい丁寧な挨拶をしてくる。

「よお、ランク」

そんな少年、ランクに向かって片手を挙げ軽く挨拶を返すラルス。

「……マーク」

「はっ」

ランクのその言葉を聞き、従者の一人であったマークは他の従者を連れ部屋の外へと出て行き扉を閉める。

パタン……

「おかえりなさい、ラルス兄さん」

扉が閉まるのを確認するとランクの雰囲気が一変する。

「おう、ただいま」

先程まではピリピリとした雰囲気を漂わせていたランクであったが、今の彼は年齢相応の普通の少年のようであった。

「ラック兄さんもお久しぶりです」

「ああ、久しぶりだなランク」

ランクの挨拶にラックもそう軽く返す。その言葉を聞きランクは嬉しそうに微笑む。

「ラック……兄さん？」

ランクのその言葉を聞き、フェリアは不思議そうな顔でそう聞いてくる。

「昔ラック兄さんがここに居た時に僕が勝手にそう呼んでいたんですよ。僕にしてみればラルス兄さんもラック兄さんも兄のような存在でしたから」

「そう、なの？」

フェリアは確認するようにラックにそう問う。

「ああ」

ラックもそれを否定しようとはしなかった。

「ご挨拶が遅れました。初めましてフェリアさん、僕がレブルス国の国王代理を務めさせてもらっていますランク・クラウドです」

「え？」

目の前の少年がランク・クラウドである事は三人の会話から容易に予想出来たが、何故彼が自分の名前を知っているのがフェリアには解らなかった。

「フェリアさんの事はラック兄さんから良く聞かされていました」

そんなフェリアの疑問を読み取ったのか、ランクはそう補足説明を付け加える。

「ランク、余計な事は言っなよ」

「はい」

ランクの言葉に素直に返事をするランク。

どうやら兄のような存在であると言うランクの言葉は本当の事であるらしい。

「お前が変わってないようで安心した。ランク、聞きたいことがあるんだが……」

「御霊の事、カラト村の事、ウィルの事……ですね。全てを知っている訳ではありませんが、ある程度の事情は解っています。ですが、まずはランク兄さんの口から真実を聞かせて貰えませんか？」

「解った……」

そう延べ、ランクはラルスに話したようにランクに全ての経緯を話す。

「……」

ランクの言葉を全て聞き、ランクは考え込む。

「それが例え運命のせいであつたとしても、俺はウィルを許すことが出来ない。どうにか出来ないか？」

「どうにか……とは？」

「まず、レブルスの法で奴を裁く事は可能か？」

「……難しいでしょうね」

ランクの質問にランクは答えを返す。

「カラト村が滅亡したのは事実ですが、その直接の原因がガーゴイルの自爆である以上、ウィルにその責任を取らせる事は出来ません。例えウィルがそう仕向けたのだとしても証言だけでは証拠にならず、一国の騎士団長を裁く事は出来ないでしょう」

「そうか……」

元より、そうなるであろう事はランクも予想出来ていた。

「ですが、方法が無い訳ではありません。今の話は現状の法では裁

けないというだけの話であって、より強い権限があればウィルを裁く事は可能です」

「国王代理のお前の権限では駄目なのか？」

「代理は所詮代理です。法や経済を整える事が出来ても決定権は無い。ですが正式な王の決めた事であるならば、国民はそれがどんな命令でも従うでしょう」

それが王の力だとランクは言う。

「ランク、お前まだ俺の事を……」

「はい。ラック兄さん、今こそこの国の王となってください」
「は？」

ランクのその言葉に反応したのはラックではなくフェリアだった。
「えーっと、どういう事？」

話し込む二人の邪魔にならぬようにとラルスにそう問うフェリア。
「聞いての通りだ。ランクはラックに王になって欲しいと思っているんだよ」

「え、でも……」

フェリアは混乱する。

それはそうだろう、レブルスが如何に実力式階級制度の国だからと言って、一般人であるラックにいきなり王になって欲しいなどと言う話ができれば混乱もする。

「ランクは昔から自分には王の器は無いって言い続けてきてな。どう言う訳かラックと会った日から「ラック兄さんこそ王に相応しい」って言い出し始めたんだ。それ以来、ランクはラックと会うたびに王になってください王になってくださいと言い続けてきた。そんな訳でラックはランクが苦手なんだ」

「え、けどそんな事出来るの？」

ラルスの言葉を聞き、フェリアもようやくラックがランクを苦手としている理由を知る事となるのだが、初期の疑問の答えにはなっていないかった。

「それはラック次第だ。レブルスは実力式階級制度の国、実力さえ

あれば王になる事は誰にだって可能だ。まあ、言っほど簡単な話じゃないけどな」

だが、実力があっても当人にその意思が無いのでは始まらない。

「ラック兄さんは王となるべき人なんです」

「待てよ、だったらお前の兄で第一王位継承者のラルスが居るだろ。レブルスが幾ら実力式階級制度の国だからと言って第一王位継承者を蔑ろにしているはずがない」

当人の意思に関わらない所ではあるが、実力と言う点であれば血統だって立派な実力の一つだ。

「ラルス兄さんは確かに実力があり、民の人望も厚く何事も大らかな器のでかい人です。ですがそれは個人の話であって国の管理や運営が出来るような人ではありません」

ランクがそう言うラルスが流石に不愉快そうな顔をする。

「俺、つまり馬鹿扱いされてるのか？」

「個人としては褒められてるからいいんじゃない？」

そう述べ合うフェリアとラルス、だがこの際二人の話は余談に過ぎない。

「兄さん、良く考えてください。このままではウィルを裁く事は不可能です。兄さんがどう頑張ってもそれ以外の方法は考えられませんか」

「……」

ランクの言い分は正しい。

僅かな希望を抱きランクとの面談には成功したが、先にも述べた通りランクにはウィルを裁く事は出来ない。

現状、ラックには何の肩書きも無ければ何の権限も持つてはいない。ここでラックがウィルを物理的にどうにかしたとしても、ラックは何らかの罪を被せられてしまうだろう。

ラックにとつてはどの道を選んでも八方塞、打つ手は無い。

「ラック兄さんが王になりさえすれば、全てがうまく行きます」

出来る出来ないは別として、全てを可能とする方法はそれしかない

い。

「ラック兄さん、今こそこの国の王となってください」

ラックには王となる意思は無かった。ランクに対してもずっとそう言い続けてきた。

そんな自分が今更王になるなどと言い出すのは虫が良すぎる話だし、それ以前にラックは王と言う存在に常に疑問を抱いてきていたのだ。

王とは民を統べる者、国を治める者。

だが、ラックは自由を好み束縛を嫌う男である。人が人を統べると言う行為はそんなラックの考えに反しており、それを強要する王になりたいなど一度も思わなかった。

「ランク、俺は……」

ラックがランクに対して答えを返そうとすると
バンッ……

応接室の扉が開かれ、一人の男が入ってくる。

「面白い話をなさっていますね、ランク様」

その男とは黒い甲冑を身に纏ったレブルス国の騎士団長、ウィル・ワームズ。

「ウィル・ワームズ!!」

ウィルの名を叫ぶと同時にラックの体は動いていた。

フラッシュバック現象。

強い心的外傷を受けた場合に、後になってその記憶が突然かつ非常に鮮明に思い出されたりする現象を指す。思い出すと記述したが、その際の記憶はあまりにも鮮明に再現されるため、本人にとっては当時の状況を再体験するに等しい。

ラックにとってカラト村での一件はそれに該当し、ウィルを見た

瞬間

ヒュッ!!

ラックは考える間も無く床を蹴ってウィルに殴り掛かっていた。
バチイン

ラックの渾身の力を込めて繰り出した拳を、ウィルはいとも容易く右手で受け止める。

「何っ!？」

拳を受け止められた事が意外だった訳ではない。

意外だったのはウィルの手によって受け止められた事だった。

そう……手だ。

包帯が巻かれているためどのような状態かは解らないが、ウィルの両腕にはラックが切断したはずの両腕があったのだ。

「ふふ、切り落としたはずの腕があって驚いたかね？」

「くっ……」

ウィルの腕を振り払い、距離を取るラック。そして

チャキ……

今度は剣を抜き切り掛かろうとするが

「おっと、抜いていいのかな」

「何だと？」

「レブルス城内で一般人である君が剣を抜き、騎士団長である私に切り掛かればどうなるか。解らぬ訳ではあるまい」

「っ……!!」

客観的に見れば間違いなくウィルの言う通りになるだろう。

そして、その結果がどうなるかも想像に難くない。

「ふ、レブルス国を敵にするつもりがあるならば掛かってきたまえ」

「馬鹿に……っ!!」

ウィルの挑発に乗る形でラックは剣を引き抜こうとするが

「止さないか二人ともっ!!」

ランクの一喝が応接室に木霊する。

その声は先程までの少年ランクの声ではなく、国王代理ランク・クラウスの声だった。

「ここをどこだと思っている。控えよっ!!」

「……」

その声を聞き、ラックは剣の柄から手を離し、ウィルも距離を取

るようにラックと対極の位置に移動する。

だが、だからと言って場が収まった訳ではない。

「ウィル、今は客人との会話中であり誰も応接室に入るなと命を出していたはずだ」

「客人？ ランク様、この者達は御霊を強奪しカラト村を滅亡させた犯人です」

ウィルは鼻で少し笑ったかと思うと正義は我にありと言わんばかりにそう言い放つ。

「ウィル、私が何も知らないと思っているのか」

ランクのその言葉にウィルは一瞬黙るが

「ランク様、事情はどうあれ彼が御霊を所持している事は事実です。私にも多少の非があった事は認めますが、私はその御霊を回収しようとしたまで、この国を思えばこそその行動です」

「抜け抜けと……」

ウィルの一言一言が神経を逆撫でしているのか、ラックは怒りを抑えようと必死であった。

「ウィル、お前の言い分は解った。確かに御霊搜索の許可を出したのは私であり、国益のためであるのなら騎士団はある程度の行動が許可されている」

それが現行のレブルスの法だとランクは言う。

「だが、だからと言って全てを無かった事には出来まい。お前に罪が無いのと同様に、彼にもまた罪は無い。このままでは話は平行線を辿るだけだ」

「はい、そこで私はある提案をしようと思ひ参上した次第です」

「提案？」

そう延べ、ウィルはニツツと笑う。

「彼を此度行われる武闘大会に参加させる……と言うのはどうでしょう。私としても両腕を切り落とされた借りを返したいと思っていますし、彼にしてみても公然の前で私を裁く事が出来るのですから問題はないかと」

「ふむ……」

ウィルの提案にランクは少し考え込む。すると

「いいじゃねえか」

今まで黙っていたラルスがそう声を上げる。

「お互いこうなつちゃ表立って鬨えないだろ。なら武闘大会で白黒はつきりつけた方が手っ取り早い。それにその方が実にレブルスらしいやり方だ。強い奴が全てを決める。それがレブルスだ」

そのラルスの言葉を聞き

「……解った、いいだろう。お前の提案を採用する」

ランクは意を決する。

「双方、武闘大会で決着をつける事。それまでの期間、互いに争い事をする事は許さん。どちらかがそれ破った場合は互いに極刑とする」

そう双方に言い渡し

「ウィル、彼には私から説明しておこう。お前は席を外せ」

ランクはウィルにそう促す。

「そうですね。彼に切り掛かられない内に退散するとしましょう」

ウィルはそう延べ、一礼した後に応接室から姿を消す。

「……ランク、武闘大会とは何の話だ？」

ウィルが完全に姿を消した事を確認し、ランクにそう尋ねるランク。

「近々レブルスで開かれる前国王アベル・クラウスの鎮魂祭の事です。祖父が崩御してからレブルスには王が不在でした、武闘大会は次期国王候補を決めるためのイベントでもあります」

「それに参加しろと」

「すみません。場をまとめるためにラック兄さんの了承を得ず承諾してしまいました」

「良く言っぜ、俺がその大会で優勝すれば否応なしに王の候補者となる。その事を見越して打算で了承したくせに」

「……すみません」

凶星だったのか、ランクは反論せずに謝るだけだった。

「いや、あれでいい」

「え？」

「どの道、奴と表立って闘えないのであればどう転んでも俺に勝ち目は無かった。それをタイマン勝負にまで持っていていけるのなら状況は好転したと言える。それに、大観衆の前で奴をぶっ飛ばせるって言うのは気に入った」

「では、ラック兄さん……」

ランクは期待を込めた表情でラックを見るが

「だが、俺は王になる気は無い。俺の目的はあくまでウィルをぶっ飛ばす事だ。俺が優勝したら王位はお前に譲る」

「兄さん……」

ラックのその一言にランクは目に見えて落胆の色を見せる。

「まあ、こればかりはラックの意思だ。強制出来ないだろ」

「ラルス兄さん……」

ラルスの言葉にランクは渋々口を閉じる。

今はとりあえずラックが武闘大会に参加してくれるだけで満足しようと言う算段のようだ。

「ラック、俺もその大会には参加するが、本選で当たった時は本気で行くぜ。負けてウィルと闘えなくなっても恨むなよ」

「本選？」

「武闘大会はレブルス国を挙げての一大イベントです。そのため参加者も多く、予選でまずある程度篩いに掛けます」

「俺やウィルは何だかんだで国の重鎮だ。シード扱いで一足先に本選に出る事になる」

「なるほど」

言われてみれば当然の話である。

「解った。そう言う事なら俺は予選から勝ち上がってくよ。エントリーはどこでやってるんだ？」

「街の広場で一般参加を受け付けています。僕が推薦出来ればいい

んですが、露骨な鼻屑になってしまっていますので……」

「ここまでお膳立てしてくれただけで十分だ。後で登録しに行つくよ」

明確な目標、目的が出来た今、やるべき事は沢山ある。

折を見てラックは応接室を後にしようと考えてるが

「そう言えば、ウィルのあの腕は一体何だ？ 俺は確かに奴の両腕を切り落としたはずだ」

ウィルの両腕の事を思い出す。

「あれは義手ですよ」

「義手？」

「簡単に言えば機械で作られた腕の事です。物にもよりますが、ウィルが付けていた義手はかなり性能の良い品のようです」

「レブルスにそんな技術あったか？」

全てを知っているとは言わないが、レブルスにそんな技術があるとは初耳だとラックは言う。

「いいえ、僕も見て驚きました。以前から検討はされてきましたが、実用に耐えうる義手の製作や移植の成功率の面から実例はなかったはずです」

ウィルがどういう経緯でその義手を手に入れたのかは解らないが、どちらにせよラックにとっては厄介な話であった。

「ラック、ウィルは強いぜ」

「ああ」

カマト村ではウィルと直接の戦闘は行わなかったが、ガーゴイルとの闘いで僅かながらに共闘した際、その実力が半端ではない事は読み取れた。

「あの時は不意打ちに近い形で奴の両腕を切断したが、もし本気でやりあえばどうなるか……」

正直な所、自信はなかった。

「大会は何時開かれるんだ？」

「三週間後です」

「そうか……」

ラックはそれを聞くとレブルス滞在中の宿泊先をランクに教え、
フェリアと共に応接室を後にする。

「……ラルス兄さん」

「ん？」

ラック達が去った後、ランクは今もソファーに座るラルスに話し
掛ける。

「兄さんはラック兄さんを王にする話をどう思っていますか？」

「……そうだな。ラックは確かに腕は立つし、自分自身の信念に従
って生きる意思の強さも持っている。だが正直な所、王としての資
質があるかどうかは俺には判断がつかないな」

「そうですか」

「ランク、お前は どうしてそこまでラックを王にしたがる」

「僕は……」

ランクはこれまでと同じ答えをラルスに言おうとするが

「そろそろ、実の兄にぐらいは本当の事を教えてくれないかいんじ
やないか？」

ラルスはランクの目を見ながらそう問い掛ける。

それは、一片の曇りもない人に何かを信じさせるような瞳だった。
思うに、ラルスの人望の厚さはその正直さや真っ直ぐさから来る、
人に何かを信じさせる純粹さなのだろう。

「……はあ、適わないな。兄さんには」

ランクは降参とばかりのリアクションを見せる。

「僕がラック兄さんに王になって欲しいと思っているのは本心です。
でも、それ以上に僕はテラ様から教えてもらったんです……運命を」

その言葉はここに至る過程でラックから聞いていた言葉だったが
「僕の運命、レブルスの運命、そして……ラック兄さんの運命を。」

僕は全てを知った上でラック兄さんこそが王になるべきだと思っ
ているんです」

ラルスはそのランクの言葉にこれまでに無い真剣な表情を見せる。

「なるほど、結局俺達はそついう運命なんだな」

「兄さん？」

その後、二人がどんな会話を交わしたのかについて語られる事は一切無かった。

だが、その会話がこの二人の兄弟の運命を変える大きな分岐点であつた事を、彼等は知る由も無かった。

レブルス中央広場。

武闘大会の受け付けを済ませ、二人は『白ヒゲ亭』へと戻ろうとしていた。

「はあ……」

「どうしたの？」

そんな中、大きな溜息をつくラック。

「いや、何か話がでくなつちまつたなあつて」

「仕方ないよ。ラックだってそれが解つて今回の提案を受けたんでしょ」

「まあな。ウィルと闘う事自体はこっちが望んでいた事だから別にいいんだが、問題は……」

「何、ラックはそんなに王様になるのが嫌なの？」

勝利した後の事を今から考えろというのも気が早すぎるというものだが、ラックにしてみればこれでは勝つても負けても自分の思い通りにならない事態になりかねない。

「嫌かと聞かれれば嫌だね」

「どうして？」

「理由は色々あるんだけど、王様になりたいって気持ちにならないつて言うか、なつても仕方が無いつて感じがあつて」

「仕方が無いつて事はないんじゃない」

「まあ、とにかくだ。俺は王になる気はないんだよ」

それなのにランクは自分を王にさせようと躍起になっている。

それをどう回避しようか考えるのも一苦労だとラックは言う。

「ラックはそんなにこの国が嫌いな訳？」

そんなラックを茶化すようにフェリアがそう言つと

「そんな事はない。俺はこの街が好きだ」

ラックはそれを否定する。

「あら珍しい」

ラックの性格を良く知るフェリアはそう驚きの表情を見せる。

ラックは嫌いな事は嫌いとはつきりと言うが、好きな事に関しては嫌いではないと言つた間接的な表現をよくする。彼が好きだと述べるものは例外なく本当に好きなのだ。

尤もそう表現する事が本当に少ないからこそ、フェリアはラックの言葉に驚いているのだ。

「何でかな、この国に來ると歸つて來たつて氣になるんだ。カラト村は静かで良い所だったけど、この国は何ていうかすごく居心地が いいんだ」

そう話すラックはどこか嬉しそつだった。

「……ふうん」

そんなラックを見て、露骨にそつ声を上げるフェリア。

「どうした？」

「別に、ラックがそんなにはつきり何かが好きつていうの珍しいなつて思つて」

「そつかな？ そつ……かもな」

フェリアのその言葉にラックは普通に返したつもりだった。

「……この馬鹿は」

ラックに聞こえるか聞こえないか程度の小さな声でそつ悪態をつくフェリア。

「何か言つたか？」

「何でもない」

「おい、何怒つてゐるんだよ？」

「私の勝手でしょ」

そんなやり取りをしながら二人が大通りを歩いていると

パツ……

日も落ち、暗くなり始めていた道が急に明るくなる。

「え、これって」

「蛍光灯だ。街の人達は単純に電気が付いたって表現するけどな」

蛍光灯の光。カラト村近くにあった遺跡内で見たあの光だった。

普通であれば周囲はもう暗く灯火がなければ歩けないはずであったが、蛍光灯の光は街全体を照らし、夜だというのに歩く事に不自由しなかった。

「すごい……」

蛍光灯の光によって照らし出されるレブルスの街。

昨日一昨日と屋内に居たため見る事が無かったが、カラト村では決して見る事の無いどこか幻想的なその光景に対し、フェリアは素直に感動の声を上げる。

「レブルスは機械都市だからな。街の至る所に機械が使われている」

「他にもあるの？」

「ああ、例えばあれ」

ラックが指差す先には、一人が入れるガラス張りの長方体の箱が置いてあった。

「あれは電話って言って遠くの人と会話をする事が出来る。あっちのあれはテレビって言って遠くの映像を映す事が出来るし、あっちのあれは……」

ラックは街の至る所にある機械を歩きながら一つずつフェリアに説明していく。

「ふえー、ラックって機械に詳しいんだね」

「ああ、この街の大半の機械に関しては知ってるな」

これはラック的にも自慢出来る事なのか、少々胸を張ってそう答えるが

「誰から聞いたの？」

「え？」

フェリアのその一言に少々間の抜けた声を返してしまう。

「誰かから聞いたんじゃないの？」

「……誰かから、聞いた？」

続いて、ラックは驚きの表情を見せる。

「違うの？」

「あ、いや、そう言えば何で俺こんな事知ってるんだろう。誰かから聞いた覚えは無いんだけど、何時の間にか詳しくなってるな」

「何それ？」

「さあ？ 多分レブルスに居る間に見聞きしたんだろ」

フェリアの言葉にそう結論を出し

「それより早く宿に戻ろう。そろそろ腹が減りはじめた」

ラックは宿へ戻る事を促す。

「そうね」

フェリアもその言葉に賛同し、二人は宿へと戻る足を速めるのであった。

この時、ラックはもっと真剣にその事に関して悩むべきであった。もしもラックがこの時にその答えに辿り着いていれば、きっとこの先の未来は……運命は変わっていた事だろう。

変わらなかった方が良かったのか、変わった方が良かったのか、それは誰にも解らない。だが、ラックは後に知る事になる。

ラック・ラグファースと機械都市レブルスの決して分かつ事の出来ない運命を……。

第十三章 『武闘大会開幕』

第十三章 『武闘大会開幕』

カランカラン……

ラックとフェリアが『白ヒゲ亭』の扉を開け中に入ると

『なっ！！』

そこには想像を絶する光景が待ち構えていた。

天を突くようなモヒカンに湾曲した白いヒゲ、カイゼルヒゲを生やした身長凡そ二メートルの筋肉の塊。そう、先日キャンプ場でラックとフェリアを襲ったあの化け物がカウンターの席に座っていたのだ。

その化け物は恐ろしい事に飲み物、おそらくミルクをちびちびと飲みながらオムライスを体格に合わない小さなスプーンで形を崩さぬようきれいに食べていた。

実に、異様な光景である。

そんな光景を前に、ラックとフェリアが絶句したまま固まっっていると

「ん、ああ、お帰り」

そんな二人に気付いたのか、店主がそう声を掛けてくる。

「マ、マスター？」

「ん、どうかしたかね？」

「そ、そこにいるのは一体？」

「ああ、コルボさんだよ。うちの常連さんだ」

『は、はあ……？』

とりあえず以前遭遇した時に感じた凄まじい殺気や敵意は感じられなかったが、身に染み付いた恐怖というのはなかなか拭えるものではなく、二人はやや迂回するように店内へと入っていく。

「二人とも一体どうしたんだい？」

「あ、いえ、実は……」

ラックは店主にコルボとの経緯を説明する。

「ああ、なるほど。そう言うことなら大丈夫、コルボさんはもう二人の事を襲いはしないだろう」

「え？」

それはどういう事だとラックが問う前に

「彼は記憶喪失なんだ。どうやらどこかで頭を強く打ったようで記憶を無くしていてね。更にそのせいで言語障害まで引き起こしている。とは言っても話せないだけでこっちの言葉は理解しているんだが」

「は、はあ？」

いきなりコルボの身の上話をされ、どう対応してよいかが解らなくなるラック。

「彼は記憶を失う前から戦う事を生業にしていたようで、医者が言うには戦う事によって記憶が戻る可能性があるらしい。そんな訳で彼は現在賞金稼ぎをやっており、日夜戦いに身を投じている。おそらく君に襲い掛かったのも君の賞金首の紙を見ての事だろう」

「そう、何ですか？」

ラックがそう問うとコルボは静かに首を立てに振る。

「ついさつき君の賞金が無効になったとの知らせが来た。つまり彼が君を狙う理由は無くなったって訳さ。彼は見た目とは正反対に普段は穏やかな人だよ」

そうは説明されてもいきなり「はい、そうですか」と納得出来るはずもない。

ここはあまり関わらない方が無難だろうとラックは判断し、離れた場所にあるテーブルに着こうとするが

「へえ、そうなんだ」

フェリアはそう声を上げカウンターの方へと歩いていく。

「私、フェリア・カストゥール。よろしくねコルボさん」

ズガンッ！！

久し振りの超重力が襲うラック。ラックの頭はそれは見事に店の床へと突き刺さったそうだ。

「……」

そんなラックを余所に、コルボはフェリアのその名乗りに対し無言で頷き返す。

「あ、そっか。言葉喋れないんだっけ」

そう言えばとばかりにフェリアはそう述べるが

「おい、フェリア!？」

「何、ラック？」

「お前は何で平然と会話を始めている!？」

「え、だって敵じゃないんでしょ」

「いやまあ、それはそうだが……」

「この店の常連だって言ってたし、武闘大会までの間ここで寝泊まりするなら嫌でも顔を合わす事になるじゃない。それなら早めに自己紹介しておいた方がいいかなって」

「いや、だからってお前な……」
忘れていた。

ここ数日は何かと非日常的な出来事が続いたため表に出なかったが、フェリアはフェリアでなかなか天然な性格だったのだ。

「あ、こっちはラック・ラグファース。って、賞金首の紙見たんだったら知ってるか。ほら、ラックも挨拶挨拶」

「よ、よろしく」

フェリアに促され、ラックはそう述べながら会釈する。

「ほう、武闘大会に参加するのかい？」

そんなやり取りを見ていた店主がそう尋ねてくる。

「ええ、成り行きで。さっき受け付けをしてきたところです」

隠す事でもないのでラックがそう答えを返すと

「じゃあ二人は再び敵同士になるって事か。いやはや因果だねえ」

「は？」

「コルボさんもその武闘大会に参加するんだよ」

「マジっすか……」

余り認めたくない事実だが、認めなくてはならない事実なのである。

「いいねえ、祭りの参加者が増える事は実に良い事だ」

「え？」

「最近のレブルスはどうにも活気がなかった。まあ、前国王が崩御されてから色々とゴタゴタが続いたせいなんだが、今回の武闘大会は国を上げての一大イベント、これを機に皆以前のレブルスを取り戻そうと盛り上がっているのさ」

「ああ、なるほど……」

今に至り、ラックはようやくレブルスの街が依然来た時より活気付いている理由に合点がいった。皆、様々な思惑はあれども今回の武闘大会を心待ちにしているのだ。

「何にせよ、うちの宿から大会参加者が二人も出てくれるって事は実に有難い」

「何ですか？」

「さっきも言ったが武闘大会は国を上げての一大イベントだ。当然大会の様子はレブルスだけじゃなく他の街でも中継放送されるし、上位入賞者は相応の褒美や権力が与えられる。加えて参加者の泊まっていた宿やらなんやらも宣伝されて、経営者としては嬉しい話なんだよ」

「なるほど」

実力者が泊まった宿や飲食店は良い店だと考える事も出来る。優勝者が出ようものならば、一目見ようと訪れる客が現れてもおかしくない。

「そう言う訳で二人とも頑張って上位に食い込んでくれよ」

「期待に添えるよう頑張ります」

店主のそんな励ましに対し、ラックはただそう述べるだけだった。

宿の一室。レブルス滞在中の自室にて

「……」

ベッドに腰を下ろし、ラックは一人考え込んでいた。

先程の店主の言葉に対し、ラックは「期待に添えるよう頑張ります」と答えた。いや、そう答える事しか出来なかった。

コルボにしてもラルスにしても、そしてウィルにしても、ラックは勝てる断言出来ないでいる。闘いに絶対は無いが、ラックには先に述べた三人に絶対に勝つ自信は無かった。

勝つ意思はある。だがそれを実現する実力が今の自分にあるのかと問われれば答える事が出来ない。

「（……今の上までは駄目だ）」

ラックはレブルスに来るまでの旅の道中で様々な事を考えていた。裏山に向かったあの時から今に至るまでの過程で、自分に何が出来たかの可能性についてを。考えれば考えるほど最終的にある一点に行きつく事となる。

それは力だ。

理想や願いを実現させるためにはまず力が必要なのだ。今の自分にはその力が足りていない。

「（御霊や真眼は不安定すぎる。何時発動するか解らないものを頼る事は出来ない。少なくとも、三週間後の武闘大会でウィルに勝つだけの力を……俺は身に付けなくてはならない）」

そのために何が必要かも解っている。

「（後の問題は……）」

ラックの中で結論が出そうになった時

コンコン……

扉が小さく音を立てる。同時に

ガチャ……

「ラック、私だけだ」

扉を開け、フェリアが中に入ってくる。

「返事聞く前に開けたらノックの意味ないだろ。まあ、ノックする

だけまだましだが……」

フェリアの行動にそうツツコミを入れるラック。

「あはは、ごめんごめん」

どうにも、フェリアにはノックをすると言う習慣がないらしく、昔から返事を聞く前にこうやって扉を開けて入ってきてしまう。だと言うのに、鍵を掛けた日には文句を言われるのだからやってられないとラックは述べるのであった。

「それで、どうしたんだ？」

時刻はすでに日付が変わるかどうかと言う時間であり、何時ものフェリアであればとくに眠りにについているはずだ。

「んー、ラックさ。しばらく特訓したいとか考えて無い？」

「え？」

フェリアの言葉にラックは驚きの表情を見せる。

「あ、やっぱり」

そんなラックの表情を見てフェリアは予想的中とばかりにその声を上げる。

「何か最近悩んでるみたいだったからさ。私なりにその悩みを推理してみた訳ですよ。んでもって、その話をどう私に切りだそうか悩んでた……とか」

「……フェリアには敵わないな」

どうやらこちらが考えていた事は完全に予測されていたようだ。

「別にいいわよ。特訓しても」

「いや、けど……」

「私の事なら心配しないで、実はラルスにボディガード頼んでるの」「ラルスに？」

「府抜けが相手じゃ面白くない。鍛え直して来い……だってさ」

「あいつにも見抜かれているのか」

カラト村滅亡後、ラックはフェリアを守ると誓った。

そのため、一にも二にもフェリアの安全を優先に考えてきたのだが、結局自身の実力の無さを突き付けられるだけで何も出来なかつ

た。

自身を鍛えなおさなければならぬ。そのためには時間が居る。だが、その隙にフェリアに何かがあったらどうする。

そんな思考のループを、ラックの問題をフェリアは解決したのだった。

「私、弱いラックは嫌いよ」

「ああ、ありがとうフェリア」

フェリアのその一言がラックを叱咤し励ます。

ラック・ラグファースはフェリア・カストゥールのために強くなる。

その言葉一つだけで、ラックは更に強くなると言う意思を持てた。

三週間後。

レブルス城、騎士団修練場。

何時もであれば騎士達がその身を鍛えるための場所であるのだが、その日に限り武闘大会の予選会場となっていた。

「すごい人だな」

予選会場を見渡しながらラックはそう驚きの声を上げる。

会場にはすでに大勢の人が集まっており、見渡す限り人で覆い尽くされていた。

「……」

参加選手達を見渡すラック。

ピンからキリまで実力様々な選手達があり、予選が始まるのを今か今かと待ちわびている。

「（しかし、予選方法がまだ説明されていない……）」

大会運営の人に連れられるまま予選会場に足を踏み入れたが、未だ選手達には何の説明もされていなかった。どうやって予選を行うのだろうと考えていると

『あー、選手の皆さん。これよりアベル王鎮魂祭、レブルス武闘大

会の予選を開始致します」

会場中に行き渡る大きな声が聞こえて来る。

その声は異常に大きく、見れば仕官と思われる人物は円錐状の筒を持って喋っており、どうやら声を大きくする機械の一種であるようだ。

「ルールは簡単です。現在本選の空き枠は十四枠あり、その十四枠をこの予選で決めるのですが、一戦一戦やっていたのでは日が暮れてしまいます。よって、この場に居る全員でバトルロイヤルを行って頂き、最後に残った十四人を予選通過としたいと思います」

「（また随分とアバウトな……）」

正気かと疑いたくなるような内容であったが、レブルスではこれぐらい当たり前であるらしく、選手達は皆そのルールに異論を唱える事はなかった。

「武器、防具、呪法。毒等の大量殺戮道具を除くあらゆる道具の使用を許可し、一切の反則を設けません」

つまり、基本的に何でもありと言う事らしい。

「では、これよりレブルス武闘大会の予選を開始致します……始めっ……！」

「うおおおーっ……！」

仕官の開始の言葉と同時に予選会場は戦場と化した。

そもそもレブルスは実力式階級制度の国。皆が皆、己の実力には自信を持っている。そんな者達が相手の出方を伺うなどという消極的な方法を取るはずもなく、基本的にはまず隣人を倒し、それを倒したらその先の者を倒す。そんな感じで予選会場は瞬く間に戦場と化したのだった。

ラックもその例外ではなく、すぐ隣の選手が剣を振り切り掛かって来ようとしていたが

バチッ、バチバチバチ……

ラックの右手に稲妻が走る。

「迅雷っ……！」

襲い掛かってきた選手をなぎ払うように腕を振るうと、ラックを中心に稲妻は広範囲に駆け巡り、あっという間に周囲に居た数十人の選手を無力化する。

呪法は先天的な適性が無ければ学ぶ事も使用する事も出来ず、適性があったとしても使いこなせる者はそうは居ない。そのため呪法を使える人間の数は少なく、呪法に対する対抗手段を知っている者はもっと少ない。

呪法は文字や文章を構築する事によって世界に干渉する技ではあるが、その文字や文章は物理的なものではなく人の精神力によって成り立っている。つまり、呪法とは人の意思の力が具現化したものだと言える。

意思の力が具現化したものであるならば、それに対抗出来るのはこれまた意思の力のみである。簡単に言えば「この技で倒れる」と言う意思に対し「そんな技が効くか」と言う意思で対抗すれば呪法の効果は薄まるのだ。図式として簡略化すればそんな感じではあるのだが、実際にはもっと様々な要素が複雑に入り組んでいる。

当初の話に戻るが、呪法は使用者が少なくその対抗手段を知る者も少ない。こう言う場においては広範囲の呪法は効果が絶大であり、一対一で闘っていくよりも余程効果的であると言える。

ドオン、ガガンツ！！

会場の至る所から爆発音が聞こえてくる。どうやら他にも呪法を仕える者が複数人居るようだ。

「（予選は様子見だな……）」

最終的に十四枠の一つに入れば当初の目的は達成される。

ここで強敵と闘って無理にリスクを負う必要はない。そうラックは考えていた。

消極的な考えだと非難されるかもしれないが、乱戦時で一番恐ろしいのは横槍が入る事だ。

特にラックの使う技はどれも一対一でこそ最大の効果を発揮するものばかりで、一対多数の状況はマイナス要素が大きすぎる。

そんな訳で出来るだけ乱戦を避けようとするが、そんな心配もすぐに杞憂と終わる。

『そこまでっ！！』

開始の言葉を述べた仕官が今度は終了の言葉を述べる。

ラックが四度目の呪法を使用した辺りで、戦闘可能な選手は十四人を割ろうとしていたのだ。

『戦闘を中止して下さい。これより審議に入ります』

十四人を割った場合は再選考を行わなくてはならない。それを回避するため十四人以上大勢未満の状態で本選に出場出来る選手を審議しようと言う事なのだろう。

『本選出場者を発表します。名前を呼ばれた方は説明と手続きを行いますので仕官の指示に従ってください』

程なくして、その審議結果が発表される。

その中にラックの名があった事は当然と言えば当然と言えただろう。

予選後、必要な書類に記入とサインを行ったラックは本選会場の控え室へと案内された。

本選会場はレブルス城の中央に存在する大闘技場。

レブルス国は基本的に街自体が円状に出来ており、レブルス城はその中心に位置している。大闘技場は更にその中央に位置し、実力式階級制度のレブルスを名実共に象徴する場所だった。

控え室は選手の数分だけ用意されており、ラックがその一室に入ると

「よお」

待ちわびていたかのように、部屋の中に居たラルスが声を掛ける。

「予選はどうだった？」

「面白そうな奴が結構いたよ」

面白そうな奴と言うのはこの場合強そうな奴と言う意味である。

ラックが見る限り、コルボを筆頭に一癖二癖ありそうな者達が本選への出場を果たしていた。

「……へ、大分マシになったみてえだな」

ラルスには今のラックが三週間前とどう違うのかが解るのか、嬉しそうにそう述べる。

「お陰様でな。フェリアの事、悪かったな。恩に着るよ」

「何、府抜けが相手じゃ面白くないだろ」

「言ってくれるぜ」

「……まあ、お嬢ちゃんの相手はもう勘弁だ。骨が折れる」

「ははは……」

ラルスの言葉に笑うラック。

「ところでそのお嬢ちゃんはどうした？」

「予選会場に入る前に別れた。観客席に居るはずだが、そう言えばどの辺りに座っているか聞いてなかったな」

「そうかそうか……」

そのラックの言葉にラルスは不敵に笑う。

「何だよその笑いは？」

「いやなに、幼馴染の女の子をもう少しは構ってやった方が良かったんじゃないかと思つてな」

「は？」

ラルスが何を言いたいのかが解らず、ラックは頭にクエスチオンマークを浮かべる。

「何々、すぐに解るさ」

「はあ？」

尚も意味が解らず、ラックがクエスチオンマークを連発させていると

『選手の皆様、お集まりくださいっ!!』

仕官の大きな招集の声が聞こえてきた。

大闘技場。

会場は大いに盛り上がっていた。

観客席の観衆もさることながら、会場の様子を各街に中継するだけでなく、各街の様子までもが巨大なモニターに映し出されており、双方向で中継されていた。その光景は首都レブルスだけでなく、レブルス国全体が盛り上がっている事を見せつけるようであった。

『皆さんこんにちは』

そんな会場に声が響く。

『歴史に名を残すであろう今回の武闘大会の司会進行を任されましてフレケンシーと申します。試合が始まる前に皆さまに今一度ルールを説明致します』

試合は一对一のトーナメント方式。

武器、防具、呪法、毒等の大量殺戮道具を除く全ての道具の使用を許可し、反則行為は特に設けられない。試合は相手が戦闘不能になるか負けを宣言するまで続けられる。

『皆さんご存じの通り、今回の武闘大会はただの大会ではございません。今大会は前国王アベル・クラウド様の鎮魂祭であり、大会優勝者には次期国王候補として正統な資格が与えられます。その辺りを今回ゲストを務めて頂きます国王代理ランク・クラウド様にご説明頂きましょう』

『どうも、ランク・クラウドです』

紹介され、ランクは静かにそう名乗る。

『前国王である祖父が亡くなってから、私は国王代理を務めてきました。何故代理なのか、その事を疑問に思った人も多かった事でしよう』

ランクの言葉通り、国民の多くがランクが王を名乗っても良いのではないかと考えていたが

『私が何故王とならなかったのか、それは私が王に相応しくない人物であるからです』

ランクはそれを否定する。

『何故ならば、レブルス国の王はレブルス国で最も強い者になるべきだからです。そう、レブルスで一番強い者こそがレブルスの王に相応しい』

ランクのその言葉に国民の誰もが静かに同意する。

『私はここに断言します。今大会の優勝者は次期国王候補などではなく、今大会の優勝者は……この国の新しい王になるべき者であるとっ！！』

『おおおおーっ！！』

歓声を上げる観客達、モニター越しに他の街の人々も同じように歓声を上げているのが解る。その光景はまるでレブルス全土が震えているようであった。

『ここにアベル王鎮魂祭、レブルス武闘大会の開始を宣言しますっ！！』

場の盛り上がりは最高潮に達していた。舞台は整ったと言わんばかりである。

『これより一回戦第一試合を開始します。ラック選手、リュウ選手、入場して下さい』

司会者に名を呼ばれ、闘技場にラックとリュウと呼ばれた男が姿を現す。

一見して、リュウはただの青年のように見えた。唯一違う点と言えばその耳、彼の耳は文字通り人と違いややとがっており、それは彼がエルフ族である事を意味していた。

無言で闘技場上がる二人。

この場において会話は不要。相手が人間だろうがエルフだろうが今のラックには関係ない。

『それでは一回戦第一試合、……始めっ！！』

司会者の開始の言葉と共にラックは剣を構える。

ラックが剣を構えるのに対し、リュウは何の行動も見せようとしなかった。

『リュウ選手動きませんね。相手の出方を伺っているのでしょうか？』

『おそらくそうでしょう。エルフ族は種族的に接近戦を苦手とし呪法を得意とすると言います』

司会者とランクがそう言葉を交わすが、動きが無かった訳ではない。

リュウの周囲に呪法が展開されようとしているのがラックには解っていた。膨大な文章量である。決まれば防ぐ事が叶わないぐらい強力な呪法。その呪法が今まさに発動しようとしていたが

ダッ！！

ラックが一步を大きく踏み込む。

呪法が発動する前に相手を叩こうとしているのは見え見えだった。リュウもそれに気付き呪法の発動を速めようとするが

ヒュッ！！

次の瞬間、リュウが立っていた場所にはラックの姿があり、リュウの体は宙を舞っていた。

そして半瞬遅れて

ドオオオオーンッ！！

ラックの先程まで立っていた位置に巨大な爆発が巻き起こる。

『お、おおっとお！？ これは一体何が起こったのかっ！？』

リュウの体はそのまま闘技場外まで吹き飛ばされ、彼は意識を失っていた。

『先程のシーンを再生してみましよう』

闘技場に設置されていた巨大なモニターに先程のシーンがスローモーションで再生される。

すると、ラックが一步踏み込んだ次の瞬間、ラックの体が高速で動き出し、あつと言う間にリュウに近づいて掌底を叩きこんでいた。

『これは、凄まじい速さです』

スローモーションの中のラックは、まるで一人だけ違う時間の流れの中に居るかのように行動していた。それを実際の速度に直した場合、それは常識では考えられない高速移動となる。

『何らかの呪法によるものと考えられますが、これでは闘っていたリュウ選手自身、何が起こったか自覚する暇は無かったでしょうね』なるほど、それでリュウ選手は自分が既に吹き飛ばされている事に気付かず、無意識に使用していたと言う事ですか』

『これはリュウ選手を責めるのではなくラック選手を褒めるべきでしょうね』

どのような経緯であれ、リュウが戦闘不能な状態である事は誰の目から見ても明白だった。

『一回戦第一試合はラック選手の勝利です!!』

司会者の言葉にラックは腕を突き上げ、ガッツポーズを見せる。

何だかんだと不平不満を口にしたが、ラック自身こう言った場が嫌いな訳ではなく、腕を競ったりする事も嫌いではない。勝利を前に喜びを感じるのも当たり前だと言えよう。

勝利を告げられ、ラックが控え室に戻る途中

「（ん？）」

次の選手とすれ違う。

女性だった。年齢はおそらく二十代後半、この大会に性別や年齢の制限は無いし、女性の参加者がいたとしても不思議ではないのだが、長い金髪とその実に女性らしい体付きには異性で無くとも目を引くものがあつた。

「（呪法師……かな？）」

木製の杖のような棒を持っているが、見た感じ近接戦闘タイプではない。

呪法師であるならば見た目でその実力は判断出来ないが、何かが引っ掛かる。

「（何だろう、どこかで会った事があるような……）」
所謂既視感と言っちゃった。

確たる証拠がないので何とも言えないが、ラックには何となくこの女性が次の対戦相手になるだろうと思えて仕方がなかった。

「よお、何だよさっきのあれ、何時の間にあんな技身に付けたんだ？」

控え室に戻るとラルスがそう問い掛けてくる。

どうやら先程ラックが見せた高速移動の説明を求めているようだ。
「この三週間の間にだよ。カラト村で無意識に一度やった事があったんだが、最近ようやく意識的にやれるようになってきた」

「へえ、あんなに早く動かれちゃ堪ったもんじゃないな」

「そんなに自由度の高い技じゃないさ。いや、あれはとても技とは呼べないな」

ラックが言うにはあれは単に高速で移動しているだけであって技ではないらしい。

「あえて名付けるなら超加速って所か。予め自分の行動を計算して呪法で動きを加速させているだけなんだ。だから咄嗟に発動させたり、相手が動き回ってたりすると使えない。まあ、修練次第では出来るかも知れないが」

今はそれが精一杯だそうだ。

「おいおい、いいのか？ そんな事を俺にペラペラ喋って」

「いいさ、ラルスに使う予定の技じゃないからな」

リュウのような間合いを取って闘うあまり動かない呪法師用に会得した技だとラックは言う。

「ん、って事は対俺用の技何かも用意してるのか？」

「勿論」

「そいつは楽しみだ」

ワクワクしてきたとばかりにラルスはそう声を上げる。そうこうしている間に

『一回戦第二試合を開始します。アリシア選手、ミック選手、前へ』

次の試合が始まろうとしていた。

二人はその勝負を控え室から見ていたが、勝負は僅かに数十秒で決着が着く事となる。

ミックと呼ばれた選手が始めに剣で襲い掛かるのだが先程の女性、アリシアはそれを杖で回避。

数度切り合った後にミックが距離を取り呪法を使用するが、ミックの呪法によって生み出された爆炎は、アリシアを襲う所か彼女の生み出した火球に全て吸収されてしまい。

爆炎を吸収した火球はミックを一撃の下に倒すのであった。

「（すごいな……）」

驚くべき点は二つある。

まず剣と杖が切り合った所。通常であれば木製の杖で鉄製の剣を受け止める事は不可能だ。だがアリシアは杖をおそらく呪法で強化しており、それを見事に操っていた。これは呪法の精度が高い事を意味している。

そして爆炎を飲みこんだ火球。炎が炎を飲みこむ現象は自然界ではそれほど珍しくない現象ではあるが、それは自然界の話であって実際には呪法と呪法のぶつかり合いだ。相手の呪法を全て吸収する呪法などと言うものは、口で言うのはともかく実現するとなると非常に困難である。

アリシアが凄腕の呪法師である事は疑い様が無いだろう。

ラックがどうやって闘うかを考えている内に試合はどんどん進んでいった。

「（改めて見ても、強敵だな……）」

ラルス、コルボ、ウィルの相手は何れも腕の立つ者達であったが、彼等はそれを物ともせず勝利を収めた。

「（それにしても、ウィルと当たるのは決勝か……）」

トーナメント表を見て、ラックはその事実に気付く。ラックの相手は次の試合でアリシア、順当に行けば準決勝でラルス、決勝戦でウィルかコルボと当たる事となる。そう、ウィルはコルボと準決勝

で闘う事となるのだ。

「（どっちが勝っても無傷と言う訳にはいかないだろうな。最悪ウィルが負ける可能性もある。……いや、ウィルの勝利を願うのも妙な話だ）」

自らの手で決着を着けたい気持ちはあるが、だからと言ってウィルの勝利を願うのはおかしい。

「（……とりあえず、当面の問題はあのアリシアって女呪法師か）」
ラルス、コルボ、ウィルは何だかんだである程度の情報を得ているが、アリシアに関しては先の一戦を見ただけだ。対策を練るうにも情報が不足していた。

「（けど、やはり何かが引つ掛かる）」

先程すれ違った時も先の試合の時も、ラックは何かが気になっていた。

「（この引つ掛かりが解れば何か有効な手が考えられそうなんだが……）」

残念ながら時間は待つてはくれず、気付けば一回戦が終わり二回戦が始まるうとしていた。

『それでは二回戦第一試合を開始したいと思います』

『ラック・ラグファース選手対アリシア・ロードカオス選手ですね』
闘技場にて向かい合うラックとアリシア。

『二人のプロフィールを見る限りでは戦闘スタイルは似た感じとなつていますね。ただラック選手は呪法より接近戦を、アリシア選手は接近戦よりも呪法を得意としているようですが』

『一回戦ではお互いまだまだ手の内を明かしていない印象がある二人だけに、その闘いぶりに期待が寄せられます』

余談ではあるが、二回戦からは選手の呼び方がフルネームとなったり、希望すれば個人プロフィールが紹介されるなど、勝利者に対する扱いや対応が格段にアップする。その辺りは実力式階級制度の

レブルスらしいシステムである。

『それでは二回戦第一試合、始めっ！！』

司会者の開始の合図を受け

チャキ……

剣を構えるラック。

「（さて、剣を構えた所でどうしたものか）」

どうしようかと手段を考えている訳ではない。どうしたものか
方法を考えているのだ。

「（まさか女相手に剣を向ける事になるとはなあ……）」

勝負の最中に相手の事を気遣う余裕がある訳ではないのだが、ラ
ックにとって女性を切ると言う行為はなかなか抵抗がある行為で
あった。

「……女相手はやり辛い。そう思っているでしょ」

「なっ……」

そんなラックの心境をアリシアは的確に言い当てる。

「そのフェミニスト精神は嬉しいけど、それは女を馬鹿にしている
のと一緒に」

「そんな事考えてないさ」

「いいえ、考えているわ」

アリシアがゆっくりと動いたかと思うと

フッ……

次の瞬間、彼女の姿が視界から消え

「だから隙だらけ」

後ろから声が聞こえてくる。

「っ！？」

ギンッ！！

咄嗟に振り向き、アリシアの杖を剣で受け止めるが

「爆っ！！」

ドオンッ！！

杖の先端が爆発を起こし、超至近距離の爆発がラックの身体を吹

き飛ばす。

「ぐっ!!」

ズザッ!!

吹き飛ばされながらも体勢を立て直し着地するラック。

『おおっとお、これは意外にもアリシア選手の方から接近戦を仕掛けてきたあ』

『空間転移系の呪法による接近戦、そしてほぼ零距离からの呪法攻撃、見事な連携攻撃です』

爆発の衝撃で耳鳴りするラックの耳に、そんな司会者達の言葉が聞こえてくる。

「(……まともに食らえば吹き飛ぶぐらいじゃ済まない)」

爆発の瞬間、ラックは防御呪法を使用していた。そうでなければ耳鳴りで済むはずがなかった。

「どう、これで少しは本気になってももらえるかしら？」

「ああ、非礼を詫びるよ」

女だからとかそういう理由で手を抜いて勝てる相手ではなさそうだ。

「しかし随分と優しいんだな。さっきの一撃、声を掛けなかったら当てただろうに」

「油断している相手に勝っても嬉しくないじゃない。今のはサービスよ」

「ご親切にどうも」

「いえいえ」

フッ

またもアリシアの姿が消え、ラックの後ろに現れる。

アリシアは先程と同じように杖を突き出すが

ギンッ!!

ラックはその杖を剣で完全に受け止める。

「あら？」

「流石に同じ手は通じないさ」

ブンッ！！

ラックは受け止めた杖を力任せになぎ払い、アリシアの体を宙に浮かせる。

アリシアの体はそのまま空中を三メートルは移動し

ダンッ！！

そんなアリシアを追い掛けるようにラックは地を蹴る。

ギン、ギン、ギン！！

三度、火花が散る。

接近戦ではラックに分があるのか、一撃毎にアリシアは後退を余儀なくされる。

「くっ！！」

四度目の斬撃がアリシアを襲うとした時
フッ

再びアリシアの姿が消え、アリシアの体は中央へ移動した。

「はあはあはあ……」

見れば、アリシアの息は上がっていた。

「（……まるで付け焼き刃だ）」

アリシアは接近戦が得意ではない。

得意ではないと言うよりは呪法のおまけで接近戦を行っているような印象をラックは受けていた。その証拠に、先程のラックの斬撃によりアリシアの体力はすでに底を尽きようとしている。

接近戦の心得があるものであるならば流石にそこまでの消耗はしないはずだ。

「（それにあの転移呪法、あれは……）」

呪法は発動の際に空間に文字や文章が浮かぶ、それは呪法師にか見えない存在ではあるが、呪法師毎に独特の構成がされているものだ。

一度目と二度目は気付かなかったが、ラックはアリシアが使った転移呪法に見覚えがあった。

「くっ……！！」

であつた。

「フェリア、お前こんな所で何やってるんだ？」

その言葉に、観客席を含め闘技場の全員がクエスチョンマークを浮かべる。

「なっ……！！」

そんな中、ただ一人アリシアだけが驚きの表情を見せていた。

「どれもこれも見た事ある呪法でおかしいとは思ってたんだよ。それで今の呪法だろ。気付かない方がおかしいって」

「ち、違う。私は……っ！！」

アリシアはラックの言葉を否定しようとするが

「その格好ももういい」

キーン……

一閃、ラックが剣を振るうと同時に

ブワッ！！

まるで風によつて煙が散るが如く、アリシアの姿が変化する。

そこには肩に掛かるぐらいの薄紅色の髪と瞳をした少女、フェリアが立っていた。

『これは一体どういう事でしょう。アリシア選手の姿が突如少女へと変わってしまった』

『いえ、これは変わったのではなく元に戻った。呪法によつて姿を変えていたと思われます』

司会者二人のそんな言葉を余所に

「フェリア、一体どう言うつもりなんだ？」

ラックはフェリアにそう問い掛ける。

「……ラックと闘いたかったのよ」

「は？」

「全力でラックと闘いたかった。こうでもしないとラックは私と闘ってくれなかったでしょ」

フェリアの言う事は的を射ていた。

確かにこんな状況でもない限り、ラックはフェリアと本気で闘お

うとは、いや、闘おうとすらもしなかったらう。

「どうして俺とお前が闘う必要があるんだよ？」

ラックにしてみれば当然の疑問であつたが

「私が……ラックに勝ちたいからよっ！！」

フェリアはそう叫ぶと渾身の力を込めて印を組む。そして

「大火球っ！！」

フェリアの発動の言葉と共に、フェリアの頭上に直径三メートルの巨大な火球が現れる。

火球は更に増大を続けており、その威力がどれ程のものなのかはそのサイズから容易に推察出来る。

「止せフェリア、そんな呪法を使えば観客に被害が出るぞっ！！」

「なら、ラックが私を止めて見せてっ！！」

フェリアはラックの制止を聞かず

ブンッ！！

その火球をラック目掛けて放つ。

火球はその巨大さからか、先程までの火球とは違いゆっくりと移動を始めた。

「く、この馬鹿はっ！！」

それを見たラックは地面に剣を突き刺し

バチ、バチバチバチッ！！

「爆雷っ！！」

その火球に対抗するかのようにな腕に稲妻を溜め、巨大な稲妻を打ち出す。

ゴゴゴゴ…… オッ！！

互いの呪法が闘技場上で接触し、ぶつかり合い、拮抗する。

その余波は闘技場の至る所に現れ始め、地面が砕け強烈な風が巻き起こる。

『ぐっ……！！』

呪法は意思の力が具現化したものだ。それがぶつかり合い、拮抗していると云う事は両者の意思が互角である事を意味している。だが

グ、グググ……

徐々にはあるがラックが押され始める。

彼の心に迷いが生じ始めたからだ。

フェリアは敵ではない。本気で闘う理由も解らない。そもそもフェリアと闘うなどと言う状況がありえない。そんな考えがラックの意思を弱くし始めていた。そんな時

「ラックッ!!」

拮抗する呪法を挟み、相対しているフェリアの声が聞こえた。

「本気を出して、私を倒して見せてっ!!」

「な……」

何を言っているのだと、ラックは思う。

本気で闘えと言った後に、自分を倒して見せるなどと言われればそう思いたくもなる。

「私を倒せないで私を守るなんて言わないで、私を守ってくれるラックは私より強くなくちゃいけないの。ラックは私がどうあがいても勝てないの。私はそんなラックを倒してみせる。今日こそ私は、ラックを超えてみせるっ!!」

「フェリア……」

言っている事が出鱈目だった。

ラックは知っている。フェリアは子供の頃から迷ったり悩んだり追い詰められたりすると後も先も解らずに感情のまま行動する事があった。

癪癪を起こすとかそういう事とはまた違い、そういう時の彼女は理屈や理論を無視して自分の感情に素直に従うのだ。

ラックはそれを感情が爆発すると表現している。

だから、今のフェリアは何かしらの感情が爆発して暴走している状態なのだ。

そして、感情の爆発はその思いの強さに比例する。

フェリアが今どんな思いを抱いて自分と闘っているのが気になるラックだったが

「だって私は、私は……！！」

彼はその答えをすぐに知る事となる。

「ラックの事が、好きなんだからあぁっ！！」

「っ！？」

答えを知り、ラックは一瞬愕然とする。

ああ、彼女を追い詰めたのは自分なのだ……と。

思い当たる事は多々ある。小さな小さな積み重ねが今日に至りフエリアを暴走させたのだ。

「ラックウウウッ！！」

フエリアの感情の爆発はその思いが強ければ強いほど強くなる。

今のフエリアの呪法の凄まじさはそれを体現しているのだ。ラックはその思いに答えなければならぬ。

「フエリアアアッ！！」

グッ！！

足を踏ん張り、両手を突き出し、力を込め、全身全霊後先考えずに力を振り絞る。すると

ドオオオオオーンッ！！

ぶつかり合っていた呪法が弾け周囲に飛散する。

飛散した呪法はその威力を拡散させただけで、闘技場の至る所で爆発が巻き起こる、そして

「きやぁっ！！」

その爆発の一つに巻き込まれ、フエリアの体が宙に舞う。

咄嗟に防御呪法を張り直撃は免れたようではあるが、強力な呪法を使用した直後と言う事もあり、宙を舞うフエリアの体は自由に動かず不安定な体勢だった。

そのまま地面に叩きつけられただでは済まない。会場でその様子を見ていた観客の誰もがそのまま地面に叩きつけられるものだと思っていたが

トスッ……

その体が地面に叩きつけられる事は無かった。

寸前で、ラックがその体を抱き止めたのだ。

『…………』

弾けた呪法の爆発も収まり、会場は静まり返っていた。

荒れ果てた闘技場の上で少女を抱く少年の姿は、人々の心に何かを刻み込む。そんな中

「さて、まだ闘うか？」

ラックはフェリアにそう問う。

「…………ううん、参った。降参よ」

その問いに対し、フェリアは首を横に振りながらそう答えを返した。

「…………えーっと、そう言う事らしいです」

ラックはその返答を聞き、司会者に向かってそう声を掛ける。

『え、あ、はい。それではアリシア選手、あー、いえ、フェリア選手の試合放棄とみなし、二回戦第一試合はラック選手の勝利です……！』

『わあああああーっ……！』

静まり返っていた闘技場に歓声が上がる。大歓声だ。

『いやはや、私今だ状況が飲み込めていないんですが、とにかく素晴らしい闘いでしたね』

『ええ、両者の強い思いのぶつかり合いが生み出した良い闘いだっ……』
たと思います。これで二人の関係も多少は進展する事でしょう』

『おや、ランク様はお二人の事をご存じなんですか？』

『人伝で聞いた程度ですが、それなりに複雑な関係であるようです』

『なるほど、と言う事は今回の試合はレブルス史上始まって以来の壮絶な痴話喧嘩だったと言う訳ですか』

司会者のその一言に会場の至る所で笑い声上がる。

後にこの一戦はレブルス最大の修羅場とも呼ばれ、武闘大会の歴史に名を刻んだとか刻まなかったとか。とにもかくにもこの一戦を契機にラックとフェリアの名、そしてその関係はレブルス全土に広まったのであった。

夜。

ラックとフェリアは『白ヒゲ亭』へと戻っていた。

結局、二人の一戦により闘技場はほぼ全壊してしまい。後の試合は明日へ持ち越される事となった。そんな訳で二人は闘いによって疲れた体を癒すために『白ヒゲ亭』へ戻って来たのだが

『ははっ！！』

そこでは宴会が繰り広げられていた。いや、大宴会と称した方が適切だろう。

理由は以前にも述べた通り大会勝利者が利用した施設であるためだ。敢えて更に理由を述べるならば、先のラックとフェリアの一戦のせいである。

あの一戦を見てラックとフェリアに興味や共感を抱いた多くの人々が大挙して押し寄せ、飲んで食って騒いで踊っての大宴会が始まったのだ。

当然、宴会の主役はラックとフェリアであり、二人は休むことも叶わず今に至るまで宴会に付き合わされている。

ちなみに余談ではあるが、レブルスは実力式階級制度と言う制度だけでなく国自体がお祭り好きである事でも有名であった。そんな国であれだけ派手な事を二人はやったのだ。お祭り騒ぎになるのは仕方がない事だと言えるだろう。

そんな二人が宴会から解放され、話せる状態となった頃には日付が変わろうとしていた。

「ふう、賑やかなのは嫌いじゃないが、レブルスは相変わらずだな」
「どうやらラックは経験者であるらしい。」

「でも、みんな良い人ばかりね」

「ああ……」

一緒に飲んで食って騒いで踊れば大体はどんな人かが解る。

少なくとも、先程の宴会に参加していた多くの人達は、純粹に二

人に会いたいと言う一心で集まってくれた人達ばかりだった。

「……ごめんね。ラック」

「何で謝るんだよ」

「私、ただラックの傍に居ただけなの。大会で優勝したらラックは王様なるかもしれない。そうなったら私はただの一般市民で、ラックが遠くに行っちゃうような気がして、そう考えたらじっとしていられなかった。ラックを困らせるつもりなんて本当になかったの。ラックは私を守ってくれるって言うてくれたけど。私、本当はラックを守りたかった」

「フェリア……」

フェリアの言葉にラックは返す言葉が見つからなかった。

いや、言いたい事は沢山あったのだが、どの言葉を選んでも多分言い訳にしかない。

「だからお願い、私にも誓わせて」

ラックが自分に誓ったように、自分にも誓わせてくれとフェリアは言う。

「私はラックを守る。何があってもラックを守るから。ずっと……傍に居させて」

それが、ラックによって運命を変えてもらった少女の唯一の願いであった。

「……解った。フェリアの運命は俺が変えたんだ。だったら俺にはフェリアの運命を変えた責任を取る義務がある。その責任を果たせるその日まで、ずっと俺の傍に居てくれ。そして、俺に何かあった時は俺を守ってくれ、フェリア」

「うん……」

ラックの言葉にフェリアは嬉しそうに頷いた。

一方的な関係ではなく、互いが互いを守り合える関係になろう。そう、二人は誓い合うのであった。

第十四章『蘇るレブルス』

第十四章『蘇るレブルス』

翌日、武闘大会控え室。

「よお、おはようお二人さん」

ラックとフェリアが控え室に入ると同時にラルスがその声を掛けてくる。

「どうやらちゃんと仲直り出来たみたいだな」

「喧嘩していたって訳じゃないからな」

ラルスの言葉にそう答えを返すラック。

「聞いたぞ、フェリアに杖術教えたのお前だつて、まったく、三週間の間何やってたかと思えば」

ラックが付け焼き刃と称したフェリアの杖術は、大会までの三週間でラルスが教えたものだと言う事が判明した。

「おいおい、俺は言っただろ。お嬢ちゃんの相手は骨が折れるつていやあ、意外に筋がよくてびっくりしたぜ。まあ、体力の無さは三週間じゃどうにもならなかったがな」

どうやら文字通り骨が折れるような特訓に付き合わされていたようだ。

「それにしも、ようやくこれでお前と心おきなくやりあえるな」

「そう言う台詞は次の試合に勝つてから言えよ」

間もなく二回戦第二試合が始まる。そこでラルスが勝てばラックとの対戦が実現する事となる。

「へ、待ってる。すぐに決着つけて来てやるから」

そう言い残し、ラルスは闘技場へと足を運ぶ。

「さて、俺の出番はどの道三試合後だし、のんびり試合観戦といきますか」

これからの三戦は何れもラルス、コルボ、ウィルが闘う。見てお

けばそれだけ対策の幅が増えるだろうと思い、ラックは闘技場の見える位置まで移動しようとするが

「あの、少々よろしいでしょうか」

そう、声を掛けられる。

見れば、そこにはレブルスの騎士が一人立っていた。

「貴方は確か……」

「自分の名はデイズ・ブライン。御霊搜索隊の副隊長を務めておりました」

確かに、その騎士には見覚えがある。

カラト村の広場でガーゴイルと相對していた騎士達の一人で、会話を交わした事も覚えている。

「そのデイズさんが俺に何の用でしょうか？」

「不躰な質問で申し訳ないのですが、ラック殿はウィル隊長の事をどうお思いでしょうか」

「どう……とは？」

「言葉が不鮮明になって申し訳ございません。カラト村の一件以降ウィル隊長の様子はおかしく、我々もギガ殿の言葉の真意が解らず未だ明確な答えが出ておりません。ラック殿が何かご存じであればお教え頂けませんでしょうか」

「そう言う方には、皆さんはウィルの行動に疑問を持っていると言う事ですか？」

「……はい」

デイズが嘘を付いている様には見えなかった。だが

「……すみません。俺も詳しい事は知らないんです」

「そうですか……」

ラックは嘘を付く、何故ならばデイズは何も知らないからだ。

そんな彼に真実を教えれば、無駄に彼を巻き込んでしまう事になるだろう。

「試合前に失礼しました」

デイズは一礼した後、ラックの前を立ち去ろうとするが

「カライト村の一件、レブルスの騎士として誠に申し訳ないと思っております」

最後にそう謝罪の言葉を述べる。

「別に貴方のせいじゃありませんよ」

「いいえ、騎士は国を守り、民を守るために存在しています。……ラック殿のあの言葉は今でも忘れられませんが、それが騎士である自分の誇りなんです。他の騎士達もそう思っています」

デイズはそう言って微笑む。

「ありがとうございます」

そんなデイズにラックは礼を言う。

「試合、楽しみに観戦させていただきます。頑張ってください」

「はい」

今度こそデイズはラックの前を去り、控え室から出て行ってしまふ。

「レブルスって本当に良い国ね」

「ああ……」

フェリアの言葉にラックは頷く。

あの時あの場に居た騎士達はカライト村での一件を忘れては居ない。寧ろ悔いている。

その事実がカライト村の生き残りであるラックとフェリアにとって僅かばかりの慰めとなった。

その後、二回戦は予想通りラルス、コルボ、ウィルが勝ち上がりベスト4が出揃う事となる。

『これより、準決勝第一試合を始めたいと思います』

司会者のその言葉を聞き、闘技場に上がるラックとラルス。

互いに無傷であり、気力体力共に充実している。

『とうとう準決勝となりこの武闘大会もいよいよ大詰め。当初より優勝候補だったラルス選手に対して、今回初参加でここまで勝ち上

がってきたラック選手。まさにダークホース的な選手ですが、ランク様は両選手をどう見られますか？」

『そうですね。両選手は実力と肩書き共にまったく同じ立場ですから、勝負の行方は私にも解りません。注目の一戦である事は間違いないと思います』

『同じ立場と言いますと？』

『皆さんはラグファースの名に聞き覚えはありませんか？ ラック選手はかつてこの国を救った英雄、テラ・ラグファースの息子なのです』

『何と、あのテラ・ラグファース様の！？』

観客達もその名に聞き覚えがあったのか、あちこちでざわめきが起こる。

『はい、前国王アベル・クラウドと英雄テラ・ラグファースは戦友であり親友でありライバルだったと聞きます。今闘技場で相對している二人はそんな二人と似た関係なのです』

『こ、これは意外な所で予期もしないビッグカードとなりました。この一戦、レブルスに住まう者として見過ごす訳にはいきませんっ！！』

『おおおおおー！！！！！』

司会者の言葉に賛同するように観客達が、この中継を見ている全国民が一斉に歓声を上げる。

「へ、何やら騒がしくなっちゃったな」

「ああ、けどこう言うの嫌いじゃないぜ」

「同感だ」

舞台は整った。後は開始の言葉を待つだけである。

『それでは準決勝第一試合、始めっ！！』

ダンッ！！

開始の合図と共に互いが飛び出していた。一瞬にして間合いが詰まり、

ギィィンッ！！

ラックの剣とラルスの拳が火花を散らす。

ラルスの腕は格闘用のガントレットに覆われているため剣の刃が通らない。剣と拳の勝負であるとは言え、装備面での条件は五分と五分。後は力と技、そして知恵の純粋な競い合いだ。

ギイン、ギイン

剣と拳がぶつかり合う度に火花が散る。

「（やはり剣の大きさの分だけ小回りでは負ける）」

回数で言えばラックが剣を一振りする間にラルスは拳を二発繰り出している。

「（一度距離を取らないと打ち負ける）」

ラックはバックステップで距離を取ろうとするが

ダンッ！！

ラルスは驚異的な踏み込みで開いたはずの距離を一気に詰めてくる。

ゴオオオオン！！

重い金属音が会場に鳴り響く。

全体重とダッシュによる速度が全て乗ったラルスの拳がラックの剣に叩きつけられたのだ。

「ぐっ！！」

剣を盾にして受け止めたは良いが、剣越しに凄まじい衝撃が伝わってくる。

ズザァッ……

拳の威力によって吹き飛ばされた反動を利用し、体勢を立て直すラック。

「（この剣じゃなかったら間違いなくへし折られてたな……）」
ラックの剣、イレイザーフォルス。

母より授かったこの剣は本当にラックを何度も助けてくれた。いた。ガーゴイルの時もコルボの時もレブルスでの数々の試合も、この剣は傷付く事なく剣として盾として役立ってくれている。

「（だが、このままじゃ駄目だ。どうにかしてラルスの動きを止め

ないと!!)」

単純な速度ではこちらが負けている。ラックが勝つためには、とにかくこちらの攻撃が当たる状況を生み出さなくてはならない。

「（一撃を叩き込めるチャンスがあれば、勝機はある）」

だが、その方法が今のところ思い浮かばなかった。そうこう考えている間にも

ヒュッ!!

ラルスは間合いを詰めて拳を繰り出してくる。

ギイン、ギイン、ギインッ!!

闘技場の上に何十回と火花が散る。

会場の誰もがその攻防に口を挟む暇が無く、目で追うのが精一杯だった。そして

ギイイインッ!!

一際大きな火花が飛び散る。

「（っ、そうかつ!!）」

その火花の閃光がまさしくラックに閃きを与える。

「はあああッ!!」

ラックは大きく踏み込み、剣を防御するラルスを体ごと大きくなぎ払い距離を作る。そして

ズンッ!!

持っていた剣をリング中央に深々と突き刺し……手放す。

パリッ……

手放した瞬間、手と剣の間に一瞬稲妻が走る。

『おおっとお、これはラック選手どうした事でしょうか。剣を闘技場の中央付近に突き立て、手を放してしまいましたあ!!』

司会者の驚きは当然であり、観客達も同様にどよめく。

「おいおいラック……何企んでいるんだ?」

ニヤニヤ笑いながらそう聞いてくるラルス。

「さて、何企んでいるんだろうな」

ラルスの言葉にラックはニッと笑ってそう答える。そして

スッ……

左腕を前に突き出し、右腕は腰元、重心を安定させるように腰はやや下ろし足を前後に拡げる。

『こ、これは、ラック選手拳を構えました。ま、まさかラルス選手と格闘戦をするつもりなのかあ！！これはあまりに無謀だあ！！』
司会者達の言葉を余所に、ラックはラルスに笑い掛ける。

「さあ、来いよラルス」

「へ、へへへ、面白え。やっぱりお前との闘いは……」
ダンッ！！

「こうでなくっちゃなあっ！！」

ラルスはそう叫びながら踏み込み、拳を繰り出してくる。それに対してラックは

ヒュッ……、パシッ！！

身を翻し、拳の方向を逸らして回避する。

パシッパシッパシッ、パパパパッ……！！

回避回避回避。

ラックは闘技場全体を使って四方八方に体を動かし、ラルスの攻撃を回避する。

『やはりラック選手防戦一方だ。先程から攻撃をする間がありません』

司会者の言葉は正しい。

唯一間違っているのはラックは攻撃が出来ないのではなく、ラルスの攻撃を回避する事に専念していたのだ。

「（厳しい。背筋がゾクゾクする）」

素手の状態ではラルスのガントレット付きの拳を受け止める事は出来ない。

ラルスの拳を逸らし回避出来なければ致命傷、下手をすれば一撃で片を付けられてしまう。

そんなギリギリの緊張感がラックの神経を研ぎ澄ます。

「へ、どうしたラック。ガードが……」

闘技場を端から端まで四回行き来した頃になると、疲れが出始めたのかラックの動きには序盤のキレが無くなってきていた。そして「甘いぜっ!!」

ヒュオツ、ガスウツ!!

ラルスの拳を回避した直後、拳の回避に専念していたラックの不意を突く形で放たれた蹴りを、ラックはまともに食らってしまう。

「がはっ!!」

拳の直撃よりましとは言え、危うく意識が飛びそうになる。

ダン、ダンドン……

ラックの体は吹き飛ばされ、闘技場中央、剣の辺りまで転がっていく。

「ぐ……」

剣を杖代わりに体を支え、立ち上がるラック。

「何かやるんじゃないかったのか。何もしないならその剣を抜けよ」

ラルスのその言葉に同意したのか、観客達はラルスの言葉に小さく頷く。

「へ、へへへ、そうは行かないぜ。折角勝機が見えたのによ」

ラックは再び剣から手を放し、今度は印を組む。

呪法を使おうとしている事は誰の眼から見ても明白だった。ラルスはその動作に逸早く反応し

ダッ!!

地を蹴りラックとの間合いを詰め、呪法を使う前に攻撃を加えようとするが

「迅雷っ!!」

ラックの方が僅かに早く呪法が発動させる。

バチバチバチッ!!

ラックの体から迸る稲妻は、波紋が広がるようにラックを中心に闘技場全体に広がっていく。

「くっ!!」

ラルスは呪法を使えないが、その対抗方法は心得ている。

ラルスは両腕のガントレットを交差させ、その稲妻の波を突破しようと思いを集中させるが

ガアアンツ！！

「何っ！？」

ラルスの両腕は突如地面に吸い寄せられるかのように急降下し、地面に大きく叩き付けられる。

それは明らかに不自然な落ち方だった。

「……なっ、う、腕がつ！！」

ラルスは腕を地面から離そうとするが、思うように動かないようだった。

「これはどうした事でしょう。ラルス選手、地面に両腕を着けたまま動きません」

「いいえ、動かないのではなく動けないのでしょうか。おそらくこれは磁力です」

「磁力？」

「ラルス選手のガントレットは鉄製。どう言う方法かは知りませんが、ラック選手は先程の呪法で闘技場全体を巨大な磁石にしまったのではないのでしょうか」

実際には闘技場が磁石と化した訳ではない。

ラックが最初に剣を突き刺した時、ラックは闘技場の下に電流を滞留させておいた。

その後、ラックはラルスと闘いながら闘技場全体を駆け巡り、徐々に呪法の効果範囲を広げ先程の呪法によってその電流を一気に拡大させ、強力な磁場を生み出したのだ。

その磁場は闘技場全体が巨大な磁石になるのと同じ効果を発揮し、ラルスの動きを封じた。

長時間持つ磁場ではないが、ラルスとの決着をつけるには十分な時間だった。

「ラルス、勝負はついた。まだやるか！？」

ズッ……

ラックは剣を引き抜きラルスに問い掛ける。

「……へ、へへ、当たり前だろっ!!」

グ、グググ……ッ!!

ラックが発生させた磁場によって、ラルスが着けているガントレットは今や数百キロ相当の重さになっているはずなのだが、ラルスはそれでも立ち上がる。

「俺とお前の闘いに降参なんてありえないぜっ!!」

ラルスはそう言いながら何とか立ち上がるが、無理をしているのは目に見えて解る。それでも

「ああ、その通りだ。行くぞラルスッ!!」

「来い、ラックッ!!」

ラックは手を抜こうとはしなかった。

ダッ!!

ラックは地面を踏み込み、ラルスとの距離を詰める。その途中

バチ、バチバチバチッ……

ラックの剣が帯電を始める。

ラルスの頑丈さは筋金入りだ。剣であっても呪法であっても生半可な攻撃では倒れないだろう。

だから剣と呪法、その二つを合わせ物理的にも精神的にもありつたけの力をラルスに叩き込む必要がある。そんな考えを実現させるために編み出されたのがこの技だ。

ラックがラルスのために用意した対ラルス用の技、その名を『雷牙』と言う。

見ての通り、ラックが普段使用している稲妻を剣に帯電させ、斬撃と共に相手に叩きこむ技だ。

『おおおおおーっ!!』

ガキイイイン!!

二人の剣と拳が激しくぶつかり合う。

この試合で何度も見た光景だったが、磁場に引き寄せられるラルスの拳にはすでに力は無く

パリーインッ！！

ガントレットは粉々に砕け散り、ラックの剣がラルスの体を通り抜ける。

「へ、へへ……」

ドザッ……

リングに倒れこむラルス。

倒れて意識を失う瞬間、彼は実に満足そうに笑っていた。

『決着、決着です。ラック選手の勝利ですっ！！』

『わああああー！！！！！！！！！！』

司会者の勝利を告げる言葉と共に、会場内の歓声はピークを迎えた。

『素晴らしい、実に素晴らしい試合でした。最後まで互いに全力を尽くして闘った素晴らしい試合でした。私はこの試合の司会を務める事が出来た事を誇りに思いますっ！！』

司会者自身が涙を流し熱弁する。同じように観客の間でも涙を流す者が居た。

皆、この闘いに心を打たれ感動していたのであった。

控え室。

試合後、ラックはラルスを控え室に運び、医療班と共に介抱を手伝っていた。

「ラルス、大丈夫なの？」

「ああ、結局最後の一撃は半歩踏み込めず紙一重で致命傷にはならなかった。今は稲妻のショックで一時的に気を失っているだけで、放っておいてもそのうち眼を覚ますだろう」

医療班も同意見だったのか「安静にしているように伝えてください」と言い残すと、次の試合に備え待機場所へ戻っていつてしまう。
「……はあ、疲れた」

それを確認し、ラックは椅子に寝転がる。

「ふふ、お疲れ様」

そんなラックを見て笑うフェリア。

「ん？ 何だよその笑いは」

「あれ見て」

フェリアが指差す方向には今だ興奮収まらぬ会場の観客達の姿があった。観客達だけではなく、モニターを通して映る各街でも同じような光景が広がっていた。

「凄いね。ラックってばもう英雄扱いよ。何かギャップで笑えちゃった」

「柄じゃないな。そんなのは父さんだけで十分だよ」

「きつと、テラおじさんもそんな感じで英雄やってたのよ」

「……かもな」

二人がそんな会話をしていると

「うつ……」

ラルスが意識を取り戻す。

「おいおい、呆れたタフさだな。もう目を覚ましやがった」

それを見て、幾ら何でも目覚めるのが早すぎると言わんばかりにラックはそう声を上げる。

「……よお、ラック」

「気分はどうだ？ 流石に身体の方はまだ動けないだろ」

「みたい……だな」

ラルスは起き上がろうとするが、ラックの言う通り身体が言う事を聞かないようだった。

「けど、楽しかったぜ。こんなに充実した気分は久し振りだ。悔いは無い」

「何言ってるんだよ。縁起でもない」

まるで死に際の台詞のようだった。

「ラック、俺は全力で闘った」

「何だよ急に」

「何時も何時も、俺はお前と闘う時は全力で闘った。実力は毎回互

角だったと思う。けど、俺はお前に勝てなかった。何故だと思う？」

「ラルス、何が言いたい？」

様子がおかしい。

ラルスは愚痴や不満を口にする様な男ではない。だから、彼が何かを伝えようとしている事がすぐに読み取れた。

「俺が負けたのは……運命だったからさ」

「ラル、ス？」

ラルスのその言葉はラックを驚愕させるのに十分だった。

「知っていたんだ。俺はお前と闘って負ける運命にある事を。けど、別に運命のせいにする気はない。俺はお前と全力闘えて満足だ。だが、これだけは伝えておかないと、おちおち眠れない」

やはり試合のダメージが残っているのか、ラルスの意識は再び途絶えようとしていた。

「何だ？」

「ラック、最後まで油断はするな。いいか、絶対に最後まで、油断は……」

ラルスはそう言い残すと再び意識を失ってしまう。

「ラルス……」

果たして本当に意識を失ったのか、それとも運命の介入があったのかは解らない。だが、ラックはラルスの言葉を確かに受け取った。
「ラック」

「カトラ村が滅亡した後、まだ何か続きがあるんじゃないかとは思ってた。それがこの大会かもしれないとも思っていた」

「じゃあ……」

「多分、また何かが起こるんだ」

それが何かまでは解らないが、あの惨劇に匹敵する何かが起こる可能性がある。

「フェリア、次の試合を見ておこう。どっちが勝ってもただで済むとは思えない」

「うん」

二人は試合を直に見ようと、控え室より闘技場へ続く道に出て行く。

『さあ、続いては準決勝第二試合。この試合も異色の組み合わせです。ウィル選手は言わずと知れたレブルス騎士団の団長であり、コルボ選手は皆殺しのコルボとの異名を持つ名うての賞金稼ぎ。この対戦もレブルスならではのカードと言えましょう。共に相当な実力者であるためにどちらが強いのかは実に興味深いところです』
ラックとフェリアが外に出た時には、すでに二人は闘技場の上に立っていた。

コルボは鎖付きの鉄球以外何も武器を持っておらず、ウィルも同様に武器は剣だけだが、ラックはウィルの両腕に未だに包帯が巻かれている事が気が掛かった。

『それでは準決勝第二試合、始めえ！！』
司会者の開始の合図が下る。

ジャラ……

先に動いたのはコルボだった。

コルボは鉄球をゆつくりと回し始め、ウィルもその動作に合わせてるように剣を抜く。そして

ヒュンツ！！

コルボが持っている鉄球が一直線にウィルに襲い掛かる。

ヒュ……

紙一重で鉄球を回避するウィル。

如何にコルボの鉄球が高速で飛んでこようと、やはりそれは直線の動作でしかなく、ウィル程の実力者であればそれを見切る事は造作もなかった。そして

ギン

ウィルの剣が見事なまでに鉄球の鎖を断ち切る。

「（これで鉄球は無効化された。だが、奴の恐ろしさは……）」

鉄球を失ったコルボは、さながら大型の肉食獣のように一直線にウィルへ向かって走り出す。

それに対しウィルは水平に剣を構え
ヒュッ！！

全体重を乗せた突きを繰り出す。

コルボの心臓を狙ったその突きは深々と胸に突き刺さるはずだったが

パキイン！！

剣は胸に突き刺さったかと思われた瞬間に折れてしまう。

「（異常だ。普通じゃ考えられない）」

コルボの筋肉の強度はすでに人のそれではなく、まるで重厚な鎧を着ているようだった。

ブウンッ！！

コルボの拳がウィルを捉える。

ガコオオンッ！！

重い金属音が闘技場に鳴り響き、同時にウィルの体が闘技場の端まで吹き飛ばされて行く。

傍から見ていて、鎧を着ていなければ即死級の威力に見えた。

「（勝負あつたか……）」

ウィルの剣は折れてしまった。

武器も無く、コルボに対抗する手段が無いウィルにはもはや勝ち目はない。そう思った矢先

「く、くくく……」

ウィルの様子がおかしくなる。

「そうだ。そうでなくては試しがない」
パラ……

ウィルはそう述べると両腕の包帯を外し始める。

「なっ！？」

「ラック、あれって！？」

義手、機械で出来た腕。

ランクはそう言っていた。確かに、それはそう言う意味では義手であつたが、その義手は義手と呼ぶにはあまりにも金属的であり、戦闘的な印象を与える腕であつた。何故なら

「間違い無い、ガーゴイルの腕だ」

サイズこそ違えど、それは間違いなくガーゴイルの腕そのものだつたからだ。

「さあ、その威力を私に見せてみるっ！！」

ウィルがその両腕を胸の前で構えると、見る見る内に光が集まつていく。

「あれは！？」

見覚えがある光だつた。

忘れるはずが無い。それはガーゴイルの顔より発射されるあの光と同じ光だつた。

「光を溜めている……」

その光を、ウィルはまるで玉を作るように溜め喰らえっ！！」

コルボ目掛けて発射する。ウィルの両腕から放たれた光の玉は高速で宙を飛び

チユドオオオオー！ンツ！！

コルボに直撃し、同時に激しい爆音と衝撃が巻き起り闘技場全体を爆煙が包む。

その威力に勝負あつたかと思われたが

ブワァー！！

爆煙の一部が盛り上がり、中からコルボが姿を現す。

流石に無傷とはいかないらしく身体の内を負傷していたが、確実にダメージを負っている事が見て取れた。この場合、コルボのタフさを褒めるべきなのかウィルの光の玉の威力を褒めるべきなのかは迷う所だが、どちらにせよあのコルボを追いこんでいる事は確かだ。

「があああああー！っ！！」

怒りに駆られているのか、ウィルに襲い掛かるコルボには大よそ理性と言うものが感じられず、猛獣のような一撃をウィルに向かって放つが

ガシッ！！

その拳を、ウィルは真っ向から受け止めてしまう。

「くくく、はっはっはっ！！」

高らかに笑うウィル。そして

ブウンッ、ドスウウンッ！！

コルボの体をそのまま放り投げ、宙を舞ったコルボの体は闘技場の端から端へと移動し、激しく地面に叩きつけられる。それは奇しくもラックとフェリアの目の前であつた。

「ふっ……」

それを見てか、ウィルは笑う。

「っ！！」

見れば、ウィルは両腕を胸の前で構え、先程の光の玉を再び作るうとしていた。

地面に叩きつけられたコルボにはすでに意識がない。

「止める、コルボは意識を失っている。勝負はついているんだっ！

！」

ウィルに向かってラックはそう叫ぶが

ヒュ……

ウィルはそれを聞き入れる事なく光の玉を放つ。光の玉は一直線にコルボ目掛けて飛んで行き

バシユッウウー！！

彼の肉体を粉々に吹き飛ばし、ラックの顔に赤い何かがビシャッとかかる。

それは少し暖かい赤い液体。……血であつた。

ウィルのその行為は、カラト村での出来事をラックに思い出させるのに十分であつた。

「ぐっ……！！」

怒りによって、身体中の血が逆流するような感覚に囚われる。

『凄まじい爆発です。ようやく煙が晴れてきましたが、あ、ああと、これは……コ、コルボ選手が死んでおります、先程の爆発によるものでしょうか』

どうやら、闘技場を包む爆煙によって観客達にはウィルがコルボを殺すまでの過程が見えていなかったようだ。

ただ唯一解るのはコルボが死んだと言う事実だけだった。

『し、しかし、ルール上は生死問わずなのでこの勝負、ウィル選手の勝利とします』

ルール上、相手選手が戦闘不能になった時点で決着は付き、その生死は問われない。

そのコルボのあまりに凄惨な姿に観客の中に疑問の声を上げる者は少なくなかったが、闘いの上で選手が傷付き倒れる事は当たり前であり、ウィルを非難する者は誰もいなかった。

『武闘大会はラック選手とウィル選手が勝ち上がり、とうとう決勝戦を迎える事となりました。それでは、三十分の休憩の後に決勝戦を開始したいと……』

「必要ない」

司会者の言葉を遮りウィルがその声を上げる。

『は？』

「必要ないと言っている。私は見ての通り無傷だ。今は実に気分もいいのでこのまま決勝戦を始めてもらいたい」

『あ、いや、しかし……』

ウィルの言葉に司会者は戸惑うが

「どうか、ラック・ラグファース」

ウィルは司会者の言葉を待たず、ラックにそう問い掛ける。

「黙れ、そんなに俺と闘いたいならそう言えればいいだろう！！その勝負、受けてやるよっ！！」

「ふ、聞いている通りだ。対戦相手がああ言っているのだ。問題はないだろう」

『は、はい。それでは続けて決勝戦を行いたいと思います』

司会者のその言葉を聞き、ラックはリングに上がろうとする。

「ラック。絶対勝って、あんな奴絶対に許せない!!」

「ああ、任せろ」

フェリアの言葉にラックは力強く答える。

フェリアは普段から感情の起伏は激しいが、人を恨んだり憎んだりする事は滅多にない。そんなフェリアが許せないと言っている。ラックもその言葉に同意見だった。

「武器を持て、ウィル・ワームズ。素手のお前に勝っても嬉しくない」

「ふ、随分と甘いな」

ウィルはそう述べると、仕官の一人から代えの剣を受け取る。

「その甘さが多くの人達を見殺しにすると何故気付かん」

「目的のために多くの人達を殺す貴様よりマシだ」

通常であれば、ウィルのそんな言葉に感情を荒立てるラックではなかっただろうが、状況が状況だ。試合開始のその時まで襲い掛からないでいるのが精一杯だった。

「両選手は一体何を話しているのでしょうか？ 何やら険悪な雰囲気ですが……」

『あの二人には因縁があるのです。カラト村をご存じでしょうか？』

『はい、一か月前に突如消滅した村ですよ』

『ええ、原因は未だ不明とされていますが、その現況を作ったのがウィル選手との話があります。そして、ラック選手はその村のたった二人の生き残りの一人なのです』

『何と、それは本当なのですかランク様』

『はい、ですが一国の騎士団長であるウィルがそんな事をするとは思えないし、証拠は何もない。そこでラック選手はウィル選手と闘うためこの武闘大会に参加したのです。……調度良いのでこの場を借りて国民の皆さんにお伝えしたい事があります』

ランクはマイクを持って立ち上がると述べる。

『今大会が次期国王候補の選抜である事は以前お話しした通りです。レブルスは実力式階級制度の国、真に強き者こそが王になる国なのです。今、闘技場の上に立っている二人を皆さんはどのようなお気持ちで見ているでしょうか』

会場は静まり返っていた。

レブルスの民として、ランクが今喋っている話は非常に重要な重大な話である。

その言葉を聞き逃さないために、誰も音を立てようとしなかった。

『私はこの二人に王の資格があると考えています。皆さんもそうお考えではないでしょうか』

ランクは一呼吸間を置いて声を高らかにこう言った。

『私は国王代理の権限の元に、この試合の勝者を王として迎える事をここに宣言しますっ！！』

『わああああー！！ー！！ー！！』

ランクのその言葉と同時に観客達は賛同の声を上げる。

決勝戦がまるごと国王決定戦となったのだ。これまで二人の闘いを見てきた観客達は、自分達は次世代の王の誕生を見届ける事ができ、歴史の証人となる事ができるのでだと歓喜する。

『私が語るべき事はもうありません。……お願いします』

そう延べ、ランクは司会者にマイクを譲る。

『はい、それでは決勝戦並びに国王決定戦を開始したいと思います。試合……始めええっ！！』

司会者は待つてましたとばかりに声を張り上げ、試合の開始を告げる。

ダッ！！

開始の合図と共に飛び出したのはラックだった。

剣を構え、一直線にウィルに切り掛かる。

ギンッ！！

剣と剣がぶつかり合い火花を散らす。

ギギギギギ……！！

両者の力は拮抗しているのか、鏖迫り合いの状態となり剣が悲鳴を上げる。

「ふっ……」

剣の性能で言えばラックの方が優位であった。

それを察したのか、ウィルは剣の方向を逸らし自身の鎧に当てながら受け流す。

「くっ……」

ギン、ガンツ……

ラックはその後二度剣を繰り出す、一度目は剣、二度目は鎧に阻まれてウィルの体に剣が到達する事は無かった。

レブルス国は実力式階級制度と言う事もあり、戦う者達だけでなく作る者達のレベルも高い。

それはすなわち武具の質が高い事を意味している。

特に、レブルス騎士団長であるウィルが来ている黒い鎧は、前国王アベル・クラウスが直々に彼に授けた一品であり、コルボの拳を食らっても壊れない位に強度が段違いだった。

通常であればそんな鎧を着込めば動きが制限されるはずなのだが、目の前のウィルの動きは軽やかで、鎧を着ているとはとても思えなかった。

それだけ、彼が騎士として修練を積んだ事が読み取れる。

「ふ、ふふふ……」

両者の攻防が三呼吸の間繰り返された所で、ウィルが笑みを浮かべる。

「何がおかしいっ……」

「おかしいのではない。楽しいのだ」

確かに、ウィルの表情はただ笑っていると言うよりは、喜んでいると言った感じの表情だった。

「馬鹿にするなっ……」

ギン……

ラックの激しい怒気が剣に力を与えたのか、拮抗を打ち破りウィ

ルの鎧に傷を付ける。

「……馬鹿になどしてはいない。そう思えるのはお前が私を憎んでいるからだ。ラルス様との闘いの中、お前は喜びを感じなかったのか？」

「何っ!？」

「少なくとも、お前と闘うラルス様は楽しそうだったっ!！」

一瞬の隙を突き、ウィルはラックの剣を払い。

ガッ!!

「ごっ!！」

その腹に深々と蹴りを入れる。

「カライト村の一件は私の運命だった。そしてこの闘いもまた、私の運命なのだ!！」

「なっ……!！」

ギインッ!!

よろめきながらも、ウィルの剣を寸前で受け止めるラックが
「運命には逆らえない。だが、人の意思までは変える事は出来ない」
ギイン!!

受け止めていた剣が押し切られる。

「例えこの身が操られようと、この闘いが運命に定められたものだとしても、私は私の意思で闘っている。こうしてお前と剣を交えているこの瞬間、私は自分意思で闘っていると実感出来る。私はこの闘いに喜びを感じているのだっ!！」

ギイン、ギイン、ギイン!!

ウィルの力が増している。少なくともラックはそう感じていた。拮抗していたはずのバランスが崩れ、僅かに押され始める。

「そこまで解っているのだったら……何故俺達は闘っている!！」
ギインッ!!

ラックは足を踏ん張り、押されまいと打ち返す。

「お前が全てを知っていると言うのであれば、何故黙って運命に従う。逆らえないにしたってやり方があるだろ。協力する方法だって

あつたはずだっ!!」

「それは運命に選ばれたお前が言って良い言葉ではないっ!!」
ギイインッ!!

再び、両者の力が拮抗する。

闘いの中で両者の意思がぶつかり合う。ぶつかり合う度に両者の本音が浮かび上がる。

力と力、技と技。互いの全てを出し切って闘い合っているのだ。

そこに心が加わったとしても不思議な事ではない。

「私がどんな思いで居たと思う。守るべき民を、多くの罪なき人々を巻き込み、その命を奪った咎を背負う事となった私の気持ちがお前に解るかっ!!」

「ウィル・ワームズ……?」

「私とて、運命に逆らいたかつたのだっ!!」

ウィルのその言葉はラックに衝撃を与えた。

解った。解ってしまった。この男、ウィル・ワームズも被害者なのだ。

運命と言う名のプログラムの強制力に縛り付けられ、逆らう事すら叶わず多くの命を奪った事を彼は悔いている。彼に罪はない。罪があるとするならばその運命を変える事の出来なかった自分にある。その事実がラックの中の怒りや憎しみを薄れさせる。

ギンッ!!

「ぐっ!!」

途端に、ラックの剣がウィルの剣に押し切られる。

「どうしたラック・ラグファース。お前の力はそのようなものではないだろう。闘え、まさか今更闘う気が失せたなどとは言わせんぞ!!」
「……」

ラックは黙って剣を降ろしウィルを見つめる。それは無言の肯定だった。

「な……。貴様、この期に及んでまだそんな甘い事を……!!」
ウィルは剣を構えラックに切り掛かるうとするが

ピタッ

ラックの目前でその剣を止める。

「……どうあっても、私と闘わないつもりか？」

「ウィル、まだ遅くないはずだ。共に運命と立ち向かう方法を考えよう。力を合わせれば未来を変えることは出来るはずだ」

怒りを露わにするウィルに、ラックは真っ直ぐな瞳でそう言い返す。

その瞳はその言葉が真実である事を物語っているようだった。

「……そう出来れば、どれだけ良いだろうな」

ウィルはラックに聞こえないぐらい小さな声で悲しそうにそう呟くと

「くつくつくつ……！」

声を大にして笑う。

「お前にそのつもりがないのなら、その気にさせるまでだっ……！」

「ウィル……？」

ウィルは両腕を胸の前で構え光を集め始める。

「お前がどうすれば本気になるかなど、運命が簡単に教えてくれるっ……！」

ウィル・ワームズの狙いはすぐに解った。

ラックの後ろ十数メートル、控え室方向に立っている人物。フェリアだ。

「や、止めるおお……！」

カッ……！！

光が迸る。そして

チュドオオオオオ……ンッ……！！

激しい爆音と衝撃が巻き起り、爆煙が闘技場を包む。

「ぐ、あ………」

そこにラックは立っていた。

剣を闘技場に突き立て、盾にする事によってウィルの放った光の玉を真正面から受け止めたのだ。だがその威力を完全に、半分も防

ぐ事が出来ずに至るところに傷を負っていた。

『こ、これはどう言う事でしよう。ウィル選手が控え室を攻撃しようとしたように私には見えましたが……』

司会者のその言葉に観客達も啞然とする。

司会者は明確な言葉としなかったが、その場に居る全員が見ていた。一国の騎士団長ともあるう者が闘う相手を狙わずに控え室、いや、そこに立っていただけの少女を攻撃しようとしたのだ。

「卑怯者っ！！」

その対象であつた少女、フェリアが声を上げる。

「卑怯？ 馬鹿を言うな。今のはラック・ラグファースを狙った攻撃が偶然そちらに飛んで行こうとしただけだ。例え狙ってやったのだとしても、大会のルールにそんな規制は存在しない。私が咎められる謂われはないのだ」

つまり、わざとやったと言う事だ。

ウィルのその言葉に場内の観客、いや、モニターを通してそのやり取りを見ていたレブルス国の国民の怒りが爆発する。

当然、会場中から非難の声が上がるが、当の本人はそんな事を気に留める様子もなく

「どうするラック・ラグファース。今度は間違つて観客席に当ててしまうかもしれないぞ」

平然とそう言い放つ。その言葉に会場が一瞬静かになり

「それでも俺と闘う気が……」

ウィルは更に言葉を続けようとするが

メキイイッ！！

ウィルの言葉は途中で途切れてしまう事となる。

ウィルの顔の側面、頬の部分に深々とラックの拳が突き刺さったためだ。

ズ、ザアアア……！！

そのまま、ウィルの体は闘技場の端まで地面にこすれながら吹き飛ばされる。

「……ふう、すつきりしたぜ」

ラックはそう述べ、闘技場に突き刺した剣を引き抜く。

「そうだった。思い出したぜ。いつもこいつも揃いも揃ってごちやごちやと理屈を並べるせいですっかり忘れていた。俺にとって試合なんて本当はどうでもよかったんだ。俺はただ……」

しつかりと剣を握り、構えながら叫ぶ。

「お前をぶっ倒したかったんだよっ!!」

同時にラックの視界が変化する。

徐々に世界が暗転し、光る文字が見え始める。

久しく見ていなかったこの世界の本当の姿、0と1の世界が見え始める。

『ラ、ラック選手の瞳が金色に、これは一体?』

司会者がそう述べるが、その場に居る誰もがそんな事は気にしていなかった。

今、闘技場の上に立つ少年は闘おうとしている。

自分達が倒して欲しいと願うウィル・ワームズと闘い、倒すと言ってくれた。

その時、皆がラック・ラグファースの勝利を願っていた。

「ふ、ふふふ……」

立ち上がり、剣を握るウィル。

「そうだ来い、ラック・ラグファース。お前が運命に抗うと言うのであれば、見事この私に勝って見せろ!!」

ダッ!!

ラックの体が闘技場を駆け、先程までとは桁違いの早さでウィルに近づき切り掛かる。

今のラックに見えているのは0と1の配列の世界。狙いはその隙間、先程までは早すぎて見えなかった空間の隙間が今ははっきりと見える。その隙間に剣を切り込もうとするが

ギンッ!!

ウィルの剣がラックの剣を受け止める。

「ガーゴイルには自己学習能力があつた。私のこの腕には貴様の空間断裂のパターンが刻み込まれている。私にその技はもう効かんつ
！！」

「ならば……っ！！」

カッ

ラックが一步を踏み出すと同時にラックの姿が消える。

少なくとも、ウィルを含めその場に居る全員の眼にはそう映つた。超加速、予め自分の行動を計算して呪法で動きを加速させる空間制御呪法。

通常時のラックであれば、その計算に膨大な集中力と時間が掛かり、実戦での使用は難しかった。だが、今のラックには世界が見えている。

世界が見えると言う事は瞬時に世界を理解すると言う事、今の彼に細かい計算は必要ない。

ヒュッ

次にラックが現れたのはウィルの後方だった。

ラックはウィルの隙を突き、再び空間の断裂を起こそうとするがギイン

ウィルの腕が動き、ラックの剣を受け止めてしまう。

「そこかっ！！」

ブンッ！！

ウィル自身、ラックの存在に気付いてはいなかった。

「言つたはずだ。この腕には貴様の空間断裂のパターンが刻み込まれている。私が意識せずともある程度は反応してくれる」

「……言いたい事はそれだけか？」

「何！？」

「随分と良く喋るじゃないか。演じるのも大変だな」

「な、何を馬鹿な事を……」

「この瞳は真実を見る事が出来る。貴様がどんな気持ちで運命を受け入れているかが、今の俺にははっきり解る。そして、お前が俺に

負ける運命である事もな」

「く、黙れっ!!」

ウィルは剣を構え、ラックに向かって踏み込んでくるが

「哀れだな、ウィル・ワームズ」

バチ、バチバチバチ……

ラックの両腕が帯電し始め

「……迅雷」

バチイッ!!

広域に渡って放出される。途端

ガアアンツ!!

ウィルの体が闘技場に吸い寄せられる。

ウィルの鎧がどれほど頑丈であろうとも、その材質は鉄で出来ている。

ラックは高速移動中に闘技場に細工を施し、ラルスとの闘いで発生させた磁場を再び発生させたのだ。ラルスの時とは違いウィルの武器は剣で、その体には鎧を着込んでいる。

今やウィルの動きは完全に封じられた。そして

バチ、バチバチバチ……

ラックの握る剣が帯電を始める。ラックが対ラルス用に編み出した技『雷牙』だ。

「俺が運命を変えるために得た力の全てを、その身に刻めっ!!」
ザシユウウツ!!

剣を大きく振るい、ラックはウィルを断つ。

カラン、カランカラン……

剣も鎧も切断し、ウィルの体に深々と刃が通る。

「見事、だ……」

ド、サッ……

闘技場に倒れこむウィル。

その瞬間、勝負は決した

『け、決着です。ラック選手の勝利です!!』

『わああああー！ーっ！！』

司会者の言葉に、それまで静かだった場内に歓声の嵐が吹き荒れる。

『今ここに、レブルス国の新しい王が誕生しました。その名もラック・ラグファース。私達は今歴史の目撃者となったのですっ！！』
会場に設置されたモニターに映し出される他の街々でも、同じように歓声が上がっていた。

武闘大会の決着に、新しい王の誕生に人々は心の底から喜びを感じていたのだ。

そんな人達を余所に、ラックはウィルに近づく。

「おい、生きているか？」

そうウィルに問い掛けるラックの瞳は元の青い瞳へと戻っており、彼から闘う意思が無くなっている事を意味していた。

「何故、殺さなかった……」

ラックの問いにウィルは弱々しい声ながらもそう問い返してくる。
「俺はお前を倒したかったただけだ。殺したかった訳じゃない。お前を倒して、カラト村の償いをさせるのが俺の目的だ」

「なるほど……」

何が「なるほど」なのかは解らないが、ウィルは何かを納得したかのようにそう呟く。

「ラック・ラグファース。最後の頼みだ……私を消してくれ」

「何？」

「あの全て消し去る青い光で私を消してくれ、もはやそれしか方法はない。頼む、お前が多くの人々を守りたいと言っているのであれば、手遅れになる前に私を……」

「待て、一体何を言っている？」

ラックがそう問い返すが

「ぐっ……」

途端、ウィルが苦しみ始める。

「ウィルッ……」

「く、ここまで、か……」

程なくして、ウィルの体から力が抜けるのを見た。

「……な、何？」

死んだ。

ラックが与えた傷は致命傷ではなかったはずだ。だと言うのにウィルは突然苦しみだし、目の前で息を引き取った。

「これは、まさか……」

思い当たる事は一つしかない。

運命。

その超常的な何かが介入し、ウィル・ワームズの命を奪った。そうとは思えない。

「だが何故だ……」

何故ここでウィルが死ぬ必要がある。

勝負は終り、決着はついた。運命がラックを勝たせる予定だったとしても、ここでウィルが死ぬ必要は無いはずだ。そう思った瞬間
カッ！！

真昼だと言うのに空が一瞬明るくなる。そして

ドオォーン！！

一呼吸遅れて爆発音が聞こえてくる。

「何だ！？」

見れば、城下街の方から煙が上がっていた。

爆弾などによる爆発ではないが、何かが起きたのは間違いない。

『ラック兄さん！！』

自分の名を呼ぶランクの大きな声が聞こえた。

「ランク？」

一瞬、そちらに気がそれる。すると

カッ！！

再びあの光が辺りを照らす。

先程は一瞬の光で解らなかったが、それはまるで光の柱が地面に立つかのように天より降り注がれ、ラックの目の前に横たわるウィ

ルの体を包むと

ドオオオオーンッ!!

激しい爆発を巻き起こす。

「うわあああっつ!!」

至近距離で起きた爆発にラックの体は大きく吹き飛ばされ、闘技場外へと放り出される。

「ラックッ!!」

「兄さん、早くこっちへ!!」

状況が解らず、混乱するラックの耳にフェリアの声とランクの声が聞こえた。

反射的に、ラックは立ち上がって二人の方へ走り出す。

「ランク、何だあれは!?!」

「レブルスの、いいえ、世界の遙か上空、数千キロの天空から放たれた超高熱量の光の粒子、ビームによる砲撃です」

「……衛星、か」

ランクの説明を聞き、ラックの脳裏にそんな単語が浮かび上がる。知っていた訳ではない。初めて聞く言葉だし初めて口にする言葉だ。だと言っのにラックはその単語を自然と口にし、理解していた。「おそらくウィルが死んだ場合に発動するようセットされていたんでしょう。ラック兄さん、説明している暇はありません。早くあれを止めないとレブルス全土が火の海となってしまいます」

現在進行形で光はレブルスに降り注いでいた。

一本二本の単位ではない。まるでそれは光の雨の如く首都レブルスに降り注ぎ、街を破壊し続けている。

首都レブルスだけではない。辛うじて損壊を免れているモニターに他の街々の壊れていく様が映し出され、同時にそこに倒れる多くの人々の姿も映し出される。

「く、どうすればいい!?!」

悩んでいる暇はない。

ランクの言う通り、今はあの光を止めなければ取り返しのかな

い事になる。

「衛星は元々この機械都市レブルスの防衛機能の一部でした。その衛星を止めるためには最高権限者のコード認証が必要です」

「俺が王になればあの光を止める事が出来る……と言う事か」

「そうです。それ以外に方法はありません」

一瞬、ラックは返答に詰まる。だが

「……解った」

そう、了承の言葉を述べる。

多くの人々の命を前に、自分の我儘を貫くほどラックは融通の利かない人間ではない。

「兄さん!!」

その一言にランクは歓喜の表情を見せる。

「それで、どうすればそのコード認証が行える？」

「レブルスと兄さんが契約を果たせば自動的にコードは発行されます」

「契約の方法は？」

「闘技場の下に契約を行う台座があります。そこにイレイザーフォールスを突き刺してください」

「イレイザーフォールスを？」

「はい。イレイザーフォールスは本来そのために存在する王のみが振るう事が出来る剣。レブルスの起動キーです」

「そう言うことか……」

何故母がこの剣を自分に授けたのかが、今になって解った。

カヲト村から今に至るまで、全ては運命だったという事だ。

「後は音声ガイダンスに従ってください。僕がすぐに台座を出しますから」

ランクはそう述べると立ち上がり城に向かう。同時に

カツ、ドオオオオーンッ!!

天から降り注ぐ光が控え室を包み、粉々に吹き飛ばす。

「ラルスッ!？」

「そんな……」

控え室の中にはラルスが居たはずだ。

だが、光によって起こった爆発は凄まじく、吹き飛ばされた控え室は跡形も残っていなかった。

「ラック、街が……」

「くっ……」

街が燃えている。

闘技場から見えるレブルスの街、モニター越しに見える各街々。

その何れの光景を見ても今や惨劇しか映し出されておらず、まるでレブルス全体が燃えているようだった。

「（これが、これが俺の運命だと言っのか……）」

カラト村の時もそうだった。

結局、自分には何も出来ないのかと言う悔しさだけがラックの胸に広がる。ラックが己の無力さに拳を握らせていると

ガコンッ……！！

闘技場が音を立てて移動を始め、四方へ分割されるように移動した闘技場の下から祭壇のような台座がせり上がってきた。

『ラック兄さん、準備が出来ました。台座へ行ってください』

どこかからかランクの声が聞こえてくる。

「解った！！」

ランクの言葉を聞き、ラックがイレイザーフォルスを手にもその台座に近づこうとすると

『これで僕の役目は終わりました。兄さん、レブルスの事をお願いしま……』

そんなランクの声が聞こえた。同時に

カッ、ドオオオオーンッ！！

「ランクッ！？」

光がレブルス城を貫き、爆発が起こる。

それを最後にランクの声は聞こえなくなってしまった。

「そんな……」

ランクは知っていたのだ。

ランク・クラウスがレブルスと契約を行う台座を出せばどうなるのかを。

ランクだけではない。ラルスやウィルもおそらく全てを知っていた。運命を知ると言う事はそう言う事なのだ。

「く、くそおっ!!」

感傷に浸っている暇はない。

皆、全てを知った上で自分を送り出してくれた。それに答え、多くの人々を救う義務が自分にはある。だから、ランクは振り返る事無く真っ直ぐ台座の下へ足を進める。

「ここに……」

台座にはランクの言葉通り穴が開いていた。

その穴はまるで元々そこにイレイザーフォルスがあつたかのように形が一致している。

「よしっ!!」

ランクは両手でしっかりとイレイザーフォルスを持ち

ガコンッ

台座へ突き刺す。

「（後はランクの言っていた音声ガイダンスに従えばこの惨劇を止められる）」

そう、ランクが思った時

「危ないっ!!」

「え？」

フェリアの声が聞こえた。

ドンッ……

同時に、誰かに突き飛ばされる感触が身体に広がる。そしてカッ

光が見えた。

これまで見てきたどの光よりも、その光の線は鮮明に見えた。光の線は先程までランクが居た位置を通っている。

「あ、あぁっ……」

先程までラックが居た位置。誰かによって突き飛ばされたその位置。今、その位置に居るのは

「フェリアアアッ!!」

フェリアだった。

光の線はまるでそこにフェリアが居ないかのように彼女の体を貫いていた。

ドサッ……

ラックを押した勢いがまだ残っていたのか、フェリアはラックにもたれ掛かる様に倒れ込む。

「フェリア、フェリアッ!!」

ラックは起き上がりフェリアの体を抱き起こす。
軽い。

何度かフェリアを抱きかかえた事はあったが、何時にもましてフェリアの体は軽かった。

「あ、あぁぁぁ……」

フェリアの体が軽かった理由は単純だった。彼女の体積が何時もより少なかったからだ。

そう、彼女の体にはぽっかりと大きな穴が開いていたのだ。

「う、嘘だ。こんな、こんなぁ……」

まるで大切な宝物が壊れてしまった時のような絶望的な感覚がラックを襲う。

認めたくない。

認めたくないが、これは現実だった。

「……う、あ、ラッ……ク」

弱々しく、ラックの名を呼ぶフェリア。

「フェリア……」

「……えへへ、失敗……しちゃった。私も、避けるはず……だったんだけど、なぁ」

フェリアはぎこちなく笑う。

「何でだよ……」

何故笑う。何故こんな事をした。何故。

「ラルスが言つてた、でしょ。私もね、知って…… たんだ。こんな事、だから、私は……」

それはセキュリティシステムの一種だった。

正規の手順を踏まずに契約をしようとすると局所的な収束電磁波光、レーザーが対象に向けて照射される仕組みとなっていたのだ。

ラックの知る所ではないが、それこそがレブルスの最後の防衛システムであり、ラルスが最後まで油断をするなど指摘していた事だった。

「何で俺を……」

「約束……したじゃない。私が、ラックを守るって」

約束した。誓い合った。フェリアはラックを守ると誓い。ラックはフェリアを守ると誓った。

だと言うのに、今目の前で起こっている事は一体何なのだ。気付けばラックは涙を流していた。

流れ落ちる涙が頬を伝い、水滴となってフェリアに落ちていく。

「ねえ、ラック……」

そんなラックの手を握り、フェリアはゆっくりと喋る。

「運命って、変えられないのかな……」

「フェリア……」

喋るのも辛いはずなのに、フェリアはそんな素振りを見せずに笑みを浮かべている。

「ラックに助けて貰った命だけど、これじゃ……結局一緒だよね」

「そんな事は無い」

「そうかな？」

「ああ、そうだよ。そうだとしても、俺が何度でも助けてやるからそんな事は不可能だという事は自分でも解っていた。けど、今はそう信じたかった。

「ふふ、嬉しい……」

ラックの手を握るフェリアの力が弱くなる。

心なしか、その暖かささえも消えていつているようだった。

「でもね。ラックはもつと沢山の人の命を助ける事が出来るんだよ」

「俺はフェリアさえ助けられればそれでいい」

フェリアを壊さぬよう。フェリアを離さぬよう。ラックはフェリアの手をやさしく握り返す。

「私は、この街が好き。だから、皆に死なないで欲しいの」

「……フェリア」

「お願いラック。皆を、助けて。私の最後の我が儘を聞いて……」

「最後なんて言うな、俺がフェリアの我が儘を、願いを聞かない事があつたか？」

「無い……よね」

「だろ」

フェリアの言葉にラックは無理に笑おうとするが、顔がうまく動いてくれない。

どうしても涙がその邪魔をする。

「……ふふ」

「フェリア？」

「私ね。そんなラックの事が……大好きだよ」

フェリアは笑った。幸せそうに笑った。満面の笑みを浮かべながらそう言った。

「俺も、俺もそんなフェリアの事が……」

伝えたい。伝えなければならぬ事がある。

ラックがその言葉を口にしたその時

カチッ……

音が聞こえた。

スイッチが入る時のような音だ。その音には聞き覚えがある。

運命が切り替わる時に聞こえるというあの音だ。

「フェリア、音が聞こえた。大丈夫、皆助かるんだ。……フェリア？」

眠るように彼女は目を閉じていた。

本当に、ただ眠っているように目を閉じていた。

気付けば、自分の手を握っていたフェリアの手からは力が無くなっていた。

「……フェリア」

ラックはフェリアの体を抱きかかえたまま立ち上がる。そして

「見ていてくれ。俺は運命を変えてみせる」

チャキ……

イレイザーフォルスを強く握る。

「運命は変えられる……いや。俺が運命を書き換えてやるっ……！」

一人の少年の姿があった。

人々はその少年が起こす奇跡を目の当たりにする。

光の雨が降り注ぐ中、少年は眩いばかりの青く輝く光に包まれ、彼を取り巻く光はやがて無数の光を生み出し始め、光はやがてレブルス全土を包み込んでいく。

途端、光の雨が止む。

気が付けば、青く輝く光は光の雨から人々を守ってくれていた。

人々は少年の姿を見る。

少年は光の中で少女を抱きしめながら瞳を閉じる。その悲しげな青い瞳が再び開かれた時、彼の瞳は全てを見透かすような金色の瞳へとなっていた。

そして、少年は剣を天に振りかざしこう叫ぶ。

「レブルス王、ラック・ラグファースの名の下に命ずる。レブルスよ……蘇れっ……！」

少年の叫びと共に、青く輝く光はまるで世界を飲み込むかのようにその輝きを更に強める。

その輝きが止む時、人々は我が目を疑った。

何とそこには少年の言葉通りに蘇ったレブルスの姿があったのだ。

街も人も元の姿に、いや、新しく生まれ変わっていた。

人々はその時の事を「青く輝く光の中に王の姿を見た」と語ったと言う。

これが、後に『運命の日』と呼ばれるラック・ラグファースが初めて起こした奇跡であった。

第十五章『レブルス王誕生』

第十五章『レブルス王誕生』

眠りの中、目を閉じているはずなのに目の前が眩しく感じる。

「（……カーテン、閉めてなかったっけ？）」

それが日の光によるものである事はすぐに解った。

あまりの眩しさにゆっくりと目を開き、周囲を見る。

「……あれ？」

見覚えの無い部屋だった。

いや、それは部屋と呼ぶにはあまりにも広すぎる部屋だった。部屋だけではない、大きなベッドに大きな窓、天井にはシャンデリア、床には豪華な絨毯まで敷かれていた。

「えーっと……」

突然の状況にさてどうしたものかと考えていると

「あっ！！」

そんな大きな声が聞こえてきた。

声の方を見ると、使用人の格好をした女性が立っていた。

「ランク様、ラック陛下がお目覚めになりました」

「は？」

声を掛ける前に女性は部屋の外へ向かってそう大きな声を出す。

そして

「少々お待ちくださいませラック陛下、今お召し物を持って参ります」

女性はそう一礼すると部屋を出て行ってしまふ。

「ラック……陛下？」

何の事だ、と。しばらくその意味に気付かなかったが、寝惚けていた意識が徐々に戻ってくる。

数分後、慌しくランクとラルス、そしてフェリアが姿を現す。

「ラックウツ!!」

部屋に入ってくるなり、フェリアはラックの名を叫びながら飛び付いてくる。すると

グキ……!!

同時に鈍い音が聞こえた。どうやら良い感じに首の関節に負荷が掛かった様だ。

「起きるの遅いよラックウツ!!」

そんな事はお構い無しにラックの体を振り回すフェリア。

「……おい、お嬢ちゃん」

「フェ、フェリアさん、ラック兄さんはまだ本調子ではないんですから」

「え、あ、それもそうね。……ってああっ!!」

時既に遅し、フェリアの腕の中でラックは再び意識を失っていた。そんなラックが再び意識を取り戻したのは数分後、そこでようやく事情を聞く事が出来た。

「そうか、うまくいったのか」

あれから三日、レブルスは元の姿へと戻っていた。いや、蘇っていた。

「出来れば何があったのかを、事情を説明して貰えませんか」

人々は意外とあっさりその事実を受け入れていたが、実際のところ何があったのかを知っている者は誰一人居なかった。

「そうだな。どこから説明すればいいだろう」

「まず何でレブルスが蘇ったのか説明してよ。私、間違いなく死んだはずなんだけど、気付いたら生き返ってて、もう何が何やらさっぱりで」

フェリアだけではない。ラルスやランク、それに大勢の人々もあの一件で命を落としたはずだった。

「……フェリアが死んだ後、俺はこの国と契約をした」

「契約?」

「機械都市レブルスの全機能をラック兄さんの制御下へ置く儀式の

事です」

「イレイザーフォルスはインストールやセットアップと言っていた。尤もその時は必要な機能しか使用せず、残りのインストールのせいで今日まで眠っていたみたいだな」

「えーっと、つまりどう言う事だ？」

今一つピンと来ていないのか、ラルスはもう少し解りやすく説明してくれと言う。

「レブルスは名実共にラック兄さんの物となったと言う事です。今やレブルスはラック兄さんの思うがままに動きます」

「そりやすげえ」

今の説明で解ったのか、なるほどとばかりにそう納得するラルス。「レブルスの機能を掌握した俺は、レブルスの機能と真眼を使用してレブルスの全てを一度データ化した」

「何のために？」

「皆の運命を知るためだ」

ラックは言う。

「運命は世界に対して超常的な介入力を持っている。運命が決めた事は何かあっても変わらない。俺はその絶対のルールを逆手に取り、ライティングを使って皆の運命を書き換えた」

「運命を？」

「ああ、本来の運命であれば死ぬであろう者達の運命を、死ぬと言うフラグをライティングで消したんだ。そうすると、運命としては死ぬ運命で無い者を死なせる訳には行かなくなる」

「そうか、例えば死んでしまった人間であっても、運命が死んでいる事がおかしいと判断すれば」

「そう、運命が持つ世界への超常的な介入力を持っていれば、死んだ人間が生き返る事が可能……だと俺は考えた」

「考えたって言っても、そんな馬鹿げた方法がうまく行くはず……」

「まあ、常識的に考えればないだろう。だが、この世界は0と1で、文字や文章で出来ている」

要するに言葉遊びだ。

普通に考えればありえない現象である。死んだと言う事実が消えたからと言って人間が生き返るはずがない。そもそも死んだ人間が生き返るなどと言う事があるはずがない。だが、それは人間がそう思っているだけであって、世界にしてみればそんな事は一端の出来事にしか過ぎない。

世界の真実を知り、運命を変える事が出来るラックだからこそ可能なまさに奇跡なのである。

「色々と反則的な条件が重なった奇跡のような結果だ。多分、もう二度と同じ方法で人を生き返らせる何て事は出来ないだろう」

一度限りの奇跡だと、ラックは述べる。

「だが、俺がカラト村で御霊を手に入れた時から今日に至るまでに、運命によって死ぬはずだった人達は生き返ったはずだ。多分、カラト村も元に戻っていると思うんだが……」

「はい。すでにカラト村の存在を確認しています」

ラックの言葉にランクはそう事実を延べる。

「そうか、良かった。うまく行つて本当に良かった」

ラックのその言葉に皆が同意見だ頷いていると

「でも、レブルスって結構ずばらなのね」

フェリアがそんな感想を述べる。

「は？」

ラックはフェリアのその一言に多少間の抜けた声を上げてしまう。

「だって、イレイザーフォールスを台座に突き刺すだけで契約出来ちゃんでしょ。それなら誰だって王様になれちゃうじゃない」

「ああ、その事か。さっきは説明しなかったけど、実際は恐ろしく面倒な手続きが必要なんだ」

「そうなの？」

「ああ、俺はそれを六年前にやらされた。仮契約って言って、契約者はレブルスの事が自然と解るようになる。前に何で俺がレブルスに詳しいのかって話しただろ。そのせいだ」

「ラック兄さんはずっと前から王となる資格を有していた訳です」
「よく言っぜ。当時何も知らない俺に父さん達が勝手に施しただけじゃないか」

機械都市レブルスの全機能を把握しようとするのだ。三日間寝込んだぐらいで身に付くようなものではない。予め、ラックにはそういう下地が施されていたのだ。

「それでも、こうなる事はきつと運命だったんですよ」

ランクは感無量とばかりにそう述べるが

「冗談じゃない。何度も言うが俺は王になるつもりなんてないぞ」
ラックはそう答えを返す。

「それが運命だって言うなら尚更だ。俺は運命を変える男だからな。これ以上運命に従うつもりはない。約束通り、王位をお前に譲って俺は村に帰らせてもらっからな」

『……』

ラックのその一言に皆顔を見合わせる。

「何だよ？」

「兄さんの、いえ、陛下の意思を尊重したい所ではありますが、まずはテラスに出ませんか？」

「は？」

ランクはそう述べるとラックを急かすように部屋の外に連れ出す。するとそこには

『わああああー！ー！ー！』

歓声を上げる民達の姿があつた。

城のテラスから見下ろすその光景は絶句するに十分だった。

『ラック陛下ばんざー！ー！ー！』

『レブルスに栄光あれえっ！ー！ー！』

民達は口々にそんな事を叫び、ラックのことを褒め称える。

「な、何だこれは！？」

ラックがそんな光景に気圧されていると

「無論、陛下が王位に着かれた事を祝福しているのです」

「いや、だが俺は……」

「陛下、この国民達の前で先程の台詞が言えますか？」

ランクはそう言ってニツコリ笑う。

「（くっ、嵌められた……！！）」

この場で王位を辞退するなどと言った日には暴動の一つや二つは軽く起きてしまっただろう。

だが、だからといって一度肯定してしまえば後はずるずると流されてしまうだけだ。

打開策を考えようにも後手に回った時点でランクに勝ち目は無い。
「陛下は王としての力を民達に見せ、民達は陛下の力を目の当たりにしました。今やレブルスで陛下が王である事を疑う者は誰一人居りません」

真綿で首を絞めるように、丁寧に説明を述べるランク。

「ま、諦めるんだな。これも運命だ」

どうやらラルスも共謀者であるらしく、観念しろとばかりにそう言ってくる。

「僕もラルス兄さんも……ウイルさえも、陛下が王になる事を望んでいたんですよ」

「ウイルも？」

その言葉にランクは思い返す。

冷静に思い返せば、ウイルの行動には不可解な点が幾つも見受けられた。いや、本当はウイルに非が無い事をランクは知っており、彼に悪意が無い事にも気付いていた。

何故ならば、彼は運命に翻弄されつつも運命を受け入れ、敵である事を演じていたからだ。

彼は何時もレブルスのために動いていた。彼がどのような思いを抱いていたかは解らないが、今のこの状況を考えるならば、彼は確かにレブルスの騎士であつたのだ。

「けど、だからって俺の意思を無視するな。そりゃ成り行きでレブルスと契約をして一度は王を名乗ったが、ずっと王で居るつもりな

んてなかった。フェリア、一先ずカマト村に帰るぞ」

ラックはそう言っているとテラスから部屋に戻ろうとするが、そんなラックをフェリアが遮り

ゴスッ！！

「へぶっ！！」

問答無用で鳩尾に拳を叩き込む。

余程綺麗に決まったのか、ラックの身体からは力が抜け、行動の自由を奪われる。

「ごめんねーラック。私も女の子だからお姫様とかそう言うのに一度ぐらいはなつてみたいのよ。折角の王妃の座を見す見す見逃すのもあれじゃない」

「な、何を言っている！？」

フェリアの言葉にラックがクエスチョンマークを連発させていると「ああ、言っていないませんでしたね。ウィルやコルボはあの大会の後に姿を晦ませてしまい、フェリアさんは武闘大会で三位の成績を収める事になりました。実力式階級制度のレブルスにおいて、王妃は当然女性の中で一番実力がある人となります」

「っ、ま、り。私って事」

フェリアはえっへんと言わんばかりに胸を張る。

「だ、だから、俺の意思は無視なのかよ……」

あくまで王になる気は無いと言わんばかりに反論を述べようとするラックだったが

「駄目よラック。ラックには私の運命を変えた責任を取って貰わないといけないんだから。だったら、これぐらいはやってもらわないとね」

「……」

フェリアのその言葉に何も言えなくなってしまう。

「ほらほらラック。国民の皆さんに手ぐらい振ってあげようよ」

フェリアが頂垂れるラックの手を持ち国民達に向けて大きく振ると『わああああー！ー！っ！ー！』

強い歓声が巻き起こる。

民達からしてみれば、王が自分達に向け手を振ってくれているように見えたのである。

「か、勘弁してくれ……」

まあ、その真実は語らぬが花と言つものである。

こうして、ラック・ラグファースはレブルス国の王となった。

そんな彼の事を後の人々は様々な呼び方をしたが、その中で一番多かった呼び名が『運命の王』。

彼が王となったのは運命だったからだ、人々は口を揃えて語つたと言う。

尤も、それが彼にとって幸運な事であつたのか不運な事であつたのかは、人によつて評価がまちまちであつた。

とにもかくにも、彼はこうしてレブルス国の王となったのだが、物語はこれで終わった訳ではない。何故ならば、この物語はこれから始まる更なる物語の序章にしか過ぎないからだ。

そう、史上最強の王と称される彼の物語はまだ始まつたばかりなのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3652n/>

水晶物語 ～運命の継承者～

2010年10月8日11時23分発行